金沢城史料叢書13
金沢城公園整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書４

金　沢　城　跡

河　北　門

（本文編）

2011

石川県金沢城調査研究所

河北門遠景（中央上：河北門、手前左：橋爪門、右中央：石川門）

河北門調査区全景（東上空から）

河北門遺構全景（写真上が南、下が北）

二ノ門全景（南から）

二ノ門通路部分（東から）

ニラミ櫓台と枡形周辺（南西から）

調査区西側全景（南から）

ニラミ櫓台と枡形周辺全景（写真上が西、下が東）

枡形と土塀石垣（南東から）

SD006 出土遺物

SD007 出土遺物

出土軒平瓦（桐文・三葉文）

出土軒平瓦（花文）

出土軒平瓦（梅鉢文・巴文）

出土瓦（鬼瓦・鉛瓦）

復元された二ノ門（東から）

復元された桝形内部及び二ノ門（西から）

例　言

1．本書は、石川県金沢市丸の内地内に所在する金沢城跡の埋蔵文化財調査報告書である。

2．調査原因は公園整備事業（河北門復元整備事業）であり、事業を所管する石川県土木部公園緑地課が石川県教育委員会に依頼し、文化財調査（石垣解体調査を含む）を石川県金沢城調査研究所（平成19年4月1日石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室から改組）が実施した。

3．調査期間及び担当は次のとおりである。

現地調査

平成18年度

期間　　平成18年7月5日～同年12月27日

担当者　滝川重徳（専門員）、西田郁乃（主任主事）、加藤克郎（主任主事）、伊藤さやか(嘱託)

平成19年度

期間　　平成19年4月23日～同年12月21日

担当者　冨田和気夫（調査研究専門員）、滝川重徳（調査研究専門員）、西田郁乃（主任主事）、加藤克郎（主任主事）、伊藤さやか（嘱託）、細田隆博（嘱託）、吉田千沙子（嘱託）

平成20年度

期間　　平成20年4月7日～同年8月22日

担当者　冨田和気夫（主幹）、西田郁乃（主任主事）、布尾幸恵（嘱託）、伊藤さやか（嘱託）、吉田千沙子（嘱託）、丹野修太（嘱託）

なお、平成12年度に石川県教育委員会から委託を受け、公園整備に伴う調査（三ノ丸4次）を財団法人石川県埋蔵文化財センターが実施している。

平成12年度

期間　　平成12年8月31日～同年10月25日

担当部署　財団法人石川県埋蔵文化財センター調査第2課

担当者　　冨田和気夫（課主査）、立原秀明（主事）、加藤克郎（主事）

出土品整理

平成14・18・19年度　財団法人石川県埋蔵文化財センター　企画部整理課

平成20年度　財団法人石川県埋蔵文化財センター　特定事業調査グループ・国関係調査グループ

平成21年度　財団法人石川県埋蔵文化財センター　県関係調査グループ

4．報告書は、以下の職員が作成し、執筆分担は目次に記した。なお、第7章は株式会社パレオ・ラボによる分析報告である。

木越隆三（副所長）、冨田和気夫（主幹）、西田郁乃（主任主事）、伊藤さやか（嘱託）、吉田千沙子（嘱託）、丹野修太（嘱託）、小此木真理（嘱託）

5．調査に関する記録・遺物は石川県金沢城調査研究所で保管している。

6．調査・報告に際して、次の方々から指導・助言並びに協力を賜った。

文化庁記念物課　石川県立図書館　石川県立歴史博物館　金沢市立玉川図書館　金沢大学附属図書館　学習院大学史料館　財団法人文化財建造物保存技術協会　財団法人前田育徳会　滋賀県立安土城考古博物館　東京大学総合図書館　防衛省防衛研究所図書館　吉川弘文館

市川浩文　伊野近富　追川吉生　金森安孝　川村紀子　北浦　勝　北垣聰一郎　北島俊朗　北野博司　楠　寛輝　楠　正勝　久保智康　酒寄淳史　庄田知充　千田嘉博　中田宗伯　中村利則　成瀬晃司　新谷洋二　乗岡　実　橋本澄夫　平井　聖　堀内秀樹　真柄敏郎　松尾信裕　宮里　学　森島康雄　森　毅　横山隆昭　吉岡康暢　（五十音順、敬称略）

凡　例

1．本書の水平基準は海抜高を表し、東京湾平均平面水準（T.P.）である。
2．方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の日本測地系第Ⅶ系に準拠した。
3．掲載されている図版等のスクリーントーンの用例については以下の図の通りである。
4．遺構名は略号を使用した。名称に関しては、SA：築地・柵・塀・（土塁）　SD：溝　SE：井戸　SK：土坑　P：柱穴　SW：石垣　SX：その他（分類にない遺構、全体的な形状や性格が不明な遺構など）を使用している。アルファベット以降の番号に関しては以下のように使い分けている。
　201 番以降：河北門廃絶後の構築物　　101 番以降：平成 12（2000）年度調査時検出遺構
　石垣については、金沢城内で統一した ID 番号が付けられており、それを採用した（資料編　第２図・第１表参照）
5．平成 12（2000）年度と平成 18（2006）年度以降のグリッド配置は異なるが、両グリッドとも遺物採取の基準としているため併記している（資料編　第１図）。
　平成 18（2006）年度以降のグリッド名は、西から東へアルファベットの大文字（A・B・C‥）、北から南へアラビア数字（1・2・3‥）を５m 毎に付し、北西隅のグリッド杭の名称を取って呼んでいる。なお、グリッドラインと座標北との振れは N－11°－E である。
6．３～５章に関連する図（資料編　第５～50 図、第 72・73 図、第 79～86 図）には断面図等にそれぞれ図面掲載番号が付され、資料編　第４図でその位置を示している。図面掲載番号は本文や資料編、出土遺物観察表（第７～26 表）で共通する。
　例）**3-3-10　→３章**（河北門枡形の遺構）**３節**（二ノ門）の **10** 番目の図
7．測量図中、上端・下端間のケバ線や線種、太さについては下記の線種表の通りである。
8．土層注記の解釈中、特に断りがない場合は、近世の遺構・整地層を示している。
　色調に関しては、平成 18～20（2006～2008）年度調査では農林水産省農林水産技術会議事務局等監修「新版　標準土色帖」を使用している。平成 12（2000）年度調査では使用していない。
9．遺構・遺物実測図の縮尺に関しては各図中に示した。
10．石垣構築技術等に使用される用語について、本書では以下の石垣用語表に記載した。
11．引用・参考文献は、原則的に一括して本文編の最後に掲載しているが、第７章は節毎に記載している。

石垣用語表

石垣部分名称

用語	読み	解説
築石部	つきいしぶ	石垣の面部分
隅角部	ぐうかくぶ	石垣の折れ部分、外側に折れるものを出角（ですみ）内側に折れるものを入角（いりすみ）と呼ぶ
天端	てんば	石垣の上面
天端石	てんばいし	石垣の最上部の石材
根	ねそ	石垣が地面と接する部分
根石	ねいし	石垣の最下段の石
築石	つきいし	築石を構築する石材。平石（ひらいし）とも言う
間詰め	まつめ	築石の隙間に詰める小振りの石
角石	すみいし	隅角部に使用する石材
角脇石	すみわきいし	角石の側に位置する石材
目地	めじ	石材同士の隙間
勾配	こうばい	石垣の角度。直線のノリと曲線のソリからなる

石垣内部名称

用語	読み	解説
栗石	くりいし	築石の裏込などに用いられる円礫
押石	おさえいし	築石のはらみ・ずれを防止するために石尻の後ろに置く石材
介石	かいいし	築石の位置調整のために置く石材
捨石	すていし	築石の内部に押石・介石に適さない状態で置かれた石材
盛土	もりど	本来の地面の上に盛られた土

積み方名称

用語	読み	解説
布積み	ぬのづみ	石材を横方向に並べながら積む積み方
乱積み	らんづみ	横目地が通らず、不規則に積む積み方
谷積み	たにづみ	石材の長軸を交互に斜めにして積む積み方
算木積み	さんぎづみ	出隅を構成する２面に長い石材の長辺を交互に向けて積み上げる積み方

石材部分名称

用語	読み	解説
面	つら	石材の表面のうち、石垣の表面に位置する部分
大面	おおづら	角石の算木積みで使用した石材の表面のうち控が大きい面
小面	こづら	角石の算木積みで使用した石材の表面のうち控が小さい面
控	ひかえ	石材の奥行き
尻	しり	石材の後ろ側
側	どう	石材の面と尻の間。
合端	あいば	石同士の接点

石垣使用石材名称

用語	読み	解説
野面石	のづらいし	加工していない石。自然石・転石とも言う
割石	わりいし	割って、大きさを整えたり、面を造ったもの
粗加工	あらかこういし	割石をノミ等で粗く加工した石材
切石	きりいし	面や合端まで加工した石材

線種表

	ケバ種	上端線／下端線
トレンチ		崖ケバ
		実線
近代以後		短・短ケバ
		実線
近世以前		長・短ケバ
		実線

	ケバ種	上端線／下端線
遺構(未完掘)		長・短ケバ
		点鎖線
遺構 (検出のみ又は壁のみで確認)		長・短ケバ (下端線なし)

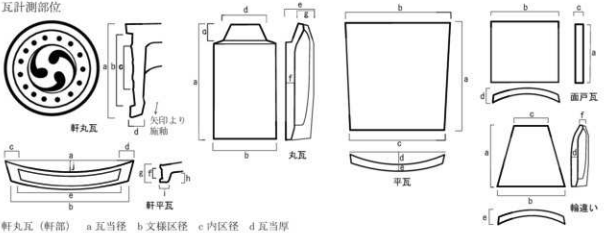
	ケバ種	上端線／下端線
遺構壁の傾斜変換線		長・短ケバ
遺構以外 (土管場)		実線・ケバなし
石(埋没部分)		点鎖線

土師器皿の分類

（㊥は石川県金沢城調査研究所 2008）

A 在地系　京都系流入以前からの系統を引くもの				13 （(財) 石川県埋蔵文化財センター1998 Fig. 307）	～16C末
B 京都系	1 概して薄手			P241㊥	～16C末
	2 概して厚手			P172㊥	～17C初
C 京都系要素が顕著でないもの 京都系終焉前後に形成か	1 京都系(B2)と共伴　17世紀初以後不明瞭 形状多様			P181㊥	17C初 慶長頃？
	2 17世紀前半以後へ連続	11 底部平坦、体部立ち上がり急、口縁端内屈	a 底部内面　一方向条痕 底部外面　指押さえ痕	P120㊥	17C初～ 元和頃～
		17世紀前半以後の主たる系統	b 底部内面　不定方向ナデ 底部外面　板（籠）目状圧痕	P141㊥	17C前半 寛永頃

瓦計測部位



軒丸瓦（軒部）　a 瓦当径　b 文様区径　c 内区径　d 瓦当厚

軒平瓦（軒部・平部）　a 上弧幅　b 下幅　c 右周縁　d 左周縁　e 文様区幅　f 文様区厚　g 瓦当厚　h 顎高　i 顎下部厚　j 弧深

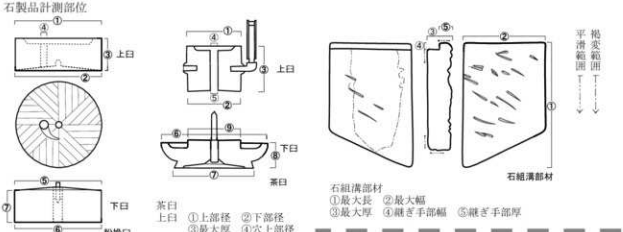
丸瓦　a 全長　b 体部厚　c 玉縁厚　d 玉縁幅　e 体部高　f 体部厚　g 玉縁高

平瓦　a 全長　b 広端幅　c 狭端幅　d 弧深　e 厚

面戸　a 全長　b 幅　c 厚　d 高さ

輪違い　a 全長　b 広端幅　c 狭端幅　d 厚　e 高さ（高）　f 高さ（高）

石製品計測部位



茶臼
上臼　①上部径　②下部径　③最大厚　④穴上部径　⑤穴下部径
下臼　⑥上部径　⑦下部径　⑧最大厚　⑨臼面径

粉挽臼
上臼　①上部径　②下部径　③最大厚　④穴上部径
下臼　⑤上部径　⑥下部径　⑦最大厚

石組溝部材
①最大長　②最大幅　③最大厚　④継ぎ手部幅　⑤継ぎ手部厚

遺構図版凡例

石垣断面

石の変色範囲

それ以外の断面（石組溝等）

本文編　目次

第１章　経緯と経過・・・・・・・・・・・・ 1
第１節　調査に至る経緯・・・・・・（冨田）1
第２節　調査の経過・・・・・・・・・（西田）3

第２章　歴史的環境・・・・・・・・・・・・ 8
第１節　金沢城と周辺の歴史・・・・（丹野）8
第２節　金沢城の沿革・・・・・・・（丹野）9
第３節　河北門の歴史・・・・・・（木越）13
第４節　既往の調査成果・・・・・（丹野）18

第３章　河北門枡形の遺構・・・・・・・ 32
第１節　概要・・・・・・・・・・・・・・・32
河北門の概要・・・・・・・・・（西田）32
近現代の河北門・・・・・・・・（吉田）36

第２節　一ノ門・・・・・・・・・・（伊藤）40
概要・・・・・・・・・・・・・・・・・40
P010・P011（根石、根固）・・・・・・40
3241・3231（東側・西側頓当石垣）、・・41
SX026・SX027（東側・西側頓当石垣階段）41
SD004・SD009（石組溝）・・・・・・・42

第３節　二ノ門・・・・・・・・・・・・・・48
概要・・・・・・・・・・・・・・（西田）48
SX030（二ノ門路盤）・・・・・（吉田）51
SX025（葛石）・・・・・・・・・（吉田）53
P005（礎石）、P001 ― 004
P006 ― 009（根固）・・・・・（西田）55
ID324・ID321（北・南石垣台）・・（西田）59
SD002（石組溝）、SK019（枡）、・・・・69
SD003（石組暗渠）・・・・・・・（伊藤）73

第４節　枡形・・・・・・・・・・・・・・・78
概要・・・・・・・・・・・・・・（西田）78
SX034（枡形内路盤）・・・・・・（吉田）80
SX031（石段）・・・・・・・・・（吉田）81
3220E・N（土塀石垣）、SA001（土塀裏盛土）、
3220S（土塀裏盛土土留石垣）・・（西田）82
SH001（長屋台石垣）・・・・・・（西田）88
SD005、SD010・011（石組暗渠）・（伊藤）90
P026 ― P030（柱穴）、SE002（井戸）
SX035（炉）・・・・・・・・（伊藤）94

第５節　ニラミ櫓台・・・・・・・（伊藤）97
概要・・・・・・・・・・・・・・・・・97
3500N・ID323（石垣）、SX028（階段）・97

第６節　河北坂・・・・・・・・・（吉田）106
概要・・・・・・・・・・・・・・・・106
SX212、SK101、SD101・102（石組暗渠）SK102　106

第４章　石垣解体調査・・・・・・（西田）112
第１節　概要・・・・・・・・・・・・・・112
第２節　事前調査及び上面遺構調査・・・112
第３節　解体調査・・・・・・・・・・・113
第４節　石材調査・・・・・・・・・・・125

第５章　河北門枡形以前の遺構（西田・伊藤）130
第１節　概要・・・・・・・・・・・・・130
第２節　東部・・・・・・・・・・・・・130
第３節　中央部・・・・・・・・・・・・144
第４節　西部・・・・・・・・・・・・・145

第６章　出土遺物・・・・・・・・・・・ 150
第１節　陶磁器・土器・・・・・・（吉田）150
第２節　瓦・・・・・・・・・・・（伊藤）156
第３節　石製品・・・・・・・・・（伊藤）161
第４節　金属製品・木製品・・・・（伊藤）162

第７章　自然科学的調査・・・・・・・・ 163
第１節　版築状盛土層及び灰質物の
自然科学分析（藤根・竹原・米田）163
第２節　出土した大型植物遺体
・・（佐々木・スダルシャン）169
第３節　出土した動物遺体・・・・（中村）172
第４節　炭化材の樹種同定・・・・（黒沼）174

第８章　総括・・・・・・・・・・・・・ 177
第１節　遺構編・・・・・・・・・（西田）177
第２節　遺物編・・・・・・（伊藤・吉田）182
引用・参考文献
抄録

表目次

第 1 表　周辺遺跡地名表・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
第 2 表　金沢城の沿革・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
第 3 表　金沢城跡発掘調査一覧・・・・・・・・・・・・・・・31
第 4 表　河北門時期区分・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
第 5 表　復元関連遺構名・・・・・・・・・・・・・・・・・・34
第 6 表　河北門石垣 1D　・・・・・・・・・・・・・・・・・34
第 7 表　SD002 石材上面標高　・・・・・・・・・・・・・・・69
第 8 表　SD003 掘方底面標高　・・・・・・・・・・・・・・・74
第 9 表　二ノ門内を通る水路・・・・・・・・・・・・・・・・91
第 10 表　柱穴の規模・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・94
第 11 表　石垣解体作業の手順及び担当・・・・・・・・・・116
第 12 表　矢穴計測表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・129
第 13 表　SD007 内遺物接合状況　・・・・・・・・・・・・・153
第 14 表　SD006・SD007　他遺構との接合状況　・・・・・153
第 15 表　SD006　土師器皿　分類別破片数　・・・・・・154
第 16 表　SD007　土師器皿　分類別破片数　・・・・・・155
第 17 表　軒丸瓦　巴文分類表・・・・・・・・・・・・・・156
第 18 表　分析試料の詳細・・・・・・・・・・・・・・・・・163
第 19 表　版築状盛土等の元素マッピング分析による点分析結果164
第 20 表　灰の植物珪酸体の種類と個数・・・・・・・・・169
第 21 表　出土した大型植物遺体・・・・・・・・・・・・・170
第 22 表　動物遺体種名一覧・・・・・・・・・・・・・・・172
第 23 表　動物遺体一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・173
第 24 表　樹種同定結果一覧・・・・・・・・・・・・・・・174
第 25 表　遺構の変遷・・・・・・・・・・・・・・・・・・179
第 26 表　軒丸瓦・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・183
第 27 表　軒平瓦・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・183

図版目次

第 1 図　遺跡の位置・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
第 2 図　周辺の遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
第 3 図　河北門関連絵図 1－7（－第 9 図）・・・・・・19
第 10 図　金沢城跡発掘調査位置図・・・・・・・・・・・・30
第 11 図　概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
第 12 図　調査区全体と近世後期の河北門・・・・・・・・35
第 13 図　近現代の河北門 1－3　（－第 15 図）・・・・・37
第 16 図　3241・3231（東側・西側煩当石垣）　・・・・・44
第 17 図　P010・P011（根石、根固）、3241・3231（東・西側煩当石垣）45
第 18 図　SX026・SX027（東側・西側煩当石垣階段）、
　　SD004（一ノ門石組溝）・・・・・・・・・・・・・・46
第 19 図　SD004・SD009（一ノ門石組溝）　・・・・・・・47
第 20 図　二ノ門全景・・・・・・・・・・・・・・・・・・48
第 21 図　二ノ門　概要・・・・・・・・・・・・・・・・・49
第 22 図　SX030（二ノ門路盤）1・2（－第 23 図）　・・・51
第 24 図　SX025（葛石）1・2（－第 25 図）　・・・・・・53
第 26 図　P001 － P009（礎石・根固）・・・・・・・・・・57
第 27 図　ID321・ID324（南・北石垣台）1－6（－第 32 図）63
第 33 図　SD002（石組溝）1・2（－第 34 図）　・・・・・70
第 35 図　SK019（枡）・・・・・・・・・・・・・・・・・・75
第 36 図　SD003（石組暗渠）1・2（－第 37 図）　・・・・76
第 38 図　枡形全景・・・・・・・・・・・・・・・・・・・78
第 39 図　枡形　概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・79
第 40 図　SX034（枡形内路盤）・・・・・・・・・・・・・80
第 41 図　石段・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・81
第 42 図　3220E・N（土塀石垣）、SA001（土塀裏盛土）・・85
第 43 図　3220S（土塀裏盛土土留石垣）・・・・・・・・87
第 44 図　SW01（長屋台石垣）・・・・・・・・・・・・・89
第 45 図　SD005・SD010・SD011（石組暗渠）・・・・・・92
第 46 図　SD005（石組暗渠）・・・・・・・・・・・・・・93
第 47 図　P026 － P030（柱穴）、SD012（溝）、SE002（井戸）96
第 48 図　ID323（ニラミ櫓台）1－6（－第 53 図）・・・99
第 54 図　SX028（ニラミ櫓台南側階段）・・・・・・・・105
第 55 図　河北坂・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・109
第 56 図　立会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・111
第 57 図　解体石垣位置及び呼称図・・・・・・・・・・・116
第 58 図　ニラミ櫓台石垣北面観察状況・・・・・・・・117
第 59 図　解体段色分け図・・・・・・・・・・・・・・・119
第 60 図　石垣解体調査断面模式図及び解体状況・・・・120
第 61 図　ニラミ櫓台北面　捻文長別・長軸角度別色分け図 121
第 62 図　一ノ門　東西　出土状況（－第 64 図）・・・・122
第 65 図　一ノ門東・西煩当石垣・ニラミ櫓台北面石材色分け図 127
第 66 図　石材調査（石材、調整、煤・鉛痕跡）・・・・128
第 67 図　石材調査（矢穴・刻印）・・・・・・・・・・・129
第 68 図　SD006・SD007　1・2（－第 69 図）・・・・・132
第 70 図　SD008（石組暗渠）・SK002・SE001（井戸）・・143
第 71 図　版築状盛土崩・・・・・・・・・・・・・・・・147
第 72 図　SA002（土塁状盛土）1・2（－第 73 図）・・148
第 74 図　SD006　土師器皿　分類別破片数　・・・・・・154
第 75 図　SD007　土師器皿　分類別破片数　・・・・・・155
第 76 図　瓦当文様分類案（軒丸瓦）・・・・・・・・・159
第 77 図　瓦当文様分類案（軒平瓦）・・・・・・・・・160
第 78 図　自然科学分析を行った土壌試料と灰質物・・・165
第 79 図　出土土壌の元素マッピング図・・・・・・・・166
第 80 図　SK002 出土灰質物中のプラント・オパール化石 167
第 81 図　土壌試料中の方解石結晶・・・・・・・・・・168
第 82 図　出土した大型植物遺体・・・・・・・・・・・171
第 83 図　出土した動物遺体・・・・・・・・・・・・・173
第 84 図　出土材の顕微鏡写真・・・・・・・・・・・・176
第 85 図　河北門遺構変遷図・・・・・・・・・・・・・180
第 86 図　調査区柱状図・・・・・・・・・・・・・・・181
第 87 図　河北門・本丸出土瓦（軒丸・軒平）・・・・・185

（資料編）

凡例

図版目次

第 1 図　グリッド配置図・・・・・・・・・・・・・1
第 2 図　石垣 1D　・・・・・・・・・・・・・・・・・3
第 3 図　遺構配置図・・・・・・・・・・・・・・・・4
第 4 図　図面作成位置図・・・・・・・・・・・・・・6
第 5 図　遺構図版（－第 86 図）・・・・・・・・・10
第 87 図　遺構写真（－第 145 図）・・・・・・・・113
第 146 図　石材カード（－第 202 図）・・・・・・176
第 203 図　遺構写真（－第 218 図）・・・・・・・233
第 219 図　遺物実測図（－第 251 図）・・・・・・269
第 252 図　遺物写真（－第 288 図）・・・・・・・302

表目次

第 1 表　遺構台帳（－第 2 表）・・・・・・・・・2
第 3 表　ニラミ櫓台　石材計測表・・・・・・・162
第 4 表　ニラミ櫓台石材観察表（－第 5 表）・・163
第 6 表　裏込め計測表・・・・・・・・・・・・・165
第 7 表　遺物観察表（－第 26 表）・・・・・・・249

第１章　経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

金沢城跡公園の開設

明治初年から旧金沢城内は兵部省（のちの陸軍省）の所管となり、昭和20年まで第九師団司令部や歩兵第六旅団司令部、歩兵第七連隊の兵舎が立ち並ぶ陸軍の拠点であった。第二次世界大戦後の昭和24年(1949)には文部省の所管となり金沢大学が開学し、金沢城跡は大学キャンパスとして利用されてきた。

昭和53年、城内キャンパスは金沢市郊外の角間地区への移転を決定し、平成５年(1993)３月に総合移転を完了した。大学跡地の取り扱いは、平成３年８月に設置された金沢大学跡地利用懇話会で検討され、平成５年(1993)３月の「公園的、文化的利用を基本とする」との提言を受けて、公園化に向けた動きが始まった。

県は、この提言に沿って、平成７年(1995)３月に「金沢城跡整備実施設計報告書」をとりまとめ、平成８年(1996)１月に 28.5ha を都市公園に利用する都市計画を決定し、同年３月に国から大学跡地21.77ha を取得した。平成８年度(1996)に始まった金沢城公園整備は、平成16年度(2004)までを公園としての基盤整備とする10ヵ年計画に基づき、①敷地環境の整備、調査（不要建物の撤去、石垣修景等）、②広場、園地等の整備（二ノ丸等各種広場、幹線園路、便益施設等）、③城郭建造物の復元（菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓、内堀等）を進めることとした。

公園の開設は、平成９年度(1997)の本丸等の暫定開園に始まり、平成13年（2001）９月の「全国都市緑化いしかわフェア」の開催を期に、公園計画区域のほぼ全域を開園した。

公園開設までの整備に伴う発掘調査

公園整備の実施に先立ち、県教育委員会文化財課と県土木部公園緑地課は、金沢城跡が周知の埋蔵文化財包蔵地であることから、工事に伴い埋蔵文化財に影響が生じる場合は、前もって発掘調査等の保護措置を講ずるべく、事前協議を進めていた。その結果、平成９年度(1997)に県立埋蔵文化財センターが実施した内堀及び菱櫓台石垣上面遺構の確認調査を皮切りに、園地整備に係る工事設計と埋蔵文化財調査がほぼ同時並行状態で急ピッチに進み、平成10年(1998)には、新たに設立された財団法人石川県埋蔵文化財センターを調査担当として、いもり堀、本丸附段階段、菱櫓南（五十間長屋折曲部）、三ノ丸北便所の発掘調査、平成11年(1999)には、前年度から継続の建物復元整備に伴う内堀・五十間長屋に加えて、三ノ丸休憩所、新丸大手門便所、鶴ノ丸便所等の便益施設の整備に係る発掘調査が行われた。

平成12年度(2000)には北ノ丸（御宮・藤右衛門丸）、尾坂門、三ノ丸北で園地園路の整備が計画された。このうち、三ノ丸北園地（旧大学本部・保健管理センター跡地）では、盛土造成と道路改修が計画され、県教育委員会文化財課と県土木部公園緑地課による事前協議の結果、道路側溝の改修工事については、大部分が既設ＶＳ側溝の付替えではあるものの、一部に経路を変更する箇所があること、当地点は河北門枡形跡地であり石垣基底部等の遺構が残存している可能性があること等、工事に伴って埋蔵文化財に影響が生じる可能性が懸念されたことから、事前に発掘調査を実施し遺構確認を行うこととなった。調査は、県公園緑地課からの依頼を受けた県文化財課が財団法人石川県埋蔵文化財センターに委託し、平成12年(2000)８月31日から同年10月25日にかけて、河北門枡形跡地から河北坂下に至る側溝予定地180㎡の確認調査を実施した。当時の調査名称は「三ノ丸第４次調査」である。調査の結果、既設側溝の下層から、二ノ門石垣台の根石、同礎石根固、石組溝等、河北門関連の遺構

が多数検出された。明治初期の枡形撤去後の整地時に周辺が盛土で嵩上げされていたため、その後の掘削による損傷を免れたものである。工事にあたっては、遺構を保護するため側溝設置高を変更するとともに、遺構面を砂で埋め戻して施工することとした。その後、平成 13 年(2001) 3 月には、追加工事として三ノ丸南園地側からの排水路との接合枡の埋設及び融雪管が埋設されることになったため、工事立会を実施し、遺構の保護を図った。

金沢城調査研究体制の整備拡充

金沢城公園の全域開園に先立つ平成 13 年(2001) 7 月 1 日、金沢城の調査研究、関連資料の整理・収集、関連城郭の調査研究、調査成果の普及・啓発等を目的として、県教育委員会文化財課内に金沢城研究調査室が設置された。同調査室では金沢城調査検討委員会を設置し、調査研究の課題や研究方法、研究計画等について総合的、専門的視点から指導助言を受け、平成 14 年(2002) 2 月に 2 期 20 年の金沢城調査研究事業計画を策定した。平成 14 年度には国庫補助による城内埋蔵文化財確認調査をはじめ、絵図・文献、建造物、石垣、石垣構築技術等の基礎的調査に着手し、金沢城に係る学術的な調査研究の専門機関として歩み始めることとなった。平成 19 年度(2007)からは、調査研究体制の一層の拡充を図るため、石川県金沢城調査研究所に改組し今日に至っている。

金沢城復元整備計画

一方、石川県では、今後の金沢城公園の整備計画を検討するため、平成 16 年(2004) 2 月に「金沢城復元基本方針検討委員会」を設置し、今後の金沢城公園の復元整備の基本的な考え方、復元に際しての留意点等について検討を加えた。その結果は平成 17 年(2005) 3 月に報告され、「整備にあたっては、将来の史跡指定を視野に入れながら、これまでの復元や学術的な調査研究を踏まえつつ、史実を尊重した本物志向で進める」との基本理念のもと、①復元にあたっては史実の十分な調査と検証を行い、史実性の高い整備を行うこと、②復元に際しての時代設定は基本的に江戸時代後期に統一すること、③多様な公園機能にも配慮すること、④復元はゾーン別の保全・整備や活用方針等を踏まえて長期的視点も含めた段階的な取り組みを進めること、等の基本方針を示した。

県は、この基本方針に基づき、平成 18 年(2006) 5 月に第二期整備計画を策定し、平成 26 年度(2014)までの 10 年間を期間とする短・中期の整備事業として、三御門（石川門、河北門、橋爪門）の整備、いもり堀の段階復元、石垣の保全・活用、玉泉院丸庭園の調査検討を進めることとした。

河北門の整備は、平成 17 年 9 月補正予算に事業化に必要な基礎調査費が計上され、平成 18 年(2006) 6 月補正予算で設計費及び埋蔵文化財調査費が承認されて本格着手した。事業期間は平成 22 年春までの 3 年 9 ヵ月余とされた。

河北門復元整備に伴う確認調査

一方、県土木部公園緑地課と県教育委員会文化財課及び金沢城研究調査室は、埋蔵文化財調査を要する範囲、期間、体制等について事前協議を重ねた。確認調査の対象範囲については、現況測量図・金沢大学城内キャンパス平面図・陸軍施設配置図・江戸後期の絵図面等及び平成 12 年度(2000)の調査結果を検討したうえで位置と範囲を決定した。調査期間は、工事工程との調整の余地を残しつつ、平成 19 年度末までの延べ 12 ヵ月を一応の目安とした。加えて必要な調査体制（金沢城研究調査室の直営調査とし調査員 3 名を充当）を確保するとともに、土木部と教育委員会との作業分担（ヤード仮囲い、現況舗装及び近現代盛土の撤去、仮設園路の整備と管理等については土木部が工事発注）等についても協議し、現地調査に速やかに着手できるよう準備を進めた。また、現地は新丸から三ノ丸へ至る金沢城公園の幹線園路として供用中であったため、う回路設置まで園路を存続させる必要があった

ことから、歩行者の安全を確保したうえで、調査進捗に支障が出ないよう経路を適宜切り回し、公園利用と発掘調査の両立を図ることとした。結果的には、来園者が発掘現場の様子を間近で見ることのできる格好の見学路となり、調査状況の解説板を取り付けるなどして、積極的に活用した（写真１）。

確認調査の実施にあたっては、復元整備の根拠となる江戸後期の遺構確認を第一義の目的とした。加えて、河北門創建以来の変遷や河北門以前に遡る遺構についても、撹乱壁を徹底的に精査する等、遺構の保存に影響を与えない範囲で、できる限りの情報を取得し、「初期金沢城の構造と変遷」をテーマに平成 14 年度から取り組んでいる城内埋蔵文化財調査研究に資する知見を得ることを第二の目的とした。また、石垣修築が必要となる場合は、一段ごとの解体調査を工事併行で実施し、遺構の現状を子細に記録保存するとともに、各石材の表面観察を徹底し、加工特性等の把握に努めた。

河北門復元整備に伴う遺構確認調査は、平成 18 年(2006) 7 月 5 日に現地調査に着手した。調査経過は後述のとおりである。

第２節　調査の経過

平成 12（2000）年度調査

金沢城公園整備に伴い（財）石川県埋蔵文化財センターが調査を行った。8 月 31 日から同年 10 月 25 日にかけて、河北門枡形跡地から河北坂下の 180 ㎡を対象とした。河北門二ノ門の南側石垣台根石や門礎石根固等を確認した。また、河北坂の改変など変遷過程等について明らかとした。

平成 13 年度に石川県金沢城研究調査室が設立され、平成 12 年度の整理報告を同調査室へ移管した。河北門復元整備に係る調査と一部重複する箇所もあるため、合わせて本書に掲載することとした。

平成 18（2006）年度調査

現地での遺構確認調査に先立ち調査計画をたてるため、現況と過去の調査成果や絵図等をもとに調査区を門の構造物の単位で分け設定した。そのうち復元に際し、まず位置や規模などのデータが必要となる二ノ門部分、ニラミ櫓台部分、一ノ門通路部分の 3 地点、730 ㎡を対象に調査を行うこととした。まず 7 月 5 日より二ノ門部分予定面積 540 ㎡のうち、約 370 ㎡の範囲の表土除去を行い調査に着手し、12 月 27 日に機材撤収等も含め終了した。都市公園の中であり、周辺の園路確保や公園内のイベント等との調整を行いながら、随時調査区の拡張を行った。調査着手時の表土除去の段階で二ノ門北側石垣台西面の南西角脇石や二ノ門路盤を検出した。調査の進捗に伴い近代以降の撹乱を受けつつも、良好に残存する遺構があることが明らかとなり、河北門の主要遺構である二ノ門・一ノ門・ニラミ櫓の規模や創建年代、当時の地盤面の高さなど復元に必要なデータが得られた。

［主な調査工程］

7 月 5 日　現地調査着手
7 月 6・7・10 日　バックホーによる表土除去。（二ノ門部分）北側石垣台北西部、二ノ門路盤検出。
7 月 11 日　作業員による作業開始。二ノ門石組溝の一部検出。
8 月 17 日　ニラミ櫓台周辺の表土除去。ニラミ櫓台石垣東面の一部検出。
9 月 6 日　第２地点の近代以降の石垣解体。
9 月 19 日　バックホーによる表土除去。二ノ門南側石垣台北面、門礎石、二ノ門葛石を検出。
10 月 10 日　バックホーによる表土除去。南側石垣台石垣の一部を検出。
10 月 19 日　金沢城調査研究埋蔵文化財・伝統技術（石垣）合同専門委員会現地指導。
11 月 2 日　バックホーによる表土除去。
11 月 21 日　ラジコンヘリによる第１回空中写真測量。

12 月 2 日　「河北門整備に伴う埋蔵文化財調査」現地説明会　（参加者約 100 名）
12 月 7 日　ラジコンヘリによる第２回空中写真測量
12 月 11 日　冬期間の遺構養生のため土嚢による遺構埋め戻し開始。
12 月 27 日　機材撤収等を行い、平成 18 年度の現地調査を終了。

平成 19（2007）年度調査

昨年度に引き続き二ノ門およびニラミ櫓台の調査から開始し、残りの調査区も順次着手した。河北坂から三ノ丸に至る園路を供用しながらの調査のため、園路切り替え工事等と工程調整を行い、調査区を７地点に細分して作業を進める計画をたてた。当初は調査を終了した調査地点から引き渡しを行い園路迂回路とし、別地点の調査を行う予定で数回の園路切り替えが必要であった。しかし河北坂に向かって、調査区を東西に分断する下水道の掘方部分を先行して調査し、調査終了まで園路として供用することとした。これにより、園路の切り替えは１回となり、調査区は東西に二分されるが、細分して調査することはなくなり、河北門の遺構全体像を見渡しながらの調査が可能となった。調査を進めていくなかで、枡形の土塀石垣や土留石垣など、門の周辺部の状況が徐々に明らかとなった。また、復元整備に関する遺構調査だけでなく、初期金沢城の様相を明らかとする手がかりも得た。調査は４月 23 日に着手し、12 月 21 日に終了した。

［主な調査工程］
4 月 23 日　現地調査着手。
5 月 15 日　バックホーによる表土除去。
5 月 21 日　金沢城調査研究埋蔵文化財・伝統技術（石垣）合同専門委員会及び現地指導。
6 月 1 日　現地指導。（東京大学埋蔵文化財調査室・成瀬晃司氏）
6 月 11 日　リフトセンサーによる第１回空中写真測量。（第３地点）
6 月 14 日　第３地点の近代石組溝の解体・撤去作業　撤去後の遺構調査を開始。（下層遺構の検出）
6 月 15 日　建造物専門委員　河田克博・増田達男氏来跡。
7 月 17 日　現地指導。（金沢城調査研究委員・吉岡康暢氏）（銅碗出土の土坑及び出土遺物）
8 月 23 日　ラジコンヘリによる第２回空中写真測量。（園路付替え箇所）
8 月 29 日　バックホー・クレーンによる近代以降の石垣、建物基礎、撹乱土の除去。
9 月 7 日　バックホーによる表土除去（土塀裏盛土周辺）土塀裏盛土土留石垣、長屋台石垣を検出。
9 月 26 日　リフトセンサーによる第３回空中写真測量。（北側石垣台や頬当石垣の一部）
10 月 1 日　近代以降に設置された天端石及び築石、裏込め解体。　北側石垣台北西隅角部を検出
10 月 29 日　現地指導。（金沢城調査研究専門委員・北野博司氏）
11 月 1 日　現地視察。（文化庁記念物課福家主任調査官）
11 月 12 日　金沢城調査研究埋蔵文化財・伝統技術（石垣）専門委員会現地指導。
11 月 14 日　ラジコンヘリによる第４回空中写真測量。二ノ門周辺の調査終了。
11 月 24 日　河北門整備工事の起工式。埋蔵文化財調査の現地説明会開催。
12 月 10 日　現地指導。（金沢城調査研究専門委員・北野博司氏）
12 月 11 日　ラジコンヘリによる第５回空中写真測量。現場撤収準備開始。
12 月 13 日・18 日　石垣立面図写真測量。
12 月 21 日　機材撤収等を行い、平成 19 年度の現地調査を終了。

平成 20（2008）年度調査

最終年度はニラミ櫓台北面（三ノ丸北面）石垣および一ノ門頬当石垣の解体調査を行った。前年度

調査を終えた二ノ門部分の復元に伴う石積み工事が並行して進む中、４月７日に現地調査に着手し、８月 22 日に終了した。石垣解体に伴い裏込めなど背面の構造について調査を行うとともに、引き続き初期金沢城の様相を追及した。調査終盤には二ノ門復元工事の進捗に伴い第１地点において根固部分の一部追加確認調査を行った。

平成 20 年度には、６月 17 日に金沢城跡が史跡指定され、その後約１ヵ月現状変更申請期間として、復元工事が中断した。埋蔵文化財調査についても、新たに石垣解体や掘削を行うことはできないため、その期間に解体石材の観察や現場で断面図作成作業等を行った。

現地調査終了後も復元工事の進捗により随時工事立会を行い、必要な記録作成を行った。

［主な調査工程］

４月 ７ 日現地調査着手。
４月 ８ 日　現地視察。（文化庁記念物課佐藤主任調査官）
４月 ９ 日　ニラミ櫓背面Ａトレンチ設定。
４月 21 日　ニラミ櫓第０段解体。
５月 ９ 日　枡形内でⅡ期の門礎石根固の可能性がある遺構を検出。
５月 15 日　リフトセンサーによる第１回空中写真測量。（第１段）
５月 16 日　ニラミ櫓第１段解体。河北坂雨水ポンプ工事立会。
５月 19 日　クレーンによる第２回空中写真測量。（第２段）
５月 20 日　ニラミ櫓及び一ノ門第２段解体。
５月 21 日　リフトセンサーによる第３回空中写真測量。（第３段）　ニラミ櫓第３段、一ノ門第４段解体。
５月 23 日　クレーンによる第４回空中写真測量。（ニラミ櫓第３段、一ノ門第４段）
５月 26 日　ニラミ櫓、一ノ門第４段解体。
５月 29 日　リフトセンサーによる第５回空中写真測量、解体。（一ノ門第５段上）
５月 30 日　クレーンによる第６回空中写真測量。（第５段）一ノ門第５段中段解体。
６月 ２ 日　リフトセンサーによる第７回空中写真測量。（一ノ門第５段下）
　　ニラミ櫓、一ノ門第５段解体。（ニラミ櫓石垣解体予定段まで解体完了）
６月 ４ 日　クレーンによる第８回空中写真測量。（一ノ門第６段上）
６月 ５ 日　一ノ門第６段上解体。
６月 ６ 日　クレーンによる第９回空中写真測量。（一ノ門第６段下）
６月 ９ 日　一ノ門第６段下解体。
６月 12 日　クレーンによる第 10 回空中写真測量。（一ノ門第７段）
６月 13 日　一ノ門第７段解体。現地視察。（文化庁記念物課佐藤主任調査官）
６月 17 日　金沢城跡の史跡指定の官報告示。国史跡に指定される
　　クレーンによる第 11 回空中写真測量。（一ノ門第８段）（石垣解体作業完了）
６月 18 日～7 月 18 日　史跡指定に伴う現状変更申請期間により復元工事が中断。
　　現場断面図作図や解体石材観察を行う。
７月 22 日　クレーンによる第 12 回空中写真測量。（調査区全景）
８月 １ 日　ニラミ櫓南西隅角部で改修掘方精査。
８月 ５ 日　リフトセンサーによる第 13 回空中写真測量。（二ノ門根固）
８月 ８ 日　現地リース機材等撤収。解体石材の観察作業は引き続き行う。
８月 22 日　現地調査終了。

なお、調査終了以降には、復原工事の各工程を公開するため、適宜現地での説明会が開催された。平成 20 年９月 17 日には立柱式、平成 21 年１月 10 日上棟式、平成 22 年４月 24 日竣工式が行われた。

遺物整理の経過

３ヵ年出土遺物は、整理箱で平成 18 年度 140 箱、平成 19 年度 154 箱、平成 20 年度 26 箱で総数 320 箱であった。（いずれもＬⅡ型コンテナバット）

出土遺物の整理については、平成 18～21 年にかけて実施し、洗浄は全て直営で調査年度内に行った。記名・分類・接合および実測・トレースは、平成 19～21 年に（財）石川県埋蔵文化財センターに委託して行った。また、平成 12 年度に調査が行われた三ノ丸第４次調査の出土遺物整理は、平成 14 年度に石川県金沢城研究調査室が（財）石川県埋蔵文化財センターに委託して行った。

河北門等復元整備専門委員会

河北門の復元整備を進めるにあたり、石川県は平成 18 年 10 月 27 日付で「金沢城河北門等の復元整備専門委員会」を設置し、「河北門」及び同時進行していた「いもり堀（段階復元）」の設計・施工上の指針等について、専門的・技術的視点から検討、助言を得ることとした。委員は以下の６氏で、石川県知事が委嘱した。

金沢城河北門等の復元整備専門委員会委員（敬称略　肩書きは当時）

北浦　　勝　　金沢大学大学院自然科学研究科教授（土木）
北垣聰一郎　　元東大阪短期大学教授（石垣）
北野　博司　　東北芸術工科大学助教授（考古）
中村　利則　　京都造形芸術大学教授（建築）
新谷　洋二　　東京大学名誉教授（城郭・土木）【副委員長】
平井　　聖　　昭和女子大学学長（城郭・建築）【委員長】

会議は以下の日程で計６回開催した。埋蔵文化財の調査状況については、適宜報告し、専門的な指導・助言を得た。

第１回　平成 18 年 11 月 27 日（月）
・復元整備計画等の概要
・復元設計の基礎資料について
埋蔵文化財調査の状況
文献史料の状況
・設計の基本的事項について

第２回　平成 19 年２月１日（木）
・整備地盤、遺構保全の検討について
・復元石垣の考察と復元方針について
・復元建築の考察と設計仕様について

第３回　平成 19 年５月 24 日（木）
・河北門の実施設計について
二ノ門の基礎構造について
二ノ門の建築構造について
二ノ門のバリアフリー構造について
一ノ門の立面設計について
ニラミ櫓台石垣について
・いもり堀の復元計画について
復元の基本的な考え方
埋蔵文化財調査の結果

段階整備に向けた課題

第４回　平成 19 年 11 月 14 日（水）

・河北門の復元整備について

工事概要、工程について

「二ノ門」の石垣について

・いもり堀の復元計画について

第５回　平成 20 年２月 21 日（木）

・河北門の復元整備について

ニラミ櫓台石垣の施工

・いもり堀の設計（案）について

鯉喉櫓台石垣について、

堀の構造について

第６回　平成 21 年２月 19 日（木）

・河北門整備工事現場

・いもり堀整備工事現場

・鯉喉櫓台石垣について

埋蔵文化財調査結果による石垣の特性について

石垣の割付けの基本方針について

金沢城跡の史跡指定

確認調査の終盤、平成 20 年６月、金沢城跡は国の史跡に指定された（６月 17 日付官報告示）。

写真１
調査区脇の園路に発掘調査や復元整備状況に関する案内板を設置した。

写真２
復元工事の起工式にあわせて行った発掘調査現地説明会の様子。

第２章　歴史的環境

第１節　金沢城と周辺の歴史

第１図　遺跡の位置

金沢市街地のほぼ中央を占める金沢城跡は、南東の山地帯より舌状に伸びる小立野台地の先端部分に立地する。

小立野台地は犀川・浅野川によって開発された河成段丘であり、城外との比高差は、最高所である本丸で30m以上、低所に位置する新丸においても約10mを測り、城が天然の段丘面を巧みに利用して築かれたことが推察される。また城のある台地先端部と、その南東に続く台地本脈との間には断層があり、自然谷が形成されていたらしく［藤 1999］、城付近の地形は、人工の手が加わる以前から、独立丘的な状況を呈していたようである。

金沢城周辺は、近世から市街化が進んでおり、近世以前の遺跡については従来伝わるところが少なかったが、城跡自体や城地に隣接する前田氏（長種系）屋敷跡［大手町遺跡（財）石川県埋蔵文化財センター 2002e］・広坂遺跡［金沢市 2004b・2005b・2006b・2007c］の調査により、縄文～中世の資料が確認されている。

金沢城では、平成９年度の調査において８～９世紀代の掘立柱建物跡が検出されたほか、断片的ではあるが、幾つかの調査区で古代に属する土坑・ピット・土器片が確認されている。城地北側の前田氏（長種系）屋敷跡では、縄文時代の落とし穴、弥生時代後期後半～終末期の墳丘墓、古代の粘土採掘坑が検出されている。一方城地南側の広坂遺跡では、８世紀代の瓦が出土し古代寺院の存在が確実視され、また中世の居館に伴う堀や寺院と思われる礎石建物が検出されている。このように、市街地の下には城下町のみならず、それ以前の遺構も残存していることが判明しつつある。

戦国時代になると、現在の城地には金沢坊（金沢御堂・尾山御坊）が創建され、加賀地域における政治・宗教・経済の拠点として発展するが、16世紀後半については、城の南側に位置する県庁跡地（近世には堂形と呼ばれ、米蔵・馬場等藩の施設があった城の外縁部）では館ないし寺院の区画施設と推定される溝・土塁、広坂遺跡では礎石建物等が検出されており、共伴する遺物に恵まれないものの数少ない遺構確認例である［伊藤 2004］。なお、浅野川と北国街道の交点に近接する東山一丁目遺跡［金沢市 2010］では、14～15世紀代と思われる珠洲甕・白磁皿・古瀬戸水滴が出土しており、近所に所在したとされる「山崎窪市」との関連が注目される。やがて金沢坊は織田政権の前に陥落し、佐久間氏・前田氏など織豊政権の大名による支配が始まるが、この段階もいまだ、遺構・遺物は多くない。

徳川氏が幕府を創始し、豊臣氏を滅ぼして名実ともに統一政権を確立した慶長・元和期頃、金沢城周辺では大名前田氏の支配のもと、城下町の整備が進行する。現在、市街各所で調査された城下町の遺跡地点数は30箇所以上を数えるが（第２図・第１表）、まとまった量の遺構・遺物が見られるようになるのは、この頃以後のことである。なお慶長４年（1599）・同15年（1610）に築造された内・外惣構の一部についても発掘調査が行われており、当初の構造や、規模を縮小しつつ存続・再生が図られる変遷過程が判明している。城下町はその後度重なる火災等の災害（寛永８年(1631)・同12年(1635)の大火等）に見舞われ、また一方で計画的整備を繰り返しながら、寛文年間（1661～1672）までにほぼ骨格が整い、以後明治時代の初めまで、三都に次ぐ大都市として発展する。

城下でも特に中枢に位置する遺跡として、先に挙げた広坂遺跡や前田氏（長種系）屋敷跡がある。

広坂遺跡は、17 世紀前半における性格はなお検討の余地はあるものの、陶磁器の優品が多く出土し、また 17 世紀中頃以降は高級武家の屋敷として、多様な遺構・遺物が検出されている。城下町遺跡として最大の面積が調査されており、火災被害地の比定等、今後基準となる所見が蓄積されている点も大きく評価できよう。前田氏（長種系）屋敷跡は、寛永 16 年（1639）以後、標記の重臣屋敷となったところであるが、これ以前の遺構・遺物が充実しており、初期城下町の屋敷跡と考えられている。

県庁跡地では、元和期以前と想定される面において、護岸石垣を備えた大規模な遺構が検出されている［加藤 2009］。堀と考えられているが、泉水等の可能性も検討する余地がある。この上面に米蔵や馬場が営まれ、公的な空間として存続する。

これらの外側に位置する安江町・本町一丁目・東山一丁目の各遺跡は、性格を異にするが、城下町の一般的な在り方を示す。安江町遺跡［金沢市 1997］は中級藩士・町人居住地が対象となる調査であるが、町人の物質的な優位性が読み取れる、興味深いデータが得られた。本町一丁目遺跡［金沢市 1995］は町人の居住地に該当し、富籤の突札等、生活臭の強い遺物が目を引く一方、建物・井戸・土坑（粘土採取坑・廃棄土坑）等の遺構配置から、屋敷地の空間構造も追求されている。東山一丁目遺跡は城下町の要である浅野川大橋に近接し、旧北国街道の表店に位置する地点が調査され、検出した井戸遺構の配置と絵図重ねから、町屋の地割りの一端が解明された。このほか特徴的なものに鍛冶関連遺構がある。城下町の急速な拡大を示す 17 世紀前半に属する遺構のほか、操業時期が江戸後期に下るものも確認され、文化８年（1811）に当地に居住していた甲冑鍛冶の春田（細工師の一種）との関わりが指摘されている。

久昌寺・木ノ新保・三社町の各遺跡は、城下縁辺に所在する。久昌寺遺跡［金沢市 2004c］では同名の曹洞宗寺院の墓地に該当する、約 300 基に達する墓が調査され、城下の墓制を考える上で重要な成果をあげている。木ノ新保遺跡［（財）石川県埋蔵文化財センター 2002b］では、墓地・農地から足軽・下級武士の屋敷地への変容を窺うことができ、三社町遺跡［（財）石川県埋蔵文化財センター 2007］でも、農地から町人地への変化が遺構より捉えられている。いずれも城下縁辺における都市域の拡大を示す良好な事例である。

なお城下町から離れるが、関連の深い遺跡として戸室石切丁場跡や野田山墓地などがある。戸室石切丁場は、金沢城内の石垣石の９割強を占める戸室石の石材産地であり、前田利家によって石垣普請が始められた文禄年間から、江戸時代を通して石材の切り出しが行われたほか、石切り技術の変遷も確認できる丁場として貴重な遺跡である［金沢城調査研究所 2008b］。

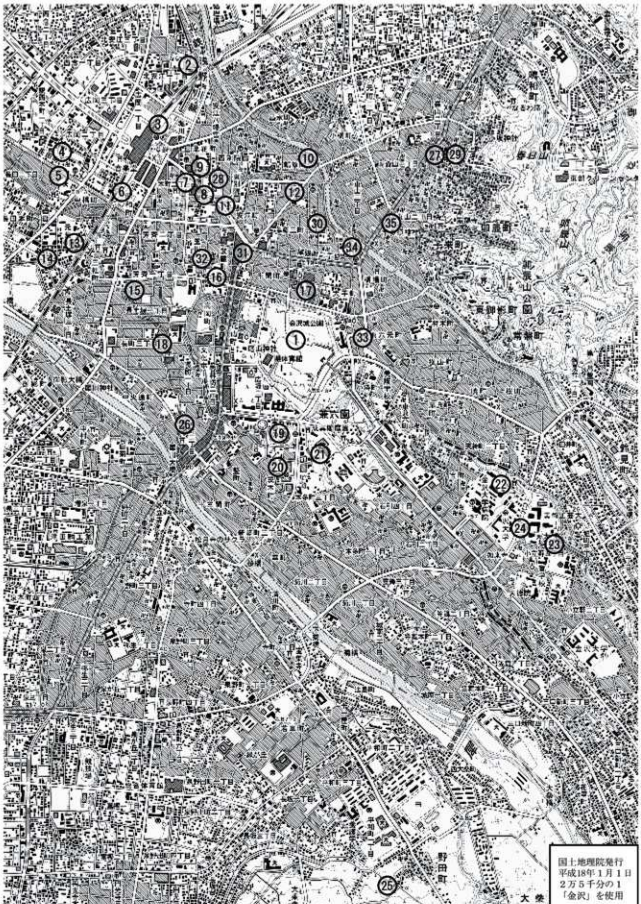
野田山墓地では、墓地移転に伴う山麓部分の調査や、藩主前田家墓地の測量・試掘調査等が実施されている［金沢市 2003d・2008b］。

第２節　金沢城の沿革

金沢城の沿革については既刊の『金沢城跡埋蔵文化財確認調査報告書Ⅰ』［石川県金沢城調査研究所 2008a］が詳しく、ご参照されたい。ここでは、年表をもって金沢城の沿革に代えることとする（第２表）。

年表については、全ての出来事を列挙することが困難であるため、金沢城の契機となる時期に分け、主に三ノ丸に関わる造成・災害・改修等を中心に羅列した。

金沢城の契機となる時期は、金沢坊設置から前田利家入城までの「金沢城の成立」、利家による城内整備から寛永の大火までの「初期金沢城」、寛永大火後の城内整備から宝暦の大火までの「寛永の大火後」、宝暦大火後の城内整備から廃藩までの「宝暦の大火後」、明治から現在までの「近代以降」に大別した。



第２図　周辺の遺跡　(S=1/25,000)

第１表　周辺遺跡地名表

№.	遺跡名	調査年度	遺跡の特徴		文献
			主要地種	特記事項	
1	金沢城跡	（別掲）	城郭	（別掲）	（別掲）
2	久昌寺遺跡	H8（1996）,H9(1997)	寺院（墓地）	近世墓292基	金沢市埋蔵文化財センター2004c
3	末ノ新保遺跡	H5（1993）	寺院？（墓地）→足軽組地→下級武家地、町人地、百姓地		(財)石川県埋蔵文化財センター2002b
4	櫛ヶ井遺跡	H7（1995）～H10（1998）	百姓地→下級武家地	前田氏（直之系）下屋敷	金沢市埋蔵文化財センター2001a 谷口・増山2004
5	長田町遺跡	H6（1994）	下級武家地		金沢市埋蔵文化財センター1998
6	昭和町遺跡	H5（1993）～H7（1995）	町人地・下級武家地		金沢市埋蔵文化財センター2001b・2003a・2004a
7	本町一丁目遺跡（第１次）	H2（1990）	町人地		金沢市教育委員会1995
8	本町一丁目遺跡（第２次）	H6（1994）	町人地		金沢市教育委員会1997
9	本町一丁目遺跡（第３次）	H9（1997）	町人地		金沢市埋蔵文化財センター2003c
10	菊草町遺跡	S61（1986）	上級武家地	前田氏（主勝系）上屋敷	金沢市教育委員会1991
11	安江町遺跡	H3（1991）～H5（1993）	町人地・中級武家地	「軍山」銘向付出土	金沢市教育委員会1997
12	彦三町遺跡	H11（1999）	中級武家地		金沢市埋蔵文化財センター2002
13	三社町遺跡	H3（1991）,H9(1997)	百姓地→町人地		(財)石川県埋蔵文化財センター2001・2007
14	元菊町遺跡	S62（1987）,H1（1989）	百姓地→町人地		石川県立埋蔵文化財センター1990
15	穴水町遺跡	H8（1996）	下級武家地	長氏下屋敷	金沢市埋蔵文化財センター1998
16	高岡町遺跡	H8（1996）～H11（1999）	町人地・上級武家地・水溜		金沢市埋蔵文化財センター2001c・2003b (財)石川県埋蔵文化財センター2002d
17	前田氏（長種系）屋敷跡	H8（1996）	町人地→上級武家地	寛永以前の町屋遺構	(財)石川県埋蔵文化財センター2002e
18	長町遺跡	H8（1996）	中級武家地		金沢市埋蔵文化財センター1998
19	広坂遺跡	H8（1996）～H12（2000） H14（2002）	上～中級武家地	調査面積広く、基準資料多数	金沢市埋蔵文化財センター2004b・2005b・2006b・2007c
20	下本多町遺跡	H4（1992）	下級武家地→上級武家地	宝暦9年（1759）大火被災一括資料出土	金沢市埋蔵文化財センター1999
21	本多上屋敷遺跡	S55（1980）	上級武家地		石川県立埋蔵文化財センター1992
22	金沢大学宝町遺跡 （医学部附属病院地区）	H9（1997）～H14（2002）	中～下級武家地等	地下室多数検出	金沢大学埋蔵文化財調査センター編2000～2003
23	金沢大学宝町遺跡 （医学部保健学科地区）	H10（1998）～H11（1999） H13（2001）	中～下級武家地等		金沢大学埋蔵文化財調査センター編2000～2003
24	延王寺遺跡	H9（1997）,H10（1998）	寺院（墓地）・中級武家地	近世初期の沢塚等	(財)石川県埋蔵文化財センター2002c
25	野田山墓地	H12（2000）～H14（2002） H16（2004）～H19（2007）	墓地	藩主家の墓所を中核とした大型墓地。道路整備による移転部分の墓石調査、改葬立会調査等H16年度より前田家墓所詳細調査。測量、試掘等実施	金沢市埋蔵文化財センター2003d・2008b
26	片町二丁目遺跡	H15（2003）	武家地		金沢市埋蔵文化財センター2005a
27	妙国寺門前遺跡	H15（2003）	寺院、参道		金沢市埋蔵文化財センター2006a
28	本町一丁目遺跡（第４次）	H15（2003）	町屋	近世初期の瓶洗等	金沢市埋蔵文化財センター2006c
29	三宝寺前遺跡	H16（2004）	寺院、参道		
30	彦三町一丁目遺跡	H16（2004）	武家地		金沢市埋蔵文化財センター2007a
31	下堤・青草町遺跡	H17（2005）	町人地		金沢市埋蔵文化財センター2007b
32	西外惣構遺跡	H17（2005）	惣構	築造当初の堀、堀の改変状況	金沢市埋蔵文化財センター2008a
33	新六元町遺跡	H17（2005）	武家地		金沢市埋蔵文化財センター2007a
34	東内惣構遺跡	H18（2006）	惣構	堀の改変状況確認	金沢市埋蔵文化財センター2008a
35	東山一丁目遺跡	H20（2008）	町人地	鍛冶職春田氏に関わる鍛冶関連遺構	金沢市埋蔵文化財センター2010

第２表　金沢城の沿革

時期	年号	西暦	出　来　事
金沢城の成立	天文15年	(1546)	本願寺末寺として金沢坊（金沢御堂・尾山御坊）を設置、金沢城の前身
	天正８年	(1580)	佐久間盛政が入城、土塁や堀を整備
	天正11年	(1583)	賤ヶ岳の合戦において佐久間盛政が敗北 前田利家が入城し、これ以後金沢城として前田家が14代にわたり統治
初期金沢城	天正14年	(1586)	天守構築、翌年に南部藩家臣北信愛が前田利家のもてなしを受け、天守をはじめ、城内の案内をされたとの記述（『北信愛覚書』）
	天正15年	(1587)	石垣職人の穴太源助に知行100俵を与え召抱える
	文禄元年	(1592)	戸室石を利用した本格的な石垣構築を開始、東ノ丸東面・北面、本丸西面の石垣を構築
	慶長７年	(1602)	落雷により天守焼失
	慶長期		本丸南面・三ノ丸北面・尾坂門の石垣を構築
	元和期		東ノ丸附段・百間堀縁などの石垣を構築
	元和６年	(1620)	本丸焼失、翌年本丸御殿などを再建
寛永の大火後	寛永８年	(1631)	城下町から出火、辰巳櫓に飛び火し城内も延焼　【寛永の大火】 大火後の石垣構築・修築でほぼ現在の縄張りに近い状態に
	寛永９年	(1632)	犀川上流から取水する辰巳用水を施工、城内に引水され城内外の堀が水堀化
	寛永11年	(1634)	玉泉院丸に泉水や築山、御亭などを造成
	寛永17年 ～ 万治３年	(1640) (1660)	20年間藩主不在、城内が荒廃
	寛文元年	(1661)	5代藩主綱紀がはじめて入国、城内のみならず城下町整備や新田開発など文化振興に寄与
	寛文２年 ～ 寛文11年	(1662) (1671)	城内の損傷著しい石垣箇所を修築。玉泉院丸色紙短冊積み石垣もこの頃に構築か 鉛瓦が普及
宝暦の大火後	宝暦９年	(1759)	城下町で一万軒以上が焼失、金沢城内でも本丸・二ノ丸・三ノ丸などの主要部が全焼する被害　【宝暦の大火】
	宝暦10年	(1760)	幕府に城再建と石垣修築を願い出て、5万両を借り修築
	宝暦11年	(1761)	河北門石垣を修築
	宝暦13年	(1763)	五十間長屋石垣を修築
	明和２年	(1765)	石川門石垣を修築
	安永元年	(1772)	河北門を再建
	天明８年	(1788)	五十間長屋や石川門などを再建
	文化５年	(1808)	二ノ丸火災
	寛政11年	(1799)	
	安政２年	(1855)	地震による石垣被害が大きく、石垣を修築
	安政５年	(1858)	
近代以降	明治４年	(1871)	兵部省（のち陸軍省）の所管となり、多くの建物が払い下げ
	明治９年	(1876)	河北門二ノ門の渡櫓や櫓台石垣を撤去するよう進達
	明治14年	(1881)	二ノ丸御殿から出火し、御殿の他、菱櫓・五十間長屋・橋爪門など焼失
	明治15年	(1882)	河北門一ノ門を解体、代わりに矢来門を設置
	明治40年	(1907)	辰巳櫓下の高石垣が崩落、石垣が幅200ｍに渡り上部2／3が取り壊され、現在残るように段を設けて改修
	昭和24年	(1949)	戦後、金沢大学の敷地として利用
	平成７年	(1995)	金沢大学の敷地を城外へ移転
	平成８年	(1996)	石川県が土地を取得し、金沢城公園として整備を開始
	平成20年	(2008)	国史跡に指定

第３節　河北門の歴史

河北門の創建

河北門の創建時期を明確に記録した文献はない。『越登賀三州志』『金城深秘録』などは、天正 12 年（1584）９月の末森合戦のとき前田利家が河北門より出馬したという記事を根拠に、これを文献上の初見とする。また鳳至郡の十村栗蔵村彦三郎の来歴（1）に、先祖彦十郎が七尾城に詰めていたとき、佐々成政が末森城に軍勢を差し向けたと金沢城の利家のもとに、注進したことを書き上げたなかで、彦十郎が浜づたいに金沢城に行き「河北門」にて言上したと記す。これが河北門の初見とされる記録だが、旧記に見える逸話なので、このまま史実とみることはできない。

しかし、天正 12 年頃の金沢城は、新丸が未だ建設されていない時代であり、江戸時代中期以後の考証家の間では「慶長４年、新丸に取囲なき以前は、河北門外は武士・町人等雑居して家屋連但す」（金沢古蹟志）と記憶されており、新丸における発掘所見も、この旧記の記述と矛盾しない（2）。したがって新丸成立以前、河北門が大手の役割を担ったことは極めて蓋然性が高く、創建も天正 12 年以前とみてよかろう。

門の名称の由来については、諸書が河北郡に面しているからと説明するが、「石河門・河北門は右両郡の御門徒より寄進仕由之事」（3）と記す旧記もある。

金沢城の慶長期後半の縄張りを描くとされる２種類の「慶長金沢城図」（第３図－１・２）を見ると、河北坂の上に平入門を描くのみで枡形門がなく、河北坂の下に枡形門を描き、坂上の平入門と坂下の外枡形の両方で防御性を高めた縄張であった。これに対し延宝年間の「加賀国金沢之図」、万治２年～延宝４年の「金沢城内図」（第３図－３・４）などは、河北坂上に河北門の枡形だけ描き、坂下の枡形門は描いていない。この坂上の枡形門をもって河北門の始まりとみるか、坂下の枡形門と坂上の平入門をまとめて河北門とみるかで、河北門の創建時期の認識は変わってくる。

今回の発掘調査の所見によれば、二ノ門渡櫓の門台南側の石垣根石が検出され、石材加工の特徴や据え方などから慶長後半期に建造されたと理解されている（３章３節）。ここから寛文期以降の絵図にみえる坂上の枡形門の創建時期は、慶長後半頃だと判断できる。また、門台石垣の根石下で確認できた遺構・遺物から、坂上の枡形門が出来る以前は平入門があり、その上限は慶長４・５年と推察され、さらに平入門ができる以前は、坂上の河北門付近では屋敷地が展開し、三ノ丸の虎口自体が現在の河北坂と異なる位置にあったと想定せざるを得ない状況になってきた。つまり、慶長初期に創建された坂上の平入りの河北門は、慶長後半に枡形門に変化したのであり、平入門の創建期は新丸の成立した慶長４・５年頃というのが発掘調査所見であった（4）。

しかし、この発掘所見と２種類の「慶長金沢城図」が描く初期河北門の姿は整合しない。この絵図には現在の河北坂上に平入門、坂下に西に開く枡形門をもつ独特の構造を描いているが、これまでの絵図研究の成果では、主に絵図に記載された前田家重臣の名前を判断材料として「慶長金沢城図」の景観は慶長 10 年代、つまり慶長後半の景観を描くと理解しており（5）、平入門は慶長 10 年以前とする発掘所見と矛盾する。発掘調査所見からみれば、「慶長金沢城図」の景観は慶長４・５年から慶長 10 年頃を描くと理解されるが、慶長 10 年代とする文献史からの指摘との間に齟齬が生じることになった。

しかし、絵図上に記入された前田家の重臣たちの名前・通称のみを根拠とし「慶長金沢城図」の景観年代や成立時期を考証してきた従来の絵図研究の手法は、必ずしも妥当といえない。私見に上れば、「慶長金沢城図」に家臣の名前を推定して入れたのは有沢永貞であり、それ自体有沢の歴史観なり考証による作為だといえるので、有沢のこうした考証に対する批判なくして安易に重臣の名前だけで「慶長金沢城図」の評価を行うのは危険である（6）。発掘調査の所見が絶対というわけではないが、発掘

所見からみて、河北坂上に枡形門が新設された時期として慶長後半期がより妥当であるなら、その視点から絵図の年代観を再検証してよいと思う。その際、河北門における枡形門創建時の門台石垣根石遺構を慶長後半と特定した考古学的考察に対する検証を歴史学全体で行う必要もあり、それ抜きで発掘所見に安易に依存する姿勢も慎まねばならない。

これにより、「慶長金沢城図」の景観を慶長前半期とすべきか後半期とすべきか、河北坂上に平入門を描いた理由などの課題も合わせ、今後より一層厳密な学際的検証が要請される。

主図合結記系慶長図の根拠となった情報源は、元和７年に幕府に提出された城郭修補願絵図とみられ（7）、また新丸や大手堀・尾坂門を明確に描くことから、その城内景観は慶長４年以前にさかのぼれない。主図合結記系慶長図の景観年代については、より広くとれば、慶長４年から元和年間という幅となるが、坂上の平入門の存在時期が慶長前半期に限定されるならば、慶長図に記載された重臣が城内に屋敷を構えた年代（慶長後半）との齟齬はなぜおきたか、「慶長金沢城図」という絵図はどのような過程を経て現存する姿になったのか、などの絵図史料批判を徹底する必要がある。

いまは、その準備がないのでこの問題に深入りしないが、こうした根本問題を検証することなく「慶長金沢城図」、とくに主図合結記系慶長図について、これを安易に利用することに警鐘は鳴らしておきたい（8）。慶長図は、時代の異なる縄張り情報を総花的に盛り込んだ、兵学者の作為的な絵図である可能性がきわめて高いと推測されるからである。今回の発掘調査によって、２種類の慶長図の景観年代を特定の一時期に対応させる理解は大きな困難に直面し、慶長図そのものの史料批判に大きな課題を突きつけたことは意味があったと思う。

したがって、慶長図に描かれた坂下の枡形門も含めた全体を河北門と把握すること自体にも再検討がいるし、森田平次『金沢古蹟志』が坂下にあった「枡形門」に関し、家督を嗣ぐ直前の利常が枡形内部の石積みを行ったという逸話を紹介しているが、これを坂下の枡形門の創建年代を推測する手がかりとして利用するのも控えるべきであろう。坂下の枡形門の創建時期を慶長前半であるかのごとくミスリードする恐れのある逸話であるからだ。

しかし、坂下の枡形門の撤去時期を検討し、坂の上に枡形形式の河北門が正門として独立して存在する景観が成立した時期を明確にすることは重要な研究課題だといえる。しかし、２つの「慶長金沢城図」の景観年代に大きな疑義が生じた以上、この問題に答えるのも極めて難しく推論を述べるにとどめたい。

まず慶長図に描かれた坂下の枡形門の存在は、初期の河北門が外枡形であったことを示唆する情報であると考えたい。それゆえ、慶長後半期に坂上に枡形門を建設したことで内枡形に変化したことは、初期金沢城の縄張や虎口の配置を考える上でも重要な論点となる。坂下に本当に枡形門があったか否かを判断する発掘等の調査所見はないが、私の推定によれば、外枡形としての坂下の枡形門の創建は慶長以前に遡り、存続の下限は慶長期まで下ることから、慶長図にも描かれたと考える。撤去時期としては、寛永８年の大火後の二ノ丸・三ノ丸の縄張り変更の頃まで下げても良いが、慶長後半に坂上で枡形門を建設した時点も十分考えられる。坂上にも坂下にも枡形門が並立する構造をこの時期で考えるのは難しいと思うからで、いずれかといえば慶長後半から元和期が蓋然性が高いように思われる。その時点で、寛文以後に描かれた河北門付近の景観が生まれたと推測してみたい。

近世前期の河北門

寛永８年の大火のあとの城の再建事業のなかで、二ノ丸が拡張され二ノ丸御殿が創建されたことは周知の通りである。寛永の大火で坂上の枡形門（河北門）が焼失したかどうかは、発掘調査の結果からも文献史料からも明確となっていない。埋蔵文化財調査において、ニラミ櫓台南面付近で、Ｖ期（寛文～元禄期）とみられる石垣根石が確認できたが、寛永大火後の改修を裏付ける遺構は確認されてい

ない。この点について、さきに刊行した『金沢城の三御門』において河北門の歴史を概説したさい、誤って河北門は寛永の火災で焼失したと記したので、ここで訂正しておきたい。正しくは焼失したかどうかは明確でないとすべきあった（9）。

だからといって、慶長創建の河北門の建物が寛文期までそのままの姿を維持されていたという証拠もない。他方で、河北門の建物の焼失や地震等による被災記録もない。その基本的な形状は継承されたのかもしれないが、再建や修理の状況、それに伴う改変などを論ずる史料は全くない。

寛文年間以後の河北門の平面規模は「金沢城内絵図」「金沢城絵図」や「金沢城地割図」に詳しい情報が示される。これらに示された規模数値は、後掲図版「金沢城内絵図」「金沢城絵図」「金沢城地割図」（第５・６図）上に示したが、ここからいえるのは、枡形の一ノ門幅は２間、一ノ門脇に伸びる頬当石垣上の土塀長さはそれぞれ約２間（頬当石垣長さ＜下端長さか＞は２間半、石垣奥行１間４尺５寸）、一ノ門脇に聳えていた二重櫓（ニラミ櫓）のサイズについては、一重目は４間に６間、二重目は２間半に３間半であり、櫓台の石垣は４間半に６間４尺、高さは８尺であった。二ノ門は渡櫓の形式で長さ 13 間５尺、妻幅４間２尺。南北にある門台石垣の上に渡櫓が乗る櫓門であったが、南側の石垣台のサイズは４間５尺５寸に３間半、北側の石垣台は４間５尺四方であった。なお櫓門（渡櫓の階下通路）の幅は６間４尺であった。また、一ノ門と二ノ門を繋ぐ土塀と長屋がＬ字に配置されて枡形構造をなすが、二ノ門に続く長屋建物のサイズは８間４尺（土台石垣の内法長さは８間３尺）に幅２間、一ノ門のニラミ櫓台から南に延びる土塀長さは６間２尺３寸（土台石垣長さは７間２尺）であった。

また延宝年間に作成された「加賀国金沢之図」（第３図－４）およびその同系絵図に書かれた三御門について、以下のようなサイズが記載されていた。

＊河北門：折廻し 29 間半、二ノ門台石垣高さ２間

＊橋爪門：折廻し 29 間半、続櫓台石垣高さ３間

＊石川門：折廻し 28 間、二ノ門台石垣高さ２間

いずれも幕府提出図でのサイズ記述なので、記載精度は期待できないが、上記の寛文期の河北門絵図のサイズと大きく矛盾しない。「折廻し」とは枡形内部の内法の総間数であろう。おおよその規模としてみればよく、三御門とも枡形内側総延長はほぼ同じで石川門のみやや小さい感じである。二ノ門の門台石垣高さは石川門・河北門は同じく２間としているが、「金沢城地割図」の石川門の石垣高さは２間半、河北門二ノ門の石垣高さは江戸後期の立面図は 15 尺５寸としており、実際よりもやや低めに報告している。橋爪門続櫓の石垣高さは１間高く約３間としていたが、これも江戸後期の石垣秘伝書などでは 19 尺としているので、やや低めに記載したと理解される（10）。

前期金沢城（1631～1759 年）の河北門の規模については、上記の通りであるが、枡形門の中に足軽番所が描かれる点にも注意したい。枡形長屋の後方に大型の「腰掛」という休憩所、ニラミ櫓台西方には「定掃除所」の建物が設置されていた。

宝暦５年図系の「金沢城図」（第３図－７）をみると、一ノ門脇に聳えるニラミ櫓台は「玉薬奉行預」、二ノ門渡櫓は「御弓奉行預」、枡形長屋に「内作事方預」と記される。枡形を構成する櫓や長屋は物置として利用されていたが、ニラミ櫓台には弾薬、渡櫓には弓矢や弓矢奉行所轄の武具（弓道具等）が保管され、枡形の長屋に内作事奉行管轄の書類や諸道具が保管されていた。

近世中期の河北門再建

宝暦９年（1759）の大火で城内の大半が類焼し、河北門も焼失した。宝暦 10 年の城郭修補願絵図に書かれた被災情報によれば、河北二ノ門の北側門台石垣では「石垣高さ２間、長さ、折れ廻し９間損し」、枡形土塀で「瓦塀 25 間半、残らず焼失」、土塀下石垣は「高さ２間、長さ２間半孕み申し候」と焼損状態を記録する（11）。

河北門の再建は二ノ門の石垣台や一ノ門両脇の頬当石垣などの修理から始まったが、その工期について、後藤彦三郎「高石垣等之事」は宝暦 10 年から「河北御門台両方」の石垣を積み直し、11 年に竣工、12 年には「五十間長屋下石垣が崩れたため、その修理の御普請」の修理にかかり、13 年に完成したと述べるが (12)、「泰雲公御年譜」によれば、宝暦 12 年３月に石川門御普請は郡方、河北門御普請は町方に入用銀の負担を仰せ付けたといい、河北門の造営費として銀 200 貫匁以上を金沢町方から冥加として献金させる心づもりであったという。その結果、同年８月４日に「河北御門台」は完成し、これをうけ石川門台の石垣修理に取り掛かったとする (13)。河北門の石垣修理は、このように 11 年完成説と 12 年完成説とに分かれるが、資金調達の面から考えると宝暦 12 年８月完成説が妥当であるように思われる。

後藤彦三郎によれば、この河北門台石垣普請は、穴生になったばかりの正木甚左衛門の指揮のもと、町石工を数人雇用して行われた。中でも法船寺町の石屋長左衛門と扶持人石切が相談して縄張りを行い遂行されたと指摘し（前掲「高石垣等之事」）、後藤彦三郎は、町石工ふぜいに城内石垣の設計や施工を任せたことに極めて批判的である。

河北門一ノ門・渡櫓・矩折土塀などの建築工事は、石垣修理が終わってちょうど 10 年たった明和９（安永元年、1772）年２月 29 日に着工、同年６月 28 日わずか４カ月で竣工した (14)。この河北門作事の「造営方主付」は、前年 10～11 月に人選を行い、馬廻組頭（880 石取 53 才）の原五郎左衛門（元成）と持弓筒頭（400 石取 49 才）の永原忠兵衛（孝良）が就任し、御大工では山上杢之助、清水次左衛門、松波源右衛門が主付となり、御壁塗・左官・屋根葺・扶持人大工・棟梁大工らともに再建事業にあたった (15)。

このとき施工された枡形の矩折れ土塀について、後藤彦三郎は「河北御門枡形御石垣折廻シねり塀之中に御石垣」と指摘し、これを「隠し石垣と申候」といい、隠し石垣は城内にこの一カ所しかないと述べる (16)。実施中の河北門の復元工事において、この記述にもとづき石垣を壁土で覆う特別な施工を行ったが、このような塀の構造（第３図－９）は、明和再建時の御大工たちが案出したものであろうか。さらに検証が必要である。

ところで明和９年３月に江戸でおきた火災をうけ、財政の緊縮が課題となり、河北門建造を先延ばしにする意見もあったが、11 代藩主治脩は、もはや大半の作事が終わったところなので延期意見を却下し６月の完成にいたった (17)。こうして再建された河北門は明治前期に腐朽し撤去されたが、今回の復元では明和９年の再建時の姿に復するとし、発掘調査で確認した遺構や所見をもとに、明治の古写真および江戸後期の絵図面等を検証し、可能な限り史実に即した復元の設計を行った。

宝暦大火後、明和９年に再建された、江戸後期の河北門の姿は、江戸後期の詳細な絵図（「御城中壱分基絵図」や「御城分間御絵図」（第３図－９、第４図－１）から、その規模が具体的にわかる。立面図は「金沢城起絵図」や「金沢城来因略記」（『絵図でみる金沢城』）として残っており、これらも参考にして、復元の設計がなされたが、江戸前期の河北門と比べるといくつか意匠の上で変化があった。最も大きな変化は、「ニラミ櫓」と呼ばれた一ノ門脇にあった二重櫓がなくなり、土塀に出シを１つ付けるだけの簡素な意匠になった点である。このほか、Ｌ字型の枡形石垣の上にあった長屋（８間４尺×２間）がなくなり、やや太めの土塀がＬ字に設置された点も大きな変化であった。いわゆる「隠し石垣」を擁した土塀の設置である。江戸後期の作事方による苦心の作といえる。普通の土塀幅は１～２尺にすぎないが、この隠し石垣土塀の幅は約８尺もあり、４倍以上の厚みがあった。石垣の上に漆喰の塗り込めにする特殊な土塀が設置されたことは、後期の河北門の大きな特色といえる。

河北門の廃絶

明和９年（1772）に再建された河北門は、その後文化５年に発生した二ノ丸御殿炎上の際には被災

せず、明治維新を迎えた。その間、何らかの補修がなされたのであろうが、修理棟札や修理記録等が残っておらず、実態は不明とせざるを得ない。

明治４年の廃藩後、河北門は急速に腐朽がすすみ、明治 15 年頃撤去されたと考えられる。明治８年から徴兵軍隊の兵営になったことで、河北門の枡形石垣や痛みの著しい建物は軍隊の利用にとって障害になっていた。防衛省防衛研究所付属図書館に所蔵される旧陸軍関係資料の中に、新丸に新築する兵舎のため河北門石垣の戸室石を撤去し礎石等として再利用したいと要望する起案文書（陸軍大日記：明治９年）が残っており、その起案文で「そもそも金沢城の内部は狭隘であり、河北門や堀・塀のため三ノ丸において広大な面積の訓練場所が確保しにくい」と指摘、三ノ丸の拡張と河北門撤去を切望している (18)。しかし、明治９年のこの起案は却下されたか施行が延期された。河北門二ノ門が菱櫓・五十間長屋とともに写る明治 11 年の金沢城三ノ丸の写真（学習院大学図書館所蔵）が残っているからである。この写真の撮影時期について、岡田茂和氏が行った明治期写真（学習院大学付属図書館所蔵）の撮影者・撮影年代の考証により、明治 11 年 10 月５日、明治天皇が金沢城内の陸軍兵舎を訪問した頃のものと特定された (19)。このほか河北門二ノ門の全体を写した写真もあるが、おそらく明治 11 年頃からさほど遠くない時期のものであろう。

明治 11 年の明治天皇北陸行幸時の河北門二ノ門の写真が存在することから、河北門は明治 11 年まで存在したことは間違いない。したがって、河北門の撤去は明治 12 年以後のこととなるが、明治 15 年３月１日付の陸軍省起案文書（防衛省防衛研究所付属図書館所蔵）によれば、河北一ノ門の朽ち果てた状況がわかり、一ノ門を撤去し矢来門に転換するよう要求したことがわかる。これに関連する３月７日付の照会文書と３月 13 日付の回答文書によれば、この起案通り一ノ門撤去工事は施行されたと理解でき、これに添付されたと思われる明治 16 年絵図では二ノ門が撤去されていた (20)。おそらくこの頃までに、痛みの著しい二ノ門も撤去済みであり、明治 15～16 年の一ノ門撤去により、河北門の枡形は跡形もなく撤去されたのであろう。その結果、残るのは現存する一ノ門頬当て石垣だけとなったのである。

河北門の最期については、明治 14 年の二ノ丸御殿火災の際に類焼したと記す文献があるため、「明治 14 年焼失」と指摘することもあったが、上掲の陸軍省太日記の公文書によって明治 15 年頃までに撤去されたものとみてよい。河北門の発掘調査において、明治期の火災による焼土層が確認されなかったことも証左となる。昨年の『金沢城の三御門』では、河北門の撤去時期について、明治 15 年から明治 20 年頃までとし、慎重な言い方にしたが、明治 15 年頃に限定してよかろう。

＜註＞

（１）「臼井氏見聞雑記」（『加賀藩史料』１編）、「能陸雑録」（『温故集録』３）。いずれも金沢城調査研究所 2010ｂ『金沢城の三御門』の文献史料編に掲載する。

（２）石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター2002

（３）「加賀国金沢御坊由緒之覚」金沢市・照円寺文書。

（４）この所見は、金沢城調査研究パンフ６「河北門の発掘調査」（石川県金沢城調査研究所）ですでに示されており、本書においても、発掘調査で確認された事実を踏まえた考察意見として、この見解を提示している（本書８章）。

（５）２種類の「慶長金沢城図」のうち有沢永貞系「慶長金沢図」については、田中喜男 1977「城下町の成立・変容」（『伝統都市の空間論・金沢』弘詢社）は慶長 13～16 年頃、高澤裕一 1985「城下町金沢の成立」（喜内敏編『金沢城と前田氏領内の諸城』名著出版）も、記載された重臣の名前が正確であるなら、という条件付きで慶長 13～16 年頃の景観とみた。濱岡伸也は２種類の「慶長金沢城図」について問題提起を行い、新しく確認した主図合結記系「慶長金沢図」に注目し、これを慶長６～10 年頃、有沢永貞系「慶長金沢図」は慶長 16 年頃の景観とされたが、その後若干の修正も行った（濱岡 1995・1999）。これに関し、木越隆三は絵図史料の史料批判の厳密化を主張し、２種類の「慶長金沢城図」の成立経緯にメスを入れ、両絵図とも史料として利用するには問題点が多いことを指摘し、作成過程や

作成目的、作成者の意図を斟酌して慎重に利用すべきことを主張した。あわせて、重臣名ではなく初期金沢城の縄張り情報が全国的に漏出する可能性として、元和７年に提出した城郭修補願図からの情報漏れを想定した。その結果、重臣名の記載のない主図合結記系「慶長金沢図」が、慶長から元和期の城内景観を描いている可能性があるとし、東京大学附属図書館南葵文庫蔵や国立公文書館蔵の慶長金沢城図は、重臣名の情報が詳しすぎるうえ矛盾が多いので有沢系絵図に毒された後年のものと判断した［木越隆三 2003］。したがって、慶長～元和年間の初期金沢城の縄張り情報を得るには、重臣名の記載のない主図合結記系「慶長金沢図」（蓬左文庫）が最も妥当である。しかし、それも様々なバイアスをうけて現存の絵柄になったものである以上、全幅の信頼を寄せるべきものではなく、発掘所見と合わせた総合的な検証が必要であると考えている。

（６）（７）木越隆三 2003

（８）なお有沢系慶長図については、慶長年間の縄張図として使用できる箇所は極めて小さく、一部が慶長期の姿に一致する可能性があるからといって、その部分だけ活用することにも慎重でありたい。

（９）石川県金沢城調査研究所 2010『金沢城の三御門』の「第２章　金沢城三御門の変遷と概要」

（10）これらの絵図情報は、江戸後期の三御門関係絵図（金沢城調査研究所 2009『絵図でみる金沢城』収録の「Ｖ三御門を描いた絵図」による。

（11）宝暦 10 年「加賀国金沢城図」（石川県立歴史博物館蔵）、宝暦 10 年「金沢城之図」（前田育徳会蔵）。この絵図の文字情報は『金沢城研究』２号に掲載する。

（12）金沢大学日本海文化研究室編『金沢城城郭史料』（1976 年）所収。後藤文庫 100 号。

（13）『加賀藩史料』８編、宝暦 12 年３月 22 日条。

（14）『加賀藩史料』８編、安永元年２月 29 日条、同年７月朔日条、同年７月７日条。

（15）田中徳栄 1996（田中徳栄 2008 に再録）。

（16）後藤彦三郎著「城内等秘抄」（前掲『金沢城郭史料』、後藤文庫 63 号）。後藤彦三郎著「金城深秘録」の「三ノ丸河北門」の項目のなかで「河北御門升形御石垣、折廻シねり塀也、中は御石垣、其上ねり塀にしたる者也、右御石垣を懸し石垣と申候」と、ほとんど同じ記述をしている。

（17）史料纂集『太梁公日記』一（八木書店）。木越隆三・正見泰・石野友康 2007「金沢城研究」５号にも掲載。

（18）明治９年 12 月 15 日付「河北門等之基礎石ヲ採用之儀伺」（「陸軍省大日記」）防衛省防衛研究所付属図書館蔵

（19）岡田茂和 1998。

（20）明治 15 年３月「河北一の門矢来門に改修につき竈」「明治 16 年：河北一の門撤去に係る図面」（「陸軍省大日記」）防衛省防衛研究所付属図書館蔵。（18）（20）の史料文は『金沢城の三御門』第４章に掲載。

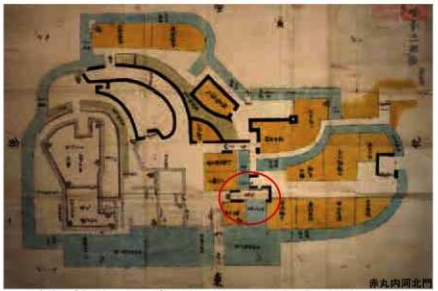
第４節　既往の調査成果

金沢城の発掘調査［第 10 図、第３表］

金沢城跡における埋蔵文化財調査は、昭和 43 年（1968）の金沢城学術調査委員会による本丸、二ノ丸等の学術調査が最初である。昭和 50 年～61 年までは、主に金沢大学が主体となり、大学施設設置工事などに伴う事前発掘調査が行われた。

平成４年～６年には、石川県土木部が所管する都市計画道路整備に伴い、石川県立埋蔵文化財センターが石川門前土橋、車橋門の一部で発掘調査を実施した。また、平成８年には石川県が金沢城跡の用地を国から取得し、以後金沢城跡の整備事業が本格的に開始された。

平成９年～13 年には、金沢城公園整備事業に伴い、石川県立埋蔵文化財センター・（財）石川県埋蔵文化財センターが、五十間長屋、本丸附段、三ノ丸等の発掘調査を実施した。これは、金沢城址公園の活用のあり方について検討された、平成９年の「金沢城址公園整備懇話会」にて定まった計画で、明治 14 年まで二ノ丸に現存した菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓等について、史実に忠実であり、かつ

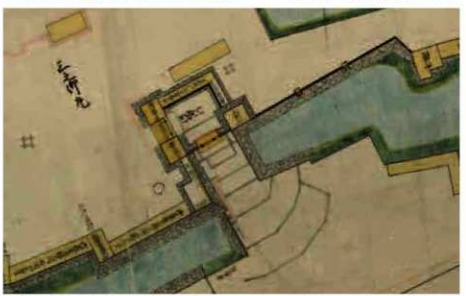


1 主図合結系「慶長金沢城図」（「加州金沢之城図」東京大学総合図書館蔵）

2 有沢系「慶長金沢城図」（「加州金沢城図」金沢市立玉川図書館蔵）

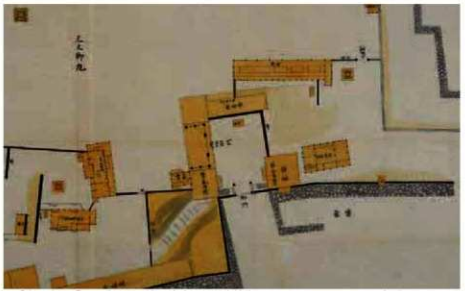
3 「金沢城内絵図」（滋賀県立安土城考古博物館蔵）　万治 2 年～延宝 4 年（1659 ～ 1676）

4 「加賀国金沢之絵図」（金沢市立玉川図書館蔵）　寛文 8 年～延宝年間（1668 ～ 1681）



5 「金沢城絵図」（石川県立歴史博物館蔵）　延宝 4 年～元禄年間（1676 ～ 1704）

6 「金沢城図」（金沢市立玉川図書館蔵）　18 世紀前半



7 「金沢城図」㊂三之御丸図（金沢市立玉川図書館蔵）　宝暦 5 年（1755）

8 「金沢城中地割絵図」三之御丸（金沢市立玉川図書館蔵）　宝暦大火以前

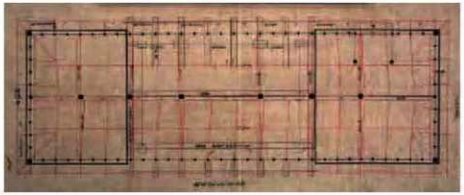
9 「御城中老分碁絵図」（横山隆昭家蔵）　文政 13 年（1830）

第 3 図　河北門関連絵図

10「金沢御城内外御建物図」（（財）前田育徳会蔵）　天保 4 ～ 9 年（1833 ～ 1838）

11「御城分間御絵図」（（財）前田育徳会蔵）　嘉永 3 年（1850）

12「河北御門絵図」（真柄建設株式会社蔵）



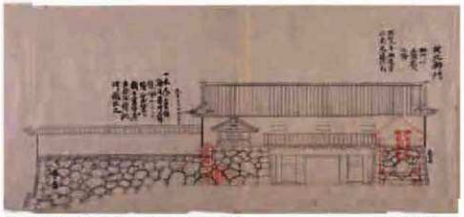
13「土蔵の絵図」河北門二の門渡櫓平面図（金沢市立玉川図書館蔵）

14「御城中絵櫓並御門絵図」（金沢市立玉川図書館蔵）　文化 13 年（1816）

15「御城中絵櫓並御門絵図」（金沢市立玉川図書館蔵）　文化 13 年（1816）

16「加州金沢御城来因略記」（石川県立図書館蔵）　天保 15 年（1844）

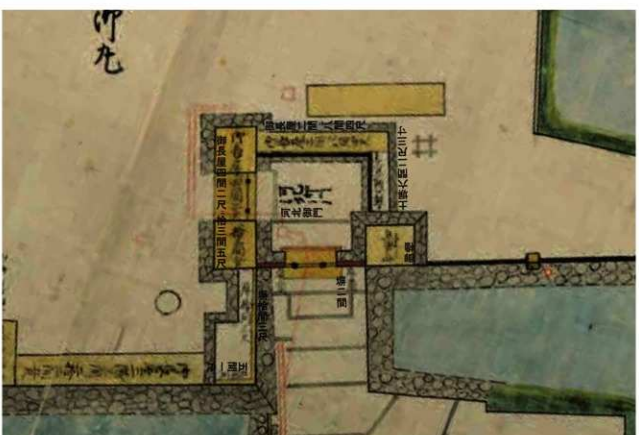
17「加州金沢御城来因略記」（石川県立図書館蔵）　天保 15 年（1844）



18「加州金沢御城来因略記」（石川県立図書館蔵）　天保 15 年（1844）

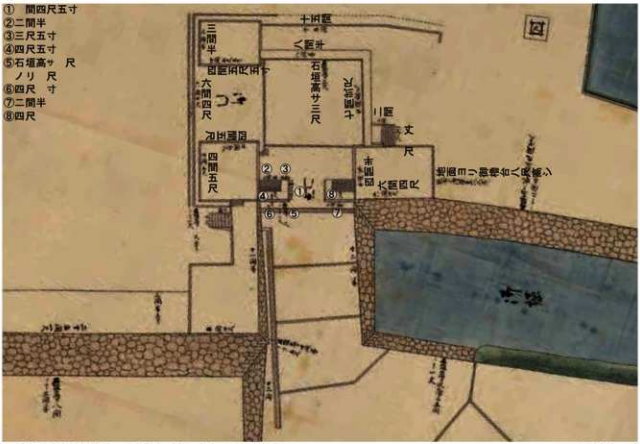
第 4 図　河北門関連絵図

3「金沢城内絵図」（滋賀県立安土城考古博物館蔵）　万治 2 年～延宝 4 年（1659 ～ 1676）



5「金沢城絵図」（石川県立歴史博物館蔵）　延宝 4 年～元禄年間（1676 ～ 1704）

第 5 図　河北門関連絵図



8「金沢城中地割絵図」三之御丸（金沢市立玉川図書館蔵）　宝暦大火以前

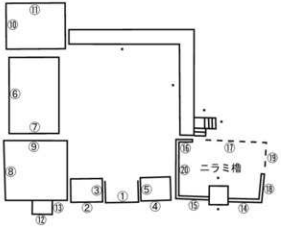
9「御城中壱分基絵図」（横山隆昭家蔵）　文政 13 年（1830）

第６図　河北門関連絵図

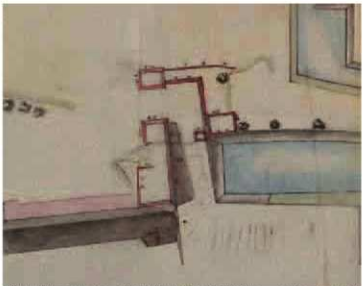
11「御城分間御絵図」（（財）前田育徳会蔵）　嘉永３年（1850）

之御門
①二間五尺四寸
②二間　尺
③九尺
④二間　尺
⑤九尺

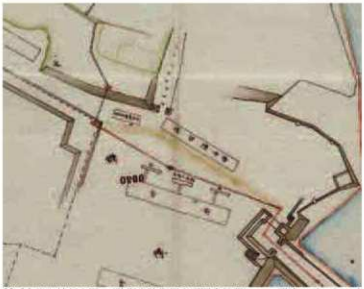
ニノ門
⑥六間　尺八寸
⑦三間四尺五寸
⑧四間四尺
⑨四間四尺四寸
⑩三間二尺六寸
⑪四間四尺五寸
⑫八尺
⑬六尺　）ニノ門出口
⑭　間二尺八寸
⑮二間二尺三寸
⑯六尺
⑰五間三尺四寸
⑱二間
⑲二間二尺
⑳三間四尺八寸
・八尺
・八尺五寸
・六尺
・九尺
・八間四寸
・六間五尺



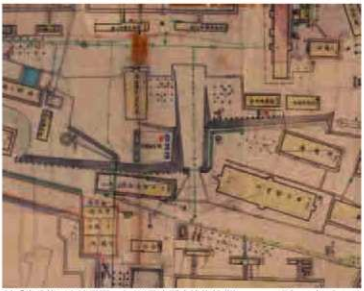
第７図　河北門関連絵図



19「金沢城三ノ丸之図」（防衛省防衛研究所図書館蔵）　明治９年（1876）



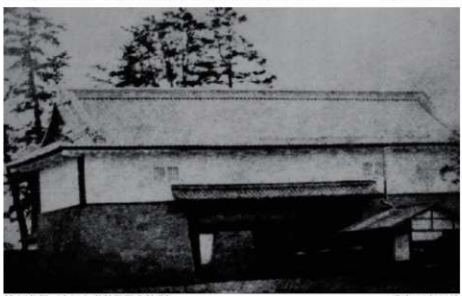
20「金沢旧城郭之図」（防衛省防衛研究所図書館蔵）　明治 40 年（1907）



21「歩兵第百七連隊図」（石川県立歴史博物館蔵）　昭和 20 年（1945）

第８図　河北門関連絵図

22 金沢城三之丸跡（河北門）（吉川弘文館刊『明治の記憶』より）　明治11(1878)年



23 河北門（金沢大学付属図書館蔵）　明治15年以前

24　明治15年以前

第9図　河北門関連絵図

本物志向の復元整備を行うという方針によるものであった。

平成 13 年７月には県教育委員会文化財課の中に金沢城研究調査室が設置され、埋蔵文化財、絵図・文献、建造物、石垣等伝統技術の４つの分野から、総合的に金沢城跡の歴史的価値を解明する調査研究事業がスタートした。平成 14 年から継続的に埋蔵文化財調査が進められている。(平成 19 年４月には金沢城研究調査室を金沢城調査研究所に改組)

以下はこれまでの発掘調査の状況である。

昭和 43 年～44 年：金沢大学金沢城学術調査委員会が、本丸四脚門、二ノ丸能舞台等の一部、三ノ丸九十間長屋の一部について発掘調査を行う。

昭和 44 年：石川県教育委員会・金沢大学が、校舎増築工事に伴い本丸三階櫓台、二ノ丸殿舎等の一部について発掘調査を行う。

昭和 50 年：金沢大学が学生会館別館建設に伴い、四十間長屋の一部の発掘調査を行う（上野 1976)。

昭和 52 年：金沢大学が二ノ丸御殿の一部について発掘調査を行う。

昭和 54 年～61 年：金沢大学文学部が大学施設設置工事に伴い藤右衛門丸斜面等の発掘調査を行う。

平成４年～６年：石川県立埋蔵文化財センター（平成 10 年４月に（財）石川県埋蔵文化財センターに改組）が石川門土橋等を道路整備工事に伴い発掘調査を行う。

平成９年～13 年：県埋蔵文化財センターが金沢城公園整備事業に伴い、五十間長屋、内堀、本丸附段、三ノ丸等の発掘調査を行う。

平成 14 年～19 年：金沢城研究調査室が国庫補助を得て、本丸、本丸附段、東ノ丸等の確認調査を行い、初期金沢城の遺構等の解明にあたった。

三ノ丸周辺の発掘調査

昭和 43 年（1968）の調査　金沢城学術調査委員会主体で、本丸・本丸附段・二ノ丸・三ノ丸の４か所で発掘調査が実施され、三ノ丸調査区では金沢大学本部裏手の空き地、かつての九十間長屋付近と考えられる場所が調査された（第 10 図中３)。

検出された遺構については、度重なる火災と、その後の整地による撹乱層の下層から石垣を検出している。この石垣は自然石を積んで土留めをしたもので、城内の他の石垣に比べ、造りが簡素である（井上 1969)。

さらに石垣下層に５㎝程度の焼土層を検出し、丸瓦と甕片の様相から近世初頭のものと思われ、この焼土層を慶長７年の大火の際の層と位置付けた。この時期はまだ辰巳用水は完工されていないことから、貯水のための大きな甕が必要であったとしている。

昭和 50 年（1975）の調査　金沢大学により三ノ丸四十間長屋跡地（第 10 図中７）が調査され、四十間長屋に関連する遺構の他、長屋構築以前の土坑、長屋北東部の櫓（御櫓）台石垣の一部が検出された（上野 1976)。残存する遺構は、地表面から 20 ㎝～30 ㎝の深さで櫓台石垣の一部を検出、長屋礎石は地表下 40 ㎝で検出、地表下 55 ㎝では四十間長屋以前と思われる、円筒状の土坑を検出し、地山までは地表下 140 ㎝を測る。

長屋に関連する遺構では、柱の礎石、長屋入口の一部、雨落石と思われる礫群が検出された。長屋の柱礎石は南東から北西方向へ６ｍおきに６点検出したが、上面のレベルが不揃いであった。長屋の入口については石段が一部残存しており、幅は 3.2ｍを測り、現存する本丸附段の三十間長屋の入口幅は 3.65ｍであるため、それより小さい。柱礎石の約２ｍ前面には布石が礎石列と並行に確認できることから、庇の礎石と考えられ、さらにその 1.8ｍ～２ｍ前面に同じく礫群が礎石列と並行に確認できることから、雨落としの礫群と考えられる。この調査で確認された遺構は、四十間長屋の絵図上 79ｍのうちの南東側 38ｍである。また検出された遺構から、長屋は前面に長い庇が張り出し、庇に柱を

有する建物で、現存の本丸附段三十間長屋とは異なる造りをしていることが明らかにされた。

昭和 54 年（1979）の調査　二ノ丸北面内堀から四十間長屋跡にかけての通路（第 10 図中９）が調査され、４基の遺構が確認された［佐々木 1980］。このうち２基は明治期からの遺構で、３基目は江戸後期または末期（19 世紀前半）と考えられ、攪乱を受けているものの、平面プランから土坑と思われる。４基目は赤戸室石の礎石で、地山直上に位置している。上面は平坦で、径 75 ㎝、厚さ 40 ㎝を測る。礎石の下には、地山との間に薄く黒色土が入っており、礎石の周囲には河原石が詰められていることから、礎石は原位置を保っているものと思われる。絵図の情報からこの調査区には建物は無かったものと思われるが、その中で礎石の検出は大きな意味をもつものとし、そのまま埋め戻して現地保存の措置をとっている。

平成 10 年（1998）の調査　（財）石川県埋蔵文化財センターにより三ノ丸第１次調査が行われ、三ノ丸北東部の便所建設予定地が調査された（第 10 図中 17）。この調査区は金沢大学時代に大学本部の建物が近接して建てられているなど、近代以降の攪乱が予想される地点であったが、絵図等の情報から近世後期には鉄砲所の一角を占めることが分かっていた。

調査の結果、近世末期の層位から鍛冶関連遺構である瓦組遺構や建物土間の貼床、不用部品の廃絶坑と思われるピットなどが検出され、それ以前の遺構では、初期金沢城～近世前期に遡ると思われる石敷遺構や落ち込みなども検出された［金沢城研究調査室 2006a］。

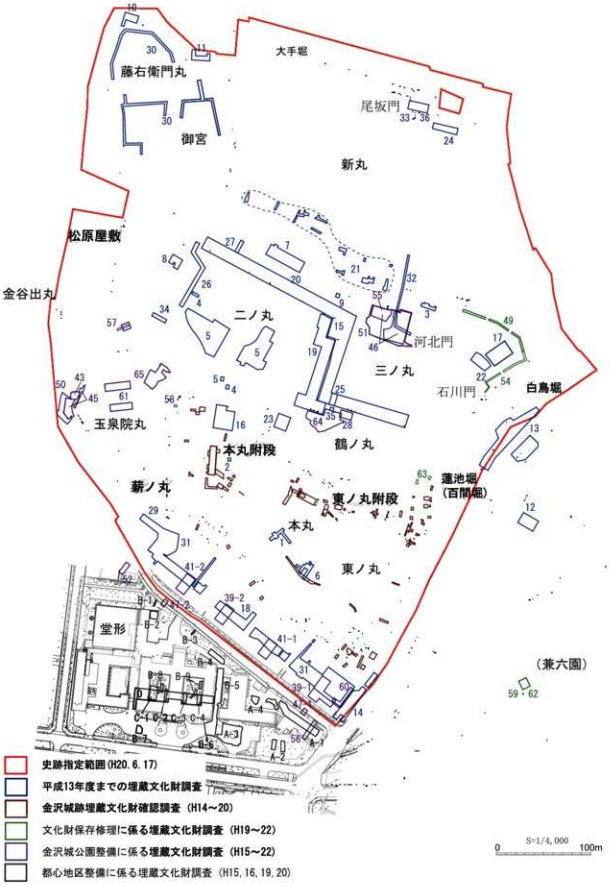
中でも鍛冶関連遺構や鍛造剥片、火縄銃部品などが出土したことから、城内に鉄砲鍛冶場があったことが確認され、幕末における洋式軍備への切り替えや、廃銃処分に関係すると思われる遺構などの位置づけがなされた。これらのことは全国的に珍しい貴重な調査資料を得ることができたと言える。

平成 11 年（1999）の調査　前年に続き（財）石川県埋蔵文化財センターにより三ノ丸第２次調査が行われ、前年度調査区に隣接する地点が調査された（第 10 図中 22）。絵図等から、この地点の時代的な変遷として、天正～慶長期には村井・横山といった重臣の屋敷地があり、その後「御細工所」が設けられ、17 世紀後半ごろに弓・鉄砲の修練場や与力番所が置かれたと考えられる。

この調査では、17 世紀中頃と思われる石組井戸や、石組の室状の遺構、17 世紀後半から明治期の始め頃まで機能していたと思われる建物の礎石列などが検出された（（財）石川県埋蔵文化財センター 2002a）。特に建物の礎石列は与力番所の最終段階にあたる遺構と思われ、石組遺構等の年代確証はないが、17 世紀中頃の「御細工所」の時期に相当するものと思われる。

平成 12 年（2000）の調査　（財）石川県埋蔵文化財センターにより、三ノ丸第４次調査が行われ、河北門地点と河北坂地点の調査が行われた（第 10 図中 32）。

調査の詳細は、本書で報告を行うため、ここでは省略する。



第10図　金沢城跡発掘調査位置図（～平成22年度）

第３表　金沢城跡発掘調査一覧

No.	調査箇所	調査年度	調査主体	調査原因	備考	文献
1	本丸	昭和43(1968)	金大金沢城調査	学術調査	四脚門・礎石建物跡	井上1969・吉岡1985・増山1999
2	本丸附設	昭和43(1968)	金大金沢城調査	学術調査	能舞台跡・台所跡・極楽橋付近建物跡	井上1969・吉岡1985・増山1999
3	二ノ丸	昭和43(1968)	金大金沢城調査	学術調査	川跡石石積	井上1969・吉岡1985・増山1999
4	二ノ丸	昭和43(1968)	金大金沢城調査	学術調査	能舞台跡・台所跡・極楽橋付近建物跡	井上1969・吉岡1985・増山1999
5	二ノ丸	昭和44(1969)	県教委・金大	校舎増築	殿舎跡・排水施設・用水路	県教委1970・吉岡1985・増山1999
6	本丸	昭和44(1969)	県教委・金大	学術調査	三階櫓・三十間長屋跡	県教委1970・吉岡1985・増山1999
7	四十間長屋	昭和50(1975)	金大	学生会館別館建設	長屋礎石・雨石列	上野1976・吉岡1985・増山1999
8	二ノ丸	昭和53(1977)	金大	学術調査	狩出14年頃矢の側瓶跡	佐々木1981・吉岡1985・増山1999
9	三ノ丸～四十間長屋間通路	昭和54(1979)	金大考古学研究室	無線アンテナ設置	大型礎石	佐々木1980・吉岡1985・増山1999
10	藤右衛門丸北側法面部階	昭和60(1981)	金大考古学研究室	舗装設置	石垣列・瓦	武末他1986・増山1999
11	黒門横北側整理部	昭和61(1986)	金大考古学研究室	流井盛部溝落防止工事	石垣列・切石側溝、瓦	武末他1989
12	重六園(江戸町歩定地)	昭和63(1989)	県埋文センター	宿舎改築	17世紀初期の遺構面(礎石建物等)	県埋文センター1992
13	石川門前土橋(石川橋)	平成4・6(1992・94)	県埋文センター	道路整備	土橋の形成過程　16世紀後半頃の簡易渡道構等	県埋文センター1997・1998
14	車橋	平成6(1994)	県埋文センター	道路整備	石垣	県埋文センター1996
15	内惣第1次・最橋	平成9(1997)	県埋文センター	公園整備(復元整備)	惣・橋跡(埋蔵された刀・鐔・鈷)・最橋礎石等	県埋文センター1997・1998
16	本丸附設第2次	平成10・12(1998・2000)	(財)県埋文センター	公園整備(復元整備)	隠居跡	梶川1999、藤原・土田他2001b
17	三ノ丸第1次	平成10(1998)	(財)県埋文センター	公園整備(施設建設)	鉄砲所跡(鉛分析遺構)、鉄砲部品	金沢城研究調査室2000a
18	ゝも/ゝ屋第1次	平成10(1998)	(財)県埋文センター	公園整備(復元整備)	天正～元和頃の堀・土橋、元和以降の堀・橋台	三浦1999
19	五十間長屋	平成10・11(1998・99)	(財)県埋文センター	公園整備(復元整備)	石垣内部構造　櫓・長屋礎石、17世紀初頭の遺構面	梶川2000a
20	内惣第2次	平成11(1999)	(財)県埋文センター	公園整備(復元整備)	西半北側石垣の構造把握	
21	新丸第1次	平成11(1999)	(財)県埋文センター	公園整備(道路整備)	近代に埋没した堀の範囲確定	土田2000
22	三ノ丸第2次	平成11(1999)	(財)県埋文センター	公園整備(施設建設)	礎石建物(番所跡)、石組井戸	(財)県埋文センター2002a
23	鶴ノ丸第1次	平成11(1999)	(財)県埋文センター	公園整備(施設建設)	本舞・石垣(浜巳用水)	土田2000
24	新丸第2次	平成11(1999)	(財)県埋文センター	公園整備(施設建設)	16世紀後半から末期頃の遺構面	(財)県埋文センター2002a
25	橋爪門西橋脚基礎	平成11(1999)	(財)県埋文センター	公園整備(復元整備)	橋脚礎石基礎の構造把握	
26	二ノ丸鍛冶	平成11(1999)	(財)県埋文センター	公園整備(道路整備)	石組遺構	
27	三ノ丸第3次	平成11(1999)	(財)県埋文センター	公園整備(設備設置)	土坑	
28	鶴ノ丸第2次	平成12(2000)	(財)県埋文センター	公園整備(復元整備)	16世紀末期頃の遺構面	藤原・土田2001a
29	ゝも/ゝ屋第2次	平成12(2000)	(財)県埋文センター	公園整備(道路整備)	最長巻半ば元和年間の石垣	藤原・土田2001a
30	北ノ丸第1次	平成12(2000)	(財)県埋文センター	公園整備(道路整備)	大部屋跡、空堀跡、石瓦等	藤原・土田2001a
31	ゝも/ゝ屋第3次	平成12(2000)	(財)県埋文センター	公園整備(道路整備)	元和以前の堀・土橋・土強薬庫　金箔瓦	(財)県埋文センター2002a
32	**三ノ丸第4次**	**平成12(2000)**	**(財)県埋文センター**	**公園整備(道路整備)**	**河北門石垣台・礎石、16世紀後半～末頃の遺構面**	**未報告**
33	新丸第3次	平成12(2000)	(財)県埋文センター	公園整備(道路整備)	尾張門石段、16世紀後半～末期頃の遺構面	藤原・土田他2001b
34	鼠昆虫1門等	平成13(2001)	(財)県埋文センター	公園整備(道路整備)	石段、石組溝	冨田・藤原2002
35	橋爪門南部	平成13(2001)	(財)県埋文センター	公園整備(道路整備)	土坑、ピット	冨田・藤原2002
36	尾張門	平成13(2001)	(財)県埋文センター	公園整備(城砦)	石組溝、路面	冨田・藤原2002
37	本丸周辺	平成14(2002)	金沢城研究調査室	確認調査	本丸虎口変遷の把握	金沢城調査研究所2008a
38	本丸周辺	平成15(2003)	金沢城研究調査室	学術調査	三十間長屋絵櫓台石垣の調査等	金沢城調査研究所2008a
39	ゝも/ゝ屋	平成15(2003)	金沢城研究調査室	公園整備(復元整備)	櫓嗅櫓台の検出	金沢城研究調査室2004a
40	本丸周辺	平成16(2004)	金沢城研究調査室	学術調査	寛永大火以前の2面の遺構面	金沢城調査研究所2008a
41	ゝも/ゝ屋	平成16(2004)	金沢城研究調査室	公園整備(復元整備)	鶴城当初の堀の規模を確認	金沢城研究調査室2004a
42	本丸	平成17(2005)	金沢城研究調査室	学術調査	本丸三階櫓石垣	金沢城研究調査室2006c
43	玉泉院丸南西石垣	平成17(2005)	金沢城研究調査室	公園整備(石垣修築)	近代の改修、石垣上部の二重柵の基礎構造の把握	金沢城調査研究所2010a
44	本丸	平成18(2006)	金沢城研究調査室	学術調査	元和期の大規模造成、初期金沢城の礎石整物	金沢城研究調査室2007
45	玉泉院丸南西石垣	平成18(2006)	金沢城研究調査室	公園整備(石垣修築)	部分修理の把握、初期金沢城石垣	金沢城調査研究所2010a
46	**河北門**	**平成18(2006)**	**金沢城調査室**	**公園整備(復元整備)**	**残存状況、保護、改修、創建時期の把握**	**未報告**
47	ゝも/ゝ屋	平成18(2006)	金沢城調査室	公園整備(復元整備)	南岸の位置確認	金沢城研究調査室2007
48	本丸	平成19(2007)	金沢城調査研究所	学術調査	寛永8年大火以前の大型遺構	金沢城調査研究所2008d
49	石川門	平成19(2007)	金沢城調査研究所	文化財修理(建造物)	控柱脚の確認	金沢城調査研究所2009d
50	玉泉院丸南西石垣	平成19(2007)	金沢城調査研究所	公園整備(石垣修築)	改修範囲と時期、初期金沢城石垣の変遷の確認	金沢城調査研究所2010a
51	**河北門**	**平成19(2007)**	**金沢城調査研究所**	**公園整備(復元整備)**	**修理門創建前(最長巻以前)の遺構確認**	**未報告**
52	ゝも/ゝ屋	平成19(2007)	金沢城調査研究所	公園整備(復元整備)	南岸の位置確認	金沢城調査研究所2008d
53	本丸	平成20(2008)	金沢城調査研究所	学術調査	寛永8年大火以前の大型遺構	金沢城調査研究所2009b
54	石川門	平成20(2008)	金沢城調査研究所	文化財修理(建造物)	控柱脚の確認	金沢城調査研究所2009b
55	**河北門**	**平成20(2008)**	**金沢城調査研究所**	**公園整備(復元整備)**	**石垣解体調査(ニラミ櫓台、一門橋当)**	**未報告**
56	ゝも/ゝ屋	平成20(2008)	金沢城調査研究所	公園整備(復元整備)	櫓の南岸、最巳用水石管、近世初期の石垣、石列等	金沢城調査研究所2009b
57	玉泉院丸	平成20(2008)	金沢城調査研究所	公園整備(遺構確認)	鉄水北部の遺構確認	金沢城調査研究所2009b
58	玉泉院丸	平成20(2008)	金沢城調査研究所	公園整備(遺構確認)	石垣変容箇所の基底部調査	金沢城調査研究所2009b
59	重六園空橋山	平成21(2009)	金沢城調査研究所	文化財修理(石垣)	石垣解体調査	
60	ゝも/ゝ屋	平成21(2009)	金沢城調査研究所	公園整備(復元整備)	櫓嗅櫓台石垣東面の残存状況確認、一部解体	
61	玉泉院丸	平成21(2009)	金沢城調査研究所	公園整備(遺構確認)	鉄水中央部、北部の遺構確認(雁庄水路、出島、最石等)	金沢城調査研究所2010c
62	重六園空橋山	平成22(2010)	金沢城調査研究所	文化財修理(石垣)	石垣解体調査	金沢城調査研究所2010c
63	石川門	平成22(2010)	金沢城調査研究所	文化財修理(建造物)	控柱脚の確認	
64	橋爪門	平成22(2010)	金沢城調査研究所	公園整備(遺構確認)	三門礎石検討の為、石組確認	
65	玉泉院丸	平成22(2010)	金沢城調査研究所	公園整備(遺構確認)	鉄水北東部の遺構確認(雁庄水路・最石等)	
A	県庁跡地(堂形)	平成14(2003)	(財)県埋文センター	都心地区整備(確認調査)	鶴来(堂形米蔵関連遺物)、近世初期以前土器遺構	伊藤2004
B	県庁跡地(堂形)	平成16(2004)	(財)県埋文センター	都心地区整備(確認調査)	足軽長屋、堂形瓦等	伊藤2005
C	県庁跡地(堂形)	平成19(2007)	(財)県埋文センター	都心地区整備(施設建設)	古代～近世の遺構面	林2008
D	県庁跡地(堂形)	平成20(2008)	(財)県埋文センター	都心地区整備(確認調査)	堂形建物、石垣、掘跡、古代～中世の遺構面	加藤2009

県教委：石川県教育委員会　　県埋文センター：石川県立埋蔵文化財センター　　(財)県埋文センター：(財)石川県埋蔵文化財センター
金沢城研究調査室：石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室　　金沢城調査研究所：石川県金沢城調査研究所

第３章　河北門枡形の遺構

第１節　概要

河北門の概要

河北門は、尾坂門より新丸を通過し、河北坂を上り三ノ丸へと入る大手筋に位置する。一ノ門・二ノ門を備えた枡形門の形式をとり、三ノ丸の正門であり、三ノ丸の搦手である石川門と二ノ丸の橋爪門とあわせて「金沢城三御門」と呼ばれる重要な門であった。

河北門の主な来歴としては、慶長後期頃に創建され、宝暦９（1759）年の大火により焼失、安永元（1772）年に再建された。明治に入ると陸軍の兵営地となり、明治15年頃に一ノ門頬当石垣を残して主要な建物や石垣は撤去されたとみられる。

門の構造は絵図等を参考にすると、河北坂上にある一ノ門は高麗門で、そこから土塀によって区画された枡形へ入る。枡形内を左に折れると櫓門の二ノ門となり、二ノ門を抜け三ノ丸へと至る。三ノ丸北面石垣の上にはニラミ櫓台が、枡形土塀の背後は盛土で土留石垣が築かれる。創建以降に大火等で改修を受けており、いくつか変化がみられる。まず、ニラミ櫓が宝暦の大火後に再建されず櫓台のみとなったこと、枡形の長屋台が無くなり土塀のみとなった点があげられる。復元整備は、宝暦の大火後に再建され、幕末まで存続した河北門を対象としており、ニラミ櫓や長屋台の無い姿で復元された。

調査前には、一ノ門頬当石垣と三ノ丸北面石垣（ニラミ櫓台石垣）のみが目視可能であった。平成12（2000）年度には公園整備に伴う側溝敷設のため確認調査を行い、二ノ門南側石垣台の一部等が遺存することを確認していたが、その他大部分の遺構の状態については不明であった。今回の復元整備に伴う調査では、平成12年度の調査分も包括した調査区となった。

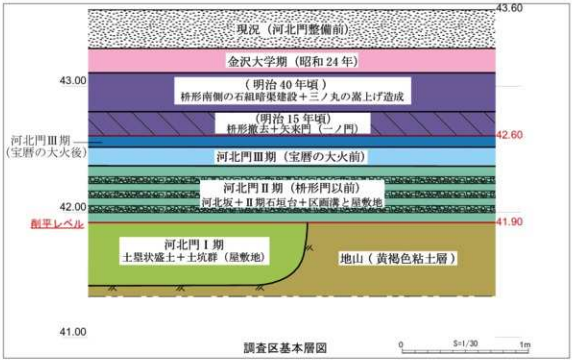
調査の方法

調査は、建物基礎や地下埋設物等の撹乱掘方の検出・掘下げ後、その壁面精査を行い門関連遺構の構造把握に努め、必要な箇所についてはサブトレンチ等をいれて精査を行った。近代以降の撹乱土と明らかなものは重機で除去したが、軍隊期の石垣や石組溝といった構造物については解体する際に略測図や写真撮影で記録作業を行った。写真撮影や断面図作成以外の遺構の図化は太陽測地社に委託し空中写真測量を実施した。

基本層序及び時期区分［第11図］

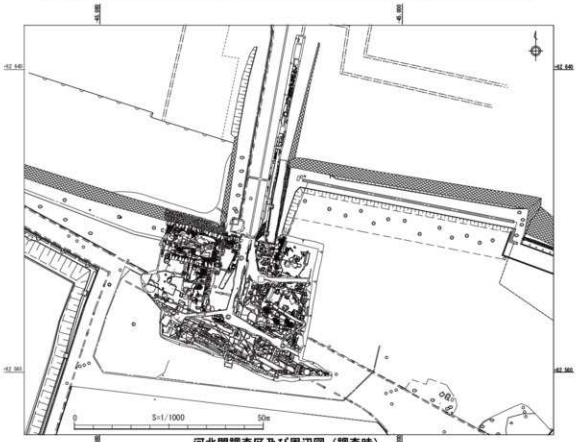
確認調査及び周辺の工事立会等により現況地盤面から河北門遺構面、地山を含む基本層序を確認した。調査区のほぼ中央付近となる枡形で基本層序を見ていくと、下図の通りとなる。ただ、調査区の南北と東西方向にもそれぞれ旧地形や近世段階の土地利用の違いによって高低差がみとめられた。

発掘調査、工事立会、絵図文献等の調査を基にして河北門における時期区分を行った。時期区分については、河北門が枡形門となる以前、枡形門の時代、破却後の３時期に分かれ、その中でもさらにいくつかの段階差や時期差が認められた。別表（第４表）はその時期区分と性格、推定年代と画期となる事象で、本報告中の時期区分はこれを基準とした。ただし河北門とその周辺部における時期区分のため、城内全体での区分とは必ずしも一致しない部分もある。例えば、本丸周辺では、元和や寛永の大火、二ノ丸では文化の大火等が建物や石垣を修理する契機となるが、河北門ではそれに該当する痕跡は見られなかったため、時期区分には含まれていない。



第４表　河北門時期区分

時期区分		性格	推定年代	時期区分の事象
Ⅰ期		門以前	～文禄期頃	削平以前の下層遺構
Ⅱ期		桝形門以前（平入門）	慶長前期（近世初期）	
Ⅲ期	1	桝形門期	慶長後期～宝暦9年（近世前期）	宝暦の大火前
	2		宝暦9年～明治15年頃（近世後期）	宝暦の大火後



第11図　概要

調査区割・グリッド[資：第１図]

調査区割は現状で目視可能な石垣と絵図を参考に、二ノ門・一ノ門・ニラミ櫓・枡形といった門の構造を基準に分割した。実際の調査では園路の切替えや作業の進捗状況により同一調査区が細分されたり、調査年度が異なるなどあったが、本報告では調査区割ごとに遺構を提示している。

グリッドは一ノ門頬当石垣と河北坂の軸を南北に、一ノ門頬当東側石垣の北面ラインを東西軸の基準としてその交点を起点に５ｍ方眼の任意のグリッドを設定し、杭は10ｍ間隔で設置した。座標北から約11°東に振る。グリッドには北から南方向へはアラビア数字（１、２…）を、西から東方向の軸はアルファベット（Ａ、Ｂ…）をつけ、両者を組み合わせて杭番号とした。グリッド名は各方眼の北西隅杭番号に代表させた。

遺構名と石垣 ID

遺構名は現地調査では仮番号でつけ、資料整理の段階で略記号を用いた遺構名をつけた。河北門枡形に関連する遺構は下記の表のとおりである。

城内石垣では、現況石垣と既に撤去された石垣については江戸後期の絵図を基にして、全てに個別 IDN_0をつけている。河北門でも江戸後期の絵図で確認できる石垣には総て IDN_0がある。本報告書では石垣N_0を石垣の遺構略記号として使用した。

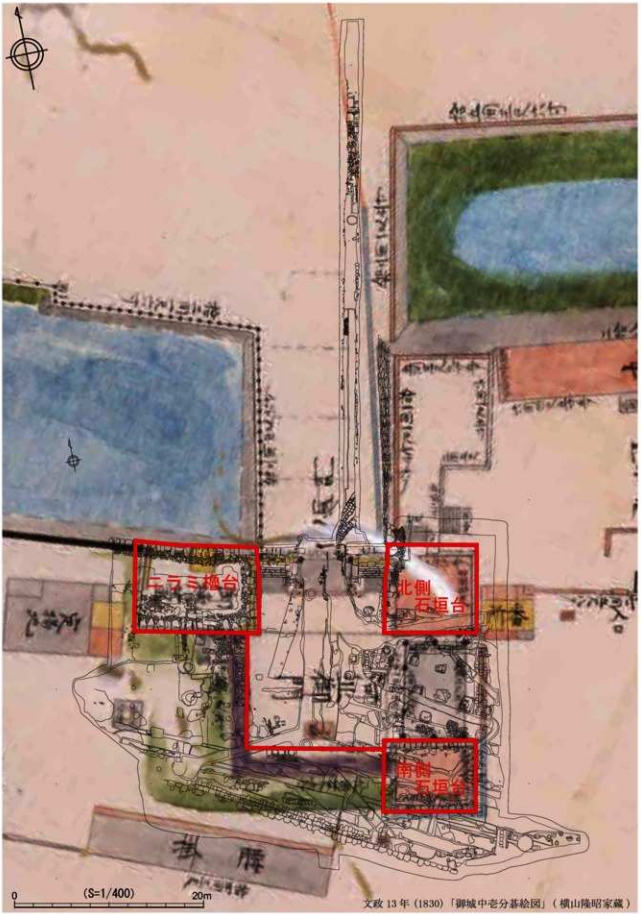
第５表　復元関連遺構名

性格	遺構名
二ノ門	
石垣台	321
礎石	P007
礎石根固	P001～6、P008・9（古）
石組溝	SD002
石組暗渠	SD003
枡	SK019
葛石	SX025
路盤	SX030
ニラミ櫓	
ニラミ櫓台石垣	323
ニラミ櫓台南側階段	SX028
河北坂	
河北坂石垣	3250
九十間長屋下石垣西面	3440W
石組暗渠(河原石)	SD005・8、SD101・2

性格	遺構名
一ノ門	
頬当石垣	3241
頬当石垣階段	SX026・027
礎石根石	P010-2・3、P011-2
石組溝	SD004・9
石組暗渠	SD010・11
枡形・周辺部	
土塀石垣	3220
土塀裏盛土	SA001
土塀裏盛土土留石垣	3220S
長屋台石垣	SW001
枡形内路盤	SX034
井戸	SE001・2
柵列	SD012
溝状遺構	SD013～16
炉[1]	SX035

第６表　河北門石垣 ID

二ノ門南側石垣台　(321)	**東面3210E、西面3210W、南面3210S、北面3210N**
二ノ門北側石垣台　(324)	**東面3240E、西面3240W、南面3240S、北面3240N**
一ノ門頬当石垣西側（3231）	**東面3231E、西面3231W、南面3231S、北面3231N**
一ノ門頬当石垣東側（3241）	**東面3241E、西面3241W、南面3241S、北面3241N**
ニラミ櫓台石垣　(323)	**東面3230E、西面3230W、南面3230S、北面3230N**
ニラミ櫓台階段脇	**南面3231S**
土塀石垣　(3220)	**東面3220E、北面3220N**
土留石垣	**南面3220S**
九十間長屋下石垣（3440）	**西面3440W**
河北坂石垣（3250）	**東面3250E、西面3250W**



第 12 図　調査区全体と近世後期の河北門

近現代の河北門［第13～15図、資：第6・7・90・91図］

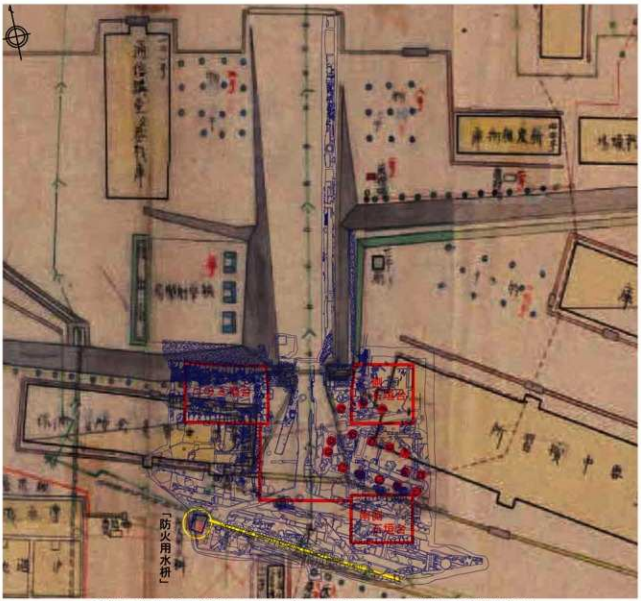
明治維新後の金沢城は、明治4年（1871）の廃藩置県によって兵部省の所轄となり、翌5年（1872）には陸軍省の所轄となる。不要な建造物は取り壊され、軍事施設として整備されていくなかで、河北門に関する記録が「陸軍省大日記」に残されている（防衛省防衛研究所図書館蔵）。まず、明治9年（1876）歩兵一大隊の営所新築に伴い、河北門・橋爪門枡形、三ノ丸、鶴ノ丸にあった土塀を解体し、石垣石や礎石を営所の礎石に使用したいといった内容の願書が出されている。明治14年（1881）兵舎として利用されていた二ノ丸御殿から出火し、多くの建物が焼失した。河北門が火災による影響を受けたかどうかは、本調査では、焼土面などが検出されず、不明である。明治15年（1882）には、一ノ門の解体に関する伺いが出される。一ノ門の柱が腐り、雪の重みで傾きはじめ、今後倒れる恐れがあるため、取り壊して矢来門を設置したいといった内容である。これらの記録から、明治以降、河北門が徐々に取り壊されていく過程が推察される。

昭和20（1945）年頃に作成された「歩兵第百七連隊図」（石川県立歴史博物館蔵）に当時の軍事施設の配置が記録されており、二ノ門北側石垣台付近には雪中演習所が、ニラミ櫓台や土塀裏盛土側には下士官集会所と酒保が建てられている（第13図）。調査区北東付近で、近代のものと推定される礎石を16基（P201～216）確認し、そのうちの4基（P201～203、213）は、絵図上で雪中演習所の位置に合致しており、演習所の礎石であったと考えられる。その他の礎石は、北西～南東を軸にして並び、この方向が雪中演習所の建物の向きに対応していることから、関連が指摘できる。

礎石以外では、調査区南西で煉瓦造りの枡が、南側で東西方向に延びる石組側溝（SD215）を確認した。検出した枡は、絵図上の防火用水枡に相当する。この枡は、明治40年（1907）に石川県・金沢市が百間堀・白鳥堀・大手堀の下げ渡しを願い出た際、第9師団は城内各所の工事を交換条件として出し、その一環として設けられた煉瓦積みの貯水枡にあたると考えられる（前掲「陸軍省大日記」）。石組側溝は、絵図上で枡付近を通り、北西～南東にかけて緑線で表現された施設に相当する。この側溝に用いられた石材は戸室石で、刻印を有する石垣石や礎石から転用されているものもある。

昭和20年（1945）8月の第2次世界大戦終了後、金沢城内にあった軍事施設は占領軍の支配下におかれた。その後、昭和24年（1949）に、文部省によって金沢大学が発足され、城内は、その敷地として活用される。大学期の河北門周辺は、二ノ門の北側石垣台付近に保健管理センターが、さらにその東に大学本部の庁舎が建てられている（第14図）。ニラミ櫓台側では、陸軍期に下士官集会所と酒保として使用されていた建物が、部室棟へと変化している。また、調査区内で見られるマンホールのほとんどが、大学期の配置図と同じ場所にあることから、調査区の縦横にわたる下水道は大学期に通されていることが判明した。

その後、金沢大学は、規模の拡大にともない、旧城内の敷地では手狭になり、平成8年（1996）に金沢市郊外の角間地区に移転する。跡地は石川県が取得し、金沢城公園として整備が始まり、河北門周辺では、大学関連の建物が解体される（第15図）。平成18年（2006）～20年（2008）にかけては、河北門復元整備に伴う埋蔵文化財調査（本調査）を行い、平成22年に復元が完了している。



調査区全体（S=1/600）と「歩兵第百七連隊図」（石川県立歴史博物館蔵）

● 礎石
● 防火用水桝　石組側溝

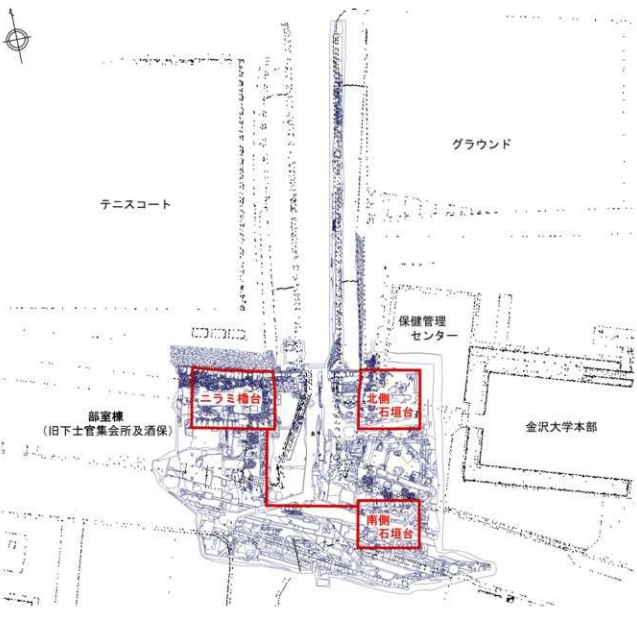
P208　礎石（近代）検出状況　南から

大正13年（1924）の旧金沢城内空中写真
（『金沢城跡』1993より）

第13図　近現代の河北門1

SD215　石組側溝（近代）　西から

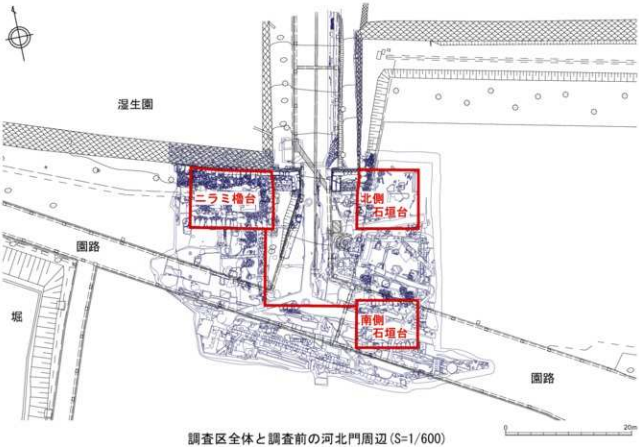
防火用水枡　北から



調査区全体と大学期の校舎配置図(S=1/600)

第 14 図　近現代の河北門２

大学期の河北門（『金沢城跡』1993より）



調査区全体と調査前の河北門周辺(S=1/600)

一ノ門頬当石垣と河北坂

二ノ門北側石垣台付近

第15図　近現代の河北門3

第２節　一ノ門

概要

一ノ門はＧＨＩ１・２グリッドに位置する。通路部分は三ノ丸から新丸方向への排水路や融雪装置が南北方向に設置され、大幅に撹乱されている。また、西側頬当石垣からニラミ櫓周辺にかけては近代以降に頬当石垣上面の高さまで盛土造成がなされ建物が建てられていた。調査の結果、現存する東西の頬当石垣階段に加え、鏡柱の根石・根固、石組溝を検出した(以下、東側頬当石垣を東側石垣、西側頬当石垣を西側石垣と記載する)。

P010・P011（根石・根固）［第16～18図、資：第８・９・92図］

概要　Ｈ１２グリッドで一ノ門鏡柱礎石の根石（根固）を確認した。東西両側ともに鏡柱礎石や控柱の礎石・根石（根固）については近代以降に破壊され、位置や大きさを特定するには至らなかった。

鏡柱基礎については東側P010、西側P011と付した。一ノ門内側の石垣面の調整の違いから、鏡柱付近の当時の地表面は約41.90mと考えられる。また、石川門の鏡柱を観察すると、鏡柱礎石の上面標高は地表面より高かったと推測できる。一ノ門東側鏡柱下で検出された上下２石のうち、上位置の石材の上面標高41.30～41.40mと当時の地表面を比較すると、同柱下は、礎石１石（未検出）に下部根石２石の計３段の構造であったと考えられる(以下、例　P010(東側鏡柱基礎)→「礎石」＝P010-1、「１段目根石」＝P010-2、「２段目根石」＝P010-3と記載する)。

P010-2・3（東側礎石根石）　東側は鏡柱礎石（P010-1、未検出）下の根石１段目（P010-2）・２段目（P010-3）を確認し、P010-3上面を検出して調査を終了した。P010-2直上まで近代以降の撹乱で壊されていた。P010-2の上面標高は41.34m、平面形は長方形であり、南北86㎝、東西最大値48㎝で上面には細かいノミ痕が確認できる。

P010-3の上面標高は40.85m、南北90㎝、東西最大径75㎝の不整長方形で、上面は凹凸を取るための細かいノミ痕が確認できる。掘方は南北152㎝、東西残存値110㎝の不整円形で、壁面は石垣下に若干オーバーハングし急激に立ち上がる。P010-2下、P010-3上には栗石が充填されていたが、P010-3が据えられている掘方内には栗石はほとんど入っていなかった。栗石の有無が石の据えられていた時期差を表している可能性もある。P010-2はP010-3に比較すると小さく、東側石垣から若干離れて据えられ、P010-3は平面では東側石垣に接するように据えられていた。

P011-2（西側礎石根石）　P011-1(未検出）直下の１段目根石（P011-2）を検出した高さで、北側に小トレンチを開放して根石の規模を確認した。P011-2は南北54㎝、東西62㎝で側面も丁寧に調整された直方体のような形状である。上面標高は41.39mで、東側鏡柱P010-2上面標高41.34mと近似値であるが、ともに根石で地表に表れていないためか石材の規格や形状は揃っていない。

時期　P010-2・3は、南北・東西方向にかなりずれて積まれていることや掘方内の栗石の有無等から、P010-3を残しP010-2からの積み直しや同位置で再利用されている可能性もある。また、宝暦９年(1759)の大火により鉛瓦が溶着した石材や、東・西石垣解体調査の際に石材の加工に違いを確認したことから、東側石垣南西隅・西側石垣南東隅根石上の石からは大火後に積み直されていると考えられる。その際に鏡柱、控柱ともに据え直されたものと推定する。しかし、創建時の２段目根石が宝暦まで遺存していたのか、それ以前に改修が行われていたのかについては不明である。

3241・3231（東側頬当石垣・西側頬当石垣）［第16～18図、資：第８・９・68・69・92図］

概要　ＧＨＩ１・２グリッドに位置する。解体調査前の現標高は、3241（東側石垣）上面は北面44.31ｍ、南面44.26ｍである。調査前は東側石垣階段の下部３段は地中に埋没した状態であった。近代に3231（西側石垣）側の東面については、南に約10ｍ石垣が延長され西側石垣上面の高さまで盛土され、軍隊関連の施設が建てられた。また、3231は、大幅にずれが生じ解体修理が必要であった。

規模・構造　石垣解体に伴い、１段毎に裏込めの状況や石材の観察を行っている。解体修理に伴う報告は第４章で行い、ここでは解体前の状況を中心に記す。東側・西側石垣は切石積で、外周は比較的平滑に調整している。規模は、石垣北面の端から端まで（ニラミ櫓東面から二ノ門北側石垣台西面まで）1370㎝、両石垣間は北面510㎝、北面幅は最上面で両石垣とも430㎝、以下、3241の数値を例示すると西面上面幅300㎝、東面上面幅230㎝である。石垣の高さは、近世の推定地表面を基準に南西隅では地表220㎝、地中62㎝である。北西隅は地表235㎝、地中30㎝である。3241の数値についてもほぼ東側と同じであるが、石垣のずれや歪み等から若干少ない数値になっている。

3241掘方は根石直下～10㎝程下で確認している。掘方下には地山上に盛土が堆積しており、この盛土は前段階の石垣掘方の可能性もある。東面中央はほぼ水平に地山が切られているが、河北坂付近は坂下に向け斜めに切られている。3231掘方は、明確に把握することはできなかったが、おそらく１・２層目が該当すると思われる。

3241西面・3231東面の北端最上段にＴ字型と上から２段目に長方形、同４段目の当時の地表面付近には方形の加工痕があり、その３つの加工痕の通るラインの石垣面が帯状に白色化している。ちょうどP010-2・3、P011-2の垂直上にこの白色の帯が位置している。この帯は、3241・3231石垣と鏡柱の接する面とも思われ、Ｔ字型や長方形の穴を利用し鏡柱と石垣が固定されていたとも推測できる。参照した昭和28～34年の石川門の解体修理工事の写真では、河北門同様石垣の最上段上面にはＴ字の穴が開いていたが、中段付近には加工痕は確認できなかった。上段のＴ字型は、石垣上の土塀の柱が造られる位置でもあり、上部構造の為のホゾの可能性もあるが、明治に入り軍隊が一ノ門の高麗門を取り壊し、矢来門を構築しており、石垣の加工痕跡や白色化は近代に入って付いた可能性もある。

時期　3231西面根石と一段上の築石の面では、上の石が最大10㎝セットバックしていることから、根石上の石から積み直しが行われたと考えられる。また、両石垣の南面の根石から２段目上面では宝暦の大火で溶着した鉛を確認していることから、転用材と分かり、こちらも根石から２段目から積み直されている。階段についても、大火後の両石垣改修時には積み直していると推測できる。このように改修の痕跡は確認出来たが、根石が創建当初のものか、宝暦までの改修のものかは不明である。

SX026・SX027（東側石垣階段・西側石垣階段）［第16～18図、資：第68・69・92図］

概要　東・西側石垣の鉤型に曲がる南側には、階段が取り付いている。SX027（西側石垣階段）は、上段部分が大幅に破壊され、多量の釉薬瓦によって埋められていた。

規模　SX026（東側石垣階段）では上面長軸幅290㎝、一段の踏み面幅は上段も下段も約21㎝、一段の蹴上の28～29㎝である。いくつかの石材で一段分を構成しているが、解体時の計測では石材の規模は最長長軸164㎝、短軸50㎝である。3240W（二ノ門北側石垣台西面）に接するように造られていたSX026は最下段から７段残存していた。SX027は3230E（ニラミ櫓台東面）に接するように位置し、下から４段までは残存し、５段以上は壊され裏込めのみ残存していた。石材の加工は、地中部分や上段の階段下に隠れる部分は粗くなっており、3231東面やSX026の７段目上面の加工の状況からは、本来８段造られていたことが判明している。また、3231・3241南面根石の一段上の面加工からは、階段の最下段は同石垣の鉤型内だけでなく両石垣南面に接するように設置されていたと考えられる。ちなみに第４図-10「金沢御城内外御建物図」（天保４～９年（1833～1838））では、階段下２段は両石垣南面に接す

る位置まで描かれている。

時期　両石垣とともに宝暦の大火後に改修され、SX026の下から７段目に凝灰岩が使用されていることから、その後も部分的に改修されている可能性がある。

SD004（一ノ門石組溝）［第16～19図、資：第９～11・92・93図］

概要　3231・3241南面に沿うように東西方向の石組溝を確認した。ＧＨＩ２グリッドに位置する。新丸方向へ続く近代以降の側溝・配管等によって撹乱され、東西両側と中央部分のみ残存していた。石組溝内部の河北門廃絶後の埋土と近代の撹乱を除去し、遺構検出と土層観察で調査を行った。枡形内部の排水溝の役割を果たしたと考える。

規模・構造　流路部分は凝灰岩製であり、東側東端と西側西・南端と中央部の南北で戸室石を確認したことから、石垣南面に接する部分を除き凝灰岩の外側に戸室石縁石が置かれる構造であると確認できた。戸室石は長軸を溝の長軸方向に合わせて据えてある。規模は、凝灰岩側板端まで東西815㎝、（内法750㎝）である。石の組み方等の構造は確認された各地点で異なるため、以下３ヵ所に分けて記す。掘方は、南北軸の撹乱壁面を利用し東西両側で観察している。

東側　凝灰岩の側板と底板をH字型に配置している。板同士を組むための切り込み等は確認できない。内面は平滑に調整され、外面は粗いノミ痕が残る。内法は28㎝、深さは東端で13㎝である。石の規格は、側板は長軸残存で70×短軸30×厚さ７（㎝）、底板は長軸残存70×短軸28×厚さ７（㎝）である。これらの数値から石材は規格品の可能性が高い。極めて軟質で端部は摩耗が激しいという特徴をもつ。

縁石はおそらく直方体の戸室石で上面は丁寧に調整され平滑であるが、土中部分の加工はやや粗い。大きいもので長軸53×短軸24（㎝）で、厚さは不明である。遺構内には、河北門廃絶後に廃棄されたと思われるいぶし瓦（海鼠塀に使用されていた腰瓦が多い）が敷き詰められるように入っていた。掘方の規模は、深さ約40㎝、幅115㎝で立ち上がりは急である。遺構埋土は近代以降の樹木根による撹乱を受けて締まりが弱く、キメも粗い。撹乱で壊され西端の底板は下に動いているが、排水溝の性格上、当初から中央部に向けて若干低く造られていたようである。

中央部　形状は刳り貫き箱型である。外面は粗いノミ痕が残り、内面は平滑に加工されていた。東西両端に比較して少し低く位置し、底面は酸化し変色が進んでいた。小口の加工状況を観察することは出来なかった。厚さは側・底部分ともに９㎝、内法は27㎝で他の箇所に比較し全体的に厚い。石材は軟質であるが、東側の石材に比較すると摩耗は進んでいない。南北で確認された戸室石縁石は長軸残存27×短軸24（㎝）である。掘方埋土には、径１～３㎝の小礫、径約10㎝の礫を含む。

西側　南北の底板端の切り込みに側板が載る箱型である。底板同士の接続部の加工は不明である。内法幅25×高さ18（㎝）である。側板は、大きいもので長軸残存104×短軸20×厚さ約７（㎝）である。底板は長軸残存72×短軸30×厚さ７（㎝）である。南側側板の凝灰岩の中には産地が異なるのか、長さ1.0㎝程度の緑色の含有物が多く含まれるものがあり東側・中央の部材に比較し硬質であるためか、ほとんど摩耗していない。戸室石縁石の加工は、東側とほぼ同じであり、規格は西端74×22（㎝）で厚さは不明である。南端85×22×14（㎝）である。最終段階の掘方の規模も東側とほぼ同じで埋土は橙色粘土ブロックを含み、それより下の前段階掘方は溶けた鉛粒と径約10㎝の礫を含む。

底石は、東・西残存部分から中央に向かい勾配が東側から８°、西側から４°であるが、中央部の残存底石材上面に推定ラインを繋ぐと東側から2.5°、西側からは１°で傾斜し据えられている。残存していない部分で底石の角度が変わっていたか、あるいは撹乱に破壊された際に角度が変わったと推測する。遺構に接する3231W下部の石垣面の調整を観察すると、面外周を巡る削り加工の他に、標高42.05mの水平ラインより下部で削り残しが多く加工が粗くなることから、遺構東側の地表面はほ

ぼ 42.05mと推定する。西側においても、石垣面の観察からほぼ同標高に地表面があったと考えられる。東西端戸室石縁石の上面標高はいずれも 42.07mであり、地表面より１～２cm、凝灰岩側板より６～７cm高い位置に据えられていたと思われる。本遺構は門を横断しており蓋が掛けられていたことが予想されるが、凝灰岩はとても軟質であり、蓋の加重がかかると割れてしまう可能性もあるため、凝灰岩より戸室石縁石を少し高く置き、戸室石に過重が架かるように蓋を載せていたことが想定できる。もしくは、地表面の高さと合うように６～７cmの厚さの蓋を戸室石縁石の間にはまるように設置していた可能性もある。文政 13 年（1830）の絵図である「御城中壱分碁絵図」（第３図-９）で描かれている石組溝上の蓋は、他の門の描画との比較から木製と推測される。先述の通り、東西両側の北側では戸室縁石は確認されていない。絵図では両石垣南面に接するように階段が描かれており、縁石ではなく階段が伸びていた可能性が高い。

時期　東西両側石組溝内埋土からは近代の遺物が出土しており、西側掘方が SX034（Ⅲ期枡形路盤）に覆われていた。Ⅲ期最終段階枡形路盤構築より前で、隣接する東西石垣を構築あるいは改修した時期としては、今回の解体調査で判明した宝暦の大火後と文献記録に見える享保 17 年（1732）があげられる。先述の通り、3231 南西隅・3241 南東隅の根石から２段目については、宝暦の大火後の改修が判明している。この際に当時の路盤とともに改修されている可能性が高い。

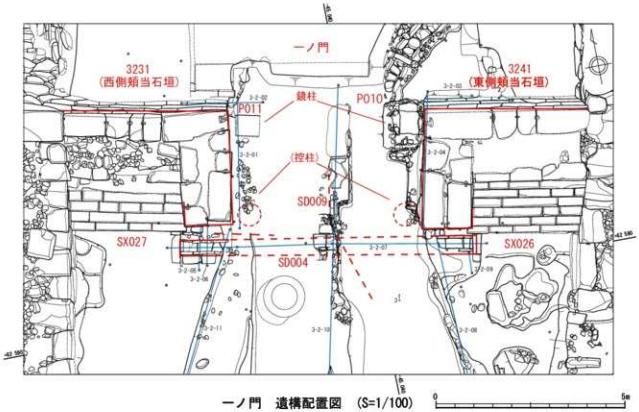
西側については平面・断面ともに宝暦の大火後の改修より新しい改修痕跡を確認している。断面では、鉛粒を含む大火後の改修掘方を切り込む新しい掘方が見つかっている。平面的には、残存している部分の東西両側を比較すると、構造・石材に加え、東西石垣から凝灰岩側石までの距離も若干異なり、東側は約 22 cm、西側は約 35 cmの距離にある。また、西側には 3241 から約 24 cmの位置に石組溝側板と思われる凝灰岩が路盤から顔を出し埋まっている。これは、東側石組溝の 3231 からの距離と近い値である。明治の河北門廃絶時に使用されていなかったと思われる凝灰岩側石が、地上に顔を出し置かれたままだったことになる。これは、大火後の改修以降に、西側石組溝のみ改修が必要となり、雁木や西側石垣根石を保持するために付近を掘り返さず、南に位置をずらし、新しく施工されたためと考えられる。延宝４年～元禄年間（1676～1704）の「金沢城絵図」（第３図-15）では、中央部残存部のすぐ東側と考えられる位置に枡と思われる四角が描かれている。南北方向の溝（SD009）との交差地点に造られていたと想定している。

SD009（一ノ門石組溝）［第 16・19 図、資：第９・10・93 図］

概要　SD004（一ノ門東西方向石組溝）の下部で南北方向の石組溝を確認した。近代以降に大幅に撹乱され、遺存状況は非常に悪い。

規模・構造　構造は、側と底一体の刳り貫き箱型で底部両小口は接続のための切り込みが入っている。SD004 底裏に接するように蓋石が設置されていた。側部分の内側は外周が幅３～４cmで平滑に調整されているが、他はノミ痕が粗く残り、SD004 に比べ底面の調整も粗い。外側の調整については破損が激しく不明である。厚さは側・底部とも９cmである。調査区内で唯一確認された石組溝の蓋石は、厚さ９cm、上面はノミ痕が粗く残る。平面の規模・内面加工・接続部分については不明である。蓋上面から側面上部にかけては、水漏れ防止のためと考えられる橙色粘土が貼られている。また、「金沢城絵図」（第３図-５）では、一ノ門付近に南北方向の溝と考えられるラインが描かれており、東西方向の溝との交点は方形の枡のようなものが確認できる。本調査では近代以降の配管等により大きく撹乱され確認できていないが、本来は SD004 の中央部付近で枡と接続し、一ノ門を通り河北坂下へ排水する溝として機能していたと考えられる。

時期　Ⅲ期最終段階に機能していた SD004 の下部に接し位置していることから、SD004 と枡を介して接続する可能性が高く、同時期の遺構と考えたい。



一ノ門　遺構配置図　(S=1/100)

3241・3231（調査開始前）　北から

3241N 掘方　北から

3241W　西から

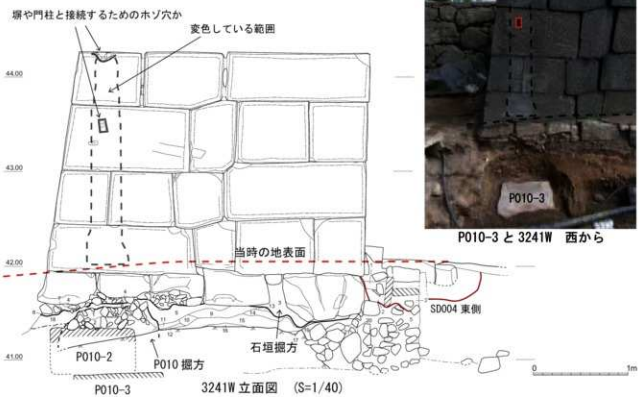
一ノ門

第 16 図　3241・3231（東側・西側頬当石垣）

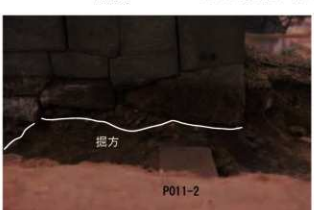
P010-2 と掘方　西から

P010-3 加工状況　北から

P010-3 と 3241W　西から



3241W 立面図　(S=1/40)



3231E　東から

地表面と根石から推定した P011-1　北から

第17図　P010・P011（根石、根固）、3241・3231（東側・西側頬当石垣）

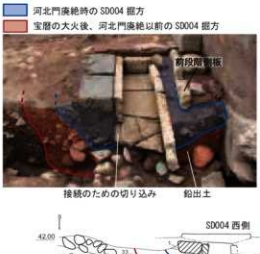
3241E　SX026　8段目痕跡　東から

SX027　上　近代盛土　東から

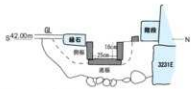
SX027　面加工状況　南から

参考：石川門一ノ門最上段（文化庁蔵）

参考：石川門一ノ門北側　南から（文化庁蔵）

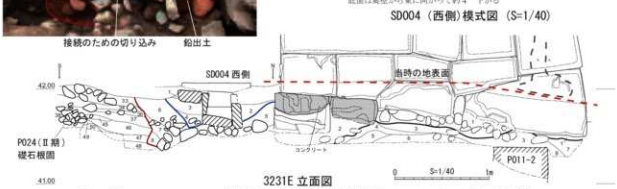


接続のための切り込み　　鉛出土



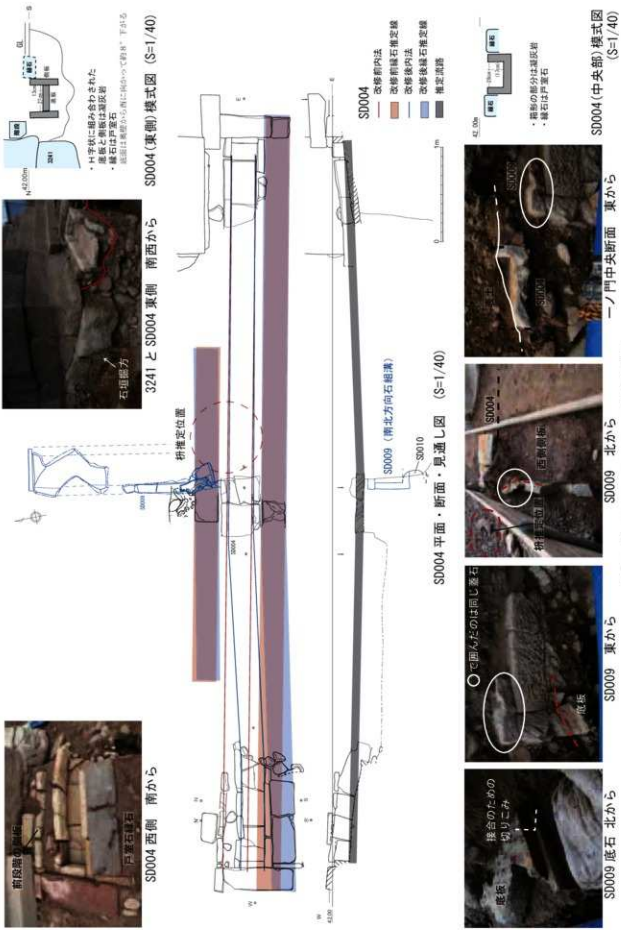
・底板と側板は凝灰岩を箱形に組み合わせる
・側板が底板に乗る場合は、底板の接合部分に切り込みが入る
・縁石は戸室石
　奥行にも接合面に切り込みが入る
　底面は奥壁から東に向かって約4°下がる

SD004（西側）模式図（S=1/40）



3231E 立面図

第 18 図　SX026・SX027（東側・西側頬当石垣階段）、SD004（一ノ門石組溝）



第 19 図　SD004・SD009（一ノ門石組溝）

第３節　二ノ門

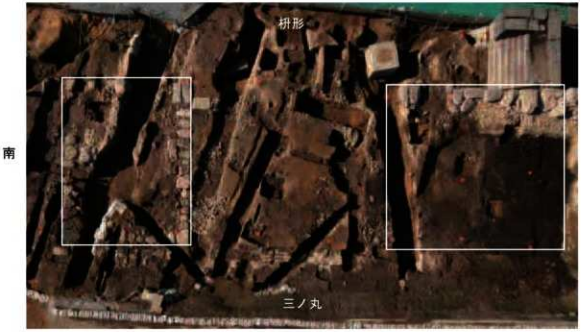
概要　Ｉ～Ｌ２～７グリッドにかけて位置する。二ノ門は絵図資料以外にも、三ノ丸側から見た古写真が何枚か残されており、地上部分の情報は一定量あり、今回の調査では、絵図・古写真の情報では不明な、当時の地表面の高さ、地下部分の構造などが明らかとなった。

河北坂や枡形部分は、金沢城期から現在に至るまで一貫して通路として機能していたが、二ノ門部分は、明治以降に軍隊建物や大学の保健管理センターが作られるなど様々な土地利用がなされていた。従って二ノ門廃絶時の遺構も、鉄筋コンクリート建物の基礎や配管といった地下埋設物により部分的に破壊されていたが、当初の予想よりも良好な遺存状態であった。撹乱部分についても最大限利用し、その壁面部分を精査し、遺構に極力サブトレンチなどを入れず内部構造の把握に努めた。

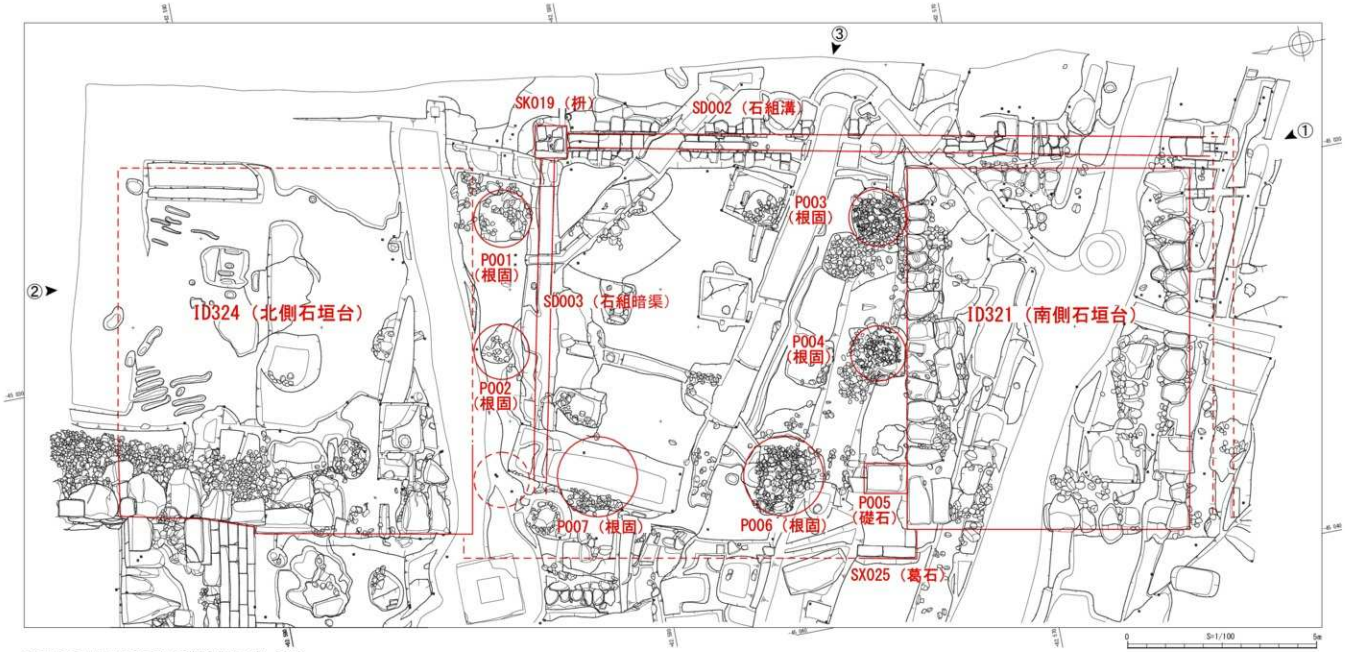
検出遺構　石垣や建物に関する遺構として、櫓門の南北石垣台の根石が遺存しており、石垣の位置や地盤の高さを推定する成果が得られ、最終段階での石垣の形式や宝暦の大火以前の改修時期、創建時期などの、河北門の来歴を探る上でも重要な情報を得た。門内部の建物に関しては、礎石１箇所と根固５箇所を確認し、柱の位置・下部構造が判明した。礎石には柱の金具痕や添柱が建てられていた部分にホゾがきられており、柱の規模や形状が明らかとなった。

門内部の通路に関しては、土間状の路盤を検出した。粘土に玉砂利を均質に混ぜ、叩き締めたとみられる硬質な面を確認した。

門の関連設備として、枡形部分を区切る葛石や、三ノ丸側には、南側石垣台に沿う石組溝が確認され、枡を介して門内の暗渠へと水が流れていくルートが判明した。石組溝の構造や、用途に応じた石材の使い分けについての知見を得ることができた。



第20図　二ノ門全景



※平面図中の**A**と番号はそれぞれ写真の撮影方向と番号と一致する

① 全景　南から

② 全景　北から

③ 二ノ門内　東から

第21図　二ノ門　概要（S=1/100）

SX030（二ノ門路盤）［第 22・23 図、資：第 12～14 図・第 94 図］

ＩＪＫ４～６グリッドに位置する。二ノ門内部で検出し、近代以降の撹乱によって部分的に削平を受けている。

規模・構造　南北では、北側石垣台から南側石垣台との間で、東西では、SD002（石組溝）から SX025（葛石）の間と、二ノ門内部において確認した。色調は黄橙色で、粘土を主体とし、径 0.1～3.0 ㎝程の小礫や砂を含み、固く締まっている。残存している部分の標高は、二ノ門西側では上面 42.50～42.60m（底面 42.46～42.50m）、東側では上面 42.40～42.50m（底面 42.34～42.40m）と、東側に向かって傾斜している。最も良好に遺存していた部分で、約 10 ㎝の堆積を確認した。

時期　検出した SX030 は、河北門最終段階時に相当するものと考えらえれ、宝暦９年（1759）に起きた大火後の改修に伴なって設けられたものと推定する。それ以前の路面は確認されず、枡形門成立以後に大幅な路面の嵩上げは行われていないと考える。

小礫を多く含み、固く締まり、二ノ門内部に広がって検出できる点から、路盤として機能していたと考えられる。また、この傾斜は、門内の水捌けに関連し、西側から東側にむかって傾斜することで、三ノ丸からの浸水を防ぐためと思われる。

その他　SX030 を撹乱壁面で確認作業中に、路盤と切合い関係がある遺構を多数確認した。ＪＫ３・４グリッドでは、SX030 を切り込む SK201 を検出し、釉薬瓦を含むことから、近代に属すると考えられる。SK201 底面では、石とその上に井桁状に組まれた木材を検出しており、過重に耐え傾かないような構造であったと推測している。当該期の絵図との比較を行ったが、該当するものは記録されてお

SX030確認範囲（黄色部分）と土層観察位置　(S 1/200)

SX030　検出状況

SX030　断面　SD212 南側壁面

※第22・23図中の丸番号は対応する

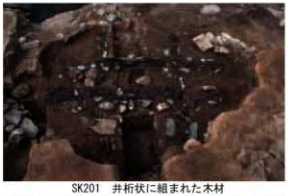
第 22 図　SX030（二ノ門路盤）１

らず、性格は不明である。また、SX030 に覆われている遺構もあり、これらは河北門造成土を切り込んでいるが、時期や性格の特定には至っていない。

以下、撹乱壁面で確認した SX030 に覆われる遺構をいくつか掲載した。ID321（南側石垣台）北東隅で確認した２基の遺構は、枡形創建時構築と考える P003 を切り込んでいた（第 23 図①：赤・青線）。内１基（赤線）は、規模や形状は不明であるが遺構南辺の約 100 ㎝のラインが 3210N に平行であることから、石垣台構築に関連する遺構の可能性もある。もう１基（青線）は、南北軸で径約 250 ㎝、深さは路盤直下から約 70 ㎝の規模になる円形土坑である。SD002（石組溝）の下で確認されたことから、二ノ門を構成する施設ではないが、321 北東隅に位置することから、石垣台積み上げの際の足場等の関連が想定できる。

※第22・23図中の丸数字番号は対応する

SX030　検出状況　東から



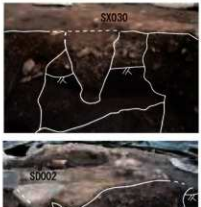
SK201　井桁状に組まれた木材

①　ID321南側石垣台北東隅　南東から

①　ID321南側石垣台北東隅　東から

②　SX201西壁　東から

二ノ門内ほぼ中央の路盤下ではピットと土坑が並んでいる。遺構上に盛土げ上がなく、前段階の路盤もない様子が分かる。



③　SX201　西から

SX030 下25㎝で黒ボクの地山が確認できる。遺構の新旧関係が見られる。

④　SX202　南から

SX030・SD002（石組溝）掘方下で、斜めに堆積する土層が見える。Ⅱ期の上層の可能性が高い。

⑤　SD205（鉄管４）壁面　南から

SD002（石組溝）下の遺構は石材調整時に出る戸室チップを含むことからⅢ期の遺構と推測する。左下にはⅠ期と思われる遺構がある。

第23図　SX030（二ノ門路盤）２

SX025（葛石）［第 24・25 図、資：第 14・15 図・第 94・95 図］

Ｉ５・６グリッド東側で３石確認した。それ以外は抜き取られ、その痕跡をＩ５グリッド北東で検出した。

規模・構造　検出した３石は、南側石垣台の北西角付近に位置する。３石はいずれも長方形の切石で、赤戸室石を使用し、２石は南北を長軸とし、１石は東西を長軸とする鉤型に並ぶ。南北軸の２石のうち北側は長辺 67×短辺 29（cm）、南側は長辺 86×短辺 30（cm）である。東西軸の１石は長辺 47×短辺 30（cm）である。SD006 南壁で確認した石の厚みは、13～15 cmである。東西軸と南北軸の直行部分では、南北軸側が東西軸の石材に合わせて削られ、東西軸と南側石垣台が接する部分では、東西軸側が石垣に合わせて削られている。切石の上面の標高は、南北軸の２石は 42.59m とほぼ同じであるが、東西軸側は南北軸より５cm程高く 42.65m である。

SX025 の掘方は、SD006 南壁と、そこから南側にかけて確認した(3-3-12)。SD006 南側平面では、南北軸の２石から 12～22 cm離れたところで２石に沿うように掘方を検出した。SD006 南壁では、掘方断面が確認でき、幅 65×深さ 20（cm）のやや浅い掘り込みである。また、切石の下に厚さ 10 cm程の凝灰岩が据えられ、上面の標高は 42.46m である。切石の東側（二ノ門側）では、掘方上部に SX030（二ノ門路盤）による整地が石の上面よりやや下のところまで確認できるが、西側（枡形側）では見られない。

検出された抜取痕は、東西 43×南北 200×深さ 20（cm）の溝状を呈する。抜取痕底面では、凝灰岩や戸室石製の厚さ 10 cm弱の板石が３石検出される。３石の上面の標高は 42.39～42.48m と若干の高低差がある。

SX025 断面の堆積状況から、切石を設置する方法として、浅く掘り込み、礫混じりの土でやや整地した後、凝灰岩の板石を敷き、その上に葛石を据える構造であることが判明した。整地を行う要因として、石材設置時の高さ調整、あるいは石材固定用とも考えられる。

葛石設置後の整地に関して、西側では掘方上面で確認できず、近現代による削平の影響が考えられる。切石の西面（枡形側）の加工において、底部付近が中央～上部と比較して、粗い加工でやや突出している。これは、この部分が地中に埋もれ露出しないことから、丁寧な加工がされなかったためと思われる。この突出した部分が枡形内の路面の標高と関連するならば、切石を挟んで二ノ門内の路盤と枡形内の路盤の高さには高低差があり、枡形側の方が低かったと考えられる。

抜取痕底面の板石は、SX025 断面から、切石を設置するための敷石であったと推測する。それぞれの敷石は材質と大きさが異なることから、転用材の可能性が指摘できる。

時期　宝暦の大火後の改修に伴い構築され、河北門の最終段階まで機能したものと考えられる。

二ノ門の西側に南北を軸に設置され、絵図とも合致することから、二ノ門の縁石（葛石）で、門内の路盤と枡形内の路盤との境として機能した。

SX025（葛石）　検出状況（S=1/200）

第 24 図　SX025（葛石）1

SX025　検出状況　西から

SX025　断面（3-3-12 T010 南壁）

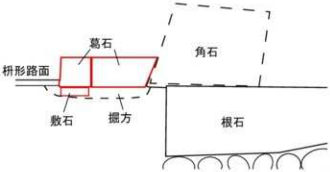
SX025　断面

SX025 断面　（3-3-12 T010 南壁）

SX025 南端　接合部分の加工状況　北から

敷石検出状況　東から

SX025 と南側石垣台北西角部分　南から



SX025 の加工状況及び石垣台との接合模式図

第 25 図　SX025（葛石）2

P005（礎石）、P001～004・P006～009（根固）［第26図、資：第15～17・95～98図］

概要　Ｊ３～６、Ｋ３～６グリッドに位置する。二ノ門渡櫓を支える柱は絵図によると８本あったことが分かるが、今回の調査では礎石１基、根固６基を確認し、唯一北西脇柱部分については撹乱により痕跡を確認できなかった。切り合い関係をもつ根固も２基検出した。いずれの遺構も平面と撹乱壁面の精査により調査を行った。P003・004、P008・009については、平成12年度調査において検出されており、新旧関係のある二ノ門礎石根固と推測されていた。平成12年度の調査後、遺構保護のため砂で埋め戻されていた遺構を今回再検出し、他の柱跡との位置や路面との関係から二ノ門礎石根固であることを確認した。

規模・構造　二ノ門の柱基礎の遺構は ID324（北側石垣台）と ID321（南側石垣台）に沿うように、北側で２基、南側で３基、桝形からの入口部分にあたる場所で２基検出した。石垣台に沿って建てられる柱は側柱と大柱、桝形からの入口部は鏡柱と呼ばれる。南側石垣台側の側柱で礎石を、礎石基礎を支える栗石詰めの土坑：根固を検出した。それぞれの心心距離で柱間隔は東西で3.4～3.5m、側柱と鏡柱は約３m、鏡柱間は二ノ門への入口となるため広く約５mを測る。根固の栗石は掘方内で壁面に沿って、斜めや立ったような状態で詰められている様子がみられた。柱や礎石を撤去後に一気に埋め戻された栗石はそのような状況はみられず、撹乱を受けていない栗石は、比較的丁寧に掘方内にきちんと詰まった状態になるように入れられていたと推測できる。また、掘方壁面に食い込むように栗石がみられるのは、上からの柱や礎石の加圧によるものと想定でき、これもまた撹乱を受けていない部分の可能性がある。

P001とP002はSX030（二ノ門路盤）よりも約50cm低い場所で検出されるが、SD003（暗渠）以北については約42mのレベルまで大規模に削平を受けている。P003・004、P008・009は平成12年度に側溝設置のため発掘調査が行われ、工事の際に遺構面は砂で保護されていた。幅約７mのトレンチが調査区東端から西方向に走っており、約42.20mの高さまで掘削されている。

P005（礎石）　Ｊ５・６グリッドに位置し、二ノ門北側柱列の西端にある側柱で、礎石を確認した。礎石は青戸室石製で、東西66×南北92（cm）を測る長方形の切石で、天端レベルは42.72mである。地表面より上は平滑に仕上げられており、北辺には18cmの造り出しの突起があり、その横には赤戸室石製の幅38cm、長さは約50cmの板材が長軸を南北方向にして置かれる。門の框が乗るものと想定される。南辺の中央部には切欠きがあり、添柱を固定するためのホゾ穴と考えられる。上面には門柱の周囲を巻いていた根巻金具痕跡とみられる錆が付着しており、その金具痕跡は東西約45cm（１尺５寸）×南北約66cm（２尺２寸）を測る。金具痕跡から推定される柱の太さは東西約39cm（１尺３寸）×南北約54cm（１尺８寸）である。礎石の全体規模は掘り下げていないため未確認であるが、地表面には出ない部分の加工は粗くなっていく傾向がみられ、地中部分は未加工もしくは割加工のままである可能性が高い。

P001（根固）　Ｋ３・４グリッドに位置し、二ノ門北側柱列の東端にある大柱の基礎根固である。東西130×南北124（cm）の範囲で根固栗石を確認した。栗石範囲は隅丸方形で、礎石天端（42.72m）より約-80cmの高さで遺存する。上部は近代以降の撹乱で大部分を削平されており、検出したレベル（42.06m）で黒ボク層を掘り込んでいた。大小の栗石が地山由来の粘性のある埋土中に埋め込まれたように入る。これは最も底面付近の栗石が上からの重さで沈下したものと考えられる。すぐ南にSD003があり、その石組を固定する黄褐色粘土によって切り込まれており、門を構築する際の工程差を示すか、もしくは暗渠の改修によるものと想定できる。

P002（根固）　Ｊ３グリッドに位置し、二ノ門北側柱列の中央にある大柱基礎の根固である。東西102×82（cm）、礎石天端より約-60cmで検出した。P001よりも高いレベル（42.11m）で検出されたにもかかわらず、遺存状況は良くない。周辺では黒ボク層が見えているが、根固周辺にわずかに整地土が

みられる。

P003・P008（根固）　Ｋ５・６グリッドに位置し、二ノ門南側柱列の東端にある大柱基礎の根固である。東西 150×120（cm）、礎石天端より約-65 cmで検出した。北側の一部は SX030 を掘り込む抜取痕跡を検出した。北側柱列の２基に比べて遺存状況は良く、栗石が根固内に大量に詰められている状況が確認できる。3210N（南側石垣台北面）の前込めの栗石を切込んで根固の栗石が置かれている。3210N の北西角石周辺は、創建以降未改修と考えられる箇所で、P003 は河北門廃絶期までの礎石根固と想定される点からも、矛盾しないといえよう。すぐ西で P008 と重複して検出しており、P008→P003 という前後関係になる。いずれも二ノ門の柱根固と考えられる。

P004・P009（根固）　Ｊ５グリッドに位置し、二ノ門北側柱列の中央に位置する大柱である。東西 130×南北 150（cm）、礎石天端から約-65 cmで検出した。平面では、1/2 が上部を撹乱によって削平されていたが、残り 1/2 は SX030 を掘り込む抜取痕跡を検出した。抜取痕跡は本来あった礎石を抜いて、その抜取穴に路盤や整地土、栗石を埋戻している。栗石のほぼ中央に礎石があったようで、いずれの根固めも撹乱部分を除去すると、中央部分が窪んだようになる。P004 もすぐ西で P009 と重複して検出しており、撹乱掘方壁で P009→P004 という新旧関係であることを確認した。P009 は P004 に比べて根固の栗石がまばらになっており、断面で見える根固内の埋戻し土も栗石より土が多く入る。P004 は抜取痕跡が SX030 を切っており、P009 は P004 に切られ、SX030 にパックされている状況が明瞭に確認できた。

P006（根固）　Ｊ５グリッドに位置する二ノ門南側の鏡柱である。路盤面から抜取痕跡を検出することができた。東西 210×南北 216（cm）を測り、撹乱部分を除去した深さは礎石天端から-82 cmである。礎石抜取後に埋め戻された撹乱部分は路盤や周辺の整地土、栗石で充填されていた。他の根固より高いレベル（42.61m）で検出したためと、鏡柱の根固のためか、撹乱部分の検出ではあるが、規模は最も大きい。また、栗石が集中する北側では明治以降の軍隊建物礎石掘方とその根固栗石を重複して確認したが、P003 と P008 のように近世段階で新旧関係のある根固の個々のプランは確認できなかった。

P007（根固）　Ｊ４グリッドに位置する二ノ門北側の鏡柱である。大部分は近代以降の深い撹乱によって破壊され、わずかに遺存する箇所も上部を削平されている。遺存部分東西 50×南北 170（cm）を測り、撹乱壁で確認した底面レベルは 41.74mである。その他の根固は断ち割り等を入れていないため底面のレベルを確認できておらず、唯一底面レベルを計測した数値である。ただしこの数値は掘方の中央部分から少し外れるため、中心部分はもう少し深くなることが予想される。根固の掘方は緩い傾斜のすり鉢状に掘り込まれている。壁面は栗石がほぼぴったりとくっついているが、底面は一旦掘削した後、平らに整地するため土を入れてから栗石が詰められているようにみえる。

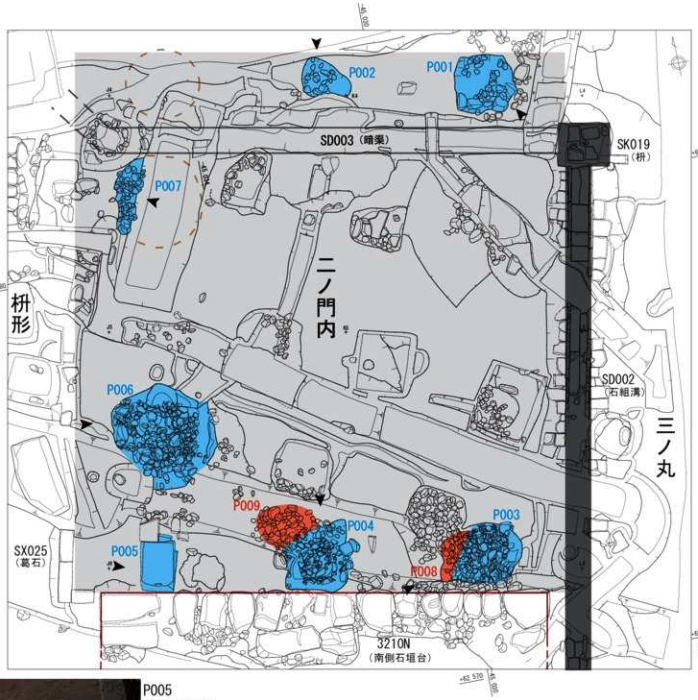
時期　P001～P007 については、P004 で確認したように、SX030 を壊して抜取痕がみられることから、宝暦大火後に再建され、明治期に破却された河北門二ノ門の柱礎石または礎石根固と考えられる。P003、P004 とそれぞれ切り合いがみられた P008、P009 については、宝暦大火以前の礎石根固と考えられる。

二ノ門内部の状況

P007
東西 (50 cm)
南北 170 cm
深さ 57 cm
底面標高 41.74m
(礎石天端から -98 cm)

P006
東西 210 cm
南北 216 cm
深さ 83 cm

P005
東西 66 cm
南北 92 cm
上面標高 42.72m
柱金具痕跡
東西 45cm
南北 66cm



P002
東西 102 cm
南北 124 cm
深さ 61 cm

P001
東西 130 cm
南北 124 cm
深さ 83 cm

P005
添柱の枘穴
東西 15cm
南北 (6) cm

P005
造出しの突起部分

P004
東西 130 cm
南北 150 cm
深さ 67 cm

P003
東西 150 cm
南北 120 cm
深さ 66 cm

0 S=1/80 5m

第 26 図　P001 ～ P009（礎石・根固）

ID324（北側石垣）［第 27～29 図、資：第 17～19・99・100 図］

概要　調査区の北東側、ＪＫ２・３グリッドに位置する。石垣西面は 3241（一ノ門東側頬当石垣）と接し、北西角部は 3440W（河北坂東側の石垣）と連続する切石積の石垣である。金沢大学期には、保健管理センターの建物が建てられており、その基礎により二ノ門の他の箇所よりも平均的に深い撹乱を受け、石垣も大部分が壊されていた。遺存していた箇所は現存する 3241 や 3440W とほぼ一体となっている 3240W（北側石垣台西面）のみであった。

規模・構造　北西角部と、南西角脇石が確認できたことと、二ノ門の門礎の位置や、南側石垣台の規模を手がかりとして、北側石垣台の規模を推定すると、東西約 14m、南北約 11m となる。絵図を見ると、南側石垣台よりも南北長は大きく描かれている（第３図８・９）。

3240W については、根石の一部と、3241（頬当石垣側面）に面が接する部分については２段分を確認した。根石部分については完全に地中に隠れてしまうような根石ではなく、面の約半分から 1/3 ほどが地表面に出る。石材の面にみられる加工痕は、地上部分の調整を丁寧に行い、地下部分については簡略したため瘤状の取り残しがみられる。加工痕の粗密が変化する高さはほぼ標高 42.10m となることから、当時の石垣前面にあたる柝形の標高も 42.10m 前後であったことが窺える。

石垣掘方は西面で平面的な範囲の検出と、SX210 北壁で断面観察を行った。掘方は幅約 250cm、検出面からの深さは約 40cm を測る。掘方内埋土は茶褐色の粘質土に小礫が含まれ、前面と石尻付近には栗石がまばらに入る。掘方には別の石垣掘方等の切り合いは認められなかった。

個別の石材をみると（第 27 図）、南西隅脇の石材（**9**）は、粗加工石を使用しており、寛文期頃の石材と比定できる。石材の面部分には被熱により溶けた鉛滴が多数付着しているが、現状の根石としてではこの痕跡が付くことは考えにくく、宝暦の大火以前には築石であったものを転用したとみられる（第 28 図⑥）。

柝形に面する１段目の石材についても、粗加工石を利用しているが、一石だけ、小型の切石材が使用される（**7**）。横長におかれた石材（**5**）については、控えが短いために、築石背面に大きな押石が置かれる。南西角脇石と４石目にも背後に押石がみられる。**2・3** は、粗加工石と割石材だが、それぞれ右側面はノミで平滑に仕上げられており、切石材を置くための再加工とみられる。

3241 に面が接する石材（**1・2**）については、割石材の上面が連続した平坦面になるようノミ加工されているが、この上に角石を載せるためと考えられ、その範囲から角石の長軸方向が推定でき、復元に際して角石の算木積みの参考となった。石材の面部分は河北坂の東面石垣からの延長で割面のまま、側面も割面または自然面であり、切石積石垣に改修の際にも解体されずにその場で部分的に再加工したとみられる。また、北側石垣西辺の裏面盛土については、盛土層（a～ｄ層）と、盛土層に覆われる遺構群（ｅ・ｆ層）に大別される（第 28 図）。また盛土層より上の栗石層中に東西方向の配管の掘込みがみられる。各層の特徴及び性格は以下のとおりである。

ａ層：築石 **4** 背後で急激に南側へと落ち込んでおり、3240W の部分改修掘方と想定している。

ｂ層：サブトレンチ（3-3-21）の観察では、3240W の裏込め栗石と互層状に堆積する状況が確認できる。ｃ層を掘込む 3240W の掘方で、北西角石から西へ３石分は据え直しが行われていないと考えているので、創建当初の石垣掘方であると考えられる。

ｃ層：ｂ層に掘り込まれており、少なくとも石垣掘方掘削以前の土と考えられる。掘り込みの落ち方がａ・ｂ層同様南側へと落ちていくことから石垣構築に関連する土と考え、施工の段階差と解釈できる。後述するｄ層が南から北へ向かって高まりをもっていた可能性も考えられることから、石垣構築前に水平に面を造作した盛土層と考えられる。埋土は地山小ブロックや炭化物を含む黒褐色系土である。層中には珠洲焼甕や越前焼といった中世に遡る遺物の大振りな個体が混ざり込んでいる。

ｄ層：地山由来の黄褐色礫混じり土が壁面の北側に偏在する。盛土内はほぼ水平に堆積する。ｃ層が

掘り込む様にも見えるが、北側への高まりが緩やかなため、元々水平面ではなく高まりを埋めている可能性もある。

e・f層：削平による地均しが行われたと考えられる、標高 41.90mで上面が切られることから、Ⅰ期の遺構とみられる。

e層は断面がU字状に立ち上がり、平面の一部しか検出できなかったが、角丸長方形を呈すると推測する。一気に埋め戻され、上部は粘質土によって蓋をするように埋められる。f層はe層に先行し、断面形態は検出面からは緩く落ち、下部は、大きくオーバーハングした掘り込みをなす。いわゆるフラスコ状もしくは袋状の断面形をなす土坑である。平面は一部しか検出できなかったが、不整円形を呈する。これも一気に埋め戻されており、緩い落ちを示す上部については、e層同様粘質土によって蓋をするように埋められる。遺構の性格を示す遺物は出土していない。遺構の形態から推察すると、貯蔵穴が考えられるが、平面形が不整形なこと、掘り下げを行った北壁は袋状を呈するが、東側はほぼ直線的に立ち上がる点が異質に感じる。袋状となるレベルの土坑外周の土は、礫の入らない地山粘質土層があることから、粘土採掘坑の可能性もあるが、その場合は粘土部分を採掘するために掘り進みが少ない点と、粘土採掘坑の場合大型もしくは複数が検出されるが、単独の立地では断定しづらい。

上述した削平による地均しは、標高 41.90～41.80mの高さで行われたことが確認でき、二ノ門周辺で見られたⅠ期→Ⅱ期への削平面と同様であると考えられる。調査区全体で削平面と考えているのは 42.10mのレベルであったが、SX210 南壁では、ほぼ水平の黒ボク土の直上に版築状盛土層がみられ、これが約 41.90mのレベルであった。北側石垣台の黒ボク土の高さはこれとほぼ同じとなり、北側になると削平面レベルが 20cm 程低くなっていることが判明した。また調査区西側では、約 42.50mと高くなることも確認した。

黒ボク土については、これを切り込む遺構がほとんどない。これは、ニラミ櫓下層で見られた、Ⅰ期の土塁がこの周辺にもあったためではないかと想定すると、周辺の下層遺構が極端に希薄になる状況とも合致する。ただし、土塁残欠とみられる遺構は確認できなかった。

時期　遺存する 3240W と接する一ノ門頬当石垣との切り合い関係から、頬当石垣に先行することがわかる。頬当石垣は、宝暦の大火後に積み直しが行われているが、これだけでは施工の段階差の可能性も考えられるが、北側では 3440W と一体に施工されている状況がみられる。また背面の栗石部分の掘方についても1時期のみが確認されたことから、3240W 北側については、慶長期の姿を留めていると考えられる。ただし、天端石については明治以降に置かれたものである。

改修については、上述のとおり北西角脇の根石についての所見から宝暦の大火後の改修があったことを確認した。掘方断面の観察からは別時期の掘方を確認することはできなかったが、同じ根石列にも粗加工石が使用されており、これらの石材で築かれた石垣台の時期があったものと推測する。

以上のことから 3240W については、慶長期創建され、寛文期と宝暦大火後の2時期の改修が行われたと考えられる。

その他　324の内部で、復元工事の石垣基礎杭を打設する箇所についてトレンチを設定し（T001・T002）、2ヶ所について調査を行った（第29図）。

T001　3240W 背後の盛土層にあたり、c層の直下で土坑を検出した。c層と土坑の境目は約 41.9mの削平面である。f層とした土坑は T001 内では東西 110×南北 100（cm）を測るが遺構全体規模の確認は出来なかった。掘方立ち上がりの東側は垂直に、北側はオーバーハングする。底面は平坦である。埋土は地山黒ボク土由来の黒褐色土に小礫が混じる。42.80m付近のレベルで黄褐色粘土層が薄く水平に土坑を覆うように広がる。削平面直下にあたり、本来の当該層も削平されている可能性がある。

T002　3240W の9背後にあたり、Ⅰ～Ⅲ期の遺構を確認した。Ⅲ期は 3240W 改修掘方、Ⅱ期は礫が充填された硬化面、Ⅰ期は土坑状の遺構を確認した。礫はトレンチ内を覆うように東西 134×南北 150

（cm）で広がっていた。削平面レベルとほぼ同じ高さで検出され、削平後に整地もしくは路盤として置かれたと推測する。縲層以下の、掘削面は削平により不明だが、T002 内でも４基の土坑を確認し、遺構の切り合いから少なくとも３段階の変遷があることが判明した。Ⅰ期の遺構は同様な状況が調査区内の他地点でも確認されるが、詳細については判然としない。

ID321（南側石垣台）［第 30～32 図、資：第 20～25・101～104 図］

概要　調査区ＪＫ６・７グリッドに位置する。地表面より上の石積みは、明治期に陸軍により破却・撤去されており、根石については、一部近代以降の地下埋設物の設置に伴い撤去されたが、角石４石を含む 35 石が遺存していた。これより ID321 の平面規模が判明した。石垣台を南北に大きく分断するように入る SD214（下水道掘方）と SD203～205（鉄管掘方）、東西に分断する SD211（土管掘方）といった地下埋設物があり、これらの掘方壁面や一部サブトレンチを入れて断面観察と、上面の掘方ライン及び残存石材・栗石等の観察を行い、創建や改修についても知見を得た。

規模・構造　根石部分で平面の規模は東西 14m、南北 9.7m を測る（第 30 図）。

使用石材は戸室石が中心となり、緑色凝灰岩や流紋岩系の亜角礫もみられる。戸室石は一部ノミ加工によって上面を平滑に加工しており、緑色凝灰岩や流紋岩系の石材は自然石のままで使用される。戸室石は北西隅角部（**35・36**　第 30 図　以下も石材番号は同図を参照）から北面のほぼ中央部分（**8**）までと、南東隅角部（**20**）から（**23**）まで、北東隅角部（**14**）で使用されているが、南西角石（**31**）だけが緑色凝灰岩の自然礫である。

北面中央付近から西側（**1～8**、**35・36**）は石材天端レベルが 42.52～42.59m であるが、他の根石列（**9～33**）の天端レベルは 42.25m 前後と約 25cm もの比高差がみられ、この範囲に対応するように戸室石の割石材が集中している。戸室石の割石材直下の根石は未確認だが、石垣の根石と１段目が遺存する可能性がある。築石は切石材を一部含むがほぼ割石材で、上面に切石を載せるため合端加工されるものもある（第 30 図、資：第 103・104 図）。河北門の石垣台は古写真から切石積であったことが判明していたが、遺構からもその点を確認できた。

裏込めには栗石と戸室石剥片が含まれ、切石材背後の押石周辺から北西角脇石背面の範囲の掘方内にみられる。一方 SD214 掘方南壁で観察した 3210W 背面の裏込めには戸室石剥片は含まれず栗石のみが使用される。

SD214 の南壁の断面観察では、根石は自然石で１段目の築石は割石材を使用しており、慶長期の石垣の特徴を持つ（金沢城石垣編年２期）。１段目の築石は地表面に顔を出していたと推測できるが、切石化された際にもこの付近は、長屋台石垣や土塀裏盛土などで、外からは見えない部分であったことから、構造上の問題が無ければ手を付けずに使用された可能性がある。

一方の SD214 北壁の断面観察では、北西角脇石前面で、戸室石剥片を大量に含む層が枡形整地土層を掘り込んでいるのを確認した（第 31 図）。整地土には石垣前面の掘方がみえないことから現存の北西角脇石設置と同時施工したものと考えられる。剥片層は溶けた鉛が付着した剥片を含むため、宝暦の大火後に石垣修理で石材を加工した際にでた剥片の廃棄坑と考えられる。角脇石背後では、石尻方向に掘り込む掘方に新旧がみられ、平面での改修範囲のラインや SD214 掘方南壁との対応から、幅が広く緩やかな掘方が創建時、狭い掘方が改修時と推測した。この改修とは、石垣が切石化された際と宝暦の大火後の２つが想定できるが、北西角脇石前面の土層の状況からは、宝暦の大火以前の改修時のものの可能性が高い。

北西部角石は、直方体に近い角石であるが、石尻が窄まっていく形状であることから慶長後期頃の特徴をもつ角石とみられる。角石・角脇石の背面は全面ノミ加工されており、特に上段の角石が乗る箇所については、細かくノミで調整されている。

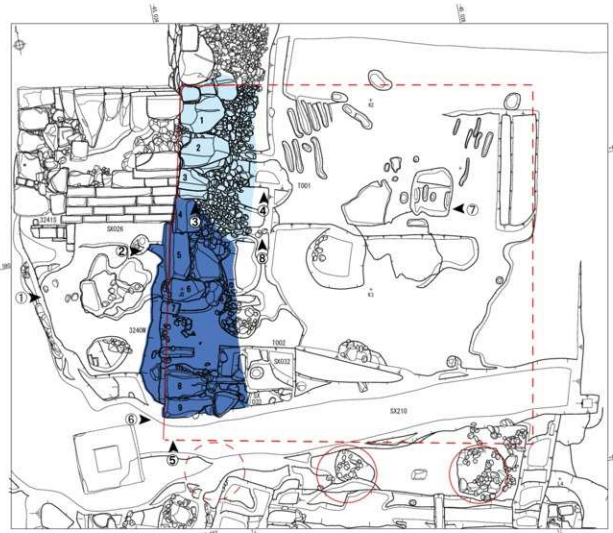
南東隅角部周辺については、平面で２時期、サブトレンチなどから、３時期の石垣掘方が確認された。創建時と想定した掘方ａは根石前面に対して幅広く、急角度で掘り込み、埋土は灰白色粘質土を含む黒褐色土がみられる（3-3-32・33　４層）。

創建期の掘方を切る掘方ｂは、創建期の掘方と比べ根石前面に対して緩やかな角度で掘り込み、根石下まで掘込まれる（改修１）。埋土は暗褐色土と黄褐色土が互層となって入る（3-3-34　６・８層、3-3-35　８～10 層）。改修２とみられる掘方ｃは、掘方内埋土中に溶けた鉛粒が含まれる。掘り込みの角度からも、鉛を含む層は根石の下に入り込まず、根石自体はそれ以前の掘方埋土内にあることから改修２は根石を含まない第１段目以上から行われたと推測できる。従って、平面で検出された２時期の石垣掘方は創建期と改修１の掘方で、検出面のほとんどが近代以降の撹乱底面であった。一方で改修２掘方は浅く掘り込まれているため、すでに検出可能なレベルは削平されているものと考えられる。

時期　二ノ門石垣については慶長期に創建され、その後少なくとも２度の改修があったことが判明した。宝暦の大火後には根石の据え直しをせずに改修が行われたが、その前段階の改修でも、根石を全面的に据えなおしたのではなく、部分的に材ごと取り替えた可能性が高い。宝暦の大火後の改修で明治期の古写真にみられるような切石積の石垣となったのではなく、北西隅角部周辺や南東角石の根石の観察所見及び北側石垣部台での調査所見も踏まえると、寛文期以降に改修され、切石積となっていたものと推測する。

出土遺物　3210S 掘方から 16 世紀後半の青花皿、3210W 掘方から青磁皿や越前焼擂鉢が出土した。いずれも石垣の築造年代を示すものではないが、15 世紀代の龍泉窯の青磁製品については他地点からも出土しており、中世段階の遺構の存在をうかがわせる資料といえよう。

その他　ID321 の内部で、復元工事の石垣基礎杭を打設する箇所について調査を行った（T004）。調査箇所は 3210W 背後で 1.8m四方のトレンチを設定し、調査を行った。トレンチ内では、まず上層で 3210W 裏込めを確認したが、平面プランはトレンチ内にはおさまらない。3210W 掘方の下層には石垣築造以前の遺構覆土がみられたが、時期の特定には至っていない。標高 41.60m付近で底面となり、地山が現れる。凹凸の少ない平坦な底面形状で、南側に向かって緩く立ち上がっていく状況が確認できた。覆土は褐灰色土を主体とし、底面レベルや形状などから、SD214 南壁で 3210W 掘方下にみられた遺構（第 95～101 層　3-3-27）と同一である可能性が高い。



※平面図中の▲と番号はそれぞれ写真の撮影方向と番号と一致する

① 3240W（北側石垣台西面）
石垣列の背後（ハッチ部分）は建物基礎によって既に石垣が撤去されていた部分。

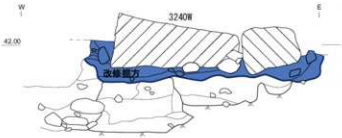
② 点線部より下は本来地中部分

③ 割石材の側面及び上面に
合端加工を行い切石材を積む

第27図　ID321・ID324(南・北石垣台) 1

3-3-21　3240W-T001 北壁　断面図（1/40）

④　3240W（北側石垣台西面）の背後の掘方
石垣掘方は盛土層を掘込む。掘方内は栗石と土が鋸歯状に堆積



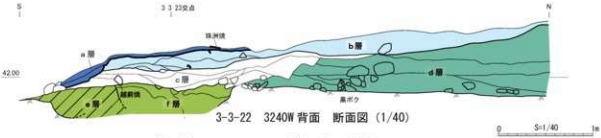
3-3-17　3240W 角脇　東西断面図（1/40）

⑤　北側石垣台南西角脇石
寛文期頃と考えられる粗加工石を使用

⑥　面に鉛滴が付着する根石
現状は根石
宝暦の大火の時点は築石として利用

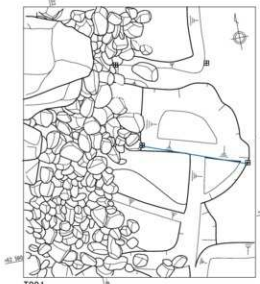
⑧　背面の珠洲焼出土状況

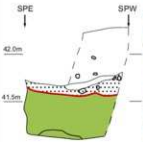
⑦　3240W（北側石垣西面）背面



3-3-22　3240W 背面　断面図（1/40）

第28図　ID321・ID324(南・北石垣台) 2

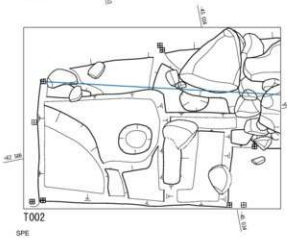




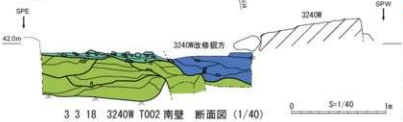
3 3 23　324 T001
南壁　断面図(1/40)

土坑と上部の整地土層間の粘質土（ドット部分）

土坑壁面の立ち上がり



Ⅱ期　礫を敷き並べた溝状の硬化面（南北方向）



3 3 18　3240W T002 南壁　断面図 (1/40)

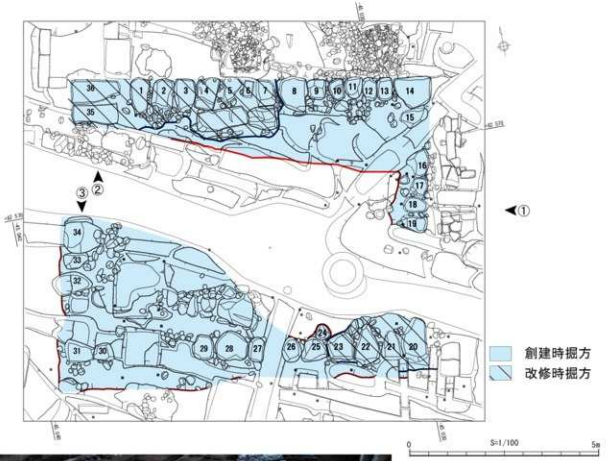
土坑Ⅰ（色塗り部分）完掘状況
（点線は別遺構覆土）

T002南壁
標高41.9mの削平面レベル以下のⅠ期は、
多数の遺構が切り合うことが判明

ピット半截状況

T002完掘状況

第29図　ID321・ID324(南・北石垣台) 3

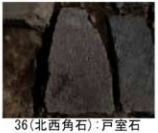


戸室石（加工材）
1～8、14、20～23、35、36

戸室石（自然石）
11、13、15、16、19、28～30、34

その他（自然石）
9、10、12、17、18、25～27、31～33

① ID321（南側石垣台）全景　東から



36(北西角石)：戸室石
上面に細かいノミ痕あり
石尻がすぼまる

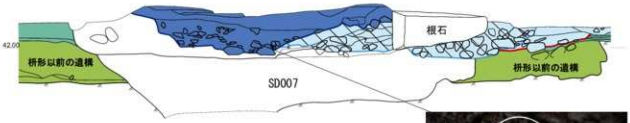
14(北東角石)：戸室石
面と上面に粗くノミ痕あり

20(南東角石)：戸室石
上面に粗くノミ痕あり

31(南西角石)：緑色凝灰岩
未加工の自然石

第30図　ID321・ID324(南・北石垣台) 4

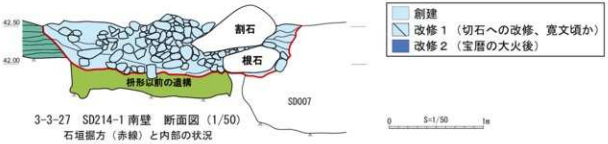
② 3210W（南側石垣台西面）



3-3-25　SD214-1 北壁　断面図（1/50）　0　S=1/50　1m

鉛が付着した戸室石剥片

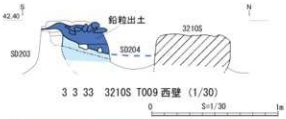
③ 創建時石垣掘方



3-3-27　SD214-1 南壁　断面図（1/50）
石垣掘方（赤線）と内部の状況

第31図　ID321・ID324(南・北石垣台) 5

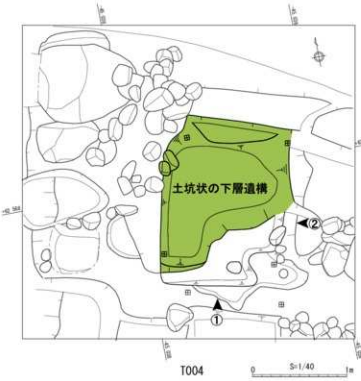
3210S前面掘方（創建時と改修１の掘方ライン）



3 3 33　3210S T009 西壁（1/30）

3210W根石抜取痕（32～33の間）
根石の形状の痕跡をとどめている。

3210S掘方　a：急角度で深く掘込む
b：緩やかに深く掘込む
c：緩やかに浅く掘込む（根石を含まない）



※平面図中の▲と番号はそれぞれ写真の撮影方向と番号と一致する

①　T004攪乱土を除去した状態
南側石垣台の裏込め栗石が周辺に広がる。

②　T004西壁
上部の栗石の下に下層遺構の堆積土がみられる。

第32図　ID321・ID324(南・北石垣台) 6

SD002（二ノ門石組溝）［第 33-34 図、資：第 13・25～28・105～107 図］

概要　Ｊ７・ＫＬ４～６グリッドに位置する。調査区の東～東南端、ID 321（南側石垣台）の南側で確認した。河北門廃絶時に溝の上部構造がほぼ壊され、近代以降の配管や建物基礎により寸断されている箇所もあったが、全体としては石組溝の規模や構造を知る上で貴重な情報を得ることができた。本遺構は、三ノ丸から二ノ門内への雨水等の流入を防ぐ役割を持っていたと考えられる。

規模・構造　南西端から枡まで断面図とエレベーションを計 11 ヵ所で作成している。SD002 の底板上面や縁石上等の標高は、以下の通りである。

第７表　SD002石材上面標高

図面掲載番号（第33図参照）	図面題名	標高	計測位置
3-3-41	SD002　断面図①	42.14m	底板上
3-3-42	SD002　東西エレベ①	42.10m	底板上
3-1-06	SD209・SX210　南壁	42.08m	底板上
3-3-43	SD002　東西エレベ②	42.17m	底板上
3-3-44	SD002　断面図②	42.25m	底板上
3-3-45	SD002　断面図③	42.30m	底板上
3-3-46	SD002　エレベ③	42.40m	底板上
3-3-47	SD002　東西エレベ④	42.44m	底板上
3-3-42	SD002　東西エレベ①	42.19m	縁石上
3-1-07	IJK7・8　南壁　断面図	42.60m	縁石上

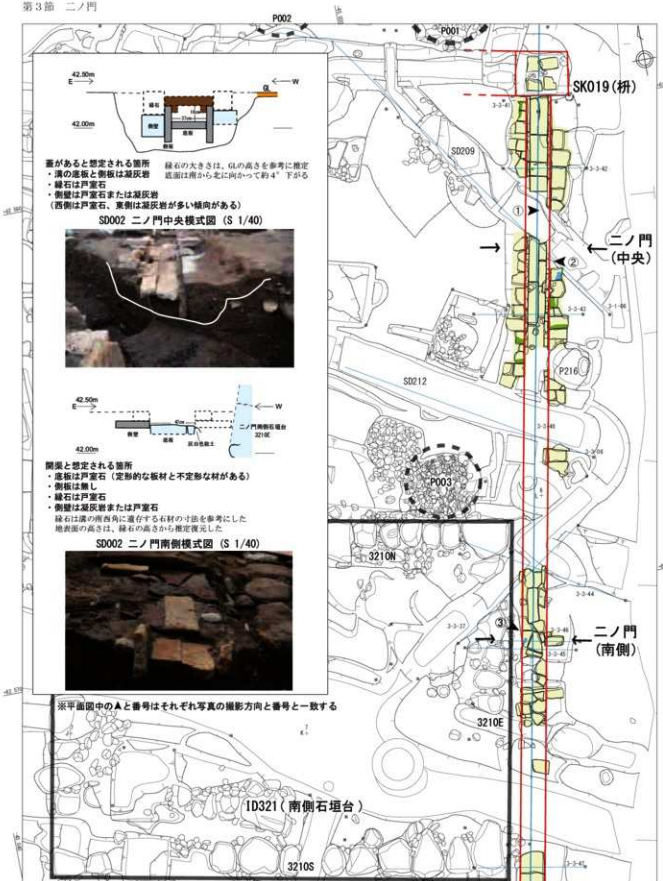
水の流れは底板や戸室石縁石上面の標高から、ID321 南西端から南東端を経由し北に向かい SK019（枡）に到達していたものと考える。3-3-42 と 3-1-06 の底板標高は、他の地点に比較し低い。２地点の底板下の土層に撹乱された様子はなく標高が低い原因は不明であるが、近代に同地点周辺が平均的に沈下している可能性もある。全体的には南から北へと底板上の標高は下がっているものと判断している。

遺構の規模は SK019 から底板部分の幅を南側に推定で延長した残存値で南北約 17.75m である。ID321 南側の東西の規模は、残存する南東端付近底石と西端縁石１石から 10.20m 程度であったと推定する。構造や部材等は地点により異なるため、以下二ノ門（中央）・二ノ門（南側）・ID321 南側の３地点に分けて記述する。３地点の模式図中(3-1-06・3-1-07・3-3-41 から作成)、同一断面以外の石材の規模を参考にしている場合は破線で表現している（第 33 図）。

二ノ門（中央）　撹乱壁面を利用して土層の観察をした。流路部分は３枚の凝灰岩をＨ字型に組み、側板と底板としている。両板ともに流路面は平滑で、外側の加工は粗く工具痕が目立っている（第 34 図①）。SD209 から南は短軸方向に底板を２枚使用している箇所もある。側板の規格は全てが同じではないが、長軸 83～84 ㎝のものを３枚確認している。側板短軸は地中に入り長さは一部しか把握できていないが、確認したものは何れも 37～38 ㎝であり、底板の内法幅と共通する。厚さは側板、底板ともに７㎝であり、もとは約長軸 84×短軸 38×厚さ７（㎝）の規格品であった可能性が高い。

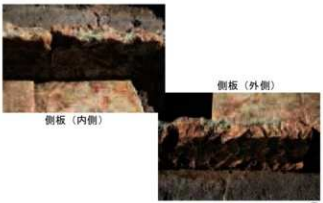
側板は SD209 壁面では、底板下に 20 ㎝程度地中に入り、短軸約 38 ㎝であるが、少し南から規格が異なり、P216 から南では底板上面から下に約４㎝しか埋まっておらず、短軸も約 15 ㎝となる。側板の短軸がより短くなり、深度が浅くなる構造は二ノ門（南側）へと続く。また、側板と底板の接続部や側板の外側、下部は、タイルの目地のようにきめの細かい灰白色粘土で埋められており、SK019（枡）付近から南端まで数か所で確認している。石材固定用の粘土と推定している。

側板両外側には、戸室石や凝灰岩の側壁が設置されている。西側側壁は大半が直方体の戸室石で、溝長軸に短辺を向けている。状態の良い側壁の規格は、長軸 48×短軸 26×厚さ 14.5(㎝)である。この側壁の上に遺構長軸に石の長辺を向けて、縁石が据えられたものと想定している。その縁石は、SD002 南西隅で検出したような規格の戸室石であった可能性が高い。西側に比較し東側側壁の石材には凝灰岩が多用され、大きさや設置される長軸方向等も様々である。大型のもので長軸 45×短軸 28×厚さ 14（㎝）で、薄いものは７㎝、南北軸は 27 ㎝が平均値である。また、検出時は西側側壁に比較し上面標高は低かったが、薄い２石の板石を積み重ねて使用していたとも想定できる。掘方は、SD209 壁面（3-1-06）では幅 140×深さ 58（㎝）、SD212 壁面（3-3-06）では、残存値幅 162×深さ 35（㎝）であ



第33図　SD002(石組溝)1

①



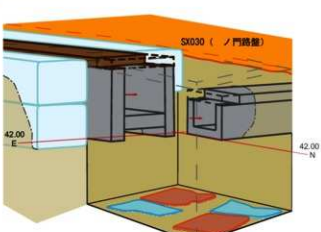
①

②

③

④

⑤



SD002・SK019・SD003 接続部 模式図

第 34 図 SD002（石組溝）2

る。側壁の上面の標高は、南から北に向かって底板上面標高と同様に下がっている。

二ノ門（南側）　ID321の南東隅から北東隅までの間は、SD002構築面が高くなるため遺存状況は悪かったが、底板を中心に以北とは大きく構造が異なることが判明している。3210Nから約100㎝南（3-3-44）では、底板・側板ともに凝灰岩であり、２枚合わせた底板内法幅も、底板と同程度しか埋まっていない側板がH字型に組まれている状況も以北と大きな変化は見られない。しかし、3210Nから140㎝以南の地点では、二ノ門（中央）で検出したような垂直方向に立ち底板下に埋まるような側板は確認していない。

東側で２石確認した側壁は、底板と同じ高さか若干上に置かれており、ともに凝灰岩であった。底板は不揃いの大きさの戸室石板石がタイルのように敷き詰められていた（第33・34図③）。底の幅は48㎝と広くなり二ノ門（中央）と比較すると側板の範囲にまで広がっている。底板上面には若干凹凸があり、少し隙間も確認できることも他の地点と異なる点である。この地点では、側板を置かず底板脇に側壁を設置していたと考えられる。石垣台に接していたと考えられる側壁は、側壁固定用の灰白色粘土が42.29mの高さで観察できたことから、底板上面（42.30m）より上に設置されていたものと判断できる。このように、三ノ丸へ抜ける通路の蓋が掛けられていたと思われる付近では、流路部分は凝灰岩の板石組みであったが、3210Eの脇を通るようになり大きく構造が変化している。おそらく開渠部分となり、人目に触れるためか、構造や石材が変わったものと推定する。

ID321南東隅付近には方形に加工された戸室石底板が２石南北に並んでいる（第33・34図④）。南側の石の規模は東西50×南北45×厚さ10（㎝）で北側もほぼ同規模である。この地点も二ノ門（中央）に比較し底板の幅が広い。南西隅で検出した縁石の位置から、この底板から南に１m以内の地点に、SD002が鉤型に曲がる角があったと推測する。底板上面まで撹乱されていたが、この地点でも固定用と思われる灰白色粘土を確認している。掘方内からは宝暦９年(1759)の大火時に溶けた鉛粒が出土している。また、底板抜取土からは、銅釘が集中して出土しており、塀や屋根に使用されていた釘が門廃絶時に落ちたものと思われる。

ID321南側　ID321の南西端から南東端までは近代以降の配管等により大幅に撹乱されていた。確認できた関連の遺構としては、南西端の南側縁石と縁石抜取痕である（第33・34図⑤）。縁石は戸室石で南西端の１石のみが残存していた。規模は長軸82×短軸22×厚さ13（㎝）のほぼ長方形で、縁石の北側は、酸化し赤化した砂が約10㎝堆積している。砂は近代の埋土と考えられるが、埋土下に掘方が確認できないことから縁石の掘方もほぼ同様の深さであったと思われる。南東角底板から南西隅縁石までの間は大幅に撹乱され、縁石も掘方も確認できなかった。

時期　遺構内埋土から明治初頃の陶磁器や瓦が出土することから、河北門廃絶時まで機能していたと考えられる。3-3-37では、ID321改修掘方を切り込むSD002掘方を確認している他、SK019（枡）の南側壁面ではSD002掘方下から、宝暦の大火で溶けた鉛粒を検出している。側壁の上面で被熱の痕跡や溶着した鉛も観察できた。側板上面やSX030（二ノ門路盤）上面の標高を考えると、鉛の確認された４ヵ所の側壁は、当時地表に表れていたとは考え難いことから大火後の改修時の転用材の使用が想定出来る。また、大火に伴いID321根石や１石上から改修している箇所に関しては作業工程上造り替えられていると考えられる。以上の点から、SD002は大火後には全面的に改修されている可能性が高い。当初の構築時期に関しては、門内の排水のために欠かすことのできない施設であることから、Ⅲ期枡形河北門創建時には構築されていたものと考える。

第３図-５「金沢城絵図」（延宝４年～元禄年間（1676～1703年））では、絵図では、地下溝（暗渠）を赤の１本線、地上の溝を赤の２本線で表現していると考えられる。赤線でID321南辺から東辺にかけてSD002が描かれている。第３図-９「御城中壱分基絵図」（文政13年（1830））、「御城分間御絵図」（嘉永３年（1850））によると、ID321の南・東面と二ノ門の通路部分の石組溝では、表現方法が異な

る。通路部分は一ノ門同様木製と思われる蓋が確認できるが、石垣台に接する部分は蓋のようなものは見られず開渠のようである。石垣台側にどのような側壁や縁石が据えられていたのかについては、読み取ることは難しい。

SK019（枡）［第 34・35 図、資：第 27～29・106・107 図］

ＫＬ４グリッドに位置する。南は SD002（石組溝）、西は SD003（石組暗渠）に接続する。SD002 を北流してきた水を枡で受け、土砂を沈殿させてから SD003 へ流していたと考えられる。調査は、遺構確認作業で掘方の範囲を検出し、遺構内部は河北門廃絶時の埋土除去を行った。

規模・構造　構造は掘方を掘削後、底面に土を入れ高さ調節し敷石を４石据え、方形の枡の部材を設置し周囲に土を充填したものと推定する。掘方は、ともに残存値で南北 130×東西 114（cm）である。部材の置かれた内法壁面は非常に硬く締まった状態で検出でき、撹乱土を容易に取り除くことができた。壁面はほぼ方形を呈し、ともに残存値南北 80×東西 72×深さ 75（cm）である。南北の壁面については、ほぼ構築時の状態が保たれていると思われる。内法壁面・底面を観察したが、木質物や木目は確認できなかったことから、石材が用いられていた可能性が高い。枡を抜き取った後の埋土には多くの戸室石破片等が入っていたが、底面に枡の空隙などから漏れる砂などの堆積が確認できなかったことから、枡の密閉性が高かったことが窺える。底面に置かれた敷石は、４石のほぼ方形の戸室石で石垣下胴木のような不等沈下防止の役割があったものと思われる。赤戸室と青戸室を対角線に置き、上面の標高は 41.67m～41.72m と若干のばらつきがあるが、この石の上に枡の部材が設置されていたと想定している。

時期　南側壁面で観察した SD002 掘方下から宝暦の大火の際に溶けた鉛粒を検出したことから、隣接する SK019 も大火後に改修されていると考えられる。掘方下からは、18 世紀代の磁器碗も出土している。また、埋土上層では、西接する SD003（石組暗渠）に使用されたと考えられる内面刳り貫き箱型の石材を確認した（S18・S25）。

SD003（石組暗渠）［第 35～37 図、資：第 15・29・30・106・107 図］

北側石垣台南面を東西方向に走り、ＪＫ４に位置する。SD002（石組溝）から SK019（枡）を通った排水は、本遺構を経て河北坂方向へ流れていたと考えられる。北側上端は、近代以降に大幅に撹乱を受け二ノ門路盤（SX030）から 50 cm弱削られ残存していない。SK201（撹乱２）、SK205（大型撹乱）が掘削された部分は南側上端も破壊されており、上部構造は不明な点が多い。

規模・構造　計８ヵ所で土層を観察している。掘方は SX030 直下まで立ち上がっている。規模は東西方向は残存値で 910 cm、掘方は 3-3-52 で幅 100×深さ 62（cm）、3-3-50 で幅 116×深さ 76（cm）である。用いられた部材であるが、二ノ門内では SK019 と本遺構を切り込む SK201 上部でのみ凝灰岩を箱型に刳り貫いた石材が出土していることから、凝灰岩刳り貫き箱型の石組暗渠を想定している。出土した石材は内法幅 15.5×内法高さ 15.5、外幅 24、底面厚さ 5.5（cm）である。蓋は出土していないが SD009（一ノ門石組溝）同様の凝灰岩板石を用いていたと考えられる。

掘方内は、若干酸化・還元が進み色調が異なるものの、ほぼ共通した計 14 層の土（以下〈暗渠１～14 層〉）で埋められている。中でも掘方長軸に沿うように、その南北で含有物の少ない明黄褐色粘土〈暗渠５層〉が検出されていることが特徴的である。構築順序としては掘方を掘削し底部から２～３層粘質土〈暗渠 11 層〉・砂質土〈暗渠８～10 層〉・粘質土と砂質土の混合土〈暗渠７層〉を敷く。次に明黄褐色粘土〈暗渠５層〉を薄く敷き、中央部に箱型溝を置き、石材を固定し、水漏れを防ぐと考えられる〈暗渠５層〉を南北に充填している。〈暗渠５層〉は厚いところで 14 cm以上になる。西端については、P205（近代礫石５）の東壁面で掘方と〈暗渠５層〉を確認している。同壁面では〈暗渠５層〉が材の下にも

敷かれていたことが観察できる。以北に関しては河北坂方向への延びていたものと考えられるが、P205西壁面のⅢ期以降の土層中では確認できない。よって、P205付近から北西側に屈曲している可能性が高いが、以北は撹乱されており詳細は不明である。

東端の3-3-53から西端3-3-14にかけて約９ｍで７cm標高が低くなっている。また、測量図では遺構の中央、明黄褐色粘土の切れたラインを撹乱として表現しているが、その直線的なラインは遺構のほぼ中央に位置することから、刳り貫き箱型石材が置かれていた形状を反映している可能性がある。SK019で土砂を浚渫するには、南接するSD002の底面標高42.15ｍより西接するSD003底面は上に置かれていたとも考えられる。しかし、SD002は蓋が付くものの、暗渠ではないので、枡の水がSD002へ逆流してしまうと地上へ流れ出る恐れもあり、また、SD003の部材を固定する明黄褐色粘土の残存レベルからも、SD003の底面の高さはSD002底面よりも低かった可能性が高い。

第８表　SD003掘方底面標高

図面掲載番号（第36図参照）	図面題名	標高
3-3-53	T019西壁　断面図	42.78m
3-3-51	T012西壁　断面図	41.77m
3-3-14	SK205西壁　断面図	41.71m

時期　土層観察の結果、各トレンチでほぼ共通する土層が確認できたことから、確認した遺構は同一時期に構築（あるいは改修）され、廃絶時期も同時と考えられる。掘方内3-3-53の６層〈暗渠７層〉からは溶けた鉛粒が出土していることから、宝暦の大火後に構築（改修）されたものと考えられる。当初の構築時期については、二ノ門の北側の柱筋に隣接して位置する等、二ノ門の他の遺構に規定され構築されていることから河北門枡形創建時と考えられる。

3-3-50・3-3-14の両壁面ではSD003より古い溝状遺構の掘方を確認している。掘方底面・側面にはきめ細かい灰色粘土が箱型に巡っている。同掘方は軸線がSD003とほぼ一致することから、宝暦の大火前のSD003に相当する可能性がある。

第３図-５「金沢城絵図」（延宝４年～元禄年間（1676～1704））を参照すると、SD002から接続するように北側石垣台の南辺に東西方向に水関連の赤いラインが描かれている。二ノ門内から一ノ門中央を通り河北坂へと続いている。城内に辰己用水が導水（1632年）された後の絵図であるが、辰巳用水が省略されていることから、図中二ノ門の赤線は辰己用水である可能性は低く、宝暦の大火前に暗渠施設が構築されていたと考えられる。

遺構の検出状況と絵図情報を合わせて考えると、検出されたSD003は宝暦の大火以前には構築されており、宝暦の大火後に改修され、河北門廃絶まで機能していたものと推測する。

SK019（枡）検出状況　北から

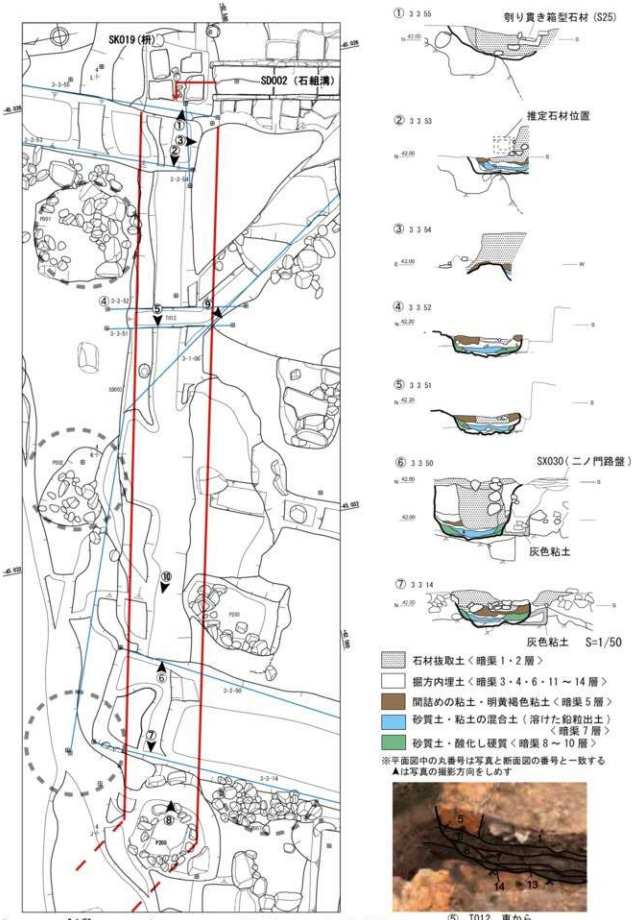
SK019 半截状況　東から

SK019 半截状況と SD003 使用石材　南から

SK019 底面の敷石（戸室石）　西から

SD002 と SD003 との接続状況　東から

第35図　SK019（枡）

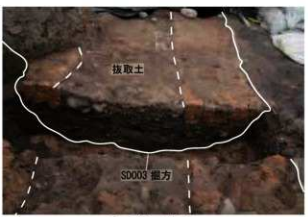


第36図　SD003（石組暗渠）１

① 西から

⑨ 北東から

⑥ 西から



⑤ T012 東から

⑦ 東から

⑩ 東から

⑧ SD003 屈折部推定線　西から

S18（200604 S01）

第37図　SD003（石組暗渠）2

第４節　枡形

概要

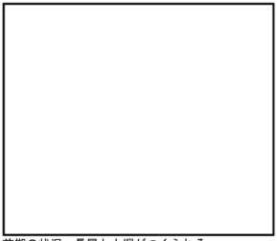
Ｃ５・Ｄ～Ｉ３～７グリッドに位置する。調査前には河北坂から三ノ丸広場へ入るための通路として利用されていた場所とその周辺部において、枡形の遺構を確認した。通路部分は地上部分の構造物はほとんどなかったが、地下部分に上下水道管などの地下埋設物が多く入り、そのため遺構が大きく破壊されている箇所もあった。地下埋設物は坂と同じ南北方向に掘削されるルートもあり、その掘方で枡形内部に大きくトレンチが入れられたような状況であったので、その壁面の精査を行ない、枡形等に関する様々な情報を得た。周辺部については、近代以降に削平された部分や、厚い盛土によって埋め戻されているといった状況がみられた。

確認した遺構として、枡形内では枡形最終段階と見られる路盤や石段の抜き取り痕跡を検出した。また、枡形を区画する土塀の基礎となる石垣根石列が遺存していた。コーナー部は撹乱により破壊されていたが、この石垣根石列の検出により枡形内部の規模が判明した。その下層では枡形門築造以前からの路面とみられる遺構を確認し、河北門の枡形とそれ以前の路面は、嵩上げを行いながら整備されてきており、河北門枡形が成立する以前から、現在に至るまで一貫して通路として利用されてきた変遷を辿ることができた。

その他には枡形周辺部の土塀裏盛土やその土留石垣の根石、近世後期以前の長屋台石垣、更にその縁辺部の井戸や柵列とみられるピット群などを確認した。

第38図　枡形全景

桝形全体図



前期の状況：長屋と土塀がつくられる。
「金沢城内絵図」万治２～延宝４年　（滋賀県安土城考古博物館蔵）

後期の状況：太い線で描かれた土塀と、その外側に盛土や土留石垣がある。
「御城中巻分基絵図」文政13年　（横山隆昭家蔵）

第39図　桝形　概要

SX034（枡形内路盤）［第 40 図、資：第 31～33・108～110 図］

枡形内路盤の面的な広がり及び枡形内における土層の堆積状況の観察を行った。SD214-2 より東側では、撹乱による影響を受けているが、西側では、比較的良好に残存している。

規模・構造　ＧＨ４・５グリッド付近で、礫まじりの撹乱土を除去した後、SX034（枡形内路盤）とみられる褐灰色砂質土層を面的に検出した。この砂質土層は、3230E（土塀石垣）東側と枡形内石段南側で確認でき、石段北側では残存していない。検出面の標高は、南側が 42.50m、北側が 42.40m と北側、特に北東側にむけて低くなる。

SD214-2 西壁・SD214-3 北壁でも砂質土層を確認した。SD214-2 西壁（3-4-05　11・12・14・15 層）では、南側から北側へ 42.50～42.45m と、やや低くなる。SD214-3 北壁（3-4-04　13・14・21 層）では、西側から東側へ 42.48～42.45m とほぼ同じ高さである。

SD214-2・3 壁面で堆積状況を確認したところ、上記の褐灰色砂質土層が堆積する以前に、地山を掘り込む黒色土の遺構群があり、その遺構群を削平した後、版築状の盛土層が厚く堆積していた。その盛土層の上面に固くしまる砂質土層が堆積している。この砂質土層は SX034 よりも層位的に下に位置する。更にその上を整地土で覆う。整地土は、南北で様相が異なっており、北側では礫や漆喰状のものを多く含む層の上に粘土層が堆積している。南側では礫を含む粘土層の上に黄褐色土が堆積している。いずれの整地土も５～10 ㎝程の厚みである。褐灰色砂質土層が枡形内全体に敷かれている。

時期　SX034 は、枡形内において面的に確認できたことから、Ⅲ期枡形成立以降に伴うものと考えられる。ちなみに、SD214-2・3 の壁面で確認した、黒色の遺構群はⅠ期、その上の版築状盛土層とその上面の砂質土層はⅡ期に該当するもので、砂質土層は路面と推定する。Ⅰ・Ⅱ期とも枡形成立以前と考えられる。

SX034 は、枡形内において検出していることや、しまりの強い砂質土であることから、路面として機能していたと考えられ、一ノ門に向かって低くなっている。枡形に関連する路面は、調査時にはこの１面のみ検出され、枡形成立当初からの路面なのか、改修の影響などを受けているかについては、不明である。石段は、Ⅲ期中に改修を受けていることが判明し、その周辺では路面の部分修理が行われている可能性も考えられる。

堆積状況

枡形内路盤

第 40 図　SX034（枡形内路盤）

SX031（石段）［第 41 図、資：第 11・33・34・110・111 図］

ＧＨ３グリッド南側で SD214－２西壁・SD213 東西壁と SD213 西側平面において、石段の掘方・抜取痕を確認した。なお、Ⅲ期以降の石段に用いられた石材は残存せず抜き取られている。

規模・構造　SD213 西側上面で南北約 50×東西約 180（cm）の溝状を呈する遺構を検出した。また、SD214－２西壁・SD213 東西壁の土層観察において、下記のとおり共通する土層を確認した。

a 層：戸室チップや小礫を含み締まりの弱い土からなる層

b 層：黄褐～灰褐色粘土ブロックを含む層や砂・小礫を多く含む層

c 層：明黄褐色粘土が充填される層

また、上記の層は削平の影響がない底面のレベルにおいても、各壁面で共通する。

a 層は、SD214 西壁（3-4-05　3 層）で底面のレベルが 42.22m、SD213 東壁（3-4-06　1 層）で 42.15m である。SD213 西壁は削平を受け、掘方を確認できない。

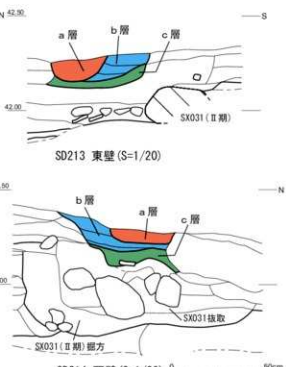
b 層は、SD214 西壁（3-4-05　4～6 層）で底面のレベルが 42.18m、SD213 東壁（3-4-06　2～4 層）で 42.16m、SD213 西壁（3-2-11　17・18 層）で 42.15m である。

c 層は、SD214 西壁（3-4-05　20 層）で底面のレベルが 42.10m、SD213 東壁（3-4-06　8 層）で 42.12m、SD213 西壁（3-2-11　19 層）で 42.10m である。

以上のことから、これら土質や底面レベルが共通する遺構は、調査成果および絵図により東西方向に長軸をもつ石段の掘方と想定した。石段の掘方には切り合いがあり、構築から廃絶までの３段階を確認した。第１段階にあたる c 層は石段設置に伴う掘方内埋土で、粘土は石段固定用と考えられる。その上の第２段階となる b 層は、石段抜き取りに、新たに石段を設置した際の埋土と推測できる。a 層は、最終的な石段の抜き取りの埋め戻し土で、第３段階とする。

時期　第１段階は SX031（Ⅱ期石段）の上に堆積しており、Ⅲ期当初、河北門創建時と想定する。その後改修をへて、最終的に石段が抜取られたのは、明治以降河北門廃絶に伴うと考えられ、第３段階が該当する。第２段階については、河北門改修の契機として宝暦の大火が妥当と考えられ、大火後の改修時の抜き取り、埋め戻し土と想定できる。

SD213 東壁



第 41 図　石段

3220E・N（土塀石垣）、SA001（土塀裏盛土）、3220S（土塀裏盛土土留石垣）

［第42・43図、資：第35～39・112～115図］

概要　Ｆ４グリッドからＧ７グリッドにかけて位置する。Ｌ字状に屈曲する土塀石垣の根石列を検出した。Ｌ字状の屈曲部分は SD214（下水道掘方）により破壊されているが、南北列および東西列については比較的良好に残存する。この土塀石垣の背面では土塀裏盛土の一部を検出し、ニラミ櫓台南面の階段最下段の南北方向（長軸）ラインに合うように盛土の裾部が落ちてくることを確認した。土塀裏盛土土留め石垣も近代以降の撹乱により破壊されているが、根石列の一部を検出した。

土塀石垣は河北門枡形を区画する構造物として築かれており、上部の土塀については、後藤家文書などで、土塀の内部に石垣が埋め込まれた「隠し石垣」と呼ばれ、同様な構造の土塀は金沢城内には類例がなく「城内唯一」の土塀であるとしている。絵図でも城内の土塀の中で最も厚く描かれている（第３図－９）。今回の調査では土塀石垣の基礎部分である根石列を検出した。

土塀裏盛土と土留石垣は、江戸前期の「金沢城絵図」（第３図－３）では石垣の表現であるが、宝暦５年の「金沢城図」（第３図－７）では石垣は無く、土羽の表現となる。その後の絵図でも土羽の表現となっており、石垣から盛土への変遷があったこと、宝暦の大火以前には改修されたことが推測できる。

3220E・N（土塀石垣）［第42図、資：第35・36・38・112・113図］

Ｆ４グリッドからＧ７グリッドにかけて位置する、南北方向と東西方向に軸をもつ石垣根石列を検出し、それぞれ平面および撹乱壁の観察を行った。

規模・構造

南北列　南北列では、調査成果および絵図から推定される南北列約 12.2mのうち 10.8mを検出した。検出面のレベルは標高 42.40～42.45mである。根石列を分断するように近代以降の土坑状の撹乱（SK203）が入り、この撹乱の掘方の南北壁２箇所を利用して土層観察を行った。石垣掘方は枡形整地層を掘り込んでおり、掘方内での新旧等の切り合いは認められなかった。掘方内は施工段階での差を示す根石設置前の土と、根石を設置後の埋土に分けられる。設置前は湾曲する掘方底面を埋め戻して上面を平坦にするため、また、根石同士の高さ調整のために一定の埋め戻しを行ったと推測できる。設置後は粘性の強い埋土中に栗石が散在する。通常石垣築石の背後は栗石で充填されるが、根石の場合は様相が異なることがわかる。

使用する石材は戸室石で、部分的に戸室石以外の河川転石が集中する箇所もあることから、断面観察を行った地点以外では、根石の一部を含めた改修が行われた可能性がある。ニラミ櫓台接続部分より南に約 2.5mから約 5.2mの範囲にかけては戸室石以外の石材が使用され、裏込めにも栗石ではなくほぼ同規模の石材を敷き並べたような状況を確認した。面のみが割面で、上面に加工痕はみられないが、平らな部分を選んでいると思われる。その点から、切石化されて以降の修理で根石が据え替えられていると推測できる。戸室石が用いられている部分は、根石上面に切石を載せるための切欠き加工が施される。面や側面は自然面のままとし、上部の石垣を切石化する段階に当初未加工で使用されていた根石の上面のみ加工して使用したと考えられる。

東西列　東西列は南北列よりも残存状況は悪く、調査成果及び絵図から推定される東西約 14.6mのうち、3.1mを検出したにとどまった。近代以降の撹乱により殆どが破壊されていたが、この撹乱壁を利用して土層確認を行った。石垣掘方は南北列同様に枡形整地層を掘り込み、掘方の新旧はみられない。根石前面掘方内部は栗石と埋土が混在するが、掘方底面には栗石はほとんど見られない点が、南北列掘方内の堆積状況と類似している。石材は戸室石を使用しており、こちらも割面より自然面が多く残る。上に切石を積むため上面はノミで平坦にされる。根石背後の掘方内は径 10cm 前後の栗石で充填さ

れるが、石尻の掘方下半部は南北列同様に、埋土と栗石が混在した状態である。また、南北列よりも根石天端の高さが全体に約 40㎝ 高くなっている点から、枡形内の地盤面の高さが北から南へと高くなっている事がうかがえる。

時期　河北門が枡形門の構造となったのは二ノ門石垣台の年代観から慶長後期と考えており、土塀石垣の創建年代もこれと同時と推定するが、発掘所見からその確証は得られなかった。根石上面に見られる加工痕は、上部に切石材が載せられていたことを示しており、城内の石垣が切石化される寛永期以降に改修が行われたと推測できるが、使用石材が部分的に異なることからそれ以降にも改修が行われていたと考えられる。慶長後期築造の二ノ門石垣台根石では、自然石が利用されているが、南北列の自然石は面割されていたこと、平面的に敷き並べられていたことから二ノ門石垣台根石とは異なり、その上に切石が乗ることを当初から想定して設置されたと思われる。

その他　南北列の北端部分で作業用の足場の柱とみられる柱穴の抜き取り痕跡を確認した（資：第 35 図 3-4-07）。この柱穴の掘り込み面は枡形整地層や 3220E（土塀石垣）掘方を切るが、柱抜取後に枡形の路面の化粧土に覆われており、枡形の整地後から最終舗装までに掘削・抜取がおこなわれた遺構と考えられる。普請時に構築されたもので、完成前に撤去、さらに、石垣に隣接しているという点から、石垣普請時又は作事の作業足場用の柱穴と推定した。

SA001（土塀裏盛土）［第 42 図、資：第 36・37・39・113～114 図］

Ｅ・Ｉ４～７にかけて位置する。土塀背面の SA001（土塀裏盛土）残丘を確認し、盛土の堆積状況等を確認するため、土塀石垣南北列と直行する方向で、盛土の残丘部分から盛土西側に広がる平坦部にかけてトレンチを設定し、精査を行った。なおこれまで、本遺構についてパンフレット等では、土塁と称してきたが、一般的な土を突き固めて構築された土塁とは異なり、突き固めた状況が見られなかったことから、本書では土塀裏盛土と呼称した。

規模・構造　東西約 5.8×南北約 8（m）の範囲で盛土は遺存するが、標高 43.20m前後の高さまで近代以降の造成により削平される。盛土南側については、更に一段低く 42.70～42.80mにまで削平された状況であった。トレンチの土層観察から、以下のとおり３段階の変遷が考えられる。

第１段階：盛土以前の路面とみられる整地層。細かい砂礫層と粘質土層が薄く互層状に堆積し、砂の硬化面とその上面には戸室チップと鉄分を多く含む面が広がる。土塀裏に盛土される以前に犬走り状の硬化面が広がっていた可能性がある。

第２段階：SA001-1　硬化面を覆い、砂礫を多く含む地山質土と粘性土が均一な厚さで堆積する。現状で約 30 ㎝の嵩上げが確認できる。均一に堆積するが盛土裾部になると細かな堆積層がみられる。

第３段階：SA001-2　土塀裏盛土層１の均一な層に対して、細かい単位の層が盛土される。粘性の強い土質である。SX028（ニラミ櫓台階段）脇の土層の観察所見（第 37 図 3-4-14）との対応関係により、周辺を改修した際に、第２段階の土塀裏盛土層１の上部を撤去し、新たに造成した層と考えられる。

また、裾部以西からニラミ櫓台西側前面にかけて広がる河北門廃絶直前まで機能していたと推測する平坦面には、路面と見られる黄色の砂が最上面にあり、その直下は灰白色土のしまりのあるシルト質土がみられる。更に下層には比較的厚い盛土層があり、黄色の砂と灰白色土が化粧砂や舗装面といった性格と考えた。このうち化粧砂は局所的にしか残存しなかったが、灰白色土は調査区西側で広範囲に見られ、盛土裾部においてこの灰白色土が斜め方向に立ち上がる状況を観察できたことから、盛土の西端を明らかにできた。

時期　第１段階の整地層は、盛土される以前にこの地点が平坦な路面となっていたことを示しており、周辺の土層との対応関係から盛土される以前の面と考えられる。第２段階では土塀裏盛土が構築され、第３段階は盛土の改修が行われたと推測する。第２段階の盛土が行なわれた時期を特定する所見は得

られなかったが、土塀石垣の改修との対応が絵図においてもみられ、宝暦の大火前に長屋台石垣から盛土へと変化したことが伺える。第３段階の盛土の改修時期は、SX028 との対応関係から宝暦の大火を契機としたと考えられる。

その他　盛土の裾部に沿うように掘り込まれた、植栽痕を２基確認した（第 42 図）。いずれも中央が黒色土、周辺が褐色土の同心円状のプランで検出される。直径は約 150cm、中央の黒色土部分は直径約 90cm を測る。遺構検出のみにとどめたため詳細な掘方の立ち上がりや断面形態、深さは不明であるが、一部撹乱により下げられている部分をみると、緩い擂鉢状に立ち上がる壁面が想定できる。黒色土の部分は根巻き、褐色土の部分は根回しと考えられる。明治９年に陸軍が提出した河北門撤去の願書につけられた絵図には、この付近に樹木が描かれており、明治 30 年までには上に、下士官集会所が建てられている。それらのことからこの植栽痕は明治期に植樹されたものではなく、宝暦の大火以降、近世後期段階の植栽痕の可能性が高い。

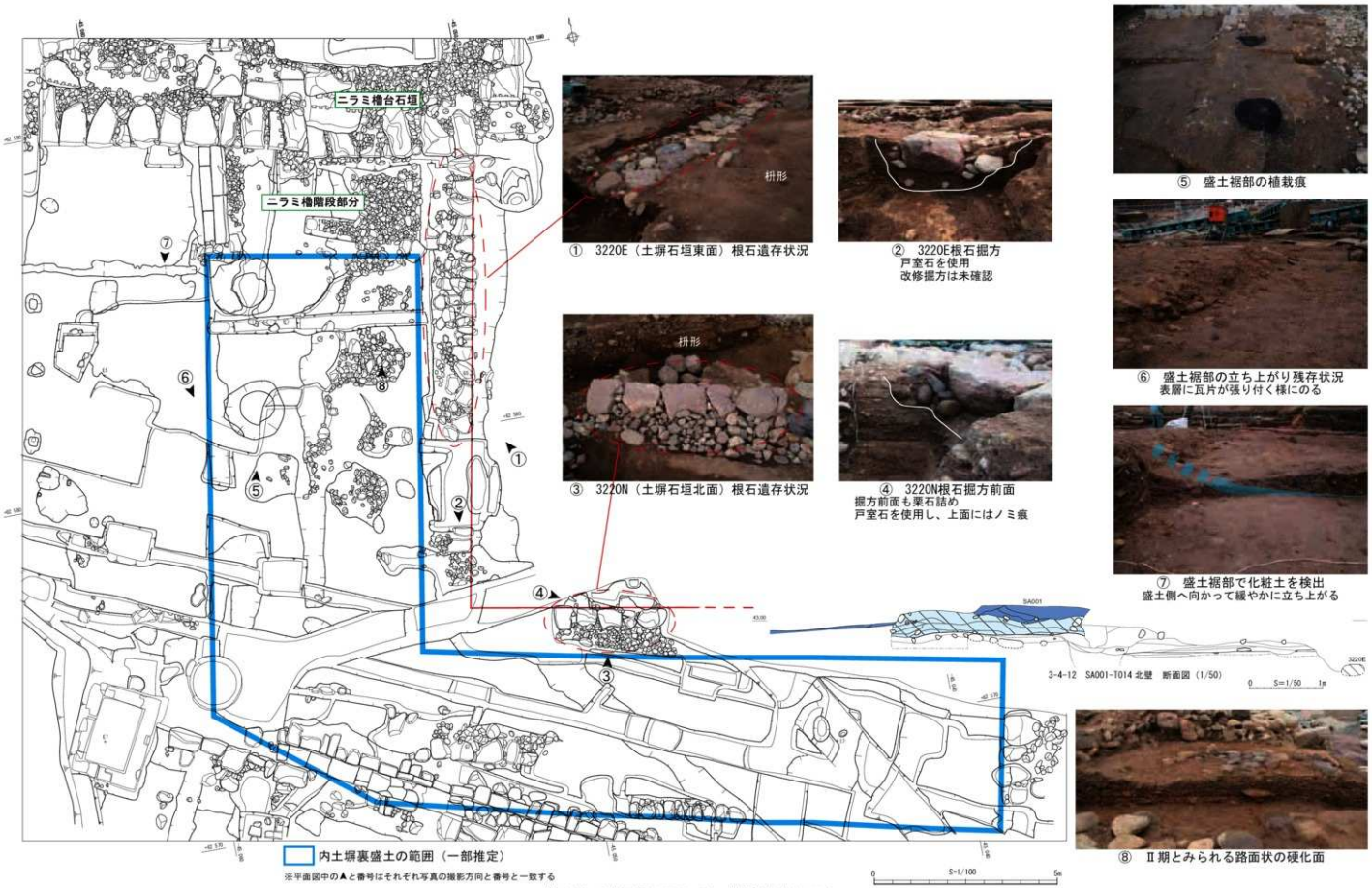
土塀裏盛土土留石垣（3220S）［第 43 図、資：第 38・115 図］

Ｅ７グリッドからＩ７グリッドに位置する。近代以降の石組側溝等によって破壊され、ID321（南側石垣台）への取り付き部や西端部につては不明であるが、東西方向に軸をもつ根石列を検出した。

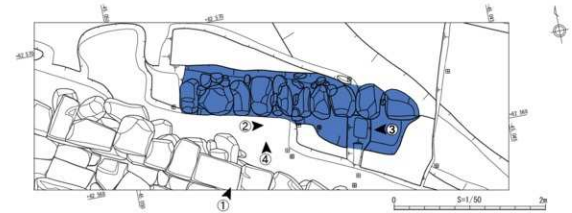
規模・構造　3210W から西へ約 7.2mの箇所で、東西 3.15mの根石列の一部を確認した。ID321 から SA001 の裾部のまでの東西約 21mが推定長である。根石列直上は栗石とガラス片などを含む撹乱土で覆われていた。掘方は幅 70～90cm の溝状を呈するが、根石石材は河川転石とみられる亜角礫が使用されており、特に石材加工痕はみられず自然面のままである。検出した根石列のうち東側約 1.5m は前面の掘方幅も広くなっており、また石材も控えと幅の差があまりみられないなど、西側部分とは異なる。根石列前面の掘方ラインを平面で精査したが、明瞭な違いを確認することができなかったため、前面の東側に一部サブトレンチをいれ、西側は撹乱壁で両者の掘方断面を比較した。その結果両者の前面堆積土や掘方底面レベルなどが異なり、その差異は工程差もしくは時期差であると想定した。土留石垣全体の規模からみると、局所的なため断定はできないが、土塀裏盛土に改修痕跡が認められることからも、部分的に修理等を行った可能性もある。

当初、他の石垣根石列に比べてこれらの石材が小振りなことについて、上に乗る土留石垣も小規模であまり高さのない構造であると推測していた。しかし明治 15 年頃の河北門古写真の解析により、高さ約２mの石垣であることが判明し、復元高もこれに基づいて行われている。

時期　築造年代や改修時期についての特定できる所見や遺物は得られなかったが、土塀裏盛土の敷設や改修等と同時期と考えるのが妥当であろう。従って、寛永期以降に築造、宝暦の大火後に一部石積みが修理された可能性がある。明治 15 年頃の古写真にはその姿が映っていることから、河北門解体時に撤去され廃絶を迎えたとみられる。



第42図　土塀石垣(3220E・N)・土塀裏盛土(SA001)

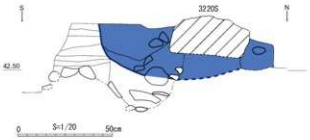


① 3220S全景（三ノ丸側）　石材の長軸を控えて並べる。★印石のみ横置き

② 掘方前面が狭い箇所

③ 掘方前面が広くかつ底面も深くなる箇所

④ 掘方底面が浅い箇所（標高42.60m）



３４１７　3220S東壁　断面図(1/20)
※平面図中の▲と番号はそれぞれ写真の撮影方向と番号と一致する

第43図　3220S（土塀裏盛土土留石垣）

SW001（長屋台石垣）［第44図、資：第40図］

概要　調査区のＦＧ６・７グリッドに位置する、枡形南側で検出した石垣根石列である。東西方向に軸をもち、他の遺構との位置関係から、二ノ門の ID321（南側石垣台）から西側に延びる石垣にあたり、江戸時代前期の絵図に見られる長屋台石垣の一部であると推測される。近世前期とみられる絵図では、枡形に面した土塀石垣と同様に SW001 も折れ曲がり部を持ち、ニラミ櫓にむかって延びる南北軸の石垣が描かれている。ただし南北軸の石垣については近世前期の絵図でも描かれていない場合も多く、今回の調査では、その存在を示す様な掘り込み等は確認できなかった。また、東西軸の SW001 自体も近世後期の絵図では描かれず、SA001（土塀裏盛土）と 3220S（土塀裏盛土土留め石垣）が東西方向に伸びる。

規模・構造　確認した遺構は東西方向に延び、残存長で約 3.3ｍを測る石垣で、５石が残存する。最も遺存状態の良い場所では根石と１段目が遺存するが、ほとんどは破壊・撤去されて、根石のみとなる。背後には栗石も遺存するが、前面は SD215（軍隊時代石組溝）、背面は SD206（鉄管掘方）によって壊される。

石垣は南面しており、三ノ丸に面する石垣である。枡形に面する石垣は 3220N（土塀石垣北面）がそれに該当すると思われる。石材は長楕円の自然石を利用し、根石は未加工の状態である。１段目では割石材が使用されるが、通常城内の石垣石で多用される戸室石ではなく、黒色の安山岩系とみられる石材を使用している。

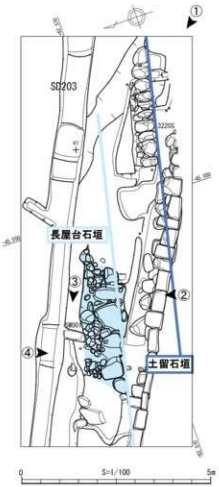
石垣の掘方は、幅 124cm の溝状を呈し、河北門枡形築造以前に行われた版築状の盛土層を掘り込んでいる。掘方内部は築石と裏込めの栗石、石垣前面の前込めの栗石が充填されている。掘方底面レベルは抜き取り後の高さが標高約 42.40ｍで、東端では下層の整地層が露出しており、その削平されたレベルで 42.45ｍであるため、概ね 42.40～42.45ｍ前後の掘方底面レベルと推測できる。周辺の近世の地表レベルは約 42.70ｍ以上と推定され、根石は地表面に一部出たような状態であったと考えられる。

検出石垣の東・西端では掘方底面直上に根石とみられる自然石が据えられている。控え長は 40 cm程と短く、ID321（南側石垣台）の創建期根石同様、１段目の築石の石尻を下げて、石垣に勾配をつけるために控えの短い根石を選択したと想定される。掘方底面には黒褐色の粘土層が薄く遺存する箇所があり、ID 321 の根石直下にも同様に粘土が敷かれるように堆積していたことから、根石直下に粘土を敷くような工法であった可能性がある。

断面では残存石垣上部の抜き取り土と推測する栗石が散見した層がみられ、抜き取りの範囲は東西 160cm、南北 70cm を検出した。抜き取り土の直下に前述した黒褐色の粘土層が遺存した部分があることから、掘方底面を大きく掘り下げての抜き取りおよび撹乱ではないことが分かる。

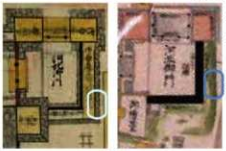
時期　SW001 は築石に割石材を使用していることから、慶長後期の河北門枡形創建時に築かれたと考えられる。『加州金沢御城来因略記』（第４図-17）では「宝暦年中己後土塀相成」と記述されており、宝暦の大火を契機に長屋台から土塀へ改修されたことがわかる。今回 SW001 を確認した地点から約 60 cm南側の地点でほぼ同方向に伸びる 3220S を検出しており、ことから、SW001 は盛土内に埋め込まれた状態で、明治期の河北門解体を迎えたと考えられる。

SW001 は河北門廃絶期には既に門の構造物としては存在しなかったため、本調査で遺構の確認はできたが、河北門復元の対象となっていない。



※平面図中の▲と番号はそれぞれ写真の撮影方向と番号と一致する

① SW001、3220S全景および位置



残存石垣推定位置

左：長屋台石垣
「金沢城内絵図」（万治２～延宝４年）
（滋賀県安土城考古博物館蔵）

右：土留石垣
「御城中壱分碁絵図」（文政13年）
（横山隆昭家蔵）

② SA001三ノ丸側
（正面部分）
★印のみ割石

③ 石垣掘方と裏込め栗石

④ 底面の粘土は根石直下でも確認

第44図　SW001（長屋台石垣）

SD005-1・2（川原石組暗渠）・SD005-3（凝灰岩石組暗渠）［第 45・46 図、資：第 40・41・116 図］

概要　調査区のほぼ中央に位置し、グリッドはＪ４に該当する。SX030（二ノ門路盤）下を東側から西に流れ、河北坂方向へ折れ曲がる石組暗渠と考えられ、屈曲部と北流する部分を検出した。北側は現代のコンクリート枡に、南側は SD212（近代溝）によって破壊され全容は明らかではないが、撹乱壁面を観察し、暗渠の変遷と構造の一端を把握することができた。

規模・構造　3-4-26～29 の計４ヵ所で土層を観察した。3-4-26～29 の４ヵ所では、５つの段階を経ていることが判明した。４ヵ所の土層観察結果をもとにした模式図（第 45 図）で変遷を示すとともに、測量図中に遺構の推定ラインを示した。なお、測量図中の SD005-1・3 は西側上端、SD005-2 は東側上端の推定ラインを引いている。以下、大別５段階を示す。

１　川原石組暗渠掘方が掘削され（第 45 図中赤線）、裏込め土を充填しながら底石と側石として断面形扁平な川原石が据えられる。側石は立てた状態である。当時は川原石の蓋があり上面は路盤（第 45 図中破線茶色）として整備されていたと考えられる。〈１段階川原石組暗渠＝SD005-1〉

２　１段階の底石を残し側石が抜き取られ、東側掘方幅が少し狭まり新たな側石（東側のみ残存し断面俵形であった）が置かれる。１段階同様に川原石の蓋や、路盤（Ⅲ期途中の路盤：黄緑色）も整備されていたと想定している。〈２段階川原石組暗渠＝SD005-2〉

３　２段階側石が一部抜き取られ埋め戻される。遺構脇には路盤（黄緑色）が残存している。
川原石組暗渠の上部に凝灰岩石組暗渠〈SD005－3〉が構築される（第 45 図中紫線）。抜取痕と凝灰岩破片のみ確認しているが、機能時はおそらくⅢ期中の路盤（破線緑色）に覆われていたものと思われる。

４　凝灰岩石組暗渠が抜き取られ、埋め戻され枡形路盤（Ⅲ期最終段階路盤：青色）が造られる。

５　上部に近代整地層（白色）が堆積した後、切り込むように SD212（近代溝）が掘削される。

SD005-1　残存値で掘方幅 158×深さ 69～92（cm）、壁面はほぼ垂直か若干オーバーハングして立ち上がる。北から（コンクリート枡から）約 300 cm残存しているが、以南に関しては SD212 に撹乱され不明である。構築時は掘方掘削後、底面には扁平な川原石を一列に敷いている。大きなもので長軸 51×短軸 38×厚さ 13（cm）である。側壁には模式図１で見られるような扁平な側石（長軸 37×厚さ 14（cm））が立つように設置されていたものと考えられる。底石の上面、側石側面下部はともに酸化し変色している。

SD005-2　掘方は残存値で幅 94×深さ 52（cm）である。SD005-1 より東側は幅を縮小している。東側側石は SD005-1 の底石を再利用し、同石に若干載るように俵形状の石が設置されている。側石は長軸残存 54×短軸 26×厚さ 22（cm）である。西側側石も同様の構造であったと考えられるが、１石しか残存していなかった。西壁面には石を抜き取ったような凹みを確認している。SD005-2 が廃絶した際には、西側は多くの側石が抜き取られ埋め戻されている。

SD005-3　その後ほぼ同位置に板石組あるいは刳り貫き箱型の凝灰岩を用いた暗渠が造られたと考えられるが、遺存状況は悪く凝灰岩の板状破片を多く含む抜取痕のみ確認している。

このように川原石組暗渠→凝灰岩石組暗渠へとほぼ同位置で造り替えられるという変遷は、一ノ門中央の SD010→SD009 の変遷と酷似しており、それぞれが接続する同一遺構の可能性もある。また、変遷図中の凝灰岩の暗渠の規模については、出土した板状の凝灰岩と SD009 で確認している凝灰岩刳り貫き箱型の石材の規格を参考に図化した。

凝灰岩石組暗渠抜取痕は南へ約 207 cmまで検出している。同暗渠廃絶後には、ほぼ重なるような位置で SD212 の抜取痕を検出している。残存値で幅 82～120、深さ 52～78（cm）、長さ北から約 17.6m である。同溝は、二ノ門をほぼ東西に横断しているが、Ｌ５以東は撹乱を受け詳細は不明である。

時期　SD005-1 は、河北門創建前遺構（Ⅱ期 SD006）を切り込み河北門最終段階より前の路盤（Ⅲ期途

中の路盤）に覆われていたことから、河北門創建時（Ⅲ期）まで遡る、あるいは創建前（Ⅱ期）の遺構の可能性もある。凝灰岩石組暗渠に関しては、SD005-1・2 廃絶後、路盤（Ⅲ期途中の路盤：黄緑色）を間に挟んでいることから、川原石組暗暗渠とは若干の時期差が想定できる。SD212 は SX030（ニノ門内路盤）を切り込むことから、近代以降の遺構と考えられる。

「辰己用水調査報告書」（金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2009）では絵図・文献から判明した城内に引水された用水について詳細に触れている。「金沢城図」（1720～1740 年頃）（第３図-６）では「埋水樋」（藍色のライン）が石川門から西に進み三ノ丸中央で分岐し二ノ門内を通っている様子が描かれている。導水管が木樋から石樋へ変わるのは天保 14 年（1843）であり、同絵図中の用水は木樋と考えられる。

文政 13 年（1830）の景観を描く第３図-９「御城中壱分碁絵図」では、「水樋」が紫線、「埋樋・万年樋」が朱細線で描かれている。紫線は辰巳用水の水路を示し、「埋樋・万年樋」は「辰己用水」と区別するため色分けされた地下に埋設された排水路と考えられている。この絵図では、三ノ丸中央から河北門方向への分岐した辰巳用水は描かれていないが三ノ丸中央から南へ向かう水路が描かれていることから、この時期河北門内に辰己用水からの分岐水路は流れていないと解釈されている。

遺構周辺の撹乱壁面等を観察した結果、SD005-3 は SD212 にほぼ重複する位置に構築されていたものと想定している。軸線は河北門内の構造物に規定されず斜めに走っていることから、門に関連する遺構でない可能性がある。土層の堆積状況からは、Ⅲ期途中に廃絶していることが判明しており、19 世紀初頭の絵図で河北門内に描かれなくなった辰己用水に関連する遺構の可能性もある。また、文献によると当時の辰己用水は木樋であるが、本遺構からは木質物は検出しておらず、門の軸線に規定されない他の石組溝も想定している。

第９表　二ノ門内を通る水路

	辰己用水	SD003		
桝形創建　慶長後期（1605～1615年）頃			SD005-1 ↓ SD005-2 ↓ SD005-3	SD101 ↓ SD102 ↓
寛永８年の大火（1631）年以降	城内導水寛永９年（1632～）			
17世紀後半		SD003（第３図-５）		
18世紀前半	SD003付近を通る（第３図-６）	↓		
宝暦９（1759）年以降	門内から消える（第３図-６）	SD003（検出）	（SD005は埋没）	

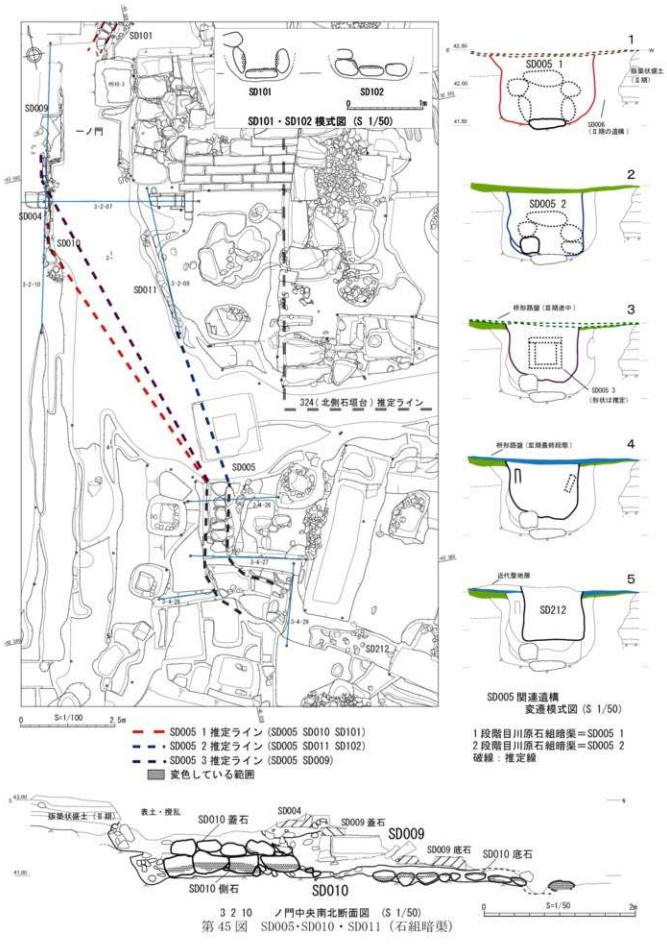
第３図-６「金沢城図」享保５～元文５年（1720～1740年頃）
第３図-５「金沢城絵図」延宝4年～元禄年間（1676～1704）
第３図-９「御城中壱分碁絵図」文政13年（1830）

SD010・SD011（河原石組暗渠）、その他（SD101・SD102・SD212）

［第 45 図、資：第 10・13・47・49 図］

先述のようにコンクリート桝を挟んだ北側においても川原石組暗渠を確認している。ほぼ南北方向に走る SD010（一ノ門中央）と SD011（一ノ門東側）である。

SD010　南北に走る SD009（石組溝）の下部で切られた状態で検出した。南北は現代の配管や側溝によって破壊されている。底石と底石に載るように置かれた側石も扁平な川原石であった。さらに蓋の一部と思われる川原石も確認している。底石は大きなもので南北 30×東西 30（cm）である。側石は南北 52×東西 16（cm）である。地山まで掘削された掘方に数cmの土を挟み底石が置かれている。SD005 同様に赤化・黒化した変色部分は水が触れた部分と考えられる。川原石の配置について SD005-1 と同様の特徴をもつ。北側から南に 420 cmの地点まではほぼ一ノ門の南北軸に合うように造られているが、以南は東に 28°角度を変え、SD005 方向に向かって約 70 cm残存している。



3 2 10　ノ門中央南北断面図　(S 1/50)

第 45 図　SD005･SD010・SD011（石組暗渠）

SD005 関連遺構（SD212 除去状況）　北から

SD005 関連遺構変遷状況　北から

第 46 図　SD005（石組暗渠）

SD009 も検出は一部であるが SD010 同様に SD005 に向かい角度を変えている。遺存状態が悪く掘方の規模等は不明である。先述のように凝灰岩石組の暗渠とほぼ同位置で上下構築されている点は SD005 と共通している。

SD011　側石のみ確認している。SD010 同様に変色しているが、石の断面形状は扁平というより俵形や円形であり、SD010 で確認し側石とは大きく異なる。SD005-2 の側石と同様の特徴をもっている。SD010・SD011 は、軸線や使用石材の違いから同一遺構とは考え難いため、SD005-1・2 同様にこの地点においても２条の川原石組暗渠があったと思われる。

その他　また、河北坂では一ノ門のすぐ北で SD101・SD102 の２条の川原石組暗渠を確認している（第３章６節参照）。SD101 は SD005-1、SD102 は SD005-2 と構造・使用石材について似た特徴を持つ。SD005 の土層堆積状況から旧 SD005-1→新 SD005-2 と新旧関係があることが判明していることから、SD010→SD011、SD101→SD102 と変遷している可能性も考えられる。SD101 と SD102 はⅡ期路面を切り込み、Ⅲ期途中の面に覆われていることから両遺構もⅡ期の遺構の可能性もある。

この他に SD005 のような川原石組暗渠は、調査区南東隅で南北方向に軸を持つ SD008 を確認している。側壁は抜き取られていると考えられるが、底石は扁平な川原石が並んでいた。SD005 と同一遺構の可能性もあるが、詳細は不明である（第５章２節参照）。

P026～P030、SD012（柱穴、溝）［第 47 図、資：第 42・117 図］

概要　ニラミ櫓台南西隅から南に向って計５基（P026～P030）の柱穴を確認している。調査区の西端に位置し、グリッドはＤ３～５に該当する。いずれも河北門最終段階に河北門の西部に堆積していた路盤（シルト質土）を切り込んでいる点は共通しているが、P027 と P028 の間に東西に走る浅い溝 SD012 を境に若干様相が異なるため、以下南北の柱穴を分けて記述する。

規模・構造

P027 は検出のみであるが、P026 は撹乱壁面で土層を観察した。P026 の１層は柱痕の可能性もある。P026⇔P027 は 138 ㎝、繋ぐ軸線はニラミ櫓やその付属施設とは一致していないが、その検出された位置からは、ニラミ櫓台南側階段（SX028）周辺の河北門と三ノ丸を区画する役割を担っていたと考えられる。P028⇔P029 は 178 ㎝、P029⇔P030 は 195 ㎝である。主軸方位はほぼニラミ櫓と一致し、N－13°－E である。門の南側の SA001（土塀裏盛土）の裾部は 3220S（土塀裏盛土土留石垣）によって仕切られるが、西側はなだらかに終息するため、SA001 と三ノ丸を区画する役割も担っていたと想定している。上面観察の結果、P028～P030 の柱穴には焼土やシルト質土（河北門Ⅲ期の路盤）の破片が混入しており、宝暦９年（1759）の大火後の改修の際に構築された柱穴の可能性が高い。柱痕の位置は何れもほぼ中央であった。

第10表　柱穴の規模（単位：㎝）

遺構名	長軸	短軸	深さ	柱痕長軸	平面形
P026	(50)		25		円形
P027		38			円形
P028	50	42		26	円形
P029	46	36		26	不整形
P030	70	46		26	不整円形

※（残存値）

SD012 は、規模は南北最大幅 44×東西残存値 690×深さは６（㎝）程度、西側は調査区外に延びる。当初柵列と考え、サブトレンチで土層を観察したが、杭穴等の痕跡は見られなかった。河北門路盤のシルト質土を切り込み、近代の河北門埋め戻しの土で埋められている。明瞭な流水の痕跡は確認できなかったが、ニラミ櫓台南側階段前の路盤の簡易な排水溝と考えている。

時期　P026～P030・SD012 は、Ⅲ期最終段階路盤を切り込んでいることから宝暦の大火以後に構築されたと推定する。SD012 に関しては調査区西壁面を観察の結果、明治に埋め戻されていることが判明している。また、近世後期に柄形を区画していた土塀の裏側には SA001 が構築されており、柱列はその西側裾部を仕切る柵列として機能していたと思われ、よって構築時期も近世後期以降であり、SD012 とともに河北門廃絶時まで機能していたと考えられる。

SE002（井戸）［第 47 図、資：第５・117 図］

概要　グリッドはＣＤ５、本調査区の西端中央部に位置する。

規模・構造　調査は遺構検出と調査区南壁面で上層部のみ土層観察を行っている。規模は南北 305×東西残存値 280(cm)、検出時の標高は 42.60mであるが、調査区西・南壁面（3-1-04・3-4-22）を観察した結果 42.85mより上から埋め戻されていることが判明している。遺構検出の際に大量の炭を確認しており、火災によるごみの廃棄がなされた可能性もある。

3-1-04・3-4-22 では 42.50mの高さで河北門最終段階の路盤を確認している。42.85mより上から埋め戻されているので、この路盤が埋められた時もまだ井戸は開放していたことになる。埋め戻し土上層からは 18 世紀末頃から近代初頭の陶磁器・土器が出土している。

時期　土層の堆積状況から河北門最終段階路盤の埋め戻し時期（明治 15 年頃）より後まで開放していたことが想定できる。構築時期に関しては第３図-３「金沢城内絵図」（万治２～延宝４年（1659～76））で土塀石垣の西側に井桁状の印で描かれている。後の絵図第３図-５「金沢城絵図」（延宝４年～元禄年間（1676～1704））、第３図-７「金沢城図②（三之御丸）」（宝暦５年（1755））、第３図-９「御城中壱分碁絵図」（文政 13 年（1830））、第４図-11「御城分間御絵図」（嘉永３年（1850））を観察したところ、全ての絵図に描かれていた。

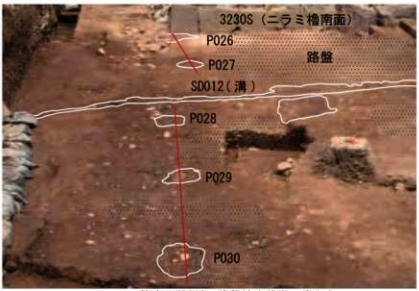
明治 11 年（1878）「金沢旧城三之丸」では石川門の西側の井戸が写されている（第３図-７）。写真からは切妻屋根下に滑車が取り付けられ、人の腰上の高さ位に井戸枠（石製か）が作られていることが分かる。おそらく、本遺構も明治には同規模の施設が備え付けられていたものと想定している。以上の点から遅くとも 17 世紀後半には構築され、河北門廃絶頃まで引き続き機能していたと推測する。

SX035（炉か）［資：42・117 図］

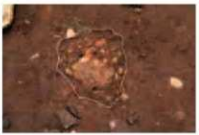
Ｄ５グリッドで確認した炭化物と焼土を多く含む遺構である。P030 の南側に位置するが、同時期の遺構ではなく、P030 を確認したシルト質土の路盤（Ⅲ期最終段階路盤）には覆われ、Ⅲ期初頭の路盤を切り込んでいることが判明している。

規模・構造　規模は 64×64×深さ 10（cm）で平面形は不整円形である。上面では同心円状に土質が異なり、中心から炭化物→焼土→炭化物＋焼土→小礫混じりの粘質土と移行していく。一部開放したトレンチでは６層に分層出来た。焼土、炭化物を集中的に検出したことから炉の可能性もあるが、焼けた硬化面等が検出されないことから、火を扱う簡易的な施設であったと推測するにとどめる。

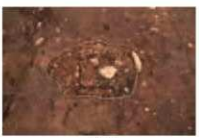
時期　遺物は出土していない。確認した面から、Ⅲ期初頭～Ⅲ期最終路盤が作られるまでに構築された遺構と考える。



柱穴・SD012・路盤検出状況　南から

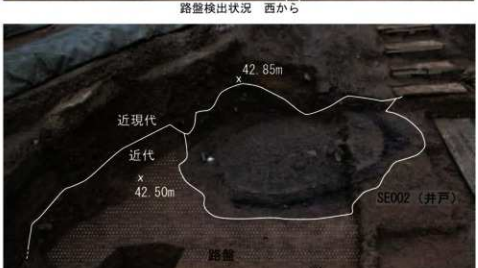


P029



P030

路盤検出状況　西から



SE002・路盤検出状況　東から

第 47 図　P026 ～ P030（柱穴）、SD012（溝）、 SE002（井戸）

第５節　ニラミ櫓台

概要

ニラミ櫓台石垣(以下、ID323)グリッドはＤ～Ｇ１～３で、調査区の北西に位置する。近代に入り、北面はほぼ頬当石垣上面の高さまで、西面は根石のみ、南面・東面は根石かその一段上までを残し破壊されている。その後、南西部に関しては河北門最終路面の高さ 42.70mから 43.50mまでの約 80cm軍隊時代に盛土造成されている。櫓内には金沢大学時代のものと考えられる釉薬瓦が大量に廃棄されていた。その後は、公園整備の際にも照明灯・柵の設置等により付近が改変されている。しかし、石垣基底部が残存していたことから、石垣の位置と平面規模、石垣改修状況や石積みの特徴を確認することが出来た。

3500N(三ノ丸北面石垣)・ID323(ニラミ櫓台石垣)［第 48～54 図、資：第 43～46、第 118～124 図］

調査の結果、ID323 が造られた地点では、河北門枡形創建以前も含めて大きくⅠ～Ⅲ期の３つの段階があることが判明している。以下、各段階の遺構や土層の残存状況を示す。任意に西・南面の石材には 1～27 まで番号を付している。Ⅰ・Ⅱ期の詳細は５章を参照されたい。

Ⅰ期　黄緑色に塗られた範囲がⅠ期に該当する。この時期には三ノ丸北面付近にほぼ東西軸の SA002(土塁状盛土)が築かれている。SA002 の南側を嵩上げした際の土層から 16 世紀末と考えられる遺物（P65）が出土しているので、SA002 の構築は、それ以前から始まったものと考えられる(第 49 図③)。同時期の遺構としては、黒ボク土主体の土坑をいくつか確認している。

Ⅱ期　緑色に塗られた範囲がⅡ期に該当する。Ⅰ期の SA002 の南側嵩上げ土を切り込む掘方を持つ石垣(以下、Ⅱ期石垣台とする)を確認している。Ⅱ期石垣台は、南東角石は欠いているが、西へ続く南面の５石、６石目の角石、そこから北への２石が残存している。規模は南北約９×東西６(m)で、ID323 に比較し小さい。

同時期の遺構として一ノ門付近では礎石根固と思われる円礫充填の土坑 P024・P025 と SX031(石段)とそれに続く路盤を確認しており、これらはⅡ期の門に関連する遺構と想定している。**15～20** はⅡ期石垣台根石と思われ、その上部は抜かれている。**26・27** は２段目で割加工石である。**25** は検出した位置や焼土に覆われていた点からⅡ期に置かれた石と考えられる。

Ⅲ期　水色・青色・黄土色で塗られた範囲が河北門枡形創建以降のⅢ期に該当する。規模は門廃絶時で、東面 9.06m、西面 9.43m、南面 13.18m である。ID323 ではⅢ期中の改修の痕跡を確認しており、以下、Ⅲ期　創建時石垣掘方、Ⅲ期　改修１掘方、Ⅲ期　改修２掘方の３時期に分けて規模・構造等を述べる。

規模・構造

Ⅲ期　創建時掘方（西・南面）　**1・10～14、21～24** の築石が配された石垣掘方である。規模は、東西方向は、**1** の面から西へ 70cm、面から東へ 700cm である。**4** の面から西に 120cm、南へ 85cm である。南北方向は、**12** の面から北へ 400cm である。深さは T016 西壁では **1** 上面から約 40cm 下まで確認している。T016 の西壁観察の結果、**1** 以北は急激に掘方が浅くなり、石垣や抜き取りが残存していないことからも ID323 基盤自体が北へ向かい高くなっていたものと考えられる(第 49 図①)。調査区西壁面においても SA001 は北面石垣に近いほど高くまで残存しており、基盤が高くなっていた様子が想定できる。北側は SA002(Ⅰ期)を、東側はⅡ期石垣台の掘方をそれぞれ切り込んでいる。

南西角石 **4** の西側の撹乱を除去したところ、新旧２時期の石垣掘方と **4** 下の根石を確認した（第 49 図②・第 50 図④)。根石は **4** と面が合わず、数 cm 張り出している。**4** には寛文期の築石の特徴である「江戸切り」と呼ばれる稜線加工が施され、同時期の石垣によく見られる板状詰石が載り、**5** と面を

合わせるための新しいノミ加工が入っている。根石は古い掘方内に位置し、**4** を含む新しい掘方内には、慶長期の築石の掘方ではあまり見られない、石材調整の際に出る戸室チップが多量に出土している。以上の点から **4** は寛文期の角石でほぼ間違いないと考えられ、掘方の新旧関係や面のズレ等から古い掘方と根石は河北門枡形創建時である可能性が高い。

築石の１の面は自然面、背は割加工であり、河北門枡形創建期で石垣編年２期の慶長期(新)の特徴を有する。その他の築石も同様の特徴を持つが、**10** は慶長期(新)に置かれた石の面を再加工することにより南側の改修された SX028（階段）と上手く接続させたものと思われる。**11**～**14** も寛文期に面は少し加工されているが、慶長期(新)から位置は動いていないようである。**4**～**14** の慶長期(新)石垣の背後は、面から約 400㎝ で SA002（Ⅰ期）を掘り込み、裏込めが詰められている。Ⅱ期やⅢ期の北面創建時掘方や、Ⅲ期の東面改修２掘方と比較するとかなり広い。また、掘方内の栗石は立っている傾向がある。

掘方内の **21**～**24** の周辺に焼土が広がっていた。これはⅡ期櫓台南面付近に見られた焼土がⅢ期枡形創建時に撹乱され西側に広がったものと想定しており、この焼土上に載る **21**～**24** の石材はⅢ期枡形創建時に置かれたものと判断する。**21** は慶長期（新）の角石で、正面左端には角稜線が確認出来、石尻端面にもノミ痕があることから、左面が大面、正面が小面となる完成材と思わる（⑤）。また、石下面には拳大の扁平な川原石が数石噛ませてあることから、この角石加工の石は捨石ではなく、正位に設置されたものであると想定しているが、特定の機能等は不明である。**22**～**24** も加工状況から同時期の石材と思われる。平坦に加工された面が上方を向いており、階段等段状の遺構を想定しているが、詳細は不明である。

Ⅲ期　創建時掘方（北面）　北面の石垣は２ヵ所アゼを残し断面図化を行いながら解体を進めた。北面石垣の築石は割石積で石垣編年２期である(詳細な解体石材観察は第４章参照)。第 50 図中、南北軸の３本の断面(3-5-08・3-5-10・3-5-13)には、石垣掘方が水色、水色に斜線の部分がある。上段から今回解体した範囲 C5 段の石垣は、少なくとも SD015 覆土を切る掘方（水色斜線部分＝改修１）までに収まり壁面が検出されている。青破線部分は SD015・SD016 の南北軸で確認された２条の溝状遺構であり、Ⅲ期枡形門創建時の遺構と考えている。両遺構掘方は石垣北面に対し直交し、東西壁面の立ち上がりには角度がある(3-5-09)。

SD015　櫓台北面ほぼ中央に位置し東西 300 ㎝、北面から 420 ㎝で南上端となる。3-5-08 地点で石垣改修１掘方に切り込まれており、その前段階の枡形創建時掘方と少なくとも遺構埋土下層部分は互層に堆積しており同時施工であったと考える。

SD016　櫓台北西隅に位置する SD016 は、東西約 300 ㎝、北面から 500 ㎝で南上端となる。検出した改修１石垣掘方下は未解体のため、北面石垣掘方と SD016 の新旧関係について詳細は不明あるが、T016 西・北壁面の SD016 覆土中で北面石垣裏込めと思われる栗石が観察できることから、同時施工の可能性が高い。SD015・SD016 とも明確な硬化面等は未検出であるが、櫓内のほぼ中央と西面外側という検出した位置や軸線からは、Ⅲ期枡形創建時の石垣構築の際の作業用通路の可能性も考えられる。SD016 の南端上端は西面石垣掘方に切られているが、北面石垣を最初に施工し、その後ニラミ櫓台石垣西面を積んだことによる工程差のためと推定している。

Ⅲ期　改修１掘方　北面の掘方の幅は、上部に遺構が構築された地点では広くなっているが、平均して北面から 280㎝ 位である。T016 西面付近では改修１石垣掘方は、緩やかに傾斜し下がっているが、T016 東面やニラミ櫓台中央の掘方の傾斜は急であり、約 200㎝ で 100㎝ 弱下がっている。

西面・南面では **2**～**9** の築石を含む石垣掘方を確認している。規模は、東西方向は、**2** の面から西へ 80㎝、東へ 150㎝ である。南北方向は、**7** の面から北へ 160㎝ である。**2**・**3** は石垣編年２期（慶長期頃）の特徴を残しているが、**2**～**4**・**6**～**10** の間に、それぞれ板状詰石が詰められていた。**9** には「六中？」

刻印を確認した。5～10の石材の特徴から慶長期(新)の石材を再加工し利用していると思われる。これらの築石の調整や、寛文期の石垣で多く見られる板状詰石が確認出来ることから、改修１掘方は寛文期である可能性が高い。

Ⅲ期　改修２　主にID323の東面で確認した。根石上半より不整形切石の布積みであり、石垣編年６期（宝暦～安永年間頃）の特徴を示す。掘方は面からほぼ一定の約230㎝で掘削されている。掘方内の栗石間には、戸室石を加工・整形した際に出るチップが多く含まれていた。近代にはこの東面の石垣上部を壊し、セットバックした石垣が新たに構築される等大幅に撹乱されていた。

以上の土層や築石や積み方の観察からⅢ期は以下のような変遷が判明している。

Ⅲ期　創建時石垣掘方　河北門枡形創建時と推定する。築石の特徴や土層堆積状況、出土遺物から時期は慶長後期頃と思われる。当該期の遺構としては、西・南面に残存していた築石、南西隅から北へ約５ｍ、東へ約８ｍの範囲で広がる掘方や北面石垣に直交する２条の溝状遺構SD015・SD016を確認した。SD015下では、一部北面石垣掘方も確認している。

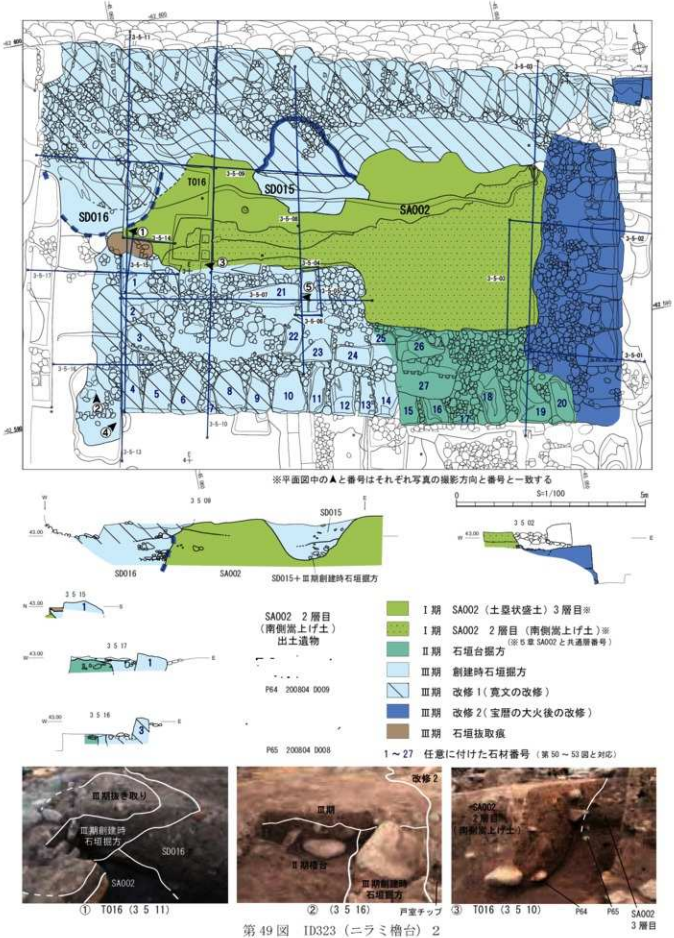
Ⅲ期　改修１掘方（寛文期）　築石や角石の調整や板状詰石を用いた積み方、新旧関係から寛文期と考えられる遺構である。ニラミ櫓南西隅と北面石垣でこの時期の改修の痕跡を確認している。

Ⅲ期　改修２掘方（宝暦期）　宝暦の大火後の改修に伴う掘方と想定している。ニラミ櫓台の東面については切石積みされた石垣が確認できた。北面では一ノ門部分を除き、宝暦の大火で溶着した鉛が上から垂れた状態を確認していることから、大火後の積み直しは行われていないと思われる。西・南面は板状詰石が残存していたことから、寛文期以降は改修されていないものと思われる。

第48図は、ニラミ櫓台の南北軸の堆積状況の模式図である。SA002を石垣内部盛土として利用し、北面と南面の傾斜部分を掘り込むことによって、Ⅱ期櫓台もニラミ櫓台も構築されていることが分かる。

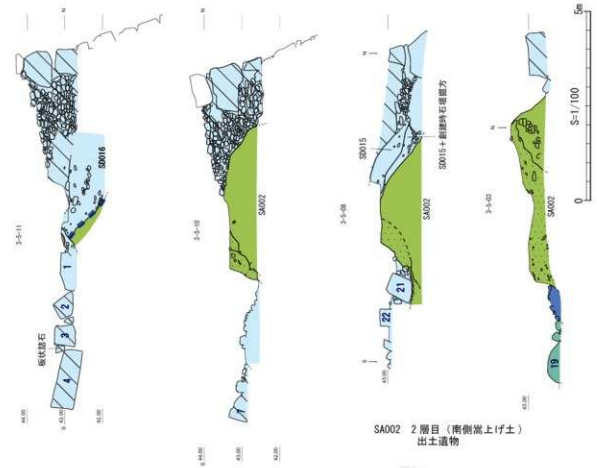
ニラミ櫓台南北軸　模式図（S=1/80）

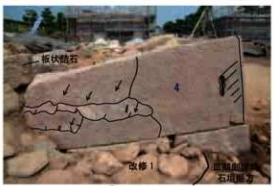
第48図　ID323（ニラミ櫓台）１



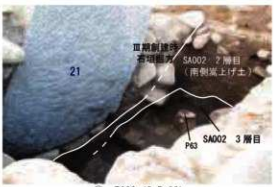
① T016（3 5 11）　② （3 5 16）　③ T016（3 5 10）

第49図　ID323（ニラミ櫓台）2



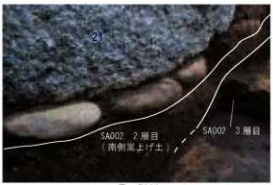


④　(3 5 11)



⑤　T020 (3 5 08)

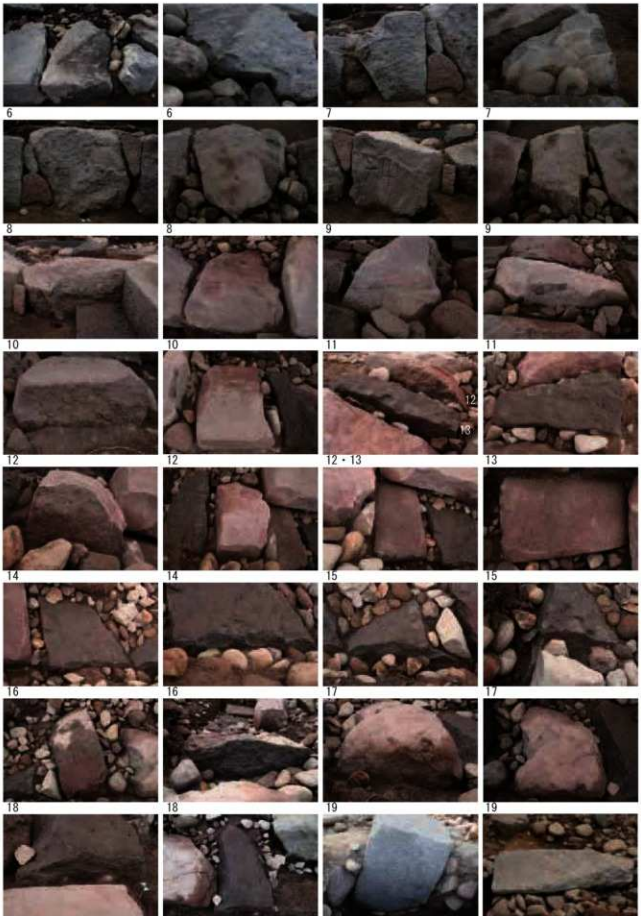
④



⑤　T020

第 50 図　ID323（ニラミ櫓台）３

第51図　ID323（ニラミ櫓台）4



第52図　ID323（ニラミ櫓台）5

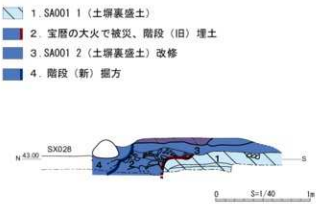
第53図　ID323（ニラミ櫓台）６

SX028（ニラミ櫓台南側階段）［第54図、資：第37・123・124図］

概要　ニラミ櫓台（以下、ID323）南側に取り付く階段で、グリッドはＥ３・４に該当する。栗石の痕跡から南面には石垣が積まれていたものと思われる。下段の２段が残存していたことから、位置と規模の復元根拠となる情報を得た。

規模・構造　直方体に加工された戸室石を数個並べて１段としている。階段は南北の軸で2.68m、蹴上の高さは26㎝である。細かいノミ調整が見られる切石で、角を幅1～1.5㎝斜めに落とす面取りの調整がなされている。これは、一ノ門の階段では一段分しか見られなかった加工である。雁木は大きなものでは長さ136×幅41（㎝）で、幅約28㎝が踏み面で、それより奥は上段の石材が載り、ずれ防止の段差が彫られている。階段付近は、ニラミ櫓台南側に広がる河北門Ⅲ期最終路盤（シルト質土）が剥がれており、路盤下に隠れる部分は表面調整が粗くなっていた。また、当時の路盤の上面の標高が西側から東側にかけて徐々に上がっていることが判明している。階段掘方の土層を観察し改修の痕跡を確認することができ、以下のような変遷を想定している。

時期　改修の痕跡から、現存する２段の階段は宝暦の大火以降に構築されたものと考えられる。しかし、階段の１段目は、石垣南西隅から4.72mに位置し、江戸後期の絵図、第４図-11「御城分間御絵図」（嘉永３年（1850））に比較し西側によっている。また、１段目の延長線上で土塀裏盛土の裾部と思われる整地面の立ち上がりを検出したが、これも絵図表現と一致せず、幕末頃に石段周辺が再整備された可能性も考えられる。雁木が接する3230Sは、創建当初から移動していない可能性が高いが、寛文期に面が調整され、さらに宝暦の大火後に接する部分が加工されていると思われる。



3-4-14　SX028　断面図（一部）

栗石検出状況　北から

SX028 掘方土層堆積状況　北西から

雁木石端部（面取り）加工状況　西から

第54図　ニラミ櫓台南側階段

第６節　河北坂

概要

河北坂は、河北門の北側に位置し、三ノ丸と新丸を結ぶ。坂の現状は、全長 60m、幅５～９ｍで坂上の標高が約 41.80m で坂下が約 33.90m と標高差は約 7.9m である。坂西側には湿生園が広がる。坂から湿生園にかけて３～６ｍの石垣が築かれる。この石垣は、坂上から北～ 26.5m続き、そこから新丸にかけては土羽となる。坂東側には、坂の中程まで三ノ丸からの石垣が続き、石垣の前面には芝生が広がる。坂上面から芝生にかけて 2.6m の石垣が築かれ、北にむかって低くなる。

近世の河北坂の構造を絵図から見てみる。近世初期（慶長～元和頃）の絵図には、坂上は平入り門で、坂下に右折れの門が描かれている。坂の東西には食い違いの水堀がある。近世前期（17 世紀後半頃）の絵図には、河北門は坂上の枡形門だけとなり、坂下の門は姿を消す。東西には食い違いの水堀が巡る。坂西側の段差は現状より短く、水堀までで、そこから新丸にかけては、ゆるやかな傾斜であったと考えられる。坂と水堀の間は石垣がある。坂東側の中程までは三ノ丸からの石垣があり、そこから坂下にかけては水堀がひろがる。坂から水堀の間は土羽が描かれたものと、石垣が描かれたものとがある。坂の東端には開渠の排水路が南北に、坂道には階段状の施設が描かれている。近世後期（19 世紀前半頃）の絵図には、宝暦の大火後の河北門の姿が描かれる。坂の規模や構造は前期とほぼ同じである。大きく変化した点は見られないが、坂東側と水堀の間が石垣で統一して描かれる。

平成 12 年（2000）に、河北坂において排水溝整備に伴い事前に発掘調査を行った。調査範囲は河北坂東側の東西 2.5m、南北 55m である。主に、近現代の坂の改変、河北坂盛土層とその変遷過程、石組暗渠、河北坂造成以前の遺構・整地層を確認した。

近現代の改変

近現代以降の盛土層は、坂の南北にわたって確認され、北側にむかって厚く堆積する。

明治以降、坂の下部では大幅な改変が行われる。坂の西側に広がる緩傾斜地を削平し、その時の土砂を利用して食い違いの堀を埋める。この結果、坂道は延長し、現状の長さとなる。坂西側に新たにできた段差は、土羽で仕上げられる。これら改変の影響は調査区西壁では確認できないが、東壁では、一ノ門北面から 45m付近で近代層が坂盛土層をカットし、そして１ｍ程盛土される。これは、坂が延長した際に行われた造成に関連する可能性がある。

近現代層は３ａ～３ｃ区にかけて一定量堆積するが、３ｄ区付近では現代層が厚く、近代層は確認できない。そして、３ｅ・ｆ区と坂下にかけて近現代層の厚みが増す。以上の特徴から、河北坂では、近代～現代にかけての改変を経て現状の姿になった。

SX212

規模・構造　３ｅ区中心付近で検出され、東西 120 ㎝南北 50～70 ㎝の溝状の掘り込み内に戸室石列を伴う遺構である。掘り込みの東西は調査区からさらにひろがる。掘込面は近代以降の盛土による削平を受け、不明である。確認面は 34.30m 程で地山である黒ボク層を掘り込んでいる。戸室石は３石確認され、間知石からなり、北側を正面にして東西に並ぶ。石の下半部は暗灰色粘土中に埋まり、石面の高さは不明であるが、中央の一石では、面は東西 50 ㎝、控えは南北 25 ㎝である。石の加工は、面にはノミ加工、控え上面にもやや粗いが加工を受けた痕跡がある。３石は密着せず、わずかに隙間が見られる。合端加工は確認できない。石尻付近では 10～20 ㎝の川原石を 25 個程検出する。

時期　遺構の直上には近代以降の盛土が堆積し、その一部が遺構埋土に混入している点から、近代以降に設けられたものと思われる。その後、抜き取られ、盛土される。

石列の性格については、検出状況とその立地から、裏栗石を伴う小規模な石垣もしくは石段の可能性が考えられるが、検出範囲が狭く確定することも難しい。

河北坂盛土層

３a～b 区の西壁で、深く掘り下げたところで、地山を検出した。地山の標高は、39.00m～37.60m で、そこから 1.3～1.5m 程坂盛土層が堆積する。西壁の堆積状況から、盛土層中に約 15 個の単位を確認する。それら単位の中で、33 層、17・18 層が南北に一連に続く。33 層は、南北にわたって厚く堆積し、２～５cm大の石を多く含み、大変固くしまる。また、33 層を境にして、下層は薄い層が何層にも堆積しているのに対して、上層は１層ごとに層をもつ。18 層は部分的に小石を敷き詰めるなどして硬化している箇所がある。以上の特徴から、33 層、17・18 層は路面整備に関する整地層である可能性が考えられる。

東壁は、黄褐色系の砂礫層を主体とする。坂の縁辺部に位置しており、坂中央付近の西壁で顕著に見られた版築状盛土層はなく、単位層が厚くなる。

盛土層中では、下記の遺構を検出した。

SK101

規模・構造　３ｄ区に位置し、直径 100 cm深さ 40 cmの円形を呈する土坑で、５～15 cmの礫が充満する。土坑の上部には淡灰色粘土、下部には暗灰褐色粘土が礫の隙間に詰まる。掘込面は近代以降の整地層に削平され、不明である。確認面は、36.35～36.18m で、坂盛土層の上部に位置する。

礫の隙間には粘土が詰まっていた。坂盛土層上層を切って構築されており、坂造成以前に遡る遺構ではない。

礫集中遺構　３ｃ区の西壁 49 層付近の平面では、５～15 cm大の礫が集中していた。用途は不明である。

SD101・102（石組溝）

規模・構造　２b～３a 区において確認し、川原石を組み合わせた溝状の遺構である。南北に並び、南側が SD101 、北側が SD102 である。２基とも、北東～南西を軸にしているが、SD101 が少し東に傾いている。川原石は底石と側石として置かれ、それに沿うように掘方が伴う。

SD101 は、底石は平均で主軸 26.5 cm短軸 30 cm、厚みは断面図から 10 cmである。扁平な面を上にし、石の両端に側石が置かれる。側石は平均で主軸 40.5 cm短軸 15.4 cm、厚みは断面図から 30 cmである。扁平な面が底石の上面に直立するように設置される。内法は 30～40 cmである。底石上面のレベルは、南西側で 40.75m、北東側で 40.66m と河北坂に向かって低くなる。底石上面と側石内面には黒色に変色した部分が認められる。

SD102 は、底石は平均で主軸 25.6 cm短軸 32.4 cm、厚みは断面図から 10 cmである。扁平な面を上にする。側石は平均で主軸 38.7 cm短軸 24.1 cm、厚みは断面図から 15 cmである。SD102 の側石は SD101 と比較してやや扁平さに欠ける。また、底石の上面ではなく脇に設置される。内法は 40 cmである。底石上面のレベルは南西側で 40.73m、北東側で 40.57m と河北坂に向かって低くなる。調査区西壁では、SD102 の掘方が確認され、24・25 層が相当する。掘込面は、抜取掘方（20～23 層）に削平され、不明である。

SD101・102 の前後関係について、調査区壁面では切り合いが確認されなかったが、桝形内の調査から、側石の形が扁平で底石上面に直立するものは古く、厚みをもった形で底石脇に置かれるものは新しいといった、側石の形状と配置方法の変遷が明らかとなっていることから、SD101 から SD102 への移行を推測することができる。

SD101・102 以外に、３c 区東壁で川原石列と凝灰岩製の板石列を検出した。川原石列は、９石検出し、石の大きさは断面図から南北 30 cmのものがほとんどで、50 cm大のものが１石あり、厚みは 10～15 cmである。東西は確認できるもので、30～40 cmである。９石は、いずれも上下面が扁平で、SD101・102 の構造を参考にすると溝状遺構の底石と考えられる。その上層に、凝灰岩製の板石が３石並ぶ。

板石は長方形を呈し、残りのよいもので断面図から南北 100 ㎝、厚み 10 ㎝、東西は東壁にかかり、確認できる範囲で 30 ㎝ある。

時期　SD101・102 と３ｃ区の川原石列は坂盛土層中に含まれる。凝灰岩製の板石は、検出した整地層の位置から、近代以降に設置されたと推定する。

川原石や凝灰岩製の板石を用いた溝状遺構は、枡形内においても検出される。枡形内での調査成果をふまえると、SD101・102 と３ｃ区の川原石列は石組溝と考えることができる。このうち SD101・102 については、絵図の描写から、暗渠であった可能性が高い。３ｃ区の川原石列は、絵図では開渠が描かれている箇所に相当する。凝灰岩製の板石は、石組溝の底石として機能していた可能性が高い。

河北坂造成以前の遺構・整地層

河北坂造成以前の遺構・整地層は、３d～f 区の範囲で確認する。３d・e 区の境付近の西壁では２～３㎝程の小粒の礫が広がる面を２面検出した。この面は東壁や東西断面でも確認できる。上面の標高は南から北にかけて 35.10～34.45m、下面は 34.40m 前後である。東壁では、造成以前の遺構・包含層を覆う整地土を確認する。１層ごとは薄く、灰～灰褐色系で、粘土・粘質土からなる。この粘土層の整地によって、新丸側の遺構は廃絶され、その上に河北坂の造成土が厚く盛土される。

SK102

規模・構造　３ｄ区に位置し、長軸 110 ㎝短軸 80 ㎝深さ 10 ㎝で、隅丸方形を呈する浅い皿状の遺構である。確認面は、35.10～35.00m で坂造成以前の礫面上面に相当し、掘込面は削平を受け不明である。埋土の上半には、骨片、炭粒、焼土を含んだ黒灰色土、下半は灰混じりで炭粒を含んだやや粘りのある灰褐色土が堆積する。遺構の東端からは銭貨（渡来銭）が出土した。

時期　坂盛土以前の面で確認したことから、造成以前に遡ることは確実である。遺構群の所属時期の詳細は、第８章を参照されたい。

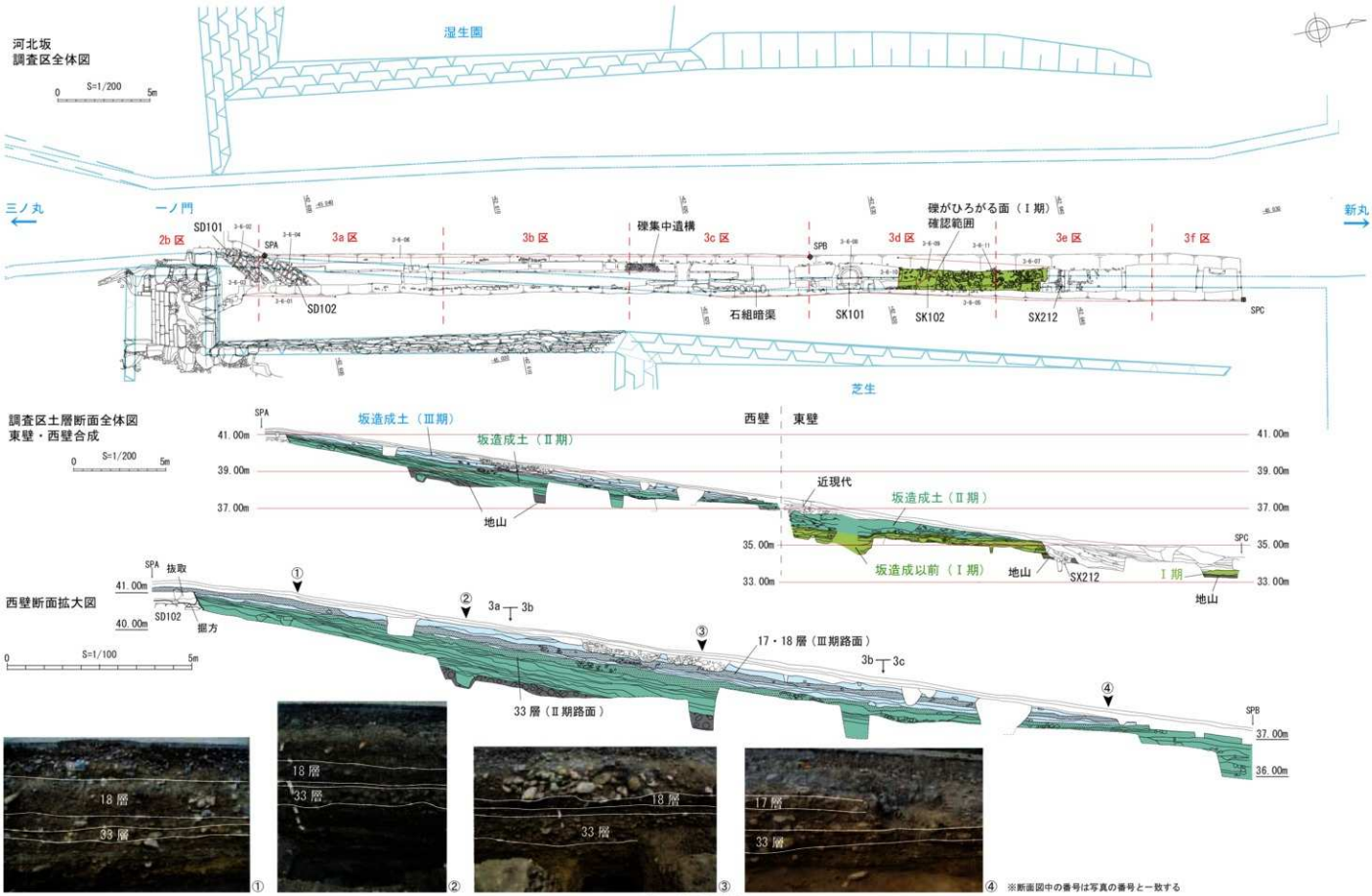
小範囲の調査であったため、本遺構の性格を特定することは難しいが、河北坂の造成を契機として、新丸の、少なくとも南部では大幅な土地利用の変化があったことを示している。初期金沢城の整備過程を跡づけるうえで、重要な意味をもつ遺構である。

枡形内と河北坂の対応関係

調査区内における堆積状況は、坂盛土以前と坂盛土層に大別される。枡形内でのⅠ～Ⅲ期との対応を見てみると、盛土以前がⅠ期、盛土層がⅡ・Ⅲ期に相当すると考えられる。

西壁盛土層中において 33 層、17・18 層、75～77 層が南北に一連に続く。33 層より下層は、薄い層が何層にも堆積し、枡形内のⅡ期版築状盛土と似ている。そのことから、33 層上面がⅡ期路面となり、17・18 層上面はⅢ期以降の路面と推測できる。75～77 層は、2000 年調査時に、枡形内調査区に対応する層があると考えられた。その面は、2006 年以降の調査からⅡ期整地層であることが明らかとなっている。

SD101・102 と坂盛土層中の路面との関係について、SD102 抜取掘方はⅡ期路面（33 層）を切り、Ⅲ期路面（17・18 層）に覆われる。Ⅲ期路面がⅢ期中のいつの段階の路面かが不明である。


河北坂
調査区全体図
S=1/200
0
5m
湿生園
三ノ丸
一ノ門
新丸
2b 区
3a 区
3b 区
3c 区
3d 区
3e 区
3f 区
SD101
SD102
SPA
SPB
SPC
礫集中遺構
礫がひろがる面（Ⅰ期）
確認範囲
石組暗渠
SK101
SK102
SX212
芝生
調査区土層断面全体図
東壁・西壁合成
S=1/200
0
5m
41.00m
39.00m
37.00m
35.00m
33.00m
坂造成土（Ⅲ期）
坂造成土（Ⅱ期）
地山
西壁
東壁
近現代
坂造成以前（Ⅰ期）
Ⅰ期
西壁断面拡大図
40.00m
36.00m
抜取
掘方
S=1/100
3a
3b
3c
17・18 層（Ⅲ期路面）
33 層（Ⅱ期路面）
18 層
33 層
17 層
①
②
③
④
※断面図中の番号は写真の番号と一致する

第 55 図　河北坂

2008年立会［第56図、資：第50図］

2008年の調査時において、河北坂上部において雨水ポンプ埋設に伴い立会調査を行った。調査地点はG1グリッドに位置し、頬当石垣西側の北面付近にあたる。範囲は東西約3.5m南北約4.0m深さ約1.6mである。

掘り下げたところ、その大半が大学時代の大型コンクリート枡の掘方埋土であったが、調査区南壁の一部に栗石層を検出する。栗石層は、10～20㎝大の石を主体としている。また、壁面より奥では空洞が多いこと、石と石の隙間に粘土が詰まっていないといった特徴から、地業による整地のためではなく、石垣の裏込めであると考えられる。その場合、検出した位置から、河北坂西面石垣の裏込めであると思われる。

調査区全体（北から）

調査区全体（南から）

調査区南壁と頬当石垣西側

南壁　栗石層

調査区　東～南壁

調査区　西～北壁

第56図　立会

第４章　石垣解体調査

第１節　概要

遺構の概要

解体対象となったニラミ櫓台北面石垣は、これまでは三ノ丸北面石垣と呼称されてきた石垣であるが、復元工事の一環としてニラミ櫓台石垣を新たに築き足すため、事前に三ノ丸北面石垣の歪みが著しい上部５段について解体修理を行うこととなった。最上部の一ノ門頬当石垣との境にニラミ櫓台北東角石とみられる１石があることから、上部２段についてはニラミ櫓台石垣の可能性があり、ニラミ櫓台石垣と一括して呼称した。慶長後期（金沢城石垣編年２期）に構築された割石積石垣である。現状の天端から最下段までは約 10mの比高差がある。

一ノ門東側・西側頬当石垣は、不揃いな石材を利用して積まれた切石積石垣で、宝暦～安永期（金沢城石垣編年６期）とされる。東西石垣の石積み部分についてはほぼ完全な形で遺存するが、階段部分については一部破壊されていた。東側・西側石垣の全体形状は左右対称をしており、天端幅で東西約 430×南北約 300×高さ（地上部）約 260（cm）を測る。近世段階では、両頬当石垣の間に高麗門があったが明治 15 年に老朽化のため矢来門に造り替えられ、金沢大学期や調査直前には石垣のみが残るだけとなっていた。

調査の概要

ニラミ櫓台北面石垣（三ノ丸北面）及び一ノ門東側・西側頬当石垣の解体調査を行った。石垣解体範囲ついては、事前に協議した上で、孕み出しやズレ、石材の破損が見られる箇所について行うこととした。一ノ門の個別石材は健全な石材が多く、積み直しの際に全石再利用された。ニラミ櫓では破砕した石材を新材に取り替えたが（C4-4）、補修可能なものは、接着剤および鎹により接着して再利用した（C5-14、C5-17、D0-1）。

解体調査の進め方と主たる作業工程及び分担については別表（第 11 表）で示すが、文化財担当者（石川県金沢城調査研究所）と解体・積直し工事担当者（和田石材）が一石ずつ立合い、積みの状態や石材の健全度等の記録を作成しながら行った。

第２節　事前調査及び上面遺構調査

3500N（ニラミ櫓台北面）［第 58 図］

ニラミ櫓台の上部は明治期の河北門の解体とともに大部分が撤去されており、調査時までは四十間長屋から続く三ノ丸北面石垣と同じ天端の高さに揃えられている。

解体調査前に石材の面部分の加工状況や調整、間詰石の状況、積み方の観察を行った。その結果、

①築石の面は自然面を残す割石が多いが、一部平滑にするための矢割痕がみられる。

②上部築石の一部では面部分にノミが入る。

③面部分の刻印は殆どが自然面に入る。

④間詰石は戸室石の割石主体の部分と円礫のみの部分があり、部分改修の可能性がある。

⑤基本的に割石積みで横目地は通らないが、横目地が通る段があり、改修境の可能性がある。

⑥面部分には宝暦の大火の際に付着したと考えられる鉛滴が見られた。

鉛滴については付着箇所や滴の流れた方向についても合わせて観察を行った。鉛滴は付着する位置が同じ高さの段に集中しており、火災の際に石垣よりせり出した屋根の軒先から落ちてくる鉛滴が付

着したものと考えられる。また、上から落ちてきた鉛滴が付着した位置も、築石の面・側面・上面に限定され、滴の垂れ方も縦方向のみであった。これらのことから宝暦の大火以前から築石の位置は移動していないことが判明した。大火後の改修を受けていないと考えられ、改修時期が宝暦の大火以前に限定できた。

石垣の上面遺構については、櫓台上部が明治期の破却に伴い撤去されており、現状の最上段にあたる解体範囲の第０段も明治期以降に積まれた地覆石である。今回の解体調査でも記録は作成したが、本報告では詳細については触れていない。櫓台上部の破却後は陸軍の下士官集会所が建てられており、調査時には建物基礎や凝灰岩製の側溝、集水桝などが確認された。下士官集会所は金沢大学期に入っても引き続き大学施設として利用されていたが、大学移転後に撤去された。調査直前までは周辺は緑地となっており、石垣背後は表土を除去後すぐに裏込め栗石が見えるような状態であった。表土中には「尾山食堂」と銘の入った金沢大学期の食器や、釉薬瓦などが含まれる。

3241・3231・SX026・SX027（一ノ門東側・西側頬当石垣・一ノ門東側・西側階段）

河北門一ノ門は、石垣台とその上に置かれた土塀へと向かう階段からなる。調査前は東西両石垣部分が遺存し、西側石垣の階段は明治以降に上段部が破壊されているが、河北門では地上部分に遺存した数少ない遺構である。調査着手前には西側石垣の階段部分と南面の一部が埋められた状態で、階段部分には大量の釉薬瓦が投棄されていた。東側は階段の最下段のみ埋没した状態であった。

解体前に石垣の表面観察を行い、以下のような所見を得た。

①一ノ門の柱痕跡が石垣表面に残り、ホゾ穴がみられる。

②石垣表面には鉛や煤が付着している。

③最上段にはチキリ穴があり、鉛チキリの遺存する箇所もある。

④東側の階段部分の残存最上段に凝灰岩が１石使用されている。

一ノ門は享保年間に改修記録があり、その後宝暦の大火後の河北門再建時に改修されたと考えられる。石垣の表面に鉛が付着しているということは、宝暦の大火後の改修では、旧材を利用し積み直した可能性が指摘できる。

柱痕跡やホゾ穴については、明治 15 年に陸軍により、一ノ門の撤去及び、矢来門の設置が申請されており、矢来門設置の際つけられた可能性もある。

石垣の上面遺構については、表土層直下に裏込め栗石層を確認した。表土層からは釉薬瓦やガラス片などが出土した。東西どちらの階段も最上段は既に撤去されていた。

絵図によると石垣の上に土塀が乗っていたことになるが、その痕跡等は確認できなかった。

第３節　解体調査

3500N（ニラミ櫓台北面）［第 60・61 図］

石垣を解体するにあたりまず先行トレンチを設定し、裏込め栗石を人力で解体しながらアゼを残して裏込め及びその背面の観察を行った。また、解体時には石材の上下の接点の状況や間詰石・介石の状況なども合わせて観察し、写真・ビデオに記録した。

解体調査により、ニラミ櫓台北面石垣は背面の土との一体施工ではなく石垣掘方をもち、その掘方は一定の幅ではない、という点が明らかとなった。

改修痕跡　改修痕跡の詳細については第３章第５節を参照されたい。掘方は２時期が確認されており、Ⅲ期のニラミ櫓台石垣構築を創建とし、改修についても述べている。

改修：背面の盛土層を掘り込んでおり、掘り込み内は栗石で充填される。創建時の溝状遺構の埋土も

掘り込む。おおむねC5段まではこの掘方に含まれる。

創建：背面盛土層を掘り込む2条の溝状遺構を検出し、この遺構埋土はC5段以下で栗石層と入り組みながら鋸歯状に堆積する。

以上の所見と調査前の石垣表面観察の所見とを対比してみる。

北面石垣の表面観察からは、C4段とC5段の間に横目地が入るようにも見える。解体範囲の築石面はほとんどが自然面で、ランダムに割面がみられる。第1～4段についてはその傾向がみられるが、第5段ではC5-3からC5-15までが自然面となり、石積みをみても、この段で一旦布積みの傾向がみられ、上部では再び積みが乱れる。この観察結果と改修とした掘方が対応すると推定できる。

創建については、どこまで掘方が掘り込まれているかの確認はできなかったが、間詰石が戸室割石主体から、円礫主体の部分に標高 39.00m前後で変化する。この変化は、ニラミ櫓台石垣を構築した時期とも対応する可能性が高い。

北面石垣の円礫主体の間詰石の部分については、ニラミ櫓台が構築される以前、河北坂の整備に伴ない、順次石垣築造も行われていったと推測しており、北面石垣もその際に施工されたと考えられる。つまり、三ノ丸北面石垣とニラミ櫓台石垣の創建は時期差があった可能性が指摘できよう。

また、面が破損した石材を再利用するための修理の方法についても今回の調査で確認した（C4-1・C5-1）。本来の築石の面部分が破損したため、改修時に約10㎝の厚さの板状石材を背後の築石石材と鉛チキリで接着させ前面にあてている（第61図）。

石材法量　ニラミ櫓の解体石材について石材法量の計測を行った。ただしC0段については、明治期以降に軍隊によって設置された地覆石のため、観察自体は行ったがここでは対象範囲に含めない。控え長や築石ツラ面積についてもC1段以下とは明らかに異なる。

築石控え長は、最も短い控えで50㎝、最長で145㎝、平均値は115㎝を測り、C1段から5段にかけて控えが長くなる。同様に築石ツラ面積、築石重量についてもC1段から5段にかけて徐々に増加する。以上のことから、基本的には石材法量の増加と段が下になることは比例している。今回の計測値では、控え長よりもツラ面積に関して下段になる程数値が大きくなる傾向が見て取ることができた。

ニラミ櫓台の石材の背面傾斜角については10°前後が多く50°以上も2石含まれるが、これは割石材のため計測箇所によるバラつきと考えられる。

裏込め　石垣一段ごとの解体時に裏込めも合わせて解体を行ったが、その目安としては、解体対象段の石材が浮いた状態になるまでとした。これは石垣を積む工程を想定した場合、一段毎に作業面となっていた可能性があると予想できるからである。川原石が主体で、全て人力で撤去を行った。

第1段から第2段の裏込め解体時に、栗石の間に大量の土が堆積する状況を確認した（第60図①）。これは石垣背後に塀などの屋根が無いこと、タタキ面等でもないことから、雨水と共に栗石の隙間に流れ込んだと考えられる。石垣の変形の根本原因とはいえないが、変形を更に促す一因となったといえよう。介石は人頭大や、それよりやや大型の自然石が使用されていた。

Aトレンチ内（T016）の裏込め栗石についてはサンプル的に取り上げ、法量を計測した。その結果、裏込めは川原石が多く、ごく少量戸室石の剥片が含まれていた。法量平均値では、第2段裏込めよりも第5段の裏込め栗石のほうがより大振りになることが明らかとなった（第6表）。

3241・3231（一ノ門東側・西側頬当石垣）

一ノ門頬当石垣については、河北門枡形創建期の様子を示す遺構・石材については確認されなかった。いつ頃から切石積となったのかは不明であるが、享保年間に頬当石垣の修理記録がある。

解体調査において、石垣内部の裏込めは栗石詰めで盛土等の部分が無い石垣であることが明らかとなった。

改修痕跡　改修痕跡については東西の石垣で若干違いがみられた。西側石垣は一部根石を含めて改修しており、東側石垣は根石までは含まない。

【西側】　築石の押石として雁木石の端材が多く見られ、それらは鉛が表面に付着することから、宝暦の大火後に使用されたとみられる（第 60 図②）。築石部分でも下記のような改修範囲を示す状況を確認した。

・B8-1（根石）上面に鉛滴が付着している。この根石の上段は角石が乗り、石積み自体が大きく変化していなければ、火災時に鉛は付着しない位置である。この１石に関しては現在の位置とは別の箇所で使用され、宝暦の大火後の改修で根石に据えられたとみられる。

・B7-7（角石・根石）は上面が平坦ではなく、この段差によって B6 段の上端が平坦となっている。この段差周辺の加工痕には煤が付着していることから、宝暦の大火前からの合端加工であることが分かる。少なくとも、B6 段隅角部を含めて、ほぼ同じ位置で再利用されたことが判明した。

【東側】　西側石垣のような明確な改修痕跡は見られず、押石として雁木石の端材が多用される状況も見られなかった。

・A8 段（根石）と A7 段の西面でそれぞれの面の通りにズレが生じている（第 60 図③）。

・A7 段石材の側面の煤等の被熱痕跡を切るノミ痕がみられる。

被災した石材を微調整しながら積み直したとみられ、西側石垣ほど明瞭な根拠はないが、根石部分を残して、地上部の積み直しを行ったと考えられる。

裏込め　裏込め内部は栗石主体の層と、戸室石剥片主体の層が互層を成していた（第 60 図）。一段ごとに栗石層と栗石と剥片が混じる層が堆積することから、以下のような作業工程が推測できる。

・築石設置→裏込め栗石を築石半分位まで入れる→上下の築石の合端を調整→上段の築石を設置

この工程の上下築石の合端を調整する際に、現地で大量の剥片が出来る。その剥片を裏込め内に廃棄したため栗石層と互層をとなったと考えられる。これは、一ノ門の石垣が切石材である為で、ニラミ櫓や、二ノ門の創建期掘方内では見られない。また、二ノ門南側石垣台西面の前面において確認した、戸室石剥片の廃棄坑をみるように、全ての石垣で同様な利用がされたわけではない。

また、築石と階段の雁木石は背面の堆積状況が一連であることから一体施工であることを確認した。AG7-1 については石材が他と異なる凝灰岩製である点や、最上段であることから修理可能なため、一体施工とは言えない。

裏込め石については、一ノ門西側でサンプル的に法量を計測した。ニラミ櫓台と異なり、川原石と戸室石剥片の量に差はほとんど見られない。また、長さと幅についても両者にあまり差は見られないが、厚みは剥片が薄く、その為重さにも差が生じている（資：第６表）。西側石垣においては破損した雁木石等が東側石垣に比べて多く含まれていた。

石材を解体した際に、上下の石材の間に小鳥や敷金（鋭形・楔形）が見られたほか、径５mm 以下の細かな礫が一面に広がっている場合があった。小鳥や敷金については面の石口を合わせるための微調整を目的として、介石と同様な性格をもつと想定するが、細かな礫の性格については不明である。

敷金については鋭形４点、楔形５点を確認した。いずれも石尻付近で使用され、角石や隅角部に集中するようにも見える。頬当石垣東側より西側でより多く使用される（第 62～64 図）。

その他　B7-10 の左側面にはチキリ穴とみられる加工痕がみられる。改修前の天端石の可能性があるが、現状のチキリ穴と比べると形状が異なること、天端石としては面の加工が粗い点など疑問が残るが、宝暦以前のチキリ穴の形態であった可能性もある。

また、頬当石垣東側で A5-9・A5-10 と A6-9 の間で、銭貨（いずれも寛永通宝）が３点出土した。３点ともほぼ同じ位置で出土しており、また敷金としては用を成していない。隅角部周辺から出土している点からも、偶然入ったものではないと思われる（第 62 図）。

第11表　石垣解体作業の手順及び担当

	解体調査の手順	担当
1	石材、栗石上面の清掃	調査
2	解体石材への番付（墨汁で筆書）　［番号管理］　写真①	調査
3	解体石材の上面傾斜角計測	調査
4	写真撮影　石材上面の状況　栗石取り外し前	調査
5	石垣断面図の補足と栗石の取り外し （栗石は段ごとにサンプリングしサイズ・重量を計測）　写真②	調査
6	空中写真測量	調査
7	写真撮影 石材１石ごとに、解体直前の状態を撮影（正面、上、後、側面等）	調査
8	石材の取り外しと写真撮影 ・石材同士の接点をマーキング ・石材調書の作成	 工事・調査 工事
9	クレーンによる解体　写真③ ・１石ごとに石の上下の接点を確認 ・解体石材の下面と下段の状況を写真撮影	 工事・調査 調査
10	取り外し直後の写真撮影 取り外し直後の状況（下面の詰石、介石、敷金等）の写真撮影	調査
11	詰石、介石等の写真撮影	調査
12	詰石、介石等の取り上げ	調査・工事
	１へ戻る	

写真①

写真②

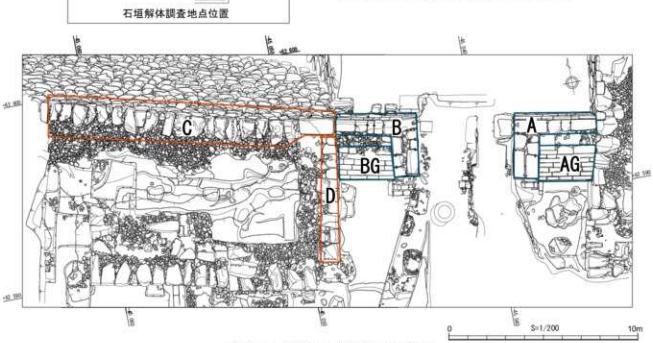
写真③

写真④

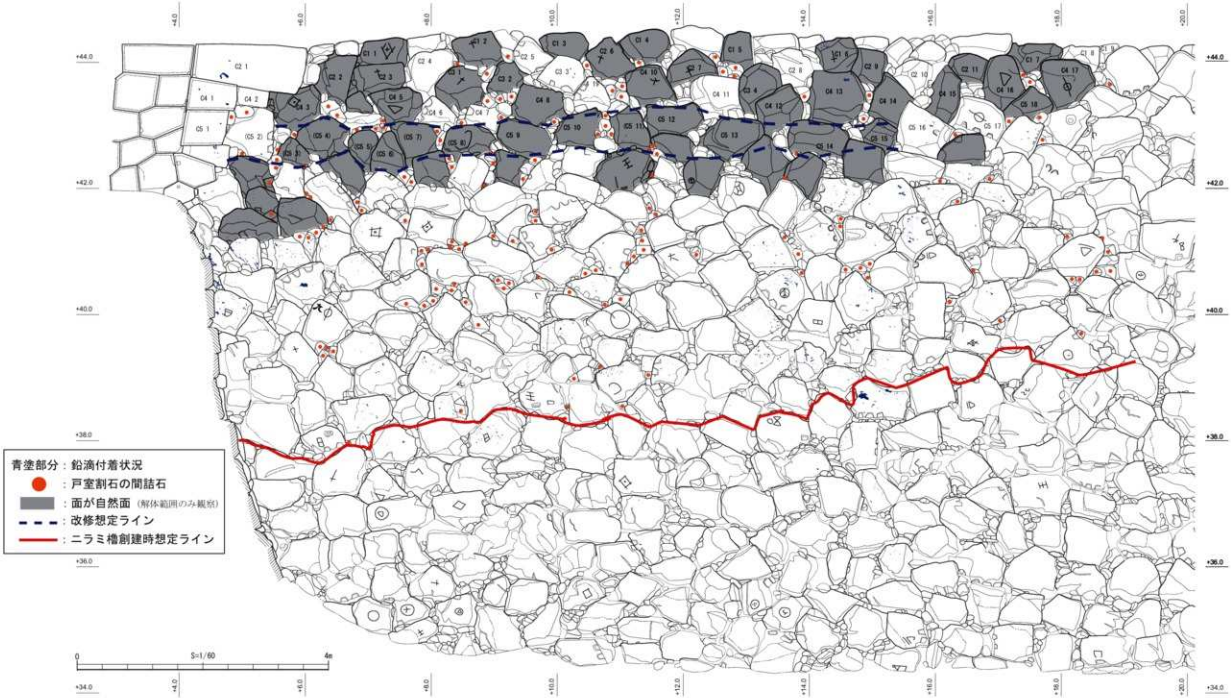
	解体石材の調査の手順	担当
①	石材の石置場への移動（保管）	工事
②	石材の洗浄	工事
③	石材記録作成	
	・石材の調整観察・カード作成、写真撮影　写真④ ・工事写真撮影	調査 工事

石垣解体調査地点位置

石垣解体箇所呼称	遺構名
A　（一ノ門東側）	3241
AG（一ノ門西側石段）	SX026
B　（一ノ門西側）	3231
BG（一ノ門西側石段）	SX027
C　（ニラミ櫓台石垣北面）	3500N
D　（ニラミ櫓台石垣東面）	3230E

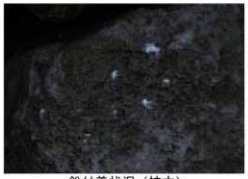


第57図　解体石垣位置及び呼称図



鉛付着状況（点線範囲に付着）

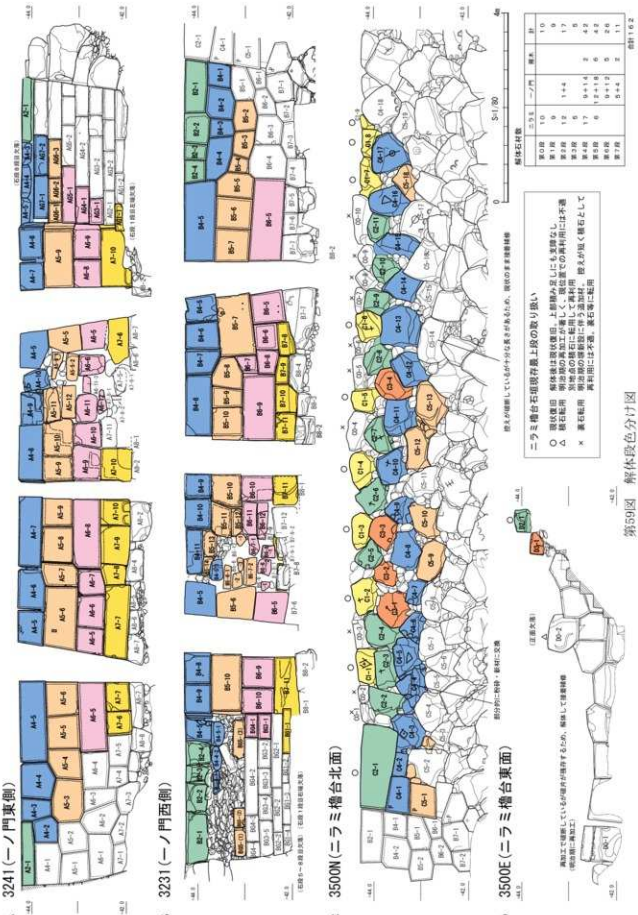
鉛付着状況（白い斑点状のものが鉛滴）


鉛付着状況（拡大）

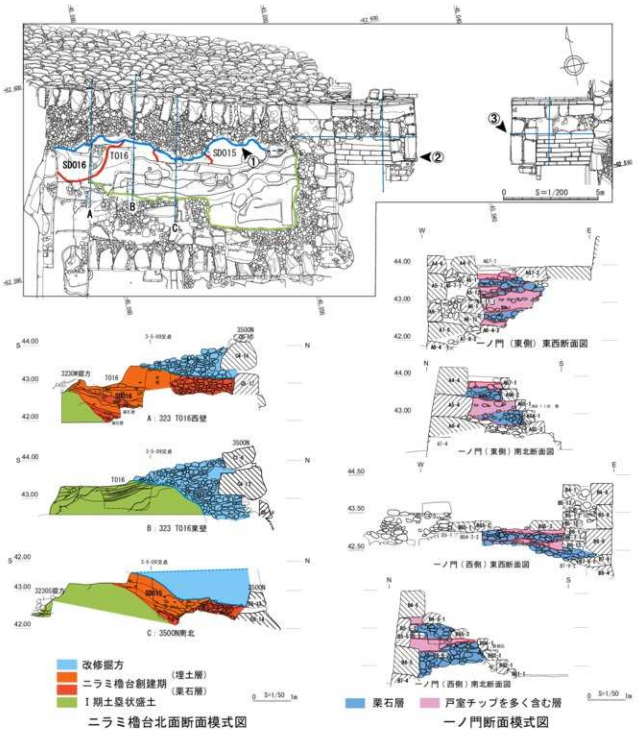
間詰石（戸室割石）

間詰石（川原石）

第58図　ニラミ櫓台石垣北面観察状況



第59図　解体段色分け図



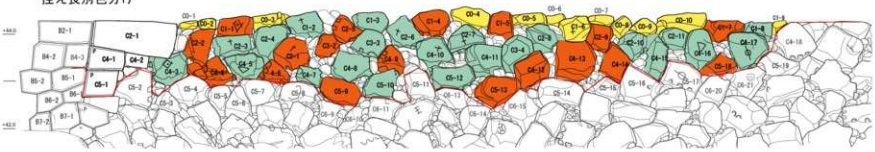
① 裏込め目詰まりの状況　② B8-1 上面に鉛が付着する　③ A7段とA8段の西面のズレ

※平面図中の**A**と番号はそれぞれ写真の撮影方向と番号と一致する

第60図　石垣解体調査断面模式図及び解体状況

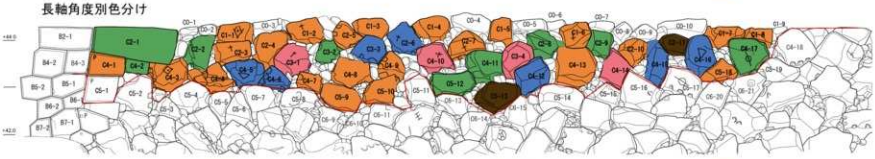
C　3500N（ニラミ櫓台北面）

控え長別色分け

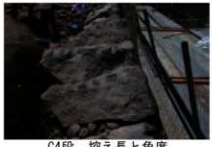


90cm未満
90cm以上～120cm未満
120cm以上

長軸角度別色分け



C4-1　板状石材を使用

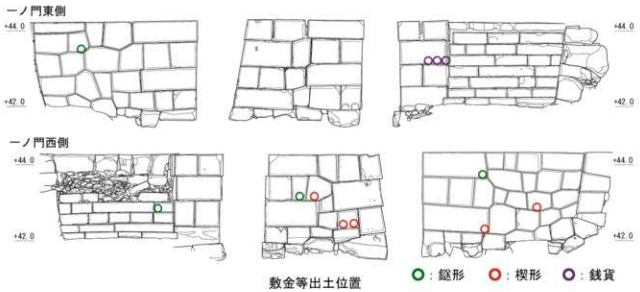


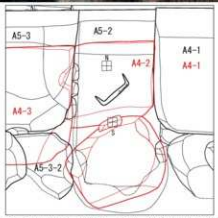
C4段　控え長と角度

0～9°
10～19°
20～29°
30～39°
40°～

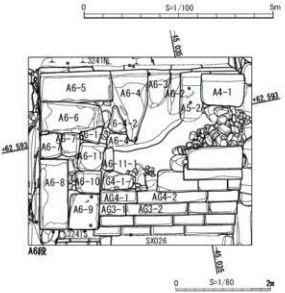
0　S=1/80　4m

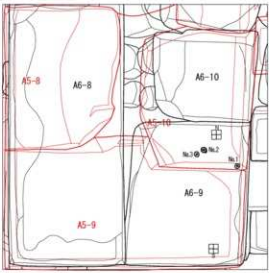
第61図　ニラミ櫓台北面　控え長別・長軸角度別　色分け図





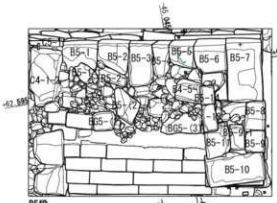
ノ門 東側 A4 2（A5 2） 敷金（鎹形）出土状況

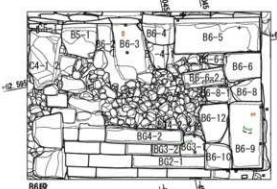




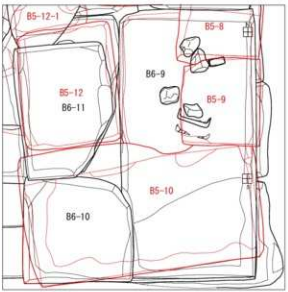
ノ門 東側 No.1；A5 9（A6 9）・No.2, 3；A5 10（A6 9）
銭貨出土状況

第62図　一ノ門 東側 金属出土状況

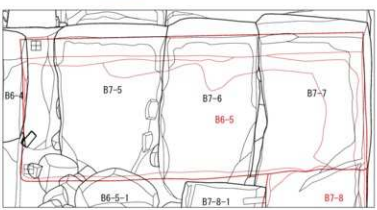

B5段
B5-1
B5-2
B5-3
B5-4
B5-5
B5-6
B5-7
B5-8
B5-9
B5-10
B5-(1)
B5-(2)
B5-(3)
B5-(4)
C4-1
-62.595


B6段
B6-1
B6-2
B6-3
B6-4
B6-5
B6-6
B6-8
B6-9
B6-10
B6-12
B6-(2)
B6-(3)
B6-(4)
B6-(5)
B6-(6)
B6-(7)
B6-(8)
B6-(9)
B6-(10)
B6-(11)
B6-(12)
B6-(13)
B6-(14)
B6-(15)
B6-(16)
B6-(17)
B6-(18)
B6-(19)
B6-(20)
B6-(21)
B6-(22)
B6-(23)
B6-(24)
B6-(25)
B6-(26)
B6-(27)
B6-(28)
B6-(29)
B6-(30)
B6-(31)
B6-(32)
B6-(33)
B6-(34)
B6-(35)
B6-(36)
B6-(37)
B6-(38)
B6-(39)
B6-(40)
B6-(41)

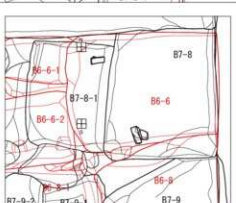
ノ門 西側 B5 8・B5 9（B6 9）
敷金（楔形・鎹形）出土状況



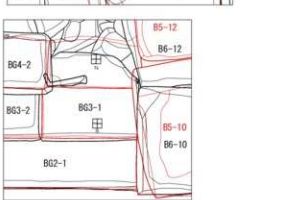
ノ門 西側 B6 5（B7 4）敷金（楔形）出土状況



ノ門 西側 No.1；B6 6（B7 8 1）
No.2；B6 6（B7 8）敷金（楔形）出土状況



ノ門 西側 BG4 1（BG3 1）敷金（鎹形）出土状況



第64図　一ノ門 西側 金属出土状況

第４節　石材調査

調査の方法

解体石材について、石材各面の観察を一石ずつ行った。解体石材を洗浄後に、法量、加工痕、付着物や変色状況などを中心に行った。一ノ門（A・B）は、面部分だけでなく側面などにも多くの調整痕があり現地で作成した観察カードをもとにした、石材カードを資料編に掲載した。ニラミ櫓台北面・東面については観察表に掲載した。

ニラミ櫓台北面および東面と、一ノ門東西石垣と階段部分の 162 石の解体を行った。うち、石垣石は 147 石、階段部分の雁木が 15 石である。また、築石の押石や介石など枝番号を付けて解体したものを含めると総数は 202 石である。

石材観察［第 65～67 図］

以下では解体石材の観察所見について項目ごとに概要及び特記事項について述べていく。詳細については観察表と観察カードを参照されたい。

石材　石材は 162 石のうち４石を除いて、全て戸室石であった。赤戸室が 39 石、青戸室石が 83 石、ニタリと呼ばれる中間色が 27 石となる（第 65 図）。圧倒的に青戸室が多く使用されるが、石垣別では、一ノ門では青戸室が赤戸室とニタリを合わせた数量の倍の数が使用される。一方ニラミ櫓では青戸室が若干多いが、大きな差はなく、石垣が構築された年代・場所または格式によって色が使い分けされた可能性も考えられる。一ノ門もニラミ櫓台も石材の色と隅角部や築石といった部分の使い分けは明瞭には認められない。戸室石以外の石材が使用されたのは、階段部分に隠れる築石もしくは押石、階段の雁木石であった。雁木石には緑色凝灰岩が使用されていたが、１石のみであったことと、箱型の側溝の材を転用していたことから、後世の部分修理等の可能性がある。

調整　ニラミ櫓台の石材は割石材のため、ノミなどの細かい調整は基本的に入らない。ただし面部分が破損した石材補修のために使用された板状石材（C4-1・C5-1）と角石（C2-1）については、切石材が使用されていることから、ノミとタタキ痕がみられた。C2-1 については、明治期以降に、北面石垣天端と高さを合わせるため、石材の上面の一部を水平になる様にカットされる。また、面よりも側面に割面・自然面を問わず部分的にノミが入ることがあるが、ごく一部である。C1 段の石材で見られる場合は、ニラミ櫓台の改修時もしくは明治以降の再加工をうけた石材の可能性がある。

一ノ門の石材ではノミとタタキ痕に幾つかの種類があることを確認した。調整は基本的に、面は内側を細かいノミで仕上げ、周縁はタタキ仕上げする。他石と接する側面は、内側を連続しない丸い滴状のノミ痕で一定方向に粗く仕上げ、これを切るノミ痕は細い滴状のものが連続し、点在することが多い。面側の１辺はタタキ仕上げする。後面は太く粗いノミで仕上げる場合や、切石でも自然面を残したままの場合がある。調整痕の観察により、宝暦の大火で付着した鉛や煤と調整痕に切り合い関係があることなどが明らかとなり、その観察所見は一ノ門の改修履歴や改修範囲を探る上で参考となった。

煤・鉛痕跡　ニラミ櫓台北面と一ノ門頬当石垣に付着した煤・鉛痕跡の観察から判明したことについて述べる。

ニラミ櫓台の一部で板状石材（C4-1・C5-1）が面部分の補修として使用される、C4-1・C5-1 背後の石材（C4-1-2）前面には鉛痕があるが、C4-1・C5-1 の裏面にはスス・鉛痕跡はみられないことが判明した。隣接する B4-1、B5-1、B6-1 はいずれも板状石材との合端があるが、これが鉛痕跡よりも以前のノミ痕であった。一方、C5-1 の下の石材と左隣（C4-2 の下）は、それぞれ C5-1 を受けるための合端があるがこれを造るノミ・タタキ痕は鉛痕よりも新しい。

以上のことから板状石材については、合端の調整は古いものと新しいものが見られ、かつ板状石材

自体に煤・鉛痕跡が見られないことから、C4-1・C5-1 は宝暦火災後に据えられた新材で、それ以前は別の板状石材が使用されていた可能性がある。

一ノ門の石材については、その殆どに鉛もしくは煤が付着していた。付着する箇所は正面および側面が多いが、底面や上面などにも見られることがあり、石材間の石口が開いたようなところから流れ込んだような状況で付着する。鉛滴については、面部分では改修の際に鉛を削り取ったように見え、鉛痕跡はあまり残らない。側面やその他の面では、部分的にノミが入るが、鉛滴は残る場合が多い。煤に関してはいずれの面でも残る。見える面と見えない面ということを意識しての調整と想定できる。石材の各面には、煤・鉛痕跡を切るノミや周囲ハツリの痕跡は見られるが、全て新鮮な石材面がみえる状態ではないことから、火災前と大きく石自体の形を変えるような調整・加工は行わず、他の石材との合端を取るために若干ノミを入れた程度と考えられる。B5-11 だけは、B5-13 と接する面で面のタタキが切れ、上面の煤も無いため、この面は積み直しの時に大きく再加工したとみられる。

煤・鉛痕跡は一ノ門石垣ではどの面にもみられるが、特に北面と通路側は痕跡が多い。火災当時の建物などの配置が関係していると考えられる。

以上の鉛痕や煤について、その原因は宝暦の大火としているが、一ノ門に見られるような石積みについては、これまで宝暦大火以降～安永期（金沢城石垣編年６期）に採用されたと考えられていた。今回の調査で鉛痕や煤がこれらの加工痕を覆っていることや、この石材を大きく切る様な調整痕も見られないことから、河北門では宝暦の大火以前に上記の石加工や石積みが採用され、また、基本的に旧材をその場所で再利用した可能性が高くなった。最下段の石材（B8-1）に鉛が付着していることや、B5-11 のように石の形を変えている例があることからも、若干の場所の入れ替えがあったと見られるが、いずれも大きく石の形を変えていない点や、B7-7 と B7-8 の例からも、ほぼ同一箇所での再利用が主であったと考えられる。

宝暦以前の修理は、享保 17 年（1732）の頬当石垣の修理の記事が確認されており、採用の段階として享保年間が考えられる。

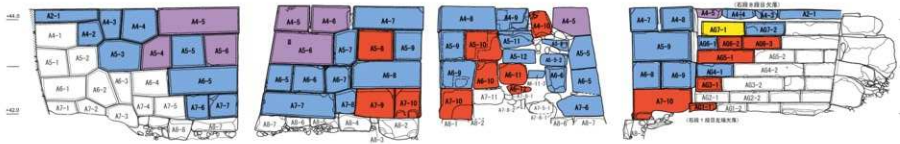
矢穴痕跡　各矢穴痕跡の上長軸と下長軸、上端から下端までの深さを計測し、それぞれについてどのような傾向がでるかグラフにした。一ノ門西側石垣については矢穴痕跡の法量は２分した。これは、断面が方形になる矢穴痕跡と、Ｖ字と呼んでいる三角錐を半裁したような矢穴痕による差である。方形矢穴痕については築石の割加工に、Ｖ字矢穴痕については裏込めの押石等の小割に使用される。また、Ｖ字矢穴痕は宝暦の大火以降の割面でみられることから、時期的にも新しいものであろう。

一ノ門東側やニラミ櫓台ではおおむね上長軸が８～12、下長軸が５～８（cm）に集中する。深さについては、８～10（cm）に多くみられるが、上下長軸ほど集中しない。最大の大きさで上長軸 18×下長軸 11×深さ 11（cm）となり、ニラミ櫓の小型のものは、近代以降に再加工した際の矢穴痕である。

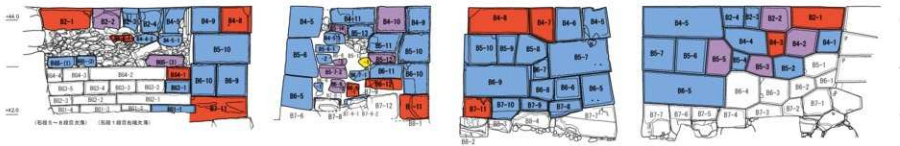
刻印　ニラミ櫓北面石垣において 11 種類、17 石で確認した。ただし、ここでは解体石材のみを対象としているため、北面石垣全体では数量や種類は変わってくる。その中で面に刻印がつけられたのは 14 石で、総て自然面に付けられる。側面は３点で、自然面１、割面２である。側面の自然面の刻印は C4-9 で（第 67 図⑥）、割面は C0-3 と C4-7 でみられる（第 67 図⑤）。

刻印の種類で最も多いのは「十」で（第 67 図①）、その他の刻印は「△」が２点でそのほかは１点ずつである。また刻印の大きさは直径約 10～12（cm）が中心で、最大でも直径 16（cm）程である。

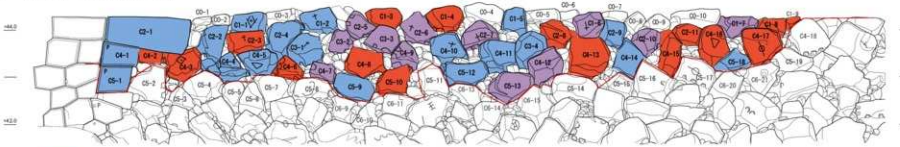
A　3241（一ノ門東側）



B　3231（一ノ門西側）



C　3500N（ニラミ櫓台北面）



青戸室	A（一ノ門東）24石・B（一ノ門西）33石・C（ニラミ櫓台北）19石・AG（一ノ門東階段）３石・BG（一ノ門西階段）４石			
中間（ニタリ）	A（一ノ門東）３石・B（一ノ門西）10石・C（ニラミ櫓台北）12石			BG（一ノ門西階段）１石
赤戸室	A（一ノ門東）９石・B（一ノ門西）８石・C（ニラミ櫓台北）16石・AG（一ノ門東階段）５石・BG（一ノ門西階段）１石			
その他	B（一ノ門西）１石			AG（一ノ門東階段）１石

0　S=1/80　4m

第65図　一ノ門東側・西側頬当石垣・ニラミ櫓台北面　石材色分け図

赤戸室

青戸室

中間（ニタリ）

凝灰岩（箱型溝を雁木石として転用か）

その他の石材（押石や介石など裏込めで使用）

【石材】

切石材の合端加工

切石材の面加工

太いノミ痕

火災痕に覆われるノミ（太）

火災痕を切るノミ（太）

細いノミ痕

火災痕に覆われるノミ（細）

火災痕を切るノミ（細）

【調整】

溶けた鉛が付着した雁木石（裏込めに転用）

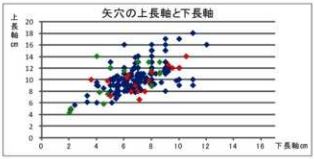
煤が付着した側面

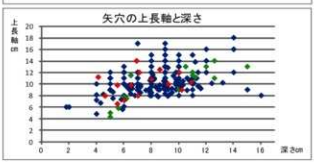
グレーの付着物（火災痕か）

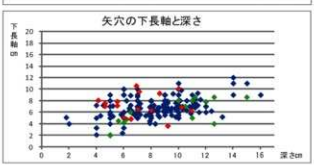
火災痕に覆われた面

【煤・鉛痕跡】

第 66 図　石材調査（石材、調整、煤・鉛痕跡）







第 12 表　矢穴計測表
◆Ａ東側頻当石垣
◆Ｂ西側頻当石垣
◆Ｃニラミ櫓

方形矢穴（C4 9）

Ｖ字矢穴

①「十」(C2 3 ほか)

②「△」(C4 5 ほか)

③「⊞」(C4 3)

④「◈」(C1 1)

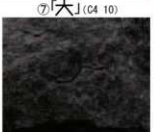
⑤「占」(C4 7)

⑥「◬」(C4 9)

⑦「大」(C4 10)

⑧「⊕」(C4 17)

⑨「⧖・⋀⋀」(C5 9)



⑩「⋔?」(C5 10)

刻印	点数
十	６点
△	２点
⊞	１点
◈	１点
占	１点
◬	１点
大	１点
⊕	１点
⧖	１点
⋀⋀	１点
⋔?	１点

第 67 図　石材調査（矢穴・刻印）

第５章　河北門枡形以前の遺構

第１節　概要

河北門枡形以前の概要

近世後期の河北門の姿を明らかとするため、調査区内に入る深い撹乱壁面の精査を行う中で、河北門枡形築造以前に遡る遺構が存在することが明らかとなっていった（以下、下層遺構と称する）。下層遺構は周辺の整地層との切り合い等から２期の変遷が認められ、第３章第１節で述べた時期区分のⅠ・Ⅱ期に該当する。それぞれの遺構の特徴は以下のとおりである。

Ⅰ期　地山を掘り込み、大型の土坑状の遺構が多い。底面はほぼ平担で、ほとんどが一気に埋め戻されたような埋土の状況である。調査区の南では標高 42.10m、北や中央付近では 41.80m 前後の高さで上面が削平された状況を確認した（以下削平面）（資：第 31 図３－４-01　第 19 図３－３-22）。そのため遺構掘り込み面が明確にわかる例はない。また、ニラミ櫓台石垣内部の盛土層がⅠ期にまで遡る土塁状盛土層であることを確認した。

Ⅱ期　削平面の上に厚く版築状盛土層を造成し路盤面としており、河北坂から延伸する河北門の中央部付近が、既にこの頃通路として整備されていたことが判明した。また礎石根固と見られる栗石詰めの土坑（P024・025）や石段（SX031）の痕跡などから枡形門以前の門の存在や、版築状盛土層を切り、南北に延びる溝状遺構（SD006・007）により、通路と屋敷地と見られる空間が広がっていた可能性も高まった。

各遺構の詳細については次節からを参照していただきたいが、遺構の粗密や土地利用の違いがみられる範囲で分けて掲載した。調査区東端から SD006・007 までを東部、版築状盛土層を中心とするグリッドのＧラインまでを中央部、Ｇラインから調査区西端までを西部とした。

第２節　東部

SD006［第 68・69 図、資：第 14・15・98・99 図］

概要　Ⅰ５グリッドに位置し、南北方向に軸をもつ溝状遺構である。Ⅱ期の路盤と考える版築状の盛土層を切り込んでつくられる。平成 12 年度に T010 部分の調査が行われており、今回全体像を把握するため周辺も含め精査を行った。

規模・構造　T010 以北の、3-4-28 断面で溝の西岸、平面は SD005 掘方に切られる SD006 掘方を確認した。この掘方は北に延びず、東へとカーブしている。約 1.5m北にある SX210 壁面では掘方を確認できないため北端と考えられる。T010 南北壁それぞれで上端を繋いでみると屈曲し、長軸方向が変化していることがわかる。更に南側は上層遺構があるため検出面まで達していない。断面形状から底面はほぼ平坦で、立ち上がりは緩く丸みをもつが壁面はほぼ垂直になる。若干オーバーハングしている箇所も見られる。規模は 3-3-12 のラインでは東西 495cm、3-3-13 では 442cm、3-3-11 では 336cm となり、必ずしも一定規模の溝幅ではないことが分かる。埋土は土質や含有物の特徴から大きく５層に分けられる。またその中でも、黄褐色土主体の上層と黒褐色土主体の下層に２分することも可能である。第 69 図の模式図で示した様に SD007 と類似した堆積状況がみられ、①から⑤層は堆積の厚さ以外に構成に大きく違いは認められず、南側は SD007 と繋がる可能性が高い。T010 北壁（3-3-11 第 9～20 層）の版築状の盛土層中からは、寛永の大火以降に使用された瓦が出土した。T010 南壁には対応する層が見られないため、寛永の大火以降の枡形内部分修理であると推定した。

時期　遺構の切り合いと出土遺物の年代観から、Ⅱ期に構築されⅢ期直前に廃絶されたと考えられる。

出土遺物　土師器皿や陶磁器、桐文をはじめとする瓦、鉄製品が⑤～③層にかけて出土し、SD007 と接合する資料もある。桐文瓦や刀子と見られる鉄製品は③層中より出土した。

遺構底面から石垣角石もしくは角脇石と考えられる石材が出土した（第 201 図石材カード）。小面が縦 61cm×横 57cm、大面長辺が 164cm を測る。小面は矢割痕を残すが全面ノミによる調整が入り、大面も矢割痕を残すが全面にノミが入る。下面は割面で、上面は自然面が大半を占め一部をノミによって平滑に仕上げている。左側面は平坦な自然面のままであった。後面は一部ノミが見られるが、石尻付近から左側面にかけては山傷によって割れており全体は直方体とならない。以上の石材加工の特徴と共伴遺物から、この石材は慶長期頃の角石と考えられる。出土状況は、遺構底面に薄く堆積土がある状態で出土したことから SD006 を埋め戻す段階で入れられたとみられる。石垣材としてほぼ完成品であったが、廃棄されたものとみられる。その原因としては石尻付近の山傷が使用に適さないと判断されたものと推測する。

SD007［第 69 図、資：第 79・80・203～206 図］

概要　本調査区の南部中央に位置し、グリッドはＩ６～８に該当する。南北方向に長軸をもつ溝状遺構である。近現代の配管、SD201（近代石組側溝）に上部は壊されており、Ｉ６グリッドは SD214（下水道）により寸断しているが、SD214 南壁面では本遺構を含めⅠ期～Ⅲ期の遺構の変遷を明瞭に確認することができた（第 69 図 3-3-27）。

規模・構造　SD214 の南側では８ヵ所で土層断面を観察した（同一遺構の可能性がある SD006 断面を含めると SD214 北側では４ヵ所）。遺構の規模は、検出した範囲では南北 750cm、SD006 を含めると南北 1920 cmである。土層①の一群は残存していない箇所もあるため、深さは②から計測した。

ID321（南側石垣台）抜取り底面で遺構の上端のラインを確認しており、東西幅は 350～405cm である。一部掘削した範囲では、壁面の立ち上がりは急であり、底面はほぼ平坦であった。②以下の深さは約 70cm、底面に凸部が見られる部分は 40cm と浅い。5-1-02 では掘削面から 125cm、②以下は 85cm である。

埋土は、その土質や含有物の特徴から大きく５つに分類できる。以下①～⑤で表し最下層の一群からその特徴を記す。

⑤. 遺構の最下層に該当する。細砂・粗砂・小礫で構成され、それ以外の遺物や炭化物等の含有物は少ない。Ｉ７グリッドの南半分に堆積した底面には鉄分が厚く沈着し、硬化していた。

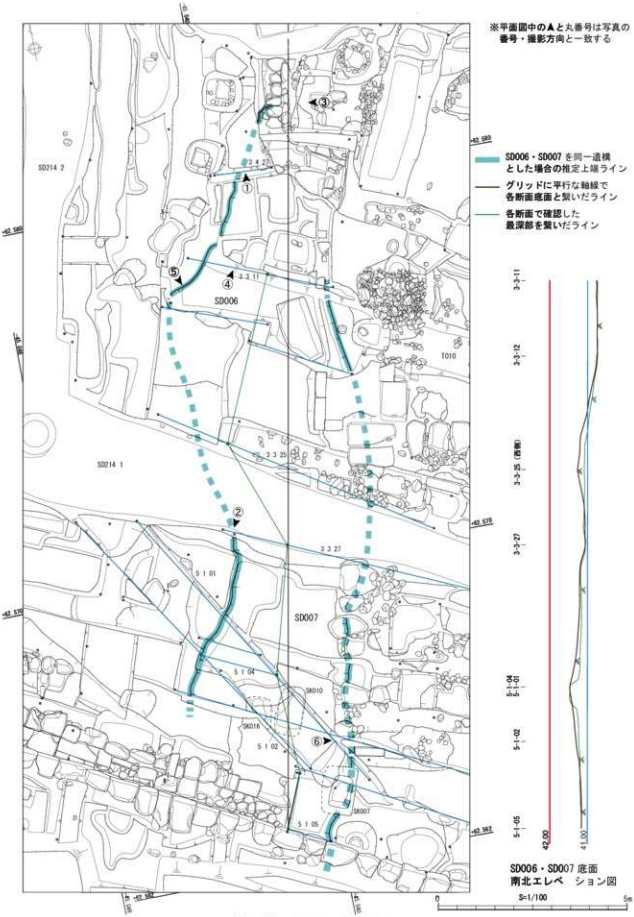
④. 粗い砂・黒化した有機物を多く含み、炭化物を若干含む。Ｉ７グリッドの南側半分で確認できる。

③. 遺構内一番広範囲で確認した土層で、炭化物を一番多く含み、黒化した有機物も含む。南側では細砂・粘土を筋状に含む箇所が見られる。遺物が最も多く出土している一群である。北側では 10 層以上に薄く分層された土層が地山まで堆積しており、人為的に埋め戻されている様子がうかがえる。土層注記に骨片（魚骨）の記載のある層があるが、実際はもっと多くの層に含まれていたものと思われる。

②. 地山質粘土・地山質シルト質土が互層に堆積している。南側では一部層厚２cm で版築状に堆積する箇所も見られる一方、北側では 40cm の厚さでほぼ含有物のない地山質粘土で構成されている。遺構内の埋土上の凹凸が本層によってほぼ平らにされ、上面は削平されている。

①. 遺構埋土最上層に該当し、ほぼ平らになった埋土上に版築状に堆積している。遺構東西に広がる版築状盛土（Ⅱ期）に比較すると１層が厚く粗い。粘質土・砂礫土・シルト質土で構成される。

これらの土層の特徴からは、同遺構内でもＩ７グリッド中央を境に南北で相違点が見られることが判明している。Ｉ７グリッド中央には遺構を南北に分ける大きな凸部分があることから、この凸が土

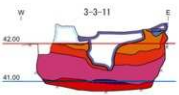


第 68 図　SD006・SD007　1

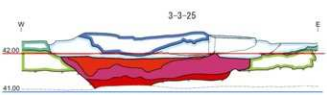
① 3-4-27　南から

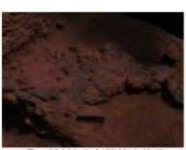
② 3-3-27　北から

③ SD005 掘方に切られる SD006 東から

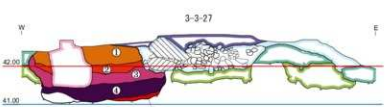


④ SD006 上端検出状況　南から

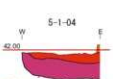




⑤ SD006 上部瓦検出状況



⑥ 鉄分沈着状況



SD006・SD007 大別層

- ①遺構上部の版築状の土層
- ②遺構上部の充填土
- ③遺物集中土層
- ④腐食土含有層
- ⑤鉄分沈着が見られる層

河北門時期区分

- 金沢大学期
- 河北門Ⅳ期（明治 15 年頃）
- 河北門Ⅲ期（宝暦の大火後）
- 河北門Ⅲ期（宝暦の大火前）
- 河北門Ⅱ期（近世前期）
- 河北門Ⅰ期（近世初期）

0　S=1/100　5m

第 69 図　SD006・SD007　2

層の境になっていると考える。相違点としては、北側は、②の層厚が薄く黒化した有機物と炭化物を多く含む。遺構底面は酸化しているが、鉄分の厚い沈着や砂、粘土はあまり見られない。南側は、北側に比較し⑤・②に細砂・粗砂等が見られ、底面にも鉄分が沈着し水が停滞していた時間のあることを窺わせる。北側に比較すると黒化した有機物は含まれず、炭化物も少なめである。

①の下面はほぼ水平に削平されⅡ期の版築状盛土と似た堆積状況だが、3-1-07・3-3-27 では、①の版築状の土層が SD007 の掘方内の堆積土と分かる。当初 SK016 は SD007 を切る別遺構と考えていたが、5-1-02 を精査した結果、①と②の間に位置することから SD007 の一部であることが判明した。埋没過程としては下層⑤～②までを埋め戻し、②の中央上面を平準化している。中央部分の平準化を行う際には上面の凸物を除去したものと思われる。SK016 の地点には SD007 や SD006 内で確認されたような築石や礫等が入っていたことも予想され、SK016 は土坑のような形状になった可能性もある。

また、遺構上層部に版築状の堆積が見られる土層の状況や土質、立ち上がりの急な遺構の形状等は北側に位置する SD006 と酷似している。しかし、遺構の上端の湾曲の違いや、間に入る SD214-1 に大幅に分断されている点等から判断が難しい。

陶磁器・土器については、調査年度毎全点接合状況を確認している。SD007 では、上記①～⑤群同士に加えて他遺構とも接合状況を確認した。なお、接合表は第６章に掲載した。結果、最も堆積状況の異なる①群と②～⑤群も接合しており、①～⑤群は土質や堆積状況は異なるが同時期に埋没していると考える。他遺構とでは、近接する４遺構だけでなく SD214-1 北側壁面や SD006 とも接合している。遺構の形状や堆積状況だけでなく、出土遺物の状況からも SD006 と同一遺構である可能性が高い。

時期　西側では SK013 を掘り込み、中央では SK010 に切られており、東側では ID321 創建時掘方（Ⅲ期）に切られ、版築状盛土（Ⅱ期）を切っていることから、Ⅱ期に掘削されⅢ期河北門枡形創建の前に埋め戻された遺構と考える。

本遺構は版築状盛土（Ⅱ期）で構成される路面の東側を区切る堀のような役割を果たしていたと推定する。SX030（二ノ門路盤）下には複数の土坑が確認できるが、Ⅲ期かⅡ期中に掘削されたものか不明な遺構が多い。Ⅱ期の東側の様相に関して詳細は不明だが、第３図-２「加州金沢城図」をはじめとする慶長期の絵図で河北坂東側は武家屋敷が展開している。

出土遺物　整理箱計７箱の遺物が出土しており、最も多く出土しているのは土師皿である。詳細は第６章を参照されたい。遺構東端では築石が出土している（資：第 202 図）。割石で面に刻印が見られる。また、多くの種子や魚骨、炭化材が出土しており、第７章で分析を行っている。植物では食用可能なサンショウ、動物遺体では焼けた魚骨が出土しており、周辺に居住空間があったことを窺わせる結果となっている。

その他　5-1-01 の右端側の５・６層

５層　壁面のみで観察できた遺構である。版築状盛土（Ⅱ期）・SD007（Ⅱ期）を切り、Ⅲ期最終段階の SD002（石組溝）掘方より古い。検出した範囲では深さ 55cm 幅 105cm である。出土遺物は土師器皿である。下方には人頭大の石が入る。

６層　壁面でのみ確認できた遺構である。SD007 を切り込んでいる。検出した範囲では幅 40cm、深さ 100cm である。いぶし瓦が出土している。覆土は SD007 の土が多く含まれているようである。

SD008［第70図、資：第80・206図］

概要　Ｌ８グリッドに位置する。近代以降の排水溝や鉄管により上端や埋土上層は壊されているが、下端は良好に遺存していた。南北に長軸を持つ溝状遺構であり、遺構の南北は調査区外に展開している。土層断面観察の他、４ヵ所でエレベーション図を作成した。

規模・構造　検出した範囲では長軸296×短軸130×深さ66（cm）、断面形状は箱型を呈し底面は平坦で壁面はほぼ垂直に立ち上がる。底面に若干埋まった状態で並んだ川原石を検出している。川原石は大きなもので長軸44×短軸36×厚さ20（cm）程で平らな面が上に向いている。遺構長軸に石の長軸を合わせている訳ではなく、むしろ長軸方向と短軸方向を交互に変えて置かれているようにも見える。底面の標高は、北端で41.82m、南端で41.86mと緩やかに北方向に傾斜する。

断面観察では遺構内の埋土は４段階に大別できる。遺構構築から廃棄の順を追っていくと、底面付近で幅約100cm、上端付近で約150cmの２段で落ちる掘方を掘削し、底面に川原石を長軸方向に１列に並べていく。川原石上面が埋まらない程度まで周りを粘質土で埋め戻し、石を固定する（ｄ層）。ｃ層はSD008が機能していた最終段階の堆積土と考えられ、粘質土と砂礫土が互層状をなす水成堆積であった。堆積の状況から常時水流はなかったことが判明した。ｃ層の横の広がりはｂ層で止まっており、本来ｂ層には側石（板）等があり、廃絶時に抜き取られたと推測する。ｂ層の両側にも石を固定するｄ層がみられる。ａ層は廃絶後の埋戻し土と考えられる。ａ層中から凝灰岩板石の破片が出土しており、側溝関連の遺構に凝灰岩の使用例が多いことからも、側石材であった可能性がある。ただし川原石と凝灰岩の併用例は他の遺構ではみられない。

本遺構は調査区内で最も南東側で検出した石組溝である。二ノ門から枡形にかけて石組溝が多数検出された。いずれかの溝とつながり、水を流していったとは想定できるが、川原石を底面に敷くという点で共通するSD005は同一箇所で少なくとも３回の作り替えが行われているが、本遺構では作り替えの痕跡は認められなかった。仮にSD005と同一遺構だとすれば、ある時期SD008は大きく流路を変更した可能性がある。

SK001［資：第81・207・208図］

Ｋ８グリッドに位置する。北側は上層遺構にかかるため全容は不明である。検出した範囲では、東西117×南北68×深さ50（cm）である。平面形は不整形で壁面は垂直に立ち上がり、底面中央部には径55cmの落ち込みがある。瀬戸美濃の瓶や中国の白磁の碗、越前の甕が出土している。遺構北東には長軸70×短軸52×深さ60（cm）の本遺構より新しい掘り込みも確認されている。

時期　三ノ丸の路盤に覆われており、枡形門があった時期にこの場所で土坑等が開口していたとは考えにくいことからも、Ⅰ期もしくはⅡ期の遺構の可能性が高い。SK011より古い。

SK002［第70図、資：第81・208・209図］

Ｋ８グリッドに位置する。遺構上部はSD215に壊されている。平面形は不整長方形を呈し、規模は長軸104×短軸88×深さ25（cm）で底面はほぼ平坦で壁面は緩やかに立ち上がる。遺構上部は壊されているが遺構壁面の立ち上がりや周辺の遺構との深さの比較からは、元々それほど深い遺構ではないことがわかる。主軸方位はN－35°－Wである。

土坑内の埋土は炭化物層や鉄製品が入る黒色土層（ａ層）と砂質土または砂層（ｂ層）に大別できる。ｂ層は、ほぼ平らな底面と同じく平らになる様に埋め戻しを行っている。周辺の遺構や整地層・地山から同様の砂の供給源は確認できず、意図的に砂を持ってきて埋め戻しを行った可能性がある。ａ層中からは銅鉋や棒状の鉄製品（火箸か）金属製品が出土している。銅鉋周辺には炭化物層が集中し、肉眼でも稲の籾殻状の炭化物が確認できた。銅鉋内部には瓜の種とみられる植物遺体が見られた

ことから籾殻状の炭化物と共に分析を行った。詳細については本報告第７章で報告している。また炭化物層下の黒色土層では鉄分が酸化し埋土とともに塊状を呈していた。調査時にはこの塊は何らかの鉄製品が錆膨れしたものの可能性があると考え、Ｘ線写真を撮影し地金の有無を調べたところ、特定の鉄製品ではないことが判明した。塊の内部からは鉄釘が１点取り出された。

銅鋺等を入れる前段階の砂による埋め戻しは周辺の遺構ではみられない点であることや、銅鋺や他の金属製品等が出土する点からも、特殊な目的で構築された遺構の可能性がある。

時期　近代の撹乱に上部を壊されており、近世段階の整地土等との切り合いが確認できなかったが、遺構の長軸方向や周辺での遺構の展開状況、16 世紀代の景徳鎮の白磁や瀬戸美濃の合子が出土していることを勘案すると、河北門枡形創建以前の遺構の可能性が高い。

SK003［資：第 207～209 図］

Ｋ８グリッドに位置する。北側は未調査区に延びており、平面形は不明である。検出した範囲では、東西 126×南北 56×深さ 68（cm）で西側にテラス状の平坦面があり、東側の最深部には川原石が上面平坦になるように置かれていた。SK015 同様に川原石上に柱が立てられていた可能性があるが、土層の堆積状況から柱痕跡や抜き取りの状況はみられなかった。

16 世紀末～17 世紀初頭の越前の擂鉢や漳州窯の磁器、17 世紀初頭の景徳鎮の磁器碗等が出土している。

河北門二ノ門南側石垣台のすぐ脇にあり、枡形門創建以前の建物柱穴もしくは創建時の足場用柱穴の可能性が想定できる。SK011 より古い。

SK005［資：第 82・209・210 図］

Ｊ８グリッドに位置する。遺構上部は SD215 によって壊されている。検出した範囲では、東西 160×南北 108×深さ 40（cm）で底面はほぼ平坦である。土層から底面西よりに柱痕跡があったことが判明している。西側上端の歪みは柱を抜き取った際の変形と思われ、本来の平面形は円形と考える。土師器皿（C1）や陶器、16 世紀中葉～後半の中国の白磁が出土している。

SK006［資：第 82・210 図］

ＩＪ８グリッドに位置する。遺構上部は SD215 によって壊されている。平面形は円形と思われる。壁面は擂鉢状に立ち上がり、底面は非常に狭い。検出した範囲では、東西 107×南北 88×深さ 100（cm）である。C1 の土師器皿が出土している。

SK007［資：第 81・210 図］

Ｉ７・８グリッドに位置する。平面形は南北に長軸を持つ長方形で、規模は長軸 128×短軸 90×深さ 108（cm）である。底面の形状は隅丸長方形で底面から上に約 30cm までは斜めに立ち上がり、そこで角度が変わり壁面はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は地山質粘土が主体でしまりが強く２層目には人頭大の川原石が集中している。

16 世紀後半から 17 世紀初頭の景徳鎮の青花が出土している（P269・P270）。C1 の土師器皿も出土している（P271）。SD007 との遺物の接合関係はなかった。

時期　版築状盛土（Ⅱ期）・SD007 を切り込み、幕末～近代の砂路面に覆われており、Ⅱ期以降の遺構と考えられる。SK010 とともに ID321（南側石垣台）の軸線と一致していることから、ID321 施工に関連した足場等の掘り込みの可能性もある。当時、遺構を掘削した際に西側壁面で SD007 内の慶長期の築石がすでに廃棄されていたものと思われ、西壁面は築石下方にも 10cm 程オーバーハングして掘り込

み、締まった埋土が堆積している。本遺構はSK010のようにSD007の遺物を多く含んではいない。SK007掘削後にSD007埋土が掘り返されるような状況がなかったものと思われる。

SK008[資：第82・83・210図]

ＫＬ８グリッドに位置する。平面隅丸長方形の遺構である。規模は長軸100×短軸74×深さ60（cm）である。ほぼ垂直に立ち上がる壁面では、木材もしくは工具痕とみられる縦方向の筋状痕跡が確認できる。底面はほぼ平坦であるが、柱痕跡の底面には方形の窪みがあり、堅く締まっていた。柱は一辺約15cmの角柱で、地面に直に設置されていたことが分かる。西隣のSK009より古い。

SK009[資：第82・211図]

Ｋ８グリッドに位置する。北側は近代以降の排水溝に破壊され全容は不明である。残存部は南北88cmでそのうち北側は深さ23cmの小段となり、南側は径65×深さ51cmの柱穴のような形状をもつ。小段は柱が北側に引き抜かれた痕跡の可能性もある。SK008の一部を掘り込んでいる。

SK010[資：第83・211図]

Ｉ７グリッドに位置する。平面形は南北に長軸を持つ隅丸長方形を呈し、底面は平坦で壁面はほぼ垂直に立ち上がる。規模は長軸130×短軸72×深さ76（cm）である。埋土は２層に分かれ、底面付近は酸化する。17世紀初頭の肥前陶器や景徳鎮の五彩手や青花が出土している。

時期　SD007より新しく、Ⅲ期柵形河北門創建時には埋まっている遺構である。ID321南東隅に位置し、同石垣台と軸線が一致することから、創建時の普請に関連する足場等の遺構の可能性もある。出土遺物に関してはSD007と接合するものがあり、もとはSD007に含まれていた遺物の可能性が高い。そのことからSK010掘削後にSD007が別に掘り返され、その土がSK010に廃棄されたものと思われる。すでに埋め戻されていたSD007が掘り返された理由としては、3220N(土塀石垣)の構築等があげられる。

SK011[資：第81・207・208図]

Ｋ８グリッドに位置する。上層遺構に一部がかかるため全容は不明である。検出した範囲では南北26×東西26×深さ50（cm）である。SK001・SK003両方の遺構より新しいが近世末から近代初頭の路盤層に覆われる。

SK012[資：第81・207・211図]

Ｊ８グリッドに位置する、上層遺構に一部がかかるが、検出した範囲では東西70×南北26×深さ77（cm）であり、底面付近東側はオーバーハングしている。深さからは遺構が北側に大きく展開していることが予想できる。SK004・SK018より古い。

SK015[資：第83・211図]

Ｊ８グリッドに位置し、南側は調査区外に延び、上部はSD215に壊されている。平面形は不明であり検出した範囲では東西97×南北56×深さ74（cm）である。底面は平坦で壁面はほぼ垂直に立ち上がる。底面には扁平な川原石が置かれ、断面からは上に柱が建っていた様子が断面から窺える。SK008同様約15cm幅の柱が使用されており、ほぼ中央部に立っていたことが分かる。中国の磁器碗や越前の甕が出土している。SK004より古いSK015とSK003は遺構内に柱がのるような扁平な石（礎石）が置かれている点が共通している。またSK008とは土層断面で似た形状の柱痕を確認している。３遺構は上端東西の規模が近似しており、平面形が若干方形を呈するなどの共通点がみられる。

SK016［資：第 79 図］

Ｉ７グリッドに位置する。一つの遺構として調査を開始したが、SD007 を埋め戻し周囲を平坦に造成する際の一連の作業に伴う土坑と考えたため、SD007 で触れることとする。

SK018［資：第 81・207 図］

Ｊ８グリッドに位置し、アゼの土層断面図のみで確認した。規模は東西 127×深さ 50（cm）で、断面形状は皿状を呈し、東西 55×厚さ 40（cm）の川原石を含む。アゼの北側断面においても同規模の石を含む掘り込みを確認した。3210S 掘方を切り込んでいることから、この２つが一連の遺構と考えるとⅢ期以降の遺構となるが、近世末から近代の路面に伴う土に覆われている。

SX001［資：第 30・107 図］

Ｋ４グリッドに位置する。T019 南端 SD003（石組暗渠）・SK019（枡）下部で確認した遺構である。検出した範囲では東西方向の溝状遺構の北側上端と思われる。底面には地山土を主体とした土が 20 cm弱堆積し上に扁平な川原石が敷かれたように東西に並んでいる。最深部まで到達していない可能性が高いが底面まで SD003 掘方下から 62cm、二ノ門路盤から 125cm である。同じように川原石を利用している SD005 に使用される石と比較して小振りである。

SX002［資：第 30・107 図］

Ｋ４グリッドに位置する。T019 中央で確認した東西方向の溝状と考えられる遺構である。検出した範囲では 104cm、底面は幅 25cm、立ち上がりは緩やかである。SD003・P001 の下部に位置し、黒色土を主体とする埋土の様子からⅡ期遺構の可能性もある。底面まで確認面から 50cm、SX030（二ノ門路盤）から 90cm である。SD003・P001・SX001 より古い。

SX003［資：第 30・107 図］

Ｋ３グリッドに位置する。T019 北東端で確認した遺構である。埋土の色調や礫を含む土質、生木を含む点等、近代の攪乱の可能性もあるが詳細は不明である。

SX004［資：第 30・107 図］

Ｋ３グリッドに位置する。T019 中央で確認した東西方向の溝状と思われる遺構である。ほぼ断面箱型である。埋土の様子や P001 下部に位置することからもⅡ期遺構の可能性もある。上端は検出した範囲では南北 70cm、底面は幅 50cm で赤みを帯びていた。底部までの深さは確認面から 42cm、SX030 から 80cm である。SX005 より古い。

SX005［資：第 30 図］

Ｋ３グリッドに位置する T019 北西で確認した遺構である。検出した範囲では、上端 84cm、確認面からの深さは 16cm である。P001 や 324（北側石垣台）下部に位置することから、Ⅱ期遺構の可能性もあるが詳細は不明である。

SX009［資：第６図］

Ｋ８グリッドに位置し、上面は近代以降の配管掘方によって削平される。検出した位置からはⅢ期河北門の構造物に関連する遺構ではなくⅡ期遺構と思われる。SX023 より新しい。

SX010［資：第 29 図］

Ｊ４グリッドに位置する。SK205 北東隅で遺構のごく一部を確認した。SD003 下部に該当する。底面は酸化が進み非常に硬化していた。漆器破片が出土している。

SX012［資：第 14 図］

ＫＬ７グリッドに位置する SD204 底面で確認した遺構である。検出した範囲では、東西 90×南北 60（cm）である。宝暦の大火後に改修された SD002 下部に位置することから、それ以前に構築されたものと思われる。

SX014［資：第７図］

Ｊ４グリッドに位置する。P203 南壁面で確認した SX030 直下の遺構である。SK201 南壁面にも続いており、検出した範囲では、東西 280×深さ 80（cm）の規模になる。埋土の様子からⅡ期の遺構の可能性が高い。景徳鎮の磁器の皿が出土している。

SX015［資：第６図］

Ｋ４Ｌ４・５グリッドに位置する。SD209 底面・壁面で確認した SX030 直下の土層である。検出範囲が狭く、明確な規模は不明だが、同壁面では、東西 260×南北 360（cm）に広がり、SX202 壁面においても酷似した土層が確認出来るため、大規模な遺構あるいは整地層の可能性もある。埋土はⅡ期の特徴を持つ。

SX017［資：第 15 図］

Ｊ４グリッドに位置する。SK205 西壁面(3-3-14)の 41・42 層に該当する。3-4-27 との比較により 3-4-14 の 25 層がⅡ期以前の整地層を切り込む遺構と判明していることから、41・42 層はⅡ期（あるいはⅠ期）の遺構と考えられる。SX030（二ノ門路盤）から底面までの深さは 110cm である。SX019 より古く、越前の甕が出土している。

SX019［資：第 15・29 図］

Ｊ４グリッドに位置する。SK205 西壁(3-3-14)17・18 層、東壁(3-3-50)、15・16 層に該当する SX030 直下の遺構である。上部は SD212（東西撹乱）に壊されている。検出した範囲では、東西 120×南北 54×深さ 96（cm）である。いぶし瓦が出土している。Ⅱ期遺構を切り込む遺構より新しい。

SX020［資：第 29 図］

Ｊ４グリッドに位置する。SK205 東壁(3-3-50)17～25 層に該当する SX030 直下の遺構である。SX019 より古い。検出した範囲では、東西 40×南北 227×深さ 100（cm）の土坑と思われる。底面は平坦で立ち上がりはほぼ垂直である。埋土からはⅡ期の遺構の可能性が高い。

SX021［資：第 24～26 図］

Ｌ６グリッドに位置する T010 と SD210 の交点で確認した。3210E（南側石垣台東面）創建時掘方の下に位置することから、Ⅱ期あるいはⅠ期の遺構と考えられる。検出した範囲では、東西 420×南北 280×深さ 110（cm）である。東側は緩やかに立ち上がるが、南側はオーバーハングしている箇所も見られる。底面には凹凸が見られる。埋土は上下２層に大別され、上部分は褐色の砂質土、下層部分は黒褐色や暗褐色土の粘質土である。15 世紀の青磁の碗、16 世紀瀬戸・美濃の灰釉皿等が出土している。

SK004・SX023[資：第６・22・81・207～209図]

概要　Ｋ７・ＪＫ８グリッドに位置する。南北方向に走るSD211にほぼ中心を壊されている。東側はSX009に、西側はSK018に切られ、SK004上部はSD215によって、SX023上部は近代以降の配管によって壊されている。両者の遺構はそれぞれ撹乱壁や撹乱掘方底面で検出されており、同一遺構として検出していないが、遺構の断面観察からはそれぞれ類似した土層の状況であった。また遺構の東西の規模や底面形状・標高等から平面的にもつながってくる可能性はある。ただし、隣接した同時期の遺構が同じ作法で埋め戻されたと想定することも可能で、同一遺構とは断定には至らなかった。以下ではそれぞれ検出した規模や埋土の状況を述べる。

規模・構造　SK004の平面形は検出範囲では半円形である。検出した範囲では、東西310×南北148×深さ113（cm）、底面はほぼ平坦で壁面は大幅にオーバーハングして立ち上がる箇所も見られる。埋土は上層と下層では堆積状況が異なり、上層部分は黄褐色系で4cm程の薄層で小礫や砂質土を含み堆積し、下層は黒褐色系で層厚がある。SX023は検出した範囲では、東西360×南北220×深さ100（cm）である。底面はほぼ平坦で立ち上がりは急で若干オーバーハングしている。埋土は地山質粘土と黒色土を主体とし、下層部は北側（上）から南側（下）へ埋め戻され、上層部はほぼ水平堆積となっている。同一遺構であった場合は、東西360×南北460（cm）となる。SK004からは16世紀末の瀬戸・美濃の陶器皿(P265)が出土している。SX023からは越前の甕や土師器皿の破片が出土している。

時期　創建時3210S（南側石垣台南面）掘方の下部に位置することから、Ⅰ・Ⅱ期の遺構と考えられる。埋土からはⅡ期の遺構の可能性が高い。

P012[資：第84・212・213図]

ＪＫ３グリッドに位置する。SX210の北側に幅60cmだけ近代の撹乱の破壊を免れ残存しており、そのアゼ状に残った北側壁面(5-1-32)で埋土を観察し、一部平面形も確認した。西側はP213に壊され、上部は別遺構に切られている。埋土は黒ボク土を主体とし含有物が少ない。検出した範囲では、東西48×南北36（cm）である。

上部遺構12～16層はⅡ期あるいはⅢ期と考えている。12層は3-3-24壁面22層に、3-3-24壁面24層は本遺構埋土に酷似していることから、3-3-24壁面まで展開している可能性がある。ちなみに3-3-24では、ほぼ同規模のⅠ期遺構を３基確認している。

時期　本遺構が河北門枡形創建以降（Ⅲ期）の324（北側石垣台）の南面下部に位置していることや埋土がⅠ期遺構の特徴を示していること等から、Ⅰ期の遺構と想定している。龍泉窯の青磁が出土している。

P013[資：第83・213図]

Ｎ８グリッドに位置する。上面形は円形を呈し、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。規模は東西42×南北36×深さ26（cm）である。埋土中には周辺の地山中には含まれない礫が入り、一部被熱したものもあった。中国の白磁の皿が出土している。

P014[資：第83・213図]

Ｍ８グリッドに位置する。P014-1（1・2層）、P014-2（3～6層）を同時に半裁し土層を観察した。P014-1は深さ16cm程の円形を呈する遺構である。P014-2の上面は不整円形、底面は円形を呈する。規模は東西60×南北54×深さ42（cm）である。断面で柱痕跡を確認していることから上端は柱抜き取りの際に崩れた可能性もある。

P015［資：第 213 図］

Ｋ８グリッドに位置する。平面形はほぼ円形を呈する長軸 58×短軸 44×深さ 12（cm）の浅い遺構で、他のピット群が黒色土で埋められているのに対して、地山由来の黄褐色土で埋め戻されている。

P016［資：第 83・213 図］

Ｋ８グリッドに位置する。平面形は不整円形を呈し、径約 60×深さ 56（cm）である。底面最深部は径 20 cmの円形であり、柱穴と思われる。土師器皿が出土している。

P017

Ｌ８グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、南北 43×東西 36×深さ 39（cm）である。柱穴と思われる。

P018［資：第 213 図］

Ｍ８グリッドに位置する。調査区外に延びるため全容は不明であるが、径 60×深さ 23（cm）の略円形を呈すると思われ、底面は平坦である。土師器皿（C1）のほか、埋土最上面から炭化米が出土した。

P019［資：第 83・214 図］

Ｍ８グリッドに位置する。P019-1（1・2 層）、P019-2（3 層）を同時に半截し土層を観察した。P019-1 の平面形は隅丸長方形、東西 38×深さ 22（cm）であるが、南北軸の規模は不明である。P019-2 は径 28×深さ 29（cm）の略円形を呈し、壁面は垂直に立ち上がる柱穴と思われる。

P020［資：第 83 図］

Ｍ８グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、南北 46×東西 38×深さ 15（cm）の浅い遺構である。越前の甕と思われる破片が出土している。

P022［資：第 83・214 図］

Ｌ８グリッドに位置する。南北 36×東西 31（cm）の円形を呈し、深さ 60cm で壁面は若干オーバーハングして立ち上がる。土層断面、底面形状から柱穴と考える。SD008 より古い。P022 は SK009・P017 とほぼ一直線上に並び、間の距離は 230cm と 220cm で、いずれも規模は類似する。しかし底面のレベルが異なるため、同一遺構の柱列とは判断できない。

P023［資：第 84 図］

Ｍ８グリッドに位置する。上面形はほぼ円形、底面は径 20 cmの円形である。長軸 54×短軸 48×深さ 67（cm）で壁面はほぼ垂直に立ち上がる。柱穴と考えられる。

SX018［資：第 12・90 図］

Ｋ４グリッドに位置する。SD209 壁面底面で確認した。鎌（M59）や越前の甕（P287）、土師器皿も出土している。確認した断面では SX030 以下７つの遺構が切り合い、本遺構が最下層に位置する。他の遺構との新旧関係と埋土の特徴からⅠ期の遺構と考える。

SX024［資：第６図］

Ｊ７グリッドに位置する。近代以降の排水溝壁面のみで確認出来た遺構で、全容は不明である。検

出した範囲では、東西 61×深さ 21（cm）である。瓦が数点出土している。幕末から近代の路面に覆われ、SX023 より新しい遺構である。

SE001［第 70 図、資：第 82・211・212 図］

概要　ＬＭ８グリッドに位置する井戸である。上部を SD203・SD204 等に撹乱されており、掘り込み面や井戸側の有無に関しては不明である。

規模・構造　確認面の高さは 42.40m、規模は南北 170×東西 180（cm）で平面形は円形を呈し、深さ 220cm で掘削を停止した。壁面は、確認面から－40～50cm までは若干上端に向かい開いているが、以下はほぼ垂直に立ち上がり、オーバーハングしている箇所も見られる。壁面には数条の工具痕が確認出来るが、足掛け等の痕跡は見当たらない。直上まで近現代の土層が堆積していた。

埋土は堆積状況や含有物から、大きく５層に分けることができる。

１．径 10 cm大の円礫を多く含み、締りがなく崩れやすい土層である。全体的に埋土・礫とも酸化が進み赤みを帯びている。戸室石のチップも含む。

２．粘質土、砂礫土、シルト質土が互層に堆積している。約５cm の薄い層もあり、順に埋め戻されている様子が窺える。

３．**１・２**層と比較してきめ細かい埋土であり、多くの軒丸瓦が出土している。完形率が高く、摩耗が進んでいないことから、一括廃棄と考える。

４．遺構の壁面に沿うように堆積する。他の層に比較し砂質であり、特に酸化が進んでいた。硬い遺構壁面に沿って雨水等が流れ、接する埋土にも影響を及ぼしたことから、最も酸化が進んだものと推測している。

５．上層に比較し、全体的に還元状態であるが、部分的に酸化が進み、鉄分の沈着も見られる。１層が 50cm 以上の厚い層も確認できる。**３**に見られた瓦は出土しなくなる。

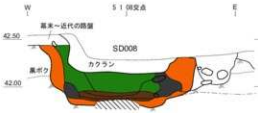
埋没の過程は、まず、**５**に見えるような大きな土層の単位で埋め戻し始める。一部、遺構壁面に沿って、次第に水や砂質土が流れこみ、**４**を形成する。**３**の部分に、軒丸瓦を中心に瓦が廃棄される。分層はしていないが、**３**堆積後も、壁面に沿って水や砂質土は流れていたものと思われる。その後、**２**として薄く締まった層が何層にも重ね埋め戻される。**１**の部分は、崩れやすく、石材加工の際に出る戸室のチップも多く含んでおり、他の土質と大幅に異なり、**２**を切り込むような堆積状況からも時期差があると想定している。

２以下の層に関しては、**２・３**層と**４・５**層の間で酸化の進行度合いや土質が若干異なる。また、**２・３**層からは、17 世紀後半の磁器が出土しているが、**４・５**層からは、唐津等の 17 世紀初頭のもののみが出土している。

時期　瓦当面の残りの良い軒丸瓦が多く出土している。『金沢城跡埋蔵文化財確認調査報告書Ⅰ』［石川県金沢城調査研究所 2008a］掲載遺物と比較したところ、寛永８年(1631)の大火前後には既に使用されている瓦と同じ文様の軒丸瓦が多く出土していることが判明した。

また、「加賀国金沢之絵図」（第３図-４寛文８～延宝年間（1668～1681）年）には三ノ丸に５基井戸が描かれている。河北門枡形西側には SE002 と考えられる井戸も描かれるが、本遺構検出位置に井戸は描かれていない。また、建物の屋根に描かれているのは、いぶし瓦ではなく、鉛瓦と考えられ、金沢城内ではこの時期までにいぶし瓦から鉛瓦へと葺き替えられたと想定している。よって、この絵図に描かれていない SE001 には、寛文８年頃までに降ろされたいぶし瓦が廃棄されている可能性がある。

以上の点から、SE001 の廃絶年代は 17 世紀後半頃と思われるが、**４・５**層との時期差について詳細は不明である。**１**層より上層に関しては、河北門廃絶時あるいはその後の金沢大学時代に撹乱されている可能性もある。

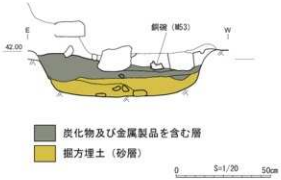


ⓐ廃棄時の埋め戻し土
ⓑ側石の抜取跡
ⓒ溝内の堆積土（粘土と砂礫が互層状となる）
ⓓ掘方埋土

0　S=1/40　1m

5-1-07　断面図

検出状況

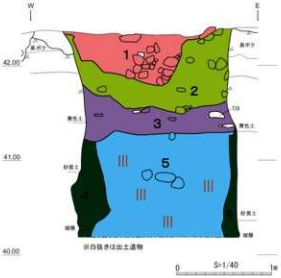


炭化物及び金属製品を含む層
掘方埋土（砂層）

0　S=1/20　50cm

5-1-15　断面図

瓦検出状況　北から



0　S=1/40　1m

5-1-16　SE001　断面図

1．戸室チップ・礫を含む層
2．版築状の層
3．瓦廃棄層
4．砂質・酸化した層
5．還元した層（III　部酸化）

第 70 図　SD008（石組暗渠）・SK002・SE001（井戸）

出土遺物　３層を中心に整理箱６箱の瓦が出土しており、軒丸瓦が多いのが特徴である。３層以下出土の遺物では、C1 の土師器皿、中国の白磁の他、唐津と思われる激しく被熱した陶器碗も出土している。

第３節　中央部

SD001[資：第 84・215 図]

Ｇ６・Ｈ７グリッドに位置し、北西から南東方向に走る溝状遺構である。近現代の配管壁面を利用して３ヵ所で土層を観察した他は上面確認で調査を終えている。

規模・構造　主軸方位は N－38°－W である。規模は、上端 84～90cm、下端 58～74cm、深さは最大値で 76cm、検出した範囲では 890cm であった。底面は西から東へ底面標高は６ｍで７cm 低くなるが、南北方向は平坦で、立ち上がりはほぼ垂直でありオーバーハングしている箇所も見られる。埋土上層は径 10 cmほどの礫を多く含み、下層ほど少なくなる。底面付近は若干酸化しているが砂や粘土の薄層等の流水の痕跡は見られず、恒常的な流水があったとは考えにくい。

時期　版築状盛土（Ⅱ期）を切り込み、枡形河北門（Ⅲ期）を構成する遺構に覆われていたことから、Ⅱ期の遺構と考える。

SK013[資：第 79・80・214 図]

Ｉ７グリッドに位置する。東側は SD007 に切られており全容は不明であるが、検出した範囲では南北 180×東西 105×深さ 60（cm）であり、円形の遺構の約 1/4 程度を調査したものと考えている。底面には若干凹凸があり、立ち上がり部分が抉るように掘られている。壁面はほぼ垂直に立ち上がりオーバーハングしている箇所も見られる。埋土は３層に分層され、褐灰色土を主体とする。遺物は少量で 16 世紀後半の中国の白磁皿や 16 世紀末の土師器皿（C1）が出土している。

SK014 より新しく版築状盛土（Ⅱ期）に覆われたⅠ期の遺構である。遺構の形状からは植栽痕と思われる。

SK014[資：第 79・85・86・214・215 図]

ＨＩ６・７グリッドに位置する。SD214-1 や配管掘方等に大幅に切られている。平面形は不整形である。検出した範囲では、南北 308～東西 246（cm）、深さは 33～46cm で立ち上がりは緩やかである。埋土は細分出来るが、黒褐色土とにぶい黄橙色土を主体とし、底面から順に埋め戻されている。底面にはいくつも遺構が切り合うような凹凸が見られ、埋め戻しは一回であるが掘削は何回か行われた可能性が高い。17 世紀初頭の景徳鎮の皿や、B2 の土師器皿、越前の擂鉢等が出土している。

版築状盛土（Ⅱ期）下で確認し、SK013・017 より古く、SX029 より新しいⅠ期の遺構と考えられる。

SK017[資：第 79・85・215 図]

Ｈ６グリッドに位置する。北側は SD214-1 に壊されている。検出した範囲では、東西 253×南北 100×深さ 60（cm）である。底面は皿形で立ち上がりは緩やかである。埋土はⅠ期の遺構によく見られる黒色土を主体としており、下方は全体的に酸化し赤色化するとともに川原石を含んでいる。

版築状盛土（Ⅱ期）下で確認され、SK014 より新しい。Ⅰ期の遺構と思われる。

SX008[資：第 31・216 図]

Ｈ３・４グリッドに位置する。上面は近代以降の配管によって撹乱され、撹乱掘方底面で平面的に

検出した規模は南北 266cm であったが、検出した範囲では、南北 532×東西 120（cm）、深さ 60cm 以上である。版築状盛土（Ⅱ期）下に位置し、SD214-2 東壁面(3-4-03)の 13～22 層も同一遺構の可能性があり、東西に延びる溝状遺構の可能性もあるが詳細は不明である。版築状盛土（Ⅱ期）に覆われていることから、Ⅰ期の遺構と考える。

SX016[資：第 84・215 図]

Ｇ７グリッドに位置する。SD001 下部で確認した遺構である。版築状盛土（Ⅱ期）下にあり、地山質シルトと黒褐色土の埋土を持つことからⅠ期の遺構である。土師器皿や陶器が出土している。

SX022[資：第 31 図]

Ｈ５グリッドに位置する。3-4-02 の壁面のみで確認した。規模は南北 83×深さ 47（cm）である。
時期　版築状盛土（Ⅱ期）に覆われていることから、Ⅰ期の遺構と考える。

SX029[資：第 214 図]

Ｈ７グリッドに位置する。SD203 底面で遺構の形状の一部を確認し遺物を採取した。検出した範囲では、南北 60×東西 185（cm）である。版築状盛土（Ⅱ期）の下にあり SK014 より古いⅠ期の遺構である。土師器皿（B1）が出土している。

P021[資：第 85 図]

Ｈ６グリッドに位置する。平面形はほぼ楕円形で長軸 70×短軸 40×深さ 56(cm)である。標高では版築層(Ⅱ期)中で確認できたが、本来は版築状盛土上面から掘削されたⅡ期の遺構と考えられる。土師器皿が出土している。

P024[資：第 11・111 図]

ＧＨ３グリッドに位置する SD213 掘方内で確認した円礫集中遺構である。検出した範囲では、南北 115×東西 75（cm）、深さは壁面で 20cm 以上である。遺構内は径 10～30cm の円礫が多く入り、その隙間の埋土は粘質土で、層下方ほどきめ細かい粘土が堆積して目詰まりを起こしていた。遺構上部は削平され、Ⅲ期枡形内路盤まで盛土されており上部の様相は不明であるが、円礫が充填されており、P025 との位置関係からも礎石の根固と考える。遺構上部は SX031（Ⅱ期石段）と同じ土層で盛土されており、Ⅱ期の礎石の根固と考える。

P025[資：第 34・111 図]

ＧＨ３グリッドに位置する P024 と類似した円礫集中遺構である。検出した範囲では、南北 138×東西 98（cm）、深さは壁面で 22cm 以上である。埋土の様相も P024 とほぼ同じ粘質土であり、円礫の隙間に堆積していた。P024 と南北に結んだ軸線は、Ⅲ期河北門の遺構の軸線とほぼ一致し、SX031 と直行する。P024 との心心距離は 196cm である。SX031 と同時期のⅡ期の礎石根固と考える。

第４節　西部

SD013[資：第 216 図]

Ｅ５グリッドの SA001 の下部に位置する溝状遺構である。撹乱掘削時に遺構の一部を平面的に確認した。検出した範囲では南北 134×東西 60（cm）で、南端部を検出しており北方向に延伸する。いぶ

し瓦が出土している。
時期　SA001 施工前に埋め戻されていることから、Ⅱ期からⅢ期初頭の遺構の可能性が高い。

SD014[資：第 216 図]
　Ｆ５・６グリッドに位置する溝状遺構である。平面と SD204-3 壁面で断面の一部を確認した。検出した範囲では、南北 324 以上×東西 87～47（cm）で、SD013 とほぼ平行に走る。17 世紀初頭の景徳鎮の白磁皿が出土している。
時期　SD013 同様に SA001 より古く、Ⅱ期からⅢ期初頭の遺構と推定する。

SW002[資：第 32・86・217 図]
概要　Ｅ６グリッドに位置する SD203・SD204-2 内で確認した石垣である。SD204-2 内の石は西面、SD203 内の石は南面になると想定している。
規模・構造　検出した範囲では、西面は 252cm、南面は 208cm、主軸はほぼⅢ期河北門の遺構の軸に一致する。帯状に掘削された掘方に沿って根石は配置されており、掘方の規模は広い所で幅は 71cm、深さは 26cm 以上である。石材は長軸 50×短軸 46×厚さ 26（cm）、長軸 70×短軸 30×厚さ 14（cm）等が大きい部類に入る。掘削はⅡ期路面を掘り込んでおり、Ⅲ期枡形路面に覆われている。
　構築された順序としては、Ⅱ期路面上に掘方が掘削され、根石を据えるとともに掘方内に裏込め栗石が充填される。それと同時に石垣面の側（外側）に粘土層が 10 cm弱の厚さで盛られている様子を確認した（3-4-04　137・138 層、5-3-01～06　33 層、3-4-23　58 層）。この粘土は路盤面となるのではなく、石垣構築に伴う整地土と考えている。石垣廃絶時には築石は根石を残して除去され、裏込め栗石が平準化され、その後上部が整地される（5-3-06　31 層）。SD203 内では築石が途切れた東側でも粘土層が確認出来ることから、本来は東面も石垣が構築されていた可能性がある。石材は自然石を利用しており割面等の加工痕は見られなかった。南面は石材を横置きする。
　栗石中から 16 世紀末～17 世紀初頭の漳州窯の磁器碗、埋め戻し土からは 17 世紀前半の肥前の陶器の皿が出土している（P312）。
時期　Ⅱ期路面構築後、Ⅲ1 期枡形路面構築までに構築・廃絶を迎えたと考えられる。

SX006[資：第 32・109 図]
　Ｆ～Ｈ６、ＧＨ５グリッドに位置し、SD214-3 北側壁面(3-4-04)の 153～157 層に該当する。検出した範囲では東西 570×深さ 70（cm）で、底面は平坦である。瓦や土師器皿（B）が出土している。
時期　版築状盛土（Ⅱ期）に覆われており、Ⅰ期遺構と思われる。

SX007[資：第 32・109 図]
　ＥＦ６グリッドに位置し、SD214-3 北側壁面(3-4-04)の 152 層に該当する。規模は、東西 382×深さ 56（cm）で垂直に近い掘り込みで底面は平坦である。
時期　版築状盛土（Ⅱ期）に覆われており、Ⅰ期遺構と考える。瓦や土師器皿が出土している。

SX011[資：第 39・218 図]
　ＤＥ６グリッドに位置する。南・北・西側を撹乱され、Ⅲ期最終面に覆われていることから、検出した範囲は狭いが SD203 南壁(3-4-23)で断面を観察することが出来た。検出した範囲では、東西 208×南北 70×深さ 50（cm）である。西側は多量の瓦が出土する SX203 に壊されている。この瓦は本来 SX011 の 47・48 層に含まれていたものとみられるが、SX203 掘削・埋め戻しの際に混入したものと考

えられる。

時期　Ⅲ期最終面に覆われ、Ⅲ期の所産と思われる巴文軒丸瓦（T24）が出土していることから、Ⅲ期の遺構と考える。

SX036［資：第 216 図］

Ｅ５グリッドに位置する。平面と SD204 北側壁面で確認した。検出した範囲では、南北 98×東西 152×深さ 23（cm）である。三葉文Ⅱ-2 の軒平瓦が出土している。

時期　Ⅲ期初頭の面を掘り込み、SA001 に覆われる。SA001 は枡形門創建当初には無く、宝暦の大火以前には構築されたと考えられる。

版築状盛土層［第 71 図］

SX034 直下、SD214-2・3 断面で確認された版築状の盛土層である。盛土層の状況は地点によって異なるが、調査区ほぼ中央部では、Ⅰ期の遺構削平面直上にやや厚めの黄褐色土が堆積する。厚さ５cm の黄褐色土の直上はやや汚れた、分層線が入れられないほどの薄い褐色土層で覆われる。これが３単位見られ、更にその上に１層が２～５cmの厚さの盛土が約 50 cmになるまで盛られる(第 33 図 3-4-05)。各層はいずれも叩き締められたように硬化しており、漆喰状の灰白色土、砂礫を多く含むにぶい黄褐色土、暗褐色粘質土といった質の異なる土を交互に盛った版築状の盛土層である。この厚い盛土層の最上面には地表面と考えられる風化層があり、標高は約 42.45mで、Ⅲ期枡形門の整地層がその上に盛られる。版築状盛土層を掘り込んでいる遺構は SD006・007 等であり、SD006・007 を埋め戻した後、河北門枡形が構築されることから、枡形門以前の面であることがわかる。

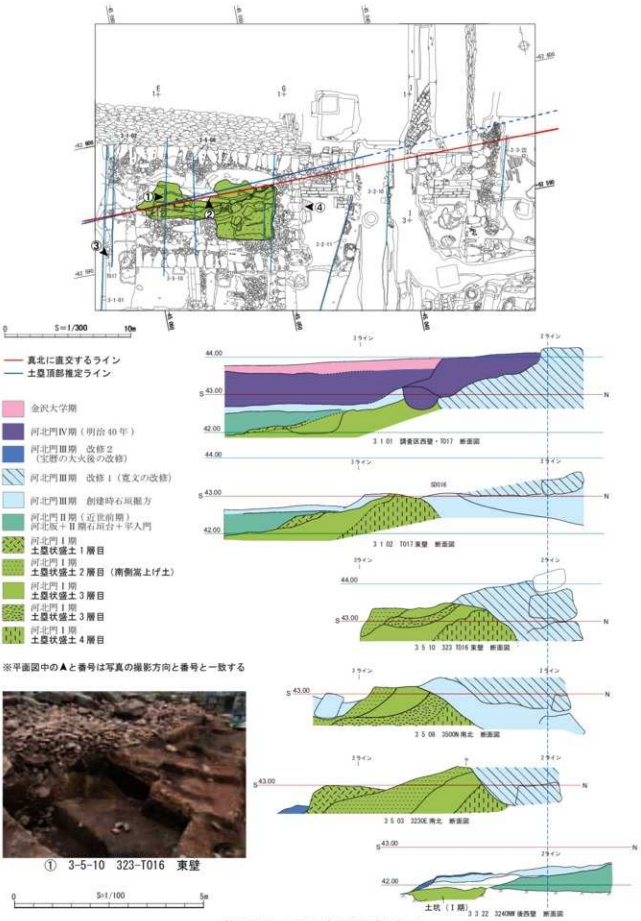
版築状盛土層は河北坂からの連続した層であることを確認しており、細かく固く叩き締めたような状況からもⅢ期以前の路面および路盤層と判断した。

範囲は河北坂から調査区南端部(3-1-08･09)、西はＥライン付近の SW002 まで確認できる(3-4-04)。東側に関しては、この盛土層を掘り込んでいる SD006・007 を境にほとんど確認できない。これは、Ⅱ期の段階から版築状盛土が希薄であった可能性と、二ノ門が構築されたⅢ期以降の改変が著しかったためという可能性が想定できる。枡形周辺部に比べ二ノ門内についてはⅢ期に掘削された遺構が多いことも確かである。しかしⅡ期における土地利用を考えた場合、SD006・007 を堀または区画溝と想定でき、河北坂を主軸とした南北に延びる版築状盛土ついては通路、東については屋敷地として利用されていたと想定可能で、そのため路盤の範囲に濃淡があるということができよう。

Ⅰ期の遺構上面を削平し、版築状盛土により造成

異なる質の土を積み重ねる。
層ごとに硬く叩き締められる。

第 71 図　版築状盛土層



第72図　SA002（土塁状盛土）１

SA002（土塁状盛土）［第 72 図］

本調査では近世の遺構に関しては基本的に上面確認にとどめていたので、河北門枡形構築以前（Ⅰ・Ⅱ期）の様相については、撹乱壁面を観察する等に限られていた。しかし、3500N（ニラミ櫓台北面）石垣解体調査に伴い 3500N 背面から、3230S（ニラミ櫓台南面）にかけて南北方向の軸線で土層を観察する機会を得たことから、3500N 構築以前のⅠ期の SA002（土塁状盛土）が残存していることが判明した。

以下の土層断面から、その堆積範囲や土質等特徴を見ていく（第 72 図）。

SA002 は、グリッドではＤ～Ｇ１～３、東西方向では T017 西壁(3-1-01)から 3230E(3-5-03)の範囲で確認出来、その規模は検出した範囲では東西約 13.50m、南北 9.50m になる。残存する最も高い所は、表土直下（第 73 図）の 43.74m で、最も低い所 T017(3-1-02)は、標高 41.82m の高さで観察出来、その高低差は 1.92m になる。41.82m 付近では、傾斜が緩くなることから、基底部が付近にある可能性がある。3230E より東側では確認出来ず、3240W 下(3-3-22)では 41.89m の高さで黒ボク土の残存する地山が広がっている。

SA002　２層目の堆積範囲から軸線を推測した。SA002 頂部はほぼ真北に直交する軸線を持ち、Ⅱ期櫓台やⅢ期の遺構の軸線とは異なる。確認した高さまでで、土層は４層に大別でき、表土直下の 43.74m 付近の３・４層は SA002 の頂部付近と思われ、１・２層は３・４層の南側を嵩上げするための盛土と考えられる。

他の層に比較して１層目は粘性・締まりが弱く、含有物が多いという特徴がある。この土質の違いが構築時期差を示しているのか出土遺物や土層の堆積状況からは不明である。

２層目は大粒の炭化物を含み、締まりが強い地山質土を由来とする粘質土である。２層目の出土遺物のうち、P63・64 はともに 17 世紀初頭の土師器皿、P65 は 16 世紀末の瀬戸・美濃産灰釉陶器皿である。３・４層目は地山質土にあまり他の土が混ざらず、含有物も少なく付近の地山質土を由来とする。

3230E より東側で土塁状盛土が確認出来ない理由としては、以下のような可能性を考えている。

１．Ⅰ期の段階で東側は土地の利用の仕方が異なり、土塁状に盛土をする必要がなかった。

２．旧地形が西側と東側では異なり、西側（T017）は地山が低かったために低い所から盛土をおこなっている。東側は地山が高かったために、地山上に盛土をおこなった可能性もあるが、Ⅱ期以降に破壊されて残存していない。

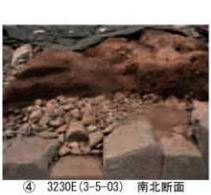
３．軸線どおりに東側は調査区より北側に土塁状盛土が構築されていた。

２に関しては、3-2-10・3-2-11 において、41.80～41.60m の標高でⅡ期に地山や整地層の削平を確認している。これは、3-3-22 の地山の標高 41.89m と近い値であり、Ｈグリッド付近から東側は、Ⅱ期に 41.80m 前後で削平されている可能性がある。

T017 の南側で確認した自然石列は検出範囲が狭く軸線が明瞭ではないが、土塁状盛土の土留めの可能性がある。

② SA002 最も高い残存地点　南から

③ SA002 最も低い地点　北西から



④ 3230E(3-5-03)　南北断面

第 73 図　SA002（土塁状盛土）２

第６章　出土遺物

第１節　陶磁器・土器

出土陶磁器・土器の概要［第 13・16 表、資：第 219～230 図・第 252～265 図・第７～17 表］

2000 年・2006～2008 年にかけての調査において、陶磁器・土器が 30 箱出土している。その量を整理箱単位で見ていくと、2000 年は４箱、2006 年は 13 箱、2007 年は 12 箱、2008 年は１箱出土している。

出土した陶磁器・土器の個々の特徴については観察表の記載にかえ、ここでは、特筆すべき点を中心に述べていく。観察表・図版における陶磁器・土器の掲載の順番であるが、第３～５章の遺構の掲載に準じている。陶磁器・土器の分類は、『木ノ新保遺跡』［石川県教委・(財)石川県埋蔵文化財センター2002b］、『金沢城跡埋蔵文化財確認調査報告書Ⅰ』［石川県金沢城調査研究所 2008b］（以下『確認調査Ⅰ』）をもとに、景徳鎮系と漳州窯系といった中国産の製品に関しては『貿易陶磁研究　№２』［上田、小野、森田 1982］なども参考にしている。観察表・図版については凡例を参照されたい。

検出した遺構のうち SD006・007 に関しては、部分的に遺構底面まで調査しており、遺物がまとまって出土している。その上で、陶磁器・土器の組成の傾向を知るため、破片数の集計を行った。

出土した陶磁器・土器

Ｐ１～P32 は、表土・撹乱からの出土やグリッド一括で取り上げているものである（第３章１節参照）。P10 は、景徳鎮系の青花碗で見込に文様が描かれる。青花碗の中でも古手であり、小野分類染付碗 C 群に相当し、いわゆる「蓮子碗」に属する。P11 は、織部の向付である。大坂の事例では、夏の陣のあった 1614 年前後から見られるとされる。P12 は天目茶碗で、産地は瀬戸・美濃あるいは越中瀬戸の可能性がある。P18 は、珠洲の擂鉢で発達した口縁端部に波状文があることから 15 世紀中～後半の製品と考えられる。P30 は、漳州窯系の青花皿で古手の製品。P31 は、『難波宮址の研究　第九』（以下、『難波宮址』）で青花皿Ⅱｂ類とされている製品に類似する。このタイプは『難波宮址』では豊臣前期と考えられている。

P33～P48 は、二ノ門付近から出土している（第３章３節参照）。大まかにその出土位置から P33～37 は SX030（二ノ門路盤）、P38～P44 は ID321・324（南・北側石垣台）、P45～48 は SD002・SK019・SD003（石組溝・枡・石組暗渠）に分けて掲載している。P33 は、景徳鎮系の青花の小坏で、見込に荒磯文が描かれる。17 世紀第２四半期頃で寛永期頃の製品。P35・36・38・39 は、景徳鎮系の白磁の皿で、森田分類白磁皿 C 群である。このうち P39 は、高台が大きく、古い様相をもつ。P41 は、胎土の特徴等から、越前の擂鉢と思われる。P42 は漳州窯系の製品で『難波宮址』で青花皿Ⅰ類に分類されている。大坂城では 16 世紀後半を中心に出土している。P44 は、龍泉窯系の青磁皿であり、15 世紀後半から 16 世紀前半の年代が考えられる。P47 は、肥前産の陶胎染付の碗と思われ、被熱が著しく、宝暦の大火等の被災資料の可能性もある。

P49～56 は、枡形付近から出土している（第３章４節参照）。枡形付近の中でも、P49 は SX034（枡形内路盤）、P50～53 は SA001（土塀裏盛土）・3220S（土塀裏盛土土留石垣）、P54 は SD005（石組暗渠）、P55・56 は柱穴、SE002（井戸）・SX035（炉）に区分し、掲載する。P52 は、瀬戸・美濃の袋物と思われるが、年代も含めて詳細は不明である。

P57～65 は、ニラミ櫓台付近から出土している（第３章５節参照）。P57～62 は 323（ニラミ櫓台）付近出土、P63～65 は石垣台（Ⅱ期）以前の土層出土の遺物である。P57 は、P35・36・38・39 等と同じく、景徳鎮系の白磁の皿である。祖形は 15 世紀後半～末頃のもので、元和の頃まで出土する。P59

は、青磁の皿で、内面はヘラで削られている。おそらく景徳鎮系の製品で 16 世紀後半頃のものと思われる。1993・4 年に調査された石川橋の下の白鳥堀調査区でも類似する製品の出土が確認されている。

P66～96 は、河北坂調査区から出土している（第３章６節参照）。P66～76 は河北坂遺成土（Ⅱ・Ⅲ期）、P77～96 は河北坂遺成以前（Ⅰ期）の土層からそれぞれ出土している。P70 は、龍泉窯系の青磁碗で、上田分類Ｅ類に含まれる。P81 は、瀬戸・美濃の灰釉皿で大窯の製品。P84・85 は、小型の土師器皿で、口縁端部の作り、体部が外側に開き気味といった点から、京都系の影響を受けた製品である。P78・87 は、景徳鎮系の青花皿で、16 世紀末頃である。

P97 は、石垣解体調査（第４章参照）に関連し、解体調査中に石垣の栗石層から出土している。

P98～312 は、河北門枡形以前の遺構に関連する（第５章参照）。枡形門成立以前の遺構は、調査区全体を東・中央・西の３つに分けて呈示している。東部が調査区東端から SD006・007 を含むところまで、中央部が SD006・007 西側から SX006 まで、西部が SX006 を含むところから調査区西端までである。遺物もこの順に合わせて掲載しており、P98～297 は東部、P298～309 は中央部、P310～312 は西部から出土している。東部の中でも遺物が多量に出土しているのは SD006 （P98～159）と SD007（P160～254）である。P170 は、器壁の薄い器種不明の土器である。P172 は、焼塩壷と思われ、本丸附段 2004-1（2003-8）地点 SK15 でも確認されている。P182 は、景徳鎮系の青花小坏で P219 と類似している。大坂でも同様の製品が豊臣後期の後半に出土している（『大坂城Ⅲ』［（財）大阪市文化財協会 1988］）。P183 は、景徳鎮系の青花皿で小野分類染付皿Ｆ群か。P184 は、漳州窯系の白磁皿で、口縁は外反し、胎土は粗く、漳州窯系の中でも古手の製品と思われる。森田分類白磁皿Ｃ群に属するか。P185 は、漳州窯系の碁笥底の皿で、小野分類染付皿Ｃ群に分類される。16 世紀末～17 世紀初頭の製品で、その中でも古手に属する。P199 は、胎土の特徴から、肥前・北九州の可能性もある。P201 は、肥前の水指の身と思われるが、器種不明。似ている製品で P274 があり、P201 の蓋とも考えられる。P239 は、華南彩釉陶の小皿で『九谷Ａ遺跡Ⅰ』［石川県教委・(財) 石川県埋蔵文化財センター2005］でも出土している。P240 は、産地不明の擂鉢。備前の擂鉢に形態が類似するが、胎土が異なる。備前写しと思われるが、産地は不明である。P253 は、灰釉に藁灰釉が施された壷で、肥前、または北九州周辺の窯の可能性がある。P288 は、碁笥底の青花皿で、器形としては小野分類染付皿Ｃ群に属する。漳州窯系の製品か。P293 は、漳州窯系。16 世紀末～17 世紀初頭の製品で、その中でも古手に属する。P185 と同型品。P294 は、青花皿で小野分類染付皿 B1 群に含まれる。胎土がやや粗いことから、漳州窯系の製品と思われる。

SD006・007 出土遺物について［第 74・75 図・第 13～16 表、資：第 223～228 図・第 256～263 図］

SD006 はＩ５グリッド、SD007 はＩ６～８グリッドに位置する溝状の遺構である。両遺構から出土した陶磁器・土器の破片数の集計を行った。SD006・007 から出土する陶磁器は破片数が少なく、完形率が低い。それに対して、土器は破片数も多く、ほぼ完形に近いものが多い。その場合、破片数が個体数を反映しているとは言い難く、実際に存在した個体数より多く捉えてしまうことになる。しかし、SD006・007 の陶磁器・土器の出土状況は類似しているので、両遺構において破片数を比較することは有効だと考え、集計を行った。ここでは、その結果について述べていく。

SD006 から出土した陶磁器・土器の破片数は 703 点である。それらを材質・産地・器種ごとに集計したものが第 16 表である。材質では、土器が 89.5%と圧倒的に多く、次に陶器が多く 7.5%、磁器が 2.8%である。材質ごとの産地では、陶器のほとんどは肥前で 69.8%、次に瀬戸・美濃が 18.9%、越前が 3.8%などである。磁器は総破片数自体少ないが、景徳鎮系・漳州窯系を含めた中国のもので占められる。肥前磁器も確認しているが、混入の可能性が考えられる。土器は在地産のもので占められている。次に陶器・磁器を合わせた全体の産地であるが、景徳鎮系・漳州窯系を含めた中国のものが

2.2%、肥前が5.8%、瀬戸・美濃、信楽、越前が１％前後、在地が89.2%と、在地のものが最も多い。器種では、皿が90%と多く、次いで碗が4%、鉢が1.3%、その他の器種は１～５点程確認でき、全体からみると１%以下の比率である。

破片数の集計から、SD006 で材質・産地・器種で最も多かったのは、在地産の土師器皿である。土器のうち１点が焼塩壷で、それ以外はほぼ土師器皿であった。ただし、先に述べたように、土師器皿は破片数が多く、実際の個体数より多く捉えている可能性がある。しかし、他の材質や器種よりも圧倒的に多いことから、土師器皿がSD006出土遺物の主体であったと考えられる。それら土師器皿の特徴を捉えるために、土師器皿の分類と口径の計測を行った。『確認調査Ⅰ』での基準を用いて分類を行ったところ、A～C2類まで確認した。ただし、C2類は１点のみで、出土状況から撹乱の可能性がある。土師器皿の中で量が多かったのは、不明の42.9%を除くとC1類であり42.3%である。C1類は、京都系B類が終焉しC2類へ移行する時期の様相を示すもので、中世以来の形態を引くA類、京都系のB類、金沢城下の近世前期に一般的なC2類に対し、形態的な斉一性に欠け、実態としては多様なグループから構成されており、分類単位として問題を孕んでいるが、ここでは、A・B・C2以外の形態として考えておく。本丸附段の2004-1（2003-8）地点SK15では、C1類が出土し、見込みに強い凹線があり、体部を中折れ気味とするもの、体部が内湾気味で底面に筵目状の圧痕がつくもの、外形が全体的に丸みを帯び、底部と体部の境が目立たないものなどがあるとし、その形状が多様であることが示されている。この他に、SD006では、B1類やB2類など、京都系の要素をもつ土師器皿が３～５%認められるが、C1類ほど多くはない。

SD006では、C1類に分類されるが、SK15では見られないタイプのものが存在している（P134・136・137）。その特徴は、形状が底部平坦、体部の立ちあがりが急、口縁端部が内屈するといった点で、C2類の器形に似ているが、C2 類より胎土が緻密で堅緻なものが多く、器壁も薄いといった傾向がある。このように、C1類のなかで、C2類の要素をもつと思われるものが4.5%認められる。

次に、土師器皿の口径であるが、10～14 cm大が量的に多く、特に12・13 cmの大きさのものが他よりも多い。寸に換算してみると、およそ３～５寸が主体で、その中で４寸が多いといった傾向が読み取れる。

SD007から出土した陶磁器・土器の破片数は3021点である。

それらを材質・産地・器種ごとに集計したものが第15表である。材質では、土器が94.9%と圧倒的に多く、次に陶器が3.5%で、磁器が1.5%である。材質ごとの産地では、陶器のほとんどは肥前で58.9%、次に多いのが瀬戸・美濃で15.9%、そして信楽が6.5%、その他に越前、備前などが１～２%認められる。京・信楽は混入の可能性がある。磁器では、景徳鎮系・漳州窯系などの中国の製品で占められ、その他の産地のものは見られない。産地では、在地の製品が94.8%と多く、その他に肥前が2.1%、景徳鎮系・漳州窯系を含めた中国が1.5%、瀬戸・美濃が0.6%である。器種では、皿が95.1%と多く、次いで碗が1.4%、壷・甕が0.7%、擂鉢が0.4%である。その他にも量は少ないが、焼塩壷・茶入・向付・水指・小坏などが出土している。

破片数の集計から、SD007においてもSD006と同じく、材質・産地・器種で最も多かったのは、在地産の土師器皿であり、出土遺物の主体をなしていた。それら土師器皿の特徴を捉えるために、分類と口径の計測を行った。

まず、分類を行った結果、B～C1類までを確認した。その中でも不明の53.6%を除くとC1類が多く39.5%程である。SD007においてもSD006と同様に、C1類に分類されるが、C2類の要素をもつものが3.6%認められる（P164・209・210・213・215・231・235）。

土師器皿の口径であるが、10～15 cm大が量的に多く、特に13・14 cmの大きさのものが他よりも多い。寸に換算するとおよそ４～５寸が主体で、その中で４寸のものが中心となっている。

以上が、SD006 と SD007 の出土陶磁器の破片数である。集計を行ったことで、明らかとなった共通点と相違点について、材質・産地・器種・土師器皿ごとに述べていく。

材質では、SD006・007 ともに、土器が最も多く、陶器・磁器と少なくなる。SD006 の方が陶器の比率がやや高い。各材質での産地の差は、磁器では、SD006・007 ともに景徳鎮系・漳州窯系含む中国産で占められている。陶器では、肥前、瀬戸・美濃、越前などが共通して見られる。また、肥前が最も多く、次に瀬戸・美濃が多いといった比率も共通している。

器種では、SD006・007 ともに皿が多い。出土している器種は、ほぼ同じであるが、SD007 の方が水指・小坏・耳皿などが出土し、やや種類が多い傾向がある。各器種の材質では、皿は、SD006・007 ともに土器が多い。碗は、SD006・007 とも陶器の比率が高い。

土師器皿を分類ごとに見ていくと、SD006 では A～C2 類、SD007 では B～C1 類が見られる。共通しているのは、C1 類が突出して多いことである。その中で、C2 類の要素を持ったものが一定量存在する。これらは、C2 類の祖形とも考えられ、C1 類期に出現し、元和以降に主流となる C2 類への移行が推定できる。SD006 では、B1・2 類の比率が高い。SD006 で確認された B1・2 類は、雲母と海綿骨片を含むといった特徴から、能登からの搬入品と考えられる。C1 類が主体となる 17 世紀初頭頃は、加賀では B 類が少なくなるが、能登では使用され続けている可能性があり、そのため、B1・2 類が多いという理由で、SD006 が SD007 より時期的に古いということにはならない。

『確認調査Ⅰ』で掲載されている C1 類の口径の平均は、12 cm（４寸）であり、SD006・007 ともに C1 類を主体としているので、口径４寸の製品の比率が高いと考えられる。

また、河北門の遺物整理作業では、陶磁器・土器は全点接合状況を確認している。SD007 の堆積状況は上層と下層で土質が大幅に異なっていたため、遺構廃絶までの時期差の有無等を確認するために層ごとに遺物を採取している。ここでは、SD006・007 の遺物を中心に非掲載のものも合わせて接合状況を表で提示した。

第13表　SD007内遺物接合状況

番号	材質	器種	出土地点	取上No.	出土地点	取上No.	出土地点	取上No.	出土地点	取上No.	出土地点	取上No.	出土地点	取上No.
P174	磁器	碗	SD007-②	432	SD007-③	1200	SD007-②～⑥	1201	SD007-③～⑤	431				
P188	陶器	碗	SD007-②～⑤	1201	SD007-③	1200	SD007-②	432	SD007	385	SD007-③	388	SD007	439
P192	陶器	碗	SD007-③	388	SD007-③	1200	SD007(75層)	513	SD007-③	439				
P225	陶器	甕？	SD007-③・④	317	SD007-③・④	366？	SD007-②	432						
	土器	皿	SD007-①・②	1301	SD007-③・④	384								
	土器	灯明皿	SD007-①・②	1301	SD007-③・④	384								
	土器	皿	SD007-②	448	SD007-③	1203	SD007-③	1200						
	土器	灯明皿	SD007-②	432	SD007-③	439								
	土器	皿	SD007-③	1202	SD007-②	448	SD007-③	1203	SD007-③	1205	SD007-③	1220		
P178	土器	皿	SD007-③	439	SD007-②	432								
	土器	皿	SD007-③	1216	SD007-③	388	SD007-③	434	SD007-②	432				
	土器	灯明皿	SD007-④・④	384	SD007-①・②	1301								
	土器	灯明皿	SD007-③・④	384	SD007-①・②	1301								

第14表　SD006・SD007　他遺構との接合状況

番号	材質	器種	グリッド	出土地点	取上No.	グリッド	出土地点	取上No.	グリッド	出土地点	取上No.	グリッド	出土地点	取上No.
P113	陶器	皿？	I5	SD006　下層	799	I7	SK010	302						
	陶器	壺	I5	SD006　下層	799	I6	SD214-1北壁(51層)	1123						
	土器	灯明皿	I5	SD006	841	I7	SD007-③	388						
P103	土器	灯明皿	I5	SD006	841	I7	SD007-③～⑤	431						
P234	陶器	すり鉢	I7	SD007-②～⑤	391	I7	SD007-④・⑤	382	I7	SD007-③・④	384	I7	SD007-③～⑤　4？	
			I7	SD007	406	I7	SD007	385	I7	SD007	421	I7	SK010	302
P268	土器	灯明皿	I8	SD007	312	I18	SK006	268						
	土器	碗？	I7	SD007-②～⑤	391	I7	SD007-②～⑤	1201	I7	SK010	396			
P304	土器	皿	I7	SD007	532	H7	SK014	535	H167	SK014	393			

第 15 表　SD006 土師器皿　分類別破片数

SD006　産地別破片数（陶器）

	肥前	瀬戸・美濃	越前	信楽	在地	不明	合計
破片数	37	10	2	1	1	2	53
%	69 8%	18 9%	3 8%	1 9%	1 9%	3 8%	100 0%

SD006　産地別破片数（磁器）　※産地不明及びその他を含む

	中国※	景徳鎮	漳州	肥前	不明	合計
破片数	6	6	3	4	1	20
%	30 0%	30 0%	15 0%	20 0%	5 0%	100 0%

SD006　産地別破片数　※産地不明及びその他を含む

産地	中国※	景徳鎮	漳州	肥前	瀬戸・美濃	越前	信楽	在地	不明	合計
破片数	6	6	3	41	10	2	1	627	7	703
%	0 9%	0 9%	0 4%	5 8%	1 4%	0 3%	0 1%	89 2%	1 0%	100 0%

SD006　材質別破片数（皿）

材質	陶器	磁器	土器	合計
破片数	6	3	624	633
%	0 9%	0 5%	98 6%	100 0%

SD006　材質別破片数（碗）

材質	陶器	磁器	土器	合計
破片数	18	10	0	28
%	64 3%	35 7%	0 0%	100 0%

SD006　材質別破片数

	陶器	磁器	土器	瓦器	合計
破片数	53	20	629	1	703
%	7 5%	2 8%	89 5%	0 1%	100 0%

SD006　器種別破片数

器種	碗	皿	鉢	壺・甕	擂鉢	茶入	向付	瓶	焼塩壺	蓋	皿or鉢	碗or小坏	不明	合計
破片数	28	633	9	5	1	1	3	3	1	1	4	5	9	703
%	4 0%	90 0%	1 3%	0 7%	0 1%	0 1%	0 4%	0 4%	0 1%	0 1%	0 6%	0 7%	1 3%	100 0%

SD006　土師器皿　各分類の破片数

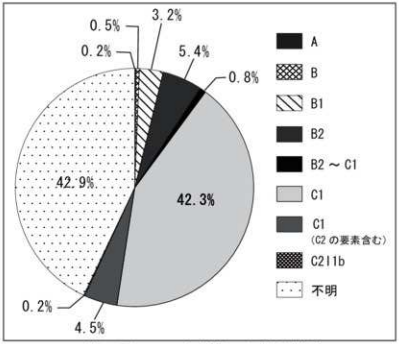
分類	A	B	B1	B2	B2～C1	C1	C1（C2の要素含む）	C2 1b	不明	合計
破片数	1	3	20	34	5	264	28	1	268	624
%	0 2%	0 5%	3 2%	5 4%	0 8%	42 3%	4 5%	0 2%	42 9%	100 0%

SD006　土師器皿　口径

口径（cm）	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	合計
破片数	1	0	3	22	15	46	36	20	5	3	1	152
%	0 7%	0 0%	2 0%	14 5%	9 9%	30 3%	23 7%	13 2%	3 3%	2 0%	0 7%	100 0%

SD006　土師器皿　雲母・海綿骨片含む

破片数	38
土師器皿全体数	624
比率	6 1%



第 74 図　SD006 土師器皿 分類別破片数

第 16 表　SD007 土師器皿　分類別破片数

SD007　産地別破片数（陶器）

	肥前	瀬戸・美濃	信楽	越前	備前	京・信楽	不明	合計
破片数	63	17	7	2	1	1	16	107
%	58 9%	15 9%	6 5%	1 9%	0 9%	0 9%	15 0%	100 0%

SD007　産地別破片数（磁器）　※産地不明及びその他を含む

産地	中国※	景徳鎮	漳州	不明	合計
破片数	11	31	2	2	46
%	23 9%	67 4%	4 3%	4 3%	100 0%

SD007　産地別破片数　※産地不明及びその他を含む

産地	中国※	景徳鎮	漳州	肥前	瀬戸・美濃	信楽	京・信楽	越前	備前	在地	不明	合計
破片数	11	31	2	63	17	7	1	2	1	2865	21	3021
%	0 4%	1 0%	0 1%	2 1%	0 6%	0 2%	0 0%	0 1%	0 0%	94 8%	0 7%	100 0%

SD007　材質別破片数（皿）

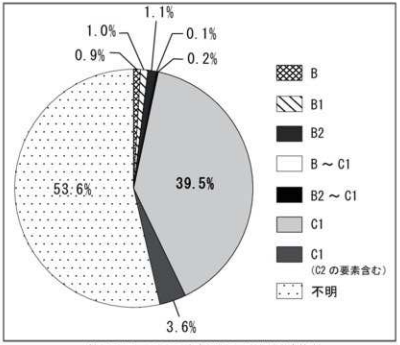
材質	陶器	磁器	土器	合計
破片数	9	4	2859	2872
%	0 3%	0 1%	99 5%	100 0%

SD007　材質別破片数（碗）

材質	陶器	磁器	土器	合計
破片数	24	20	0	44
%	54 5%	45 5%	0 0%	100 0%

SD007　材質別破片数

材質	陶器	磁器	土器	合計
破片数	107	46	2868	3021
%	3 5%	1 5%	94 9%	100 0%



第 75 図　SD007 土師器皿 分類別破片数

SD007　器種別破片数

器種	碗	皿	鉢	壺・甕	擂鉢	茶入	向付	水指	小坏	瓶	焼塩壺	耳皿	皿or鉢	碗or小坏	碗or皿	碗or鉢	不明	合計
破片数	43	2872	6	21	12	5	4	4	4	1	5	1	6	3	1	1	32	3021
%	1 4%	95 1%	0 2%	0 7%	0 4%	0 2%	0 1%	0 1%	0 1%	0 0%	0 2%	0 0%	0 2%	0 1%	0 0%	0 0%	1 1%	100 0%

SD007　土師器皿　各分類の破片数

分類	B	B1	B2	B～C1	B2～C1	C1	C1（C2の要素含む）	不明	合計
破片数	27	28	31	2	7	1130	163	1531	2859
%	0 9%	1 0%	1 1%	0 1%	0 2%	39 5%	3 6%	53 6%	100 0%

SD007　土師器皿　口径

口径（cm）	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	合計
破片数	1	13	17	50	24	58	100	89	32	11	4	5	1	5	410
%	0 2%	3 2%	4 1%	12 2%	5 9%	14 1%	24 4%	21 7%	7 8%	2 7%	1 0%	1 2%	0 2%	1 2%	100 0%

SD007　土師器皿　雲母・海綿骨片含む

破片数	26
土師器皿全体数	2859
比率	0 9%

第２節　瓦

出土瓦の概要［第 76・77 図、資：第 231～242 図、第 18～23 表］

瓦は 2000・2006～2008 年度で整理箱 223 箱出土した。撹乱出土の釉薬瓦は、現場段階で選択的に採取しているため本報告ではいぶし瓦を中心に観察を行った。器種ごとに分類し、軒瓦は瓦当文様、その他の特徴でも分類を試みた。しかし、本調査では、年代が把握出来るような良好な一括廃棄の土坑等は少なかったので、各分類に付されたローマ数字は、文様の編年を示しているのではなく、文様の種類を表している。

いぶし瓦に関しては主に『金沢城跡石川門前土橋（石川橋）』［石川県教委・（財）石川県埋蔵文化財センター1997］（以下、『石川橋』）・『金沢城跡埋蔵文化財確認調査報告書Ⅰ』［石川県金沢城調査研究所 2008a］（以下、『確認調査Ⅰ』）を参考にした。『確認調査Ⅰ』は、城内本丸の調査報告書であり、元和６年（1620）、寛永８年（1631）の大火前後、1640 年代、1640 年代以降の各年代に廃棄された瓦が掲載されている。釉薬瓦の分類に関しては、残存状況の良いものについては『金沢城跡石垣修築工事報告書　玉泉院丸南西石垣』［石川県金沢城調査研究所 2010a］（以下、『玉泉院丸』）を参考にした。瓦の計測部位については、凡例（本文編）を参照されたい。また、丸瓦のうち、体部内面調整で観察表に特に記載がないものは、瓦切り離し痕跡コビキｂである。

軒丸瓦［第 76 図・第 17 表、資：第 231～233・266～269 図・第 18・19 表］

T1～49 が軒丸瓦である。そのうちＴ８・T10・T12・T18 は釉薬瓦、その他はいぶし瓦であり、瓦当の文様から梅鉢文と巴文に大別した。梅鉢文は T21・T22・T23・T34 であり、ともに無軸である。河北門ではその大半を巴文が占めており、分類を試みた。

第17表　軒丸瓦　巴文分類表　　**※1　巴の頭→尾の向きを右：ａ、左：ｂ**

分類名	珠文数	径（cm）	巴の尾の向き（※1）	突起・その他
Ⅰ-1	12	16	左回り	
Ⅱ-1a	14	14～15前半	右回り	中心に円形突起あり
Ⅱ-1b	14	14～15前半	左回り	中心に円形突起あり
Ⅱ-2a	14	14～15前半	右回り	
Ⅱ-2b	14	14～15前半	左回り	尾が次の巴に繋がらないものを含む
Ⅲ-1a	16	14後半～16	右回り	
Ⅲ-1b	16	14後半～16	左回り	尾が次の巴に繋がらない
Ⅲ-2	16	17～19	右回り	巴の間に鉤型や十字の突起あり
Ⅳ	不明	不明	左回り	巴の上面が平坦

巴文　珠文の数、瓦当径、巴の頭→尾の向きを右：a、左：b として分けた。細分として、瓦当中央の突起物の有無、その他尾の繋がり、十字や鉤型の突起の有無でも分類している。以下、珠文の少ないものからⅠ～として記した。また特記したもの以外は、巴の尾は次の巴に繋がっていた。

以上の瓦のうち、Ⅳの瓦はⅢ期枡形河北門創建時（慶長後期）には埋没している SD006（Ⅱ期）から出土しており、慶長後期以前から使用されていたと考える。巴の尾の上面が平坦であることから、金箔が貼られていた可能性がある。SE001 からⅠ-1、Ⅱ-1a・1b、Ⅱ-2a・2b、Ⅲ-1a が出土している。その他は、中国の白磁や 17 世紀初頭の土師器皿等が出土し（P278・ P279）、遺構の位置や絵図との比較からも、寛文８年（1668）には廃絶していると考えられる遺構であり、SE001 出土の軒丸瓦は 17 世紀第３四半期より以前から使用されていたと想定している（第５章第１節参照）。

T6 は菊丸瓦である。重弁で上の花弁には中央に沈線がある。釉薬瓦のＴ８・T10・T12・T18 は巴文の越前赤瓦である。

軒平瓦［第77図、資：第234～237・270～275図・第20～22表］

軒平瓦(T50～T104)のうち、T52・T65・T87・T92・T112は釉薬瓦である。その他、いぶし瓦は、中心飾りの文様で桐文・花文・三葉文・菊文に大別し、その後多く出土した花文と三葉文に関しては細分を行った。軒平瓦の多くは、河北門廃絶時の埋土と考えられる土層から出土しており、瓦当文様の変遷等確認は難しいが、城内初出の資料もあり、今後の資料と比較するためにも多くの瓦を提示した。

桐文　T93・T104は桐文である。T89も桐文の可能性がある。T89は、SX203・SX011一括採取の遺物である。SX203は近代の遺構であるが、SX011はⅢ期最終路面に覆われたⅢ期初期の遺構である。T104はⅢ期河北門創建以前のSD006(Ⅱ期)から出土している。

花文　中心飾りが花文のものは、T50・T51・T56～59・T61～T64・T66～80・T88・T91・T95・T99・T102・T103である。花文や唐草文の描かれ方で花文Ⅰ～Ⅴに分類している。以下、その特徴を示す。

Ⅰ　中心の花弁が小さめで葉や唐草は、輪郭線以外の中央部も立体的になっている箇所が見られる。端のツルの巻きがより曲線的で上が下より外側に出ている。

Ⅱ　花弁の中が少し簡略化される。葉の輪郭線が太く、先が二股に分かれ、唐草の巻きは深いが、直線的になる。

Ⅲ　花弁・葉・唐草ともに、輪郭だけを直線的に描くようになり、その線も細くなる。葉が二股に分かれる。唐草の巻きがより浅くなる。

Ⅳ　輪郭線がより細くなる。花弁が団扇状、葉が二股に浅く分かれる。唐草の巻きも浅い。

Ⅴ　輪郭線が太く直線的、立体の凸が緩い。葉は二股に分かれる。端の唐草の下側は巻かない。

花文Ⅲ・Ⅴは、先述したSE001から出土しており、寛文８年(1668)以前から城内で使用されていたと考えられる。文様のみを観察すると、花文Ⅰが一番細かく丁寧に彫られた范を使用し、ⅠからⅤに数字が増えるに従って、文様は簡略化されていく。しかし、その大半は明治の河北門廃絶時の埋土出土であり、生産年代に言及することは困難である。文様の変遷が「細かく丁寧」→「簡略化」の方向へ移行していくとは限らず、花文Ⅰから花文Ⅴまでほぼ時期差なく使用されていた可能性もあり、あくまで文様の違いで分類した。

三葉文　瓦当の中心飾りの文様が主に三つの葉で構成されているものを三葉文とした。三葉文はT53～55・T60・T81～87・T92・T94・T96～98・T100・T101である。葉の上下の向きで三葉文と垂下型三葉文に分け、三葉文の中では主に唐草の描かれ方でⅠ～Ⅵに分類している。河北門では、垂下型三葉文は出土していないが、垂下型五葉文が出土している。花文同様に文様の時期的な変遷を捉えるのは困難であるが、城内初出の資料もあり多くを掲載した。拓本のみでは把握し難い唐草細部の分類の基準を以下記す。

Ⅰ　三葉横に下向きに２本唐草が巻く。その外側上向き唐草の巻きは繋がっており上方先端は枝毛状に分かれる。

Ⅱ-1　三葉横の下向き唐草は１本で、その外側は唐草が「川」の字状に伸びる。上方先端は枝毛状に分かれる。

Ⅱ-2　Ⅱ-1と良く似ているが、「川」字状のツルの途中が切れている。范キズとも思われたが、唐草を詳細に観察した結果、別の范と判断した。

Ⅲ　三葉の脇の下向きの唐草は１本で、その外側の上向きの唐草は繋がっていない。先端まで数本の唐草で構成されている。三葉間はあまり開いていない。

Ⅳ　三葉の間が開き、唐草は繋がっていない。全体的に抽象的に描かれている。

Ⅴ　三葉自体が花弁のように幅を持ち、唐草は連続し、全て下向きに巻いている。

Ⅵ　上下交互に巻いている唐草が一本ずつ独立している。

垂下型葉文のうち、T101は中心飾りが下向きの葉５枚で、全体的に彫りが浅く線が細い。先端は

三股に分かれた唐草の中心からも唐草が伸びている。同じく垂下型と思われるT100は、T101とよく似ているが端の唐草の巻きや葉の太さが異なり、城内初出である。三葉文ⅠとⅡ・Ⅲを比較して見ると、唐草が繋がって描かれ、上方先端が枝毛状に分かれる点ではⅡと共通しているが、中心飾りから外側に向けて下上下ときれいに唐草が巻かれる点においてはⅢと共通している。

釉薬瓦のうち、T52・T87・T92は越前赤瓦である。T87・T92はT86等三葉文Ⅱ-1に文様がよく似ているが別の范と思われる。T65は『玉泉院丸』で梅鉢Ⅲと分類している。釉薬の掛り方は広めで新しい様相を示すが、『玉泉院丸』では近世に生産された可能性について指摘しているため提示した。

軒丸瓦・軒平瓦に関して、土層の新旧関係等から、ある程度年代が判明している遺構等を基準に見ていきたい。河北坂の造成土18層上面は、Ⅲ期中の造成土でⅢ期最終段階までには盛土に覆われている。同層上面から軒丸瓦は、巴Ⅱ-1a・1b、Ⅲ1-a、軒平瓦は三葉文Ⅱ-2・Ⅳが出土している。SX036は、枡形のSA001（土塀裏盛土）の下部に位置し、Ⅱ期版築状盛土を切り込む遺構であり、三葉文Ⅱ-2（T94）が出土している。SA001は、河北門枡形創建当初にはなく、宝暦の大火以前には構築されている。Ⅱ期のSD006上部に位置し、寛永8年（1631）の大火以降の枡形内の部分修理の整地層からは、垂下型五葉文（T100）と花文Ⅲ（T99）が出土している。先述の通り、SE001には、寛永の大火後に葺かれ、寛文8年までに下ろされた瓦が本遺構に廃棄されていると考えている。本遺構出土の軒丸瓦の文様はⅡ-1a・bが多く、他はⅠ-1、Ⅱ-2a・2b、Ⅲ-1aが出土している。軒平瓦は、垂下型五葉文、花文Ⅲ・Ⅴが出土しており、上向きの三葉文は確認していない。

丸瓦［資：第237～240・275～277図・第22表］

T105～T129が丸瓦である。丸瓦の切り離し痕跡であるコビキaは、近代以降の土層出土のものを除くとSD006・SD007等大半はⅡ期の遺構から出土している。T118・T119はSX030（二ノ門路盤）下から出土し、T118はSD002(石組溝)下部に位置し、Ⅱ期と想定している SX015出土である。

平瓦［資：第241・277図・第23表］

T130～T140が平瓦である。T130～T133は河北門廃絶時に伴う埋め戻し土出土である。T134～T138はⅢ期最終段階には近世の盛土に覆われていた河北坂造成土出土である。T139はⅡ期～Ⅲ期中の遺構、T140はⅡ期の遺構出土である。近代以降の土層から出土したT130～133は厚さ2㎝以下、T134～T140のⅢ期以前の土層や遺構出土の瓦は概ね2㎝以上と厚い傾向が見られる。

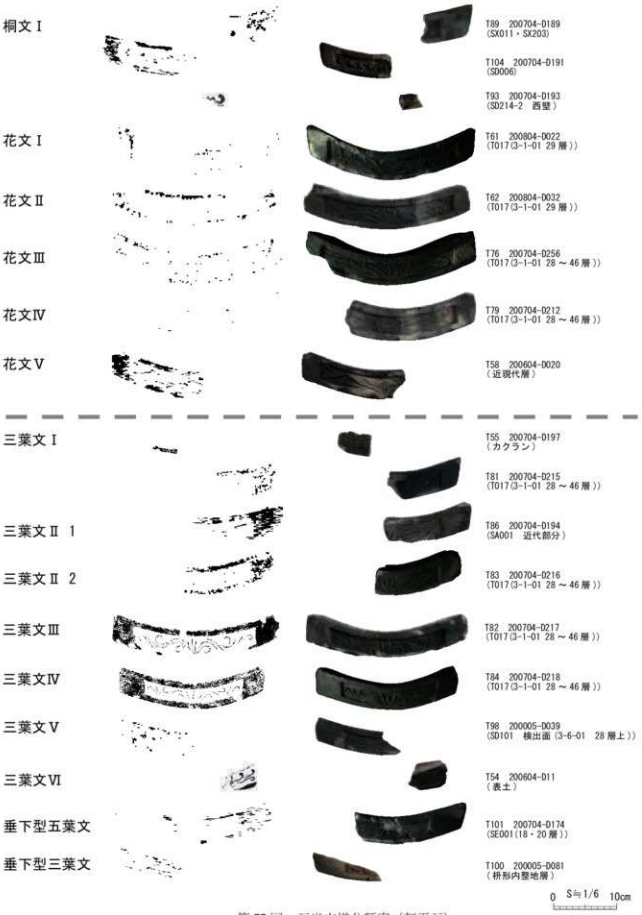
その他の瓦［資：第241・242・277・278図・第23表］

T141～T158をその他の瓦として報告する。T141～T144は鬼瓦、T145・T146は腰瓦、T147～T151は面戸瓦、T152～T156は輪違い、T157・T158も鬼瓦の一部と思われるが詳細は不明である。T151・T152は内面に棒状の圧痕が見える。

刻印・墨書［資：第288図］

T76・T98・T122は城内初出の刻印である。また、いぶし瓦には、大きさ内径約0.7㎝で約0.1㎝幅の丸い輪状の痕跡が多数あった。墨のような黒い輪が大半を占めるが、赤錆のように赤化しているものもあった。丸瓦か軒丸瓦に多く、軒平瓦にも数点あった。何れも表面か側面で、内面や割れ口にはない。一つの瓦に何ヵ所かあるもの、丸が重なっているものもあった。当初、目視で墨と想定していたが、いくつか選択し赤外線に通したところ、墨以外の痕跡も含まれていた。T59は赤錆のような丸がある。瓦の表面に何か付着しているが、赤外線には反応せず墨ではない。物質が何かは不明である。T115は墨である。T131は墨のような反応を示すが、墨と何かを混ぜたものが付着している可能性が高い。T151は赤外線に反応するが、墨ではないようで何が反応したのかは不明である。T115・T131・T151は何れも同じ丸に見えたが結果はT115のみが墨であった。観察表には、今回墨と判別出来たものは「墨書」、不明な印は「丸」と記した。

第 76 図　瓦当文様分類案（軒丸瓦）



第77図　瓦当文様分類案（軒平瓦）

第３節　石製品

2000・2006～2008 年度で整理箱 40 箱出土している。茶臼や行火等の生活関連道具も出土しているが大半は凝灰岩の SD002（石組溝）・SD003（石組暗渠）・SK019（枡）関連の部材である。

生活関連道具［資：第 243・244・247・248・279・280・283・284 図・第 24 表］
臼　S５・S26 は茶臼で、S５は下臼、S26 は上臼である。S23・S27 は粉挽き臼で、S23 は上臼、S27 は下臼である。S９は石鉢である。
行火　S10 は行火の蓋で、越前では行火は「バンドコ」と呼ばれている。
その他　S７は性格不明の石製品である。表面の調整は細かく滑らかで一部円形に彫られた部分には工具痕が確認出来る。

SD002・SD003・SK019 関連［資：第 243～248・279～284 図・第 24 表］
その他の多くの石製品は二ノ門の SD002(石組溝)・SD003(石組暗渠)・SK019（枡）の遺構に関連すると思われる。現場に遺存していた部材と比較し、その用途を想定した。

S11～S17・S21 は SD002 の溝の側板・底板に使用されていた部材と考えられる。S８・S14・S16 は一辺に他の部材との継ぎ手の加工がされている。SD002 の現場に遺存していた側板・底板の部材は同一規格品と考えられ、約長軸 84×短軸 38×厚さ７(cm) であった可能性が高い。短軸方向の長さ 38 cmは規格の長さと思われる。長軸の長さは約 80 cmが平均的な長さと思われる。同遺構は改修されているためか、底板に関しては１枚でなく短軸方向に２枚継ぎ足して使用している箇所もあった。掲載の部材で短軸が 37 cmに満たないもの（S11・S16）の用途としては、２枚継ぎ足しての底板も考えられる。また、二ノ門通路部分以外は側板の土中の深度が浅くなることが調査で判明しており、側板としての使用も考えられる。S21 は小さいが、完形品であることから、大きな部材の隙間に使用されていたと考えられる。

S12・S13・S14・S17 等に見られる黒化した部分は、流水の際の堆積物が付着したものと思われる。

S20 に関しては、板状の片面は平滑に加工されているが、もう片面は曲線状に粗く加工されている。S19 も厚さが９cm 以上あり、蓋や SD002 の東側側壁等の可能性もある。

S18・S25 は SD003 と SK019 の抜き取りから出土していることから、SD003 で使用されていた刳り貫き箱型の部材と考えている。S18 は長軸 53.6×短軸 24.5 (cm)、内法底面幅 15.0×高さ 12.0、厚さ（側部）5.0cm、(底部）5.３cmである。SD002 の流路部分より一回り小さい規模である。両石とも内面の底部と側面上部、外側面上部は平滑に調整されているが、他はノミ痕跡が粗く残っている。S22・S24 は SD003 の蓋に使用されていたと想定している。

SD002・SD003 抜き取り土出土の部材の規格が一定ではないことが判明している。両遺構とも宝暦９年（1759）の大火後に改修されていることが調査から判明しており、石垣築石を再利用するようにこれら遺構の部材も再利用されたためと思われる。

S１・S３・S４は SD002 や SD003 の抜き取り出土ではないが、その厚さや加工から蓋として使用されていた可能性がある。

S２は、撹乱出土なため観察表では明記していないが、他の製品に比較し薄いため、SD002 等で使用されている大きな部材と部材の隙間に用いられたものと思われる。

S６は 3241（一ノ門東側頬当石垣）から出土いていることから、SD004（一ノ門石組溝）の縁石の部材であった可能性もある。

第４節　金属製品・木製品

金属製品［資：第 249～251・285～287 図・第 25・26 表］

金属は整理箱 15 箱出土している。点数では鋼釘が大半を占めるが、その他鉛瓦の瓦当や敷金（楔形・鎹形）も出土している。以下、材質ごとに記す。材質の分析は行っておらず、本文中及び表の材質については、担当者の肉眼観察により判断した。

鉛　Ｍ１～Ｍ３、Ｍ９・Ｍ10・Ｍ17・Ｍ38・Ｍ39、Ｍ42 が鉛である。Ｍ１・２は鉛の軒平瓦の瓦当部分、Ｍ３は丸瓦の瓦当裏面下半の円にあたる。瓦当の文様は唐草文であり、木に固定用の釘穴が各２ヵ所空いている。Ｍ３にも釘穴が見られる。Ｍ９・Ｍ10・Ｍ42 も鉛瓦の部材と考えられる。Ｍ38・Ｍ39 は石垣間のチキリである。

銅　Ｍ６・Ｍ７、Ｍ11～Ｍ14、Ｍ18、Ｍ47～Ｍ49、Ｍ51、Ｍ56・Ｍ57、加えて写真図版のみ遺物が銅製品である。Ｍ６は近代のボタン、Ｍ７は現代のフックのようであるが、詳細は不明である。Ｍ11・Ｍ12 は銅釘で SD002 の抜き取り土から出土している。同様の釘が SD002 の埋め戻し土や抜取り土から多く出土しているおり、門に使用されていた銅板や鉛瓦が河北門廃絶時にはずされ SD002 内に落ちたものと考える。

Ｍ53 は SK002 出土の銅製品の鋺と思われる。口径 7.8cm、底径 5.2cm、器高 2.5cm で内側に種子が残存していた。『木ノ新保遺跡』［石川県教委・（財）石川県埋蔵文化財センター2002ｂ］16 号墓（SH16）からはミニチュア行器（蓋付三足曲物容器）の中から青銅？製小杯？（報告書のまま）（Ｍ６）が出土している。口径 4.4～4.8cm、底径 1.7cm、器高 1.75cm であり、本遺跡出土の Ｍ53 に比較すると小ぶりであるが、行器から栗の実、椿の種子等が出土していることから、種子出土という共通点もあり、Ｍ53 も副葬品の可能性もある。Ｍ51 は環状と想定される製品の 1/4 程度が残存していたが詳細は不明である。

鉄　Ｍ８・Ｍ15・Ｍ16・Ｍ28～Ｍ37・Ｍ41・Ｍ43～Ｍ46・Ｍ50・Ｍ52・Ｍ54・Ｍ55・Ｍ58・Ｍ59 が鉄製品である。Ｍ28～Ｍ33 は石垣間から出土した敷金（楔形）、Ｍ34～Ｍ37 は敷金（鎹形）である。Ｍ28・Ｍ36 には「○」、Ｍ30 には「分銅」の刻印がされている。Ｍ46 は刀子や包丁のようであるが刃部が不明瞭で器種は不明である。SK002 からは鉄製品では Ｍ50、Ｍ52 が出土している。Ｍ50 は釘である。Ｍ52 は鉄部分と木質部に分かれる。火箸と似ているが類例は見つかっていない。Ｍ54・Ｍ58 は頭巻釘である。Ｍ59 は鎌である。残存状況は悪いが金属部分と木部の他に固定する口金が残存していた。

真鍮　Ｍ５が真鍮である。Ｍ５は『金沢城跡Ⅱ』［石川県教委金沢城研究調査室 2006a］によると火縄銃の発射装置に関連する部品の一つとあり、Ｍ17 は同時代の鉄砲の弾の可能性もある。

銭貨　Ｍ４・Ｍ19～Ｍ27 が銭貨である。Ｍ19～Ｍ23 は北宋銭と思われるが判読出来たのは Ｍ19・20 のみであった。Ｍ４・Ｍ24～Ｍ27 は寛永通宝である。

木製品［資：第 251・287 図・第 26 表］

Ｗ１は漆器の椀で、内外面とも赤漆である。

第７章　自然科学的調査

第１節　版築状盛土及び灰質物の自然科学分析

株式会社パレオ・ラボ

はじめに　金沢城跡（河北門）の調査では、版築状盛土等が随所に検出された。また、土坑内から銅鉋が出土し、内部には灰質物が充填されていた。

ここでは、これらの材料について元素マッピング分析と珪藻分析を行った。なお、元素マッピング分析は竹原、珪藻分析は藤根、灰質物の植物珪酸体分析は米田がそれぞれ担当し、藤根がまとめた。なお、灰質物中にはメロン仲間の種子が含まれていた（第２節 参照）。

試料と方法　試料は、５カ所から検出された版築状盛土および硬化層の５試料である（第18表・第78図）。

試料№１と試料№２は上水ルート版築状盛土(取上げNo.663およびNo.802)であり、白色の漆喰状土塊である。試料№３は、版築状盛土の漆喰状土塊１層目(取上げNo.1230)であり、最大30mm 礫含む砂礫である。試料№４は、二ノ門路盤(SX030)(取上げNo.1228)であり、最大25mm 円礫を主とした礫からなる膠着層である。試料№５は、枡形路盤(SX034)（取上げNo.1229）であり、最大37mm 礫含む礫を主とした砂礫からなる。また、SK002 中の灰質物は、小型の炭化材を比較的多く含む灰質物である。なお、礫も含んでいた。

第18表　分析試料の詳細

試料No.	地点	グリッド	遺構	取上げNo.	試料の特徴
1	-	H７	版築状盛土 5-2-07(24層)	663	漆喰状の土塊（最大10mm礫含む砂礫）
2	-	H６	版築状盛土	802	漆喰状の土塊（最大10mm礫含む砂礫）
3	枡形	H５	版築状盛土、漆喰状土塊1層目 3-4-05(38層)	1230	最大30mm礫含む砂礫
4	二の門	-	SX030(二ノ門路盤)	1228	最大25mm円礫を主とした礫膠着層
5	枡形	-	SX031(枡形路盤)	1229	最大37mm礫含む礫を主とした砂礫
6	-	K８	SK002(銅鉋内)		炭化材・礫混じり灰質物

試料№１～№５の材料分析は、硬化材料を調べるために蛍光Ｘ線分析による元素マッピング分析と粘土部分の珪藻分析を行った。

元素マッピング分析は、泥質～細砂部分を採取して乾燥した後、極軽く粉砕して塩化ビニル製リングに充填し、油圧プレス機で 20t・１分間プレスして測定用のプリケットを作製した。

測定は、エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置（㈱堀場製作所製分析顕微鏡 XGT-5000TypeⅡ）を使用した。装置の仕様は、Ｘ線管が最大 50kV、1.00mA のロジウム(Rh)ターゲット、Ｘ線ビーム径が 100μｍまたは 10μｍ、検出器は高純度Ｓｉ検出器(Xerophy)で、検出可能元素はナトリウム(Na)～ウラン(U)である。また、試料ステージを走査して測定し元素の二次元的分布を調べる。

最初に、元素マッピング分析を行い漆喰の主成分であるＣａマッピング図において輝度の高い箇所を５点選定して点分析を行った。測定条件は、元素マッピング分析では 50kV、1.00mA、ビーム径 100μｍ、測定時間 2000s を５回走査、点分析では 50kV、0.06～0.38mA（自動設定）、ビーム径 100μｍ、測定時間 500s で行った。定量計算は、装置付属ソフトによる標準試料を用いないファンダメンタル・パラメーター法（FP 法）で行った［藤根他 2009］。

珪藻分析は、泥質部分を採取対象として、以下に示す珪藻分析と同様の方法でプレパラートを作製した。湿潤重量約１ｇ程度取り出し、秤量した後ビーカーに移し 30%過酸化水素水を加え、加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行った。反応終了後、水を加え１時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てる。この作業を７回ほど繰り返した。残渣を遠心管に回収し、マイクロピ

ペットで適量取り、カバーガラスに滴下し乾燥させた。乾燥後は、マウントメディアで封入しプレパラートを作製した。作製したプレパラートは顕微鏡下 600～1000 倍で観察した。なお、200 個に満たなかったことからプレパラート全面を観察した。

灰質物は、約 0.5g をトールビーカーにとり、これに 30%の過酸化水素水を約 20～30cc 加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により 10μm 以下の粒子を除去した。この残渣についてグリセリンを用いて適宜プレパラートを作製した。同定及び計数は、機動細胞珪酸体を中心に 200 個体について行った。

結果および考察　以下に、土壌分析と灰質物について結果および考察をそれぞれ述べる。

a.版築状盛土等の土壌

珪藻分析を行った結果、いずれの試料においても珪藻化石は全く検出されなかった。

第19表　版築状盛土等の元素マッピング分析による点分析結果（単位%）

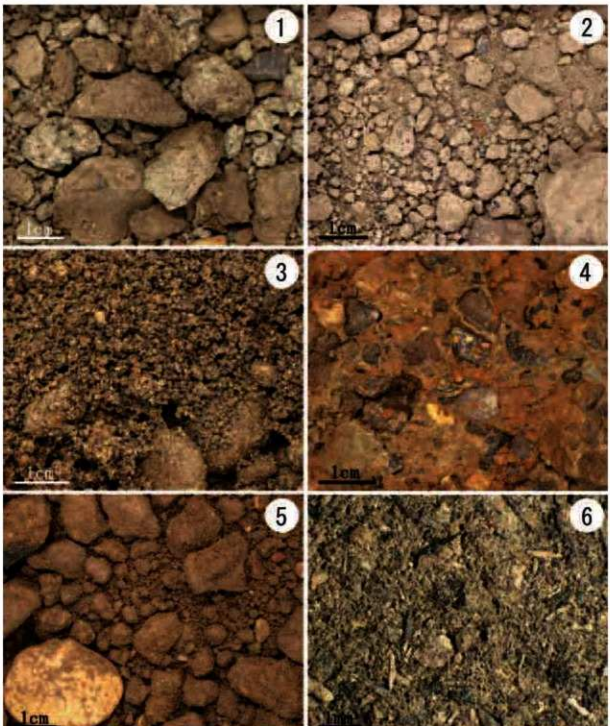
試料No.	点No.	注目元素	MgO	Al_2O_3	SiO_2	P_2O_5	SO_3	K_2O	CaO	TiO_2	MnO	Fe_2O_3	Rb_2O	SrO	Y_2O_3	ZrO_2	合計
1	a	Ca高輝度部	1.15	21.99	39.44	0.00	0.07	0.15	21.39	0.10	1.22	14.26	0.00	0.19	0.02	0.01	99.99
	b		8.60	11.74	54.28	0.16	0.05	0.93	14.68	0.62	0.27	8.59	0.01	0.03	0.01	0.03	99.99
	c		0.92	22.69	49.90	0.24	0.08	0.88	11.66	0.52	0.26	12.64	0.02	0.15	0.01	0.03	100.00
	d		0.00	24.50	62.99	0.17	0.05	0.63	10.08	0.18	0.02	1.14	0.01	0.20	0.01	0.01	99.99
	e		0.00	24.95	63.16	0.25	0.11	0.49	10.20	0.05	0.00	0.56	0.00	0.21	0.00	0.01	99.99
	最大値		8.60	24.95	63.16	0.25	0.11	0.93	21.39	0.62	1.22	14.26	0.02	0.21	0.02	0.03	
2	a	Ca高輝度部	0.50	17.61	34.73	0.26	0.05	0.14	19.32	0.32	0.14	26.86	0.00	0.03	0.00	0.03	99.99
	b		0.00	24.94	62.34	0.19	0.11	0.42	10.41	0.04	0.01	1.36	0.01	0.14	0.00	0.03	100.00
	c		0.00	29.79	56.03	0.48	0.09	0.37	11.71	0.15	0.01	1.10	0.00	0.25	0.00	0.02	100.00
	d		0.01	27.33	59.59	0.13	0.14	0.36	11.07	0.16	0.02	1.06	0.00	0.10	0.01	0.02	100.00
	e		0.58	25.23	61.33	0.35	0.06	0.63	10.11	0.20	0.03	1.26	0.00	0.21	0.00	0.01	100.00
	最大値		0.58	29.79	62.34	0.48	0.14	0.63	19.32	0.32	0.14	26.86	0.01	0.25	0.01	0.03	
3	a	Ca高輝度部	3.84	17.84	46.53	0.37	0.05	0.18	15.86	0.95	0.41	13.85	0.01	0.06	0.01	0.04	100.00
	b		0.89	22.86	54.44	0.47	0.06	0.75	8.98	0.81	0.24	10.42	0.00	0.04	0.01	0.04	100.01
	c		8.79	14.55	50.65	0.46	0.29	0.19	16.92	0.52	0.17	7.34	0.01	0.05	0.01	0.05	100.00
	d		0.27	24.91	53.66	0.69	0.09	0.38	12.71	0.23	0.03	6.85	0.00	0.15	0.01	0.03	100.01
	e		5.01	16.64	49.40	0.06	0.13	0.21	15.86	0.89	0.33	11.33	0.04	0.02	0.01	0.04	99.97
	最大値		8.79	24.91	54.44	0.69	0.29	0.75	16.92	0.95	0.41	13.85	0.04	0.15	0.01	0.05	
4	a	Ca高輝度部	0.00	25.52	59.62	0.00	0.16	0.35	13.47	0.04	0.02	0.70	0.02	0.06	0.00	0.02	99.98
	b		0.00	21.99	66.16	0.00	0.04	0.72	16.12	0.06	0.02	0.67	0.00	0.21	0.00	0.00	99.99
	c		0.04	26.28	59.63	0.01	0.09	0.36	11.41	0.13	0.04	1.88	0.02	0.07	0.01	0.04	100.01
	d		0.37	16.40	38.90	0.15	0.18	0.42	14.64	18.03	0.09	10.63	0.00	0.06	0.03	0.12	99.99
	e		0.00	15.05	37.80	20.52	0.18	1.49	16.78	1.28	0.15	6.52	0.02	0.11	0.02	0.07	99.99
	最大値		0.37	26.28	66.16	20.52	0.18	1.49	16.78	18.03	0.15	10.63	0.02	0.21	0.03	0.12	
	f	Fe高輝度部	0.01	9.42	19.72	0.30	0.19	0.22	6.38	0.25	0.05	69.27	0.03	0.03	0.02	0.12	100.01
	g		0.00	13.98	27.55	0.76	0.12	0.31	6.54	0.45	0.03	56.03	0.04	0.05	0.02	0.10	99.98
	h		0.00	11.25	44.83	0.27	0.07	0.50	6.29	0.31	0.03	42.37	0.01	0.02	0.01	0.05	100.01
	i		0.44	13.87	27.13	0.40	0.29	0.27	6.47	0.55	0.05	56.44	0.02	0.02	0.01	0.04	100.00
	j		0.01	13.77	25.37	0.84	0.29	0.27	6.40	0.37	0.01	58.50	0.03	0.03	0.01	0.09	99.99
	最大値		0.44	13.98	44.83	0.84	0.29	0.50	6.54	0.55	0.05	69.27	0.04	0.05	0.02	0.12	
5	a	Ca高輝度部	13.59	5.62	51.67	0.00	0.08	0.20	20.52	0.62	0.18	7.37	0.02	0.06	0.01	0.07	100.01
	b		0.22	18.99	46.71	0.07	0.09	0.46	18.39	0.22	0.42	14.30	0.00	0.09	0.02	0.04	100.02
	c		7.52	8.38	53.59	0.12	0.08	0.53	16.61	1.27	0.32	11.41	0.01	0.10	0.01	0.05	100.00
	d		7.87	8.52	54.03	0.16	0.16	0.51	15.35	0.77	0.32	12.14	0.01	0.07	0.02	0.06	99.99
	e		0.00	27.08	51.07	0.00	0.11	0.20	20.11	0.06	0.06	1.09	0.00	0.20	0.00	0.01	99.99
	最大値		13.59	27.08	54.03	0.16	0.16	0.53	20.52	1.27	0.42	14.30	0.02	0.20	0.02	0.07	

各試料の元素マッピング図では、カルシウム（Ca）の輝度が高い部分が複数カ所検出された（第 78 図）。輝度の高い部分を選定して点分析を行った結果、カルシウム（CaO）について試料№.1 が最大 21.39%、試料№.2 が最大 19.32%、試料№.3 が最大 16.92%、試料№.4 が最大 16.78%、試料№.5 が最大 20.52%であった。なお、試料№.4 において、鉄（Fe）の輝度が高く点分析を行った結果、最大 69.27%であった（第 19 表）。一般的に土壌中のカルシウムは、数%程度と低く、20%前後の濃度は一般的でない。また、珪藻分析のプレパラートにおいて、透明および淡褐色の長柱状結晶が多数含まれていた（第 81 図）。この長柱状結晶は、長さ 30～70μm、幅約 10μm、の直消光を示す結晶であり、方解石の結晶である。なお、試料№.4 の二ノ門路盤(SX030)ではこの方解石の結晶は多くない。

以上の分析の結果から、これらは、主に石灰分を含んだ土壌であることが判明した。漆喰などがその代表例である。なお、同時に使用されている粘土類は珪藻化石を含んでいないことから水成粘土は使用していない。

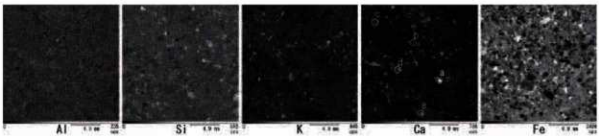
漆喰は消石灰にツノマタなどののり材を水で煮てつくった粘稠な液と麻などの繊維質のスサを加えて練ったものである。[馬淵ほか 2003]

検討した版築状盛土等は、スサ類を含まないことから、漆喰とは判定できなかった。漆喰以外に知

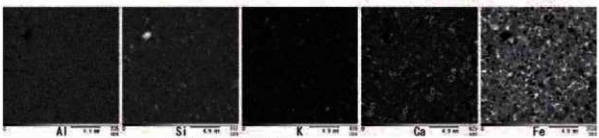


試料№１．版築状盛土 5-2-07(24 層)　試料№２．版築状盛土　試料№３．版築状盛土、漆喰状土塊１層目 3-4-05(38 層)　試料№４．SX030（二ノ門路盤）　試料№５．SX031（枡形路盤）　試料№６．SK002（銅鋺内灰質物）

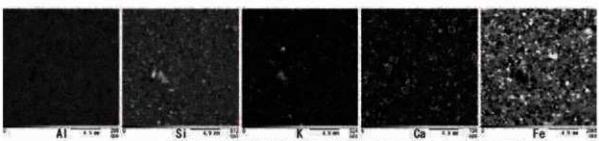
第 78 図　自然科学分析を行った土壌試料と灰質物



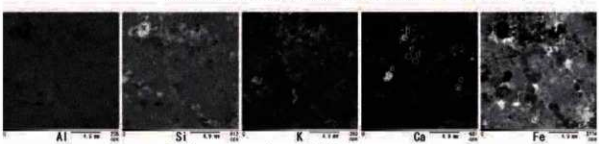
［試料№１；版築状盛土 5-2-07(24 層)］



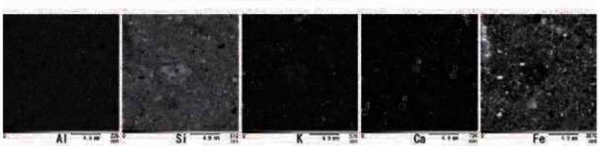
［試料№２；版築状盛土］



［試料№３；版築状盛土、漆喰状土塊１層目 3-4-05(38 層)］



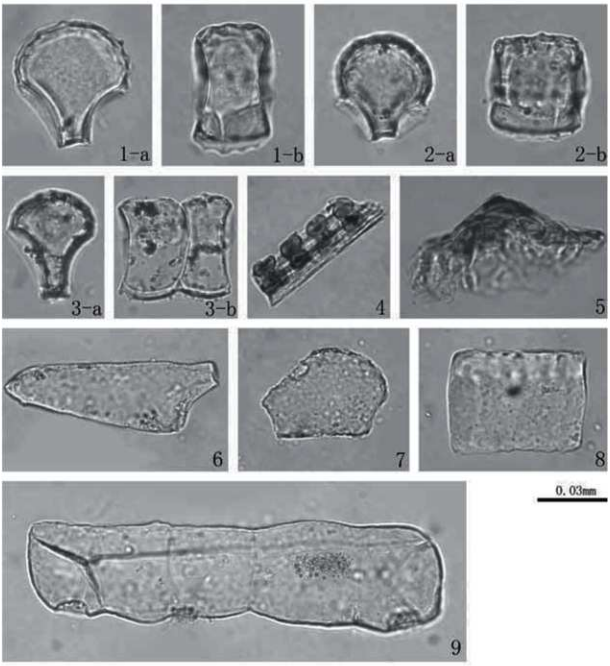
［試料№４:SX030(二ノ門路盤)］



［試料№５:SX031(枡形路盤)］

元素記号：Al: アルミニウム，Si: ケイ素，K: カリウム，Ca: カルシウム，Fe: 鉄

第 79 図　出土土壌の元素マッピング図



１～３：イネ（a：断面、b：側面）、４：イネ型単細胞珪酸体、５：イネ頴破片、６：不明植物珪酸体、７：クマザサ属型（断面）、８，９：キビ族（側面）

第 80 図　SK002 出土灰質物中のプラント・オパール化石

試料№１a・b. 版築状盛土 5-2-07(24 層)　試料№２a. 版築状盛土　試料№３a. 版築状盛土、漆喰状土塊
１層目 3-4-05(38 層)　試料№５a・b. SX031（桝形路盤）

第 81 図　土壌試料中の方解石結晶

られている手法として石灰モルタルがあるが、それに類似の手法である可能性が高い。なお、試料№４は、最大 25mm 円礫を主とした礫膠着層であるが、他の版築状盛土等と比較して硬く、蛍光Ｘ線分析により鉄分が極端に多く含まれていたことから、地下水中の鉄分が沈着して固結した可能性が考えられる。

b. SK002（銅鉋内）の灰質物について

灰質物は、検鏡した結果、イネの機動細胞珪酸体が多く検出された。また、イネ型単細胞珪酸体やイネ顆（籾殻）の破片も観察されている。イネ以外では、キビ族やクマザサ属型がやや多く、ウシクサ族やシバ属も若干得られている（第 20 表）。なお、不明の植物細胞片が多く観察された。

第20表　灰の植物珪酸体の種類と個数

試料№	イネ	イネ顆破片	クマザサ属型	キビ族	ウシクサ族	シバ属	イネ型単細胞珪酸体	不明珪酸体	合計
6	55	8	25	36	3	2	35	36	200

検鏡の結果から、稲藁や籾殻その他複数種の植物が混ざった灰であることがわかった。イネとイネ顆、イネ型単細胞珪酸体を合わせると灰の約半分程度がイネ由来の珪酸体と見積もられる。キビ族やシバ属あるいはウシクサ族は、イネに付随する植物と推定される。この灰質物は、主に稲藁や籾殻を焼いた灰と推定されるが、灰質物の観察において炭化材のほか未炭化のイネ顆（籾殻）やメロン仲間の種子が含まれていたことから、食べ物残渣の混入も見られた。

引用文献

馬淵久夫・杉下龍一郎・三輪嘉六・沢田正昭・三浦定俊　2003　文化財科学の事典．朝倉書店，522p.

第２節　出土した大型植物遺体

はじめに　河北門復元整備に伴って行われた調査では、遺構内から生や炭化した種実が得られた。ここでは、大型植物遺体の同定を行い、利用された植物や周辺の植生を復元することを目的とした。

試料と方法　試料は区画溝と考えられている SD007 で採取された植物遺体２試料（取上げ No. 1221、No. 1313・1218）と、SK002 から出土した銅鉋内に含まれていた種実１試料の計３試料である。時期は近世であるが、詳細時期は不明である。SD007 からは炭化物とともに多くの木材などがまとまって出土している（第３・４節参照）。SK002 は出土遺物の様相から祭祀的な意味を持つ可能性のある遺構である。銅鉋の中からは灰と種子が採取された（灰については第１節参照）。

試料の採取は石川県金沢城調査研究所によって行われた。SD007 は堆積物を洗浄済みの試料であるが、水洗に用いた堆積物の量や篩の目の大きさは不明である。回収された植物遺体の湿潤重量（洗浄量とする）を計量後、再度 2.0、1.0、0.5mm 目の篩を用いて水洗した。その結果、得られた種実の大きさがほとんど 1.0～2.0mm 以上の大きさであったため、堆積物の水洗時に使用した篩の目が 1.0mm 程度以上であったと想定し、1.0mm 目以上の大型植物遺体を検討対象とした。大型植物遺体の抽出・同定・計数を肉眼および実体顕微鏡下で行った。計数の方法は完形または一部が破損しても１個体とみなせるものは完形として数え、１個体に満たないものは破片とした。同定された試料および残渣は石川県金沢城調査研究所に保管されている。

結果　同定した結果、木本植物では針葉樹のマツ属複維管束亜属葉の１分類群、広葉樹のコナラ属コナラ節炭化未熟果と、ヒサカキ属種子、サンショウ種子の３分類群、草本植物のクサネム近似種炭化種子と、ウリ属メロン仲間種子、オオムギ炭化種子、イネ果実・炭化種子、キビ炭化種子の５分類群計９分類群が得られた。このほかに、破片のため科以下の同定ができなかった不明炭化種実と、識別点を欠く同定不能炭化種実が得られた。

以下、産出した大型植物遺体を遺構別に記載する。

［SD007（取上げ No.1221・No.1313・1218）］

木本植物では、広葉樹のサンショウ種子が最も多く、針葉樹のマツ属複維管束亜属葉と、広葉樹のコナラ属コナラ節炭化未熟果、ヒサカキ属種子、草本植物のクサネム近似種炭化種子、オオムギ炭化種子、イネ果実・炭化種子、キビ炭化種子、不明炭化種実、同定不能炭化種実がわずかに得られた。

第21表　出土した大型植物遺体（括弧は破片を示す）

遺構名		SD007		SK002
	取上げNo.	1221	1313・1218	銅鉋内
分類群	部位/洗浄量	139.05g	277.6g	-
マツ属複維管束亜属	葉		(1)	
コナラ属コナラ節	炭化未熟果	1	1	
ヒサカキ属	種子	1		
サンショウ	種子	17 (10)	33 (17)	
クサネム近似種	炭化種子	1		
ウリ属メロン仲間	種子			2
オオムギ	炭化種子		2	
イネ	果実		(2)	
	炭化種子	(1)	(1)	
キビ	炭化種子		1	
不明	炭化種実		(1)	
同定不能	炭化種実		(1)	

［SK002（銅鉋内）］

銅鉋内からは草本植物のウリ属メロン仲間種子が２点得られた。

以下に大型植物遺体の記載を行い、図版に写真を示して同定の根拠とする。

（1）マツ属複維管束亜属　*Pinus* subgen. *Diploxylon*　葉　マツ科

茶褐色で、側面観は針形、断面は半円形で、先端が片側に偏って尖る。基部は残存していない。残存長 8.5mm、幅 1.2mm。完形個体ならば長さ７～12cm になる。マツ属複維管束亜属にはアカマツとクロマツが含まれる。

（2）コナラ属コナラ節　*Quercus* sect. *Prinus*　炭化未熟果　ブナ科

椀状の殻斗をもち、鱗片は鱗状で幅が広い。殻斗の内部には果実がある。この特徴からコナラ属コナラ節のうち、コナラ、ミズナラまたはナラガシワのいずれかであるが、未熟果のため、種までの識別はできなかった。長さ 3.0mm、幅 3.2mm 程度。

（3）ヒサカキ属　*Eurya* spp.　種子　ツバキ科

黒色で、上面観は扁平、側面観はいびつな腎形ないし円形。凹孔をもつ多角形の網目が臍を中心に同心円状に並ぶ。臍から種子中央にかけて少し窪む。長さ 1.2mm、幅 1.6mm。

（4）サンショウ　*Zanthoxylum piperitum* (L.) DC.　種子　ミカン科

黒色で、上面観は卵形、側面観は楕円形ないし倒卵形。基部側面に稜線があり、内側には短く、斜め下を向く臍がある。網目状隆線は細かく低い。種皮は厚く硬い。長さ 4.0mm、幅 3.4mm、厚さ 3.2mm 程度。

（5）クサネム近似種　c. f. *Aeschynomene indica* L.　炭化種子　マメ科

上面観は楕円形、側面観は片面の臍部が顕著に凹む楕円形。臍は全長の 1/3 未満で楕円形、ほぼ中央に付く。臍の縁辺が肥厚する。種瘤が２つ並ぶが、本試料では欠損しているため、確認できなかったため、近似種とした。長さ 3.8mm、幅 2.6mm、厚さ 2.0mm。

（6）ウリ属メロン仲間　*Cucumis melo* L.　種子　ウリ科

黄白色で、上面観は扁平、側面観は倒卵形。表面は平滑で、基部は突出せず直線状の隆線となる。［藤下 1984］は、おおむね種子の大きさから次の３群に分けられるとしている。長さ 6.0mm 以下は雑草メロン型、長さ 6.1～8.0mm はマクワウリ・シロウリ型、長さ 8.1mm 以上はモモルディカメロン型である。本遺跡のメロン仲間は長さ 8.4mm、幅 4.0mm と長さ 7.4mm、幅 3.7mm で、大きさで分類すると前者がモモルディカメロン型、後者がマクワウリ・シロウリ型になるが、２点のみの出土であるため、タイプ分けには注意を要する。

（7）オオムギ　*Hordeum vulgare* L.　炭化種子　イネ科

側面観は長楕円形～楕円形で両端がやや細くなる。腹面中央には上下に走る１本の深い溝がある。

スケール　1, 6:5mm, 2-5, 7-11:1mm, 5c は任意

1. マツ属複維管束亜属葉（SD007, No. 1313・1218）、2. コナラ属コナラ節炭化未熟果（SD007, No. 1313・1218、3. ヒサカキ属核（SD007, No. 1221）、4. サンショウ種子（SD007, No. 1313・1218）、5. クサネム近似種炭化種子（SD007, No. 1221）、6. ウリ属メロン仲間種子（SK002, 銅碗内）、7. オオムギ炭化種子（SD007, No. 1313・1218）、8. イネ果実（SD007, No. 1313・1218）、9. イネ炭化種子（SD007, No. 1221）、10. キビ炭化種子（SD007, No. 1313・1218）、11. 不明炭化種実（SD007, No. 1313・1218）

第 82 図　出土した大型植物遺体

背面の基部には楕円形の胚がある。側面観では果実高の中部で最も幅が広い。断面形状は楕円形～円形となる［Jacomet，2006］。長さ5.0mm、幅3.1mm、厚さ2.7mm程度。

（8）イネ　*Oryza sativa* L.　果実・炭化種子　イネ科

果実は黄褐色で、完形ならば側面観は長楕円形で２条の稜があり、断面観は扁平。表面には四角形の網目状隆線と隆線上の顆粒状突起が規則正しくならぶ。果柄が肥厚する。残存長4.5mm、残存幅1.6mm程度。基部を１として計数した。種子の上面観は両凸レンズ形、完形ならば側面観は楕円形。基部側方に楕円形の胚の窪みがあり、両面に中央がやや盛り上がる縦方向の２本の浅い溝がある。残存長3.5mm、幅2.3mm。

（9）キビ　*Panicum miliaceum* L.　炭化種子　イネ科

側面観は卵形で、先端が窄まってやや尖り気味となる。断面は片凸レンズ形で厚みがある。胚の長さは全長の1/2程度と短い。胚は幅が広いうちわ型。長さ2.1mm、幅1.8mm。

（10）不明　Unknown　炭化種実

破片であるが上面観は楕円形、側面観は円形か。表面は平滑。内部には３室に分かれる空洞がある。下端に着点がある。残存長2.9mm、残存幅2.1mm。

考察　河北門周辺の区画溝および土坑出土の銅鉋内の種実を検討した結果、SD007からは低木のサンショウが最も多く、高木の針葉樹であるマツ属複維管束亜属（アカマツまたはクロマツ）と、落葉樹であるコナラ属コナラ節（コナラまたはミズナラ、ナラガシワ）、中高木の常緑樹であるヒサカキ属、草本植物のクサネム近似種、栽培植物ではオオムギ炭化種子と、イネ果実・炭化種子、キビ炭化種子がわずかに得られた。サンショウは食用可能で、割れた破片が多く含まれ、人間による利用が推察される。ただし、取り上げ状況や水洗方法などが不明のため、作業中の２次的な割れも考慮する必要があろう。オオムギやイネ、キビは食用可能な種子が炭化しており、調理・加工時に炭化した種子が溝内に廃棄されたか、あるいは流れ込んだことが推定される。またイネ果実（籾）は未炭化のため、周辺の貯蔵施設または水田等から流れ込んだ可能性がある。クサネムは湿地に生育する一年草であり、溝周辺に生育していたと考えられる。未炭化の種実は良好な状態で残存しているが、今回検討した種実は比較的大型のもののみであったため、今後細かい目の篩で水洗すれば、より具体的な周辺の植生や利用植物について解析可能になると思われる。

SK002の銅鉋内からはウリ属メロン仲間が２点得られた。大きさはモモルディカメロン型とマクワウリ・シロウリ型で、いずれも栽培種の範疇の大きさであった。メロン仲間の種子は弥生時代から食用のほか祭祀にも利用されている。銅鉋内にはイネの籾と葉起源の灰が得られていることから（７章１節参照）、祭祀目的で銅鉋内に入れられたと推定される。

第３節　出土した動物遺体

はじめに　河北門復元整備に伴って行われた調査では、遺構内から動物遺体が出土し、その同定を行った。

試料と方法　試料は、SK002から出土した銅鉋内、SK102、T016の土塁状盛土と推定される土層、区画溝と考えられているSD007から出土した動物遺体である。時期は近世であるが、詳細時期は不明である。

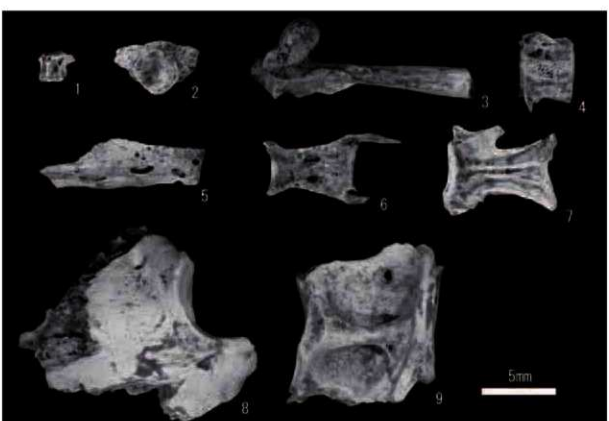
動物遺体を含む堆積物の採取と水洗選別は石川県金沢城調査研究所によって行われた。ただし、SD007の取上げNo.1216の一部はパレオ・ラボで１mm目の篩を用いた水洗選別を行った。

第22表　動物遺体種名一覧

硬骨魚綱	Osteichthyes
ニシン科	Clupeidae
フサカサゴ科	Scorpaenidae
スズキ属	*Lateolabrax*
アジ科	Carangidae
タイ科	Sparidae
マダイ亜科	Pagrinae

第23表　動物遺体一覧

遺構	取上げNo	層位	分類群	部位	左右	数量	備考
SK002		掘削内	不明	骨片		3	非焼
SK102			真骨類	椎骨		1	焼
T016	29	T016 3 5 10(25～27層)	ニシン科	尾椎		1	焼
	197	T016 3 5 10(26層)	真骨類	椎骨		2	焼
SD007	1199	③～⑤	真骨類A	脈椎		1	焼
			真骨類	椎骨		1	焼
	1215	②～③	ニシン科	尾椎		1	焼
			フサカサゴ科	脈椎		1	焼
			フサカサゴ科	椎骨		1	焼
			アジ類	尾椎		1	焼
			真骨類A	尾椎		3	焼
			真骨類	歯骨	L	1	焼
			真骨類	前上顎骨	?	1	焼
			真骨類	椎骨		6	焼
	1216	③	タイ科	椎骨		4	焼
			マダイ亜科	角骨	L	1	焼
			真骨類A	脈椎		2	焼
			真骨類A	尾椎		3	焼
			真骨類	椎骨		9	焼
			真骨類	歯骨	R	1	焼
			真骨類	歯骨	?	1	焼
	1218	③	フサカサゴ科	第1椎骨		1	焼
			タイ科?	脈椎		1	焼
			真骨類	椎骨		2	焼
	1220	③	フサカサゴ科	上上顎骨	L	1	焼
			フサカサゴ科	椎骨		1	焼
			スズキ属	歯骨	R	1	焼
			真骨類	椎骨		1	焼
	1221	③	真骨類	上鰓蓋骨	L	1	焼
			真骨類	椎骨		3	焼
	1223	③	フサカサゴ科	脈椎		1	焼
			フサカサゴ科	尾椎		1	焼
			アジ類?	尾椎		1	焼
			真骨類	歯骨	R	1	焼
			真骨類	椎骨		2	焼
	1225	③	真骨類A	尾椎		1	焼
	1227	③	フサカサゴ科	椎骨		1	焼
	1301	①・②	フサカサゴ科?	椎骨		1	焼
			タイ科	尾椎		1	焼



1．ニシン科椎骨(№29)　2．フサカサゴ科第１椎骨(№1218)　3．フサカサゴ科主上顎骨L(№1220)　4．フサカサゴ科椎骨(№1220)　5．スズキ属歯骨R(№1218)　6．アジ類尾椎(№1215)　7．真骨類A尾椎(№1215)　8．マダイ亜科角骨L(№1216)　9．タイ科尾椎(№1301)

第83図　出土した動物遺体

肉眼および実体顕微鏡下で同定に有効な部位を拾い出した。魚類は、主上顎骨、前上顎骨、歯骨、角骨、方骨、前鰓蓋骨、主鰓蓋骨、椎骨を全て拾い出した。同定は肉眼および実体顕微鏡下で現生標本との比較により行った。

結果　SK002（鋼鉋内）で不明骨片が見られた。その他の遺構では魚類が見られた。同定された分類群の一覧を第 22 表に示し、同定と計数の結果を第 23 表に示す。なお、同定には至らなかったが特徴のある一群を真骨類 A と分類した。

SK102 では焼けた真骨類椎骨が１点見られた。

T016 ではニシン科尾椎が１点、その他に真骨類椎骨が見られた。焼けている。

SD007 から検出された魚類は以下のとおりである。ニシン科が尾椎２点。フサカサゴ科が、左主上顎骨１点、第１椎骨１点、腹椎２点と尾椎１点を含む椎骨６点。フサカサゴ科の可能性がある椎骨１点。スズキ属が右歯骨２点。アジ類が尾椎１点。アジ類の可能性がある尾椎１点。タイ科が尾椎１点を含む椎骨５点。タイ科の可能性がある腹椎１点。マダイ亜科が左角骨１点。その他、同定に至らなかった真骨類が複数あった。いずれも焼けていた。

まとめ　SK002（鋼鉋内）からは焼けていない骨片が見られた。SK102 では魚類、A トレンチではニシン科を含む魚類が見られた。SD007 ではニシン科、フサカサゴ科、スズキ属、アジ類、タイ科、マダイ亜科が見られた。

第４節　炭化材の樹種同定

はじめに　河北門から出土した近世の炭化材４点の樹種同定を行った。

試料と方法　試料はグリッドＩ７の SD007 から３点（試料 No. １～３）、グリッドＩ５の SD006 から１点（試料 No. ４）の合計４試料である。

最初に肉眼もしくは実体顕微鏡で観察し、木取りの確認および径の計測を行った。その後、手割りあるいはカッターナイフを用いて３断面(横断面・接線断面・放射断面)を作製し、直径１㎝の真鍮製試料台に試料を両面テープで固定、銀ペーストを塗布して乾燥させた後、金蒸着して走査電子顕微鏡（日本電子㈱製　JSM-5900LV 型）を用いて樹種の同定と写真撮影を行った。

結果　樹種同定の結果、カバノキ科のハシバミ属、ブナ科のクリとブナ属、ツツジ科のネジキの４分類群が確認された。結果は第 24 表に示す。

第24表　樹種同定結果一覧

試料No.	グリッド	遺構名	取上げNo.	樹種	備考
1	Ｉ７	SD007	439	ネジキ	丸木、直径35mm
2	Ｉ７	SD007	439	ブナ属	ミカン割り、半径25mm、樹皮付
3	Ｉ７	SD007	388	ハシバミ属	半割、直径31mm
4	Ｉ５	SD006	611	クリ	ミカン割り（芯去）、38×17mm

以下に同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、電子顕微鏡写真を図版に示す。

（１）ハシバミ属　*Corylus*　カバノキ科　第 84 図　1a-1c(試料 No. ３)

散孔材で、道管が単独もしくは２～５個複合して放射方向に配列する。道管の穿孔は 10 段以下の階段状である。軸方向柔組織は短接線状に配列する。放射組織は１～２細胞幅のほぼ同性で、集合放射組織がみられる。

ハシバミ属は温帯に生育する落葉低木で、ハシバミとツノハシバミがある。材は堅硬・強靭である。

（２）クリ　*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.　ブナ科　第 84 図　2a-2c(試料 No. ４)

環孔材で、大型の道管が年輪界に並び、晩材部では角張った小道管が火炎状に配列している。軸方向柔組織はいびつな線状である。道管の穿孔は単一、道管放射組織間壁孔は大型の柵状である。放射

組織は単列同性である。

クリは温帯下部から暖帯に分布する落葉高木で、材は耐朽性・耐湿性に優れ、保存性が高い。

（３）ブナ属　*Fagus*　ブナ科　第84図　3a-3c(試料No.２)

散孔材で、単独の道管が密に散在するが晩材部の道管は大きさを減ずる。道管の穿孔は単一のものと階段状の２種類があるが、ここでは単一の穿孔のみ確認できた。放射組織はほぼ同性で、単列のもの、２～数列のもの、広放射組織の３種類がある。

ブナ属は温帯に分布する落葉高木で、ブナとイヌブナがある。材は堅硬・緻密で、靭性がある。

（４）ネジキ　*Lyonia ovalifolia* (Wall.) Drude var. *elliptica* (Siebold et Zucc.) Hand.-Mazz.　ツツジ科　第84図　4a-4c(試料No.１)

散孔材で、小型で角張った道管が散在するが、晩材部では道管径をやや減ずる。道管の穿孔は10～20段程度の階段状である。放射組織は１～３列幅の異性で、接線断面では単列部の直立細胞はレンズ状である。

ネジキは山形県・岩手県以南の温帯～暖帯に分布する落葉小高木である。材は硬堅であるが反りやすく、捩れがひどい。

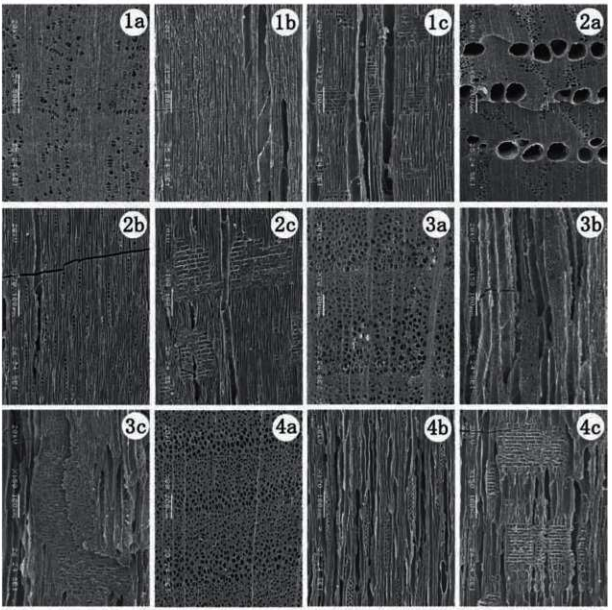
まとめ　木取りはクリとブナ属はミカン割り、ハシバミ属は半割、ネジキが丸木であった。また材の直径、半径、割材の長軸径は２～４cm程度であり、規格がおよそ統一されているように思える。残存状態は非常によく、加工痕等は見られなかった。

炭化材はいずれも温帯に分布する落葉広葉樹であり、当遺跡周辺に分布域をもつものである。特にブナ属は温帯の落葉広葉樹林を代表する種である。クリとブナ属は高木になるが、ハシバミ属とネジキは低木～小高木で材もあまり有用ではないため、燃料材もしくは自然木の可能性が考えられる。ハシバミ属は日あたりの良い山地や林縁に、ネジキは疎林内や岩場に生育する陽樹である。

引用文献

藤下典之 1984 出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法．古文化財に関する保存科学と人文･自然科学―総括報告書，638-654，同朋社．

Jacomet, S. and collaborators Archaeobotany Lab. 2006 Identification of cereal remains from archaeological sites. ２nd edition, IPAS, Basel Univ.



（a：横断面，b：接線断面，c：放射断面）

1a-1c．ハシバミ属（試料№３）　2a-2c．クリ（試料№４）　3a-3c．ブナ属（試料№２）
4a-4c．ネジキ（試料№１）

第 84 図　出土材の顕微鏡写真

第８章　総括

第１節　遺構編

はじめに　河北門復元に伴う遺構確認調査の結果、二つの成果を得た。一つは、復元対象となる近世後期河北門の遺構が比較的良好に遺存しており、門の規模や地盤の高さ、創建や改修履歴等多数の情報を得たられた点である。もう一つは、河北門が枡形門となる以前の初期金沢城の状況について、断片的ではあるが解明の手掛かりとなる所見を得た点である。個別の遺構についてはすでに述べてきたとおりであり、またⅠ～Ⅲ期とした時期区分については、第３章第１節で述べたとおりである。本節ではそれらをもとに、調査の成果について整理し、まとめとしたい。

Ⅰ期　主要な遺構としては、ニラミ櫓台北面石垣背後で確認した SA002（土塁状盛土）と、撹乱の掘方壁や底面で検出した土坑とみられる遺構群がある。

SA002（土塁状盛土）は当初三ノ丸北面石垣構築時の背面盛土と想定していたが、石垣解体調査に伴い北面石垣構築以前に遡る土塁状盛土遺構であることが確認された。北面石垣とは若干主軸がずれ、ニラミ櫓台及びそれ以前とみられる櫓台石垣掘方の両方に掘り込まれるため、櫓台構築以前の土塁と考えられる。土塁状盛土は調査区西壁でも確認しており、西側へ延長していくとみられる。東側へも土塁が繋がっていた可能性は十分に考えられる。土塁が直線的に延びた場合、その延長上と推定される調査区北東部については、建物基礎の撹乱が地山黒ボク層上部まで達していた。撹乱除去後に比較的広範囲で遺構の確認作業を行ったが、黒ボク層を掘り込む遺構がほとんど見られなかった。それはⅠ期に土塁がその上に構築され、そのため遺構が形成されなかったためと推側できる。しかし現状では土塁があったという痕跡も確認できず、Ⅰ期からⅡ期への変遷の指標となる削平レベルが土塁基底部にまで及んだものとも考えられる。一方調査区北東部で土塁が確認できないのは、三ノ丸九十間長屋付近の張り出した形状が旧地形を反映したものであり、地形に沿って屈曲した土塁が構築されていたためとも推測できる。上述の２つはあくまで推論にすぎないが、この段階で土塁を巡らす郭が形成されていた可能性は十分にあるといえよう。

土坑は単独で立地するだけではなく、同一箇所で切り合いを持ちながら作られる傾向がみられ、少なくとも３段階の変遷が確認できる。遺構の平面形態が確認できたものは少ないが、断面形態から垂直に立ち上がる壁面のもの、オーバーハングして立ち上がるもの、緩く摺鉢状に立ち上がるものの３タイプを確認した。いずれも底面は平坦に掘削されているものが多く、遺物はほとんど出土しない。埋土は黒ボク土由来の黒褐色土や地山混じり土が主体で、自然堆積による埋没ではなく埋め戻されたと考えられるものが多い。

第５章でも述べたように、Ⅰ期の遺構群は一定のレベルで上部が削平され、その後大規模に盛土造成されたことから、Ⅰ期遺構群は廃絶をむかえたと考えられる。削平レベルは、北側で 42.80m 前後、中央部や南側で 43.10m 前後を測り、北から南へと若干高くなっていく。削平と盛土造成の時期については、現在Ⅱ期は 1600 年前後に行われた新丸の新造［(財) 石川県埋蔵文化財センター2002a］と河北坂の盛土造成とを一連のものと想定しており、それ以前を当該期と考えている。

遺構の様相は断片的であるが、土塁の存在や土坑群の存在から、郭としての整備が行われていることが明らかとなってきた。

Ⅱ期　主要な遺構としては通路の路盤と考えられる版築状の盛土層や区画溝、石垣や礎石、土坑を検出した。Ⅱ期を特徴づける遺構として、河北坂から三ノ丸にかけての盛土造成がまずあげられる。三ノ丸ではⅠ期地表面を平均化するため大規模な削平を行い、粘質土や砂礫土、漆喰状の土といった異なる性質の土を薄く交互に重ね、入念に叩き締めた版築ともいえる盛土層により約 50 ㎝の嵩上げが行

われる。この嵩上げの盛土層は河北坂の盛土層とも連続しているもので、Ⅱ期に新丸から三ノ丸への通路が整備されたと考えられる。この整備は前述のとおり慶長４年（1599）から始まったとされる新丸の新造と連動したものと考えられる。現在も河北坂からの通路は継承されており、Ⅰ期段階から通路があった場所に、新たに大規模な通路を造ったと考えるのが妥当であろうが、現在のところそれを示す遺構は確認できていない。Ⅰ期に検出された土坑群が、版築状盛土層の下に多数存在している状況からは、非常に小規模な通路であったか、もしくは別ルートを想定する必要もあるかもしれない。

版築状盛土層の範囲は河北坂から直進し、調査区南端までと、調査区西側ではⅢ期には撤去されたと考えられる SW002 付近まで広がる。版築状盛土層の東側には、南北方向の区画溝（SD006・007）があり、この溝を境に東側は、削平面はみられるものの、版築状盛土層はみられず、遺構の様相が全く異なっている。区画溝の下層には多量の遺物とともに食物残渣とみられる魚骨なども含まれており（第７章第３節参照）、区画溝より東側に居住空間もしくは、土師器皿の出土点数の多さからも儀礼的な行為が行われるような空間が広がっていたと考えられる。また、この溝からは石垣石も遺物と共伴して出土しており、石面の加工等と時期を考える上で貴重な出土例となろう。

また、現在の一ノ門付近で礎石根固とみられる集石遺構を２基確認しており、河北坂を経由し三ノ丸へ入る地点に建物があった可能性が高まった。また、現状のニラミ櫓台以前に東西６×南北 14（m）前後の規模をもつ石垣台があったことを示唆する、角脇石と見られる石材がニラミ櫓台石垣南面の背後にみられる。築石材の加工状況や角脇石が備わっている点からは金沢城石垣編年２期（慶長後期）に該当する。これらの遺構の状況からⅡ期には河北坂の造成に始まり、順次周辺が整備され、枡形門築造以前に周辺が重要な役割を担っていたことが想定できる。慶長期頃の城内の様子を描いたとされる「加州金沢之城図」にみられるような坂下の門に坂上の平入り門といった「古河北門」の存在を彷彿とさせる状況であった可能性がある。

なお、河北坂周辺の石垣や三ノ丸北面石垣についても、石垣解体調査の所見からはこの頃に順次構築されていった可能性がある。

Ⅲ期　河北門が枡形門として築造され明治に廃絶されるまでをⅢ期とし、枡形門を構成する遺構を多数検出した。それらは、河北門が廃絶される際の最終状況を示すものがほとんどあるが、それらのなかから改修以前の状況も明らかとできた。また、従来不明とされてきた枡形門の創建時期もほぼ特定することが出来た。ここでは、門の築造年代やその他特徴的な遺構に限って述べていきたい

門の創建から廃絶までの来歴を明らかとするうえで、最も多くの所見が得られたのが、二ノ門南北石垣台であった。南側石垣は遺存状況が比較的良好で、ほぼ全周する根石が残っており、根石部分での南側石垣台の規模が明らかとなった。門創建期とみられる石垣根石と築石を確認しており、石垣編年２期に該当することから河北門の創建が慶長後期頃であると推定した。枡形門築造の際埋め戻され、その埋土が石垣掘方に切られる SD007 出土遺物の年代観からは、慶長後期でも末期ともいえる時期であり、石垣編年２期の最終段階に河北門枡形が成立したと考えられる。

改修の痕跡として、北側石垣台の南西角脇石（根石）に寛文期頃の粗加工石が使用され小面に鉛滴が付着していた。この状況から、寛文期頃と宝暦の大火後の２回の改修があったことが判明した。

二ノ門の内部では路盤や礎石・根固を確認した。礎石に残る金具の錆痕跡で二ノ門側柱の大きさが推定できた。石川門同様添柱があったことも明らかとなった。

門内については、黄橙色粘土中に直径５mm ほどの小礫が多く含まれた厚い路盤を確認した。この面が直接の路面となるのか、石敷きであったかのかについては特定する所見は得られなかった。路盤面と礎石の天端高さを比較すると、遺存状態の良好な地点で約 10cm の比高差が見られた。路盤表面には石敷きの石が設置されたような凹凸などの痕跡は確認できなかった。石敷きの石材の厚さや、接地面の加工についても不明だが、石敷きは無く、土間状であった可能性が高いと考える。

門の付属施設として、石組溝を検出した。門廃絶時の姿としては、凝灰岩製の石組溝であったことが明らかとなった。開渠部分については廃絶時の状況のみを確認し、当初については不明であった。暗渠は、凝灰岩製以前に川原石組溝が使用されていたことが明らかとなっている。当初は川原石組溝で、宝暦の大火以降に凝灰岩製の石組溝へと変化したと考えている。

第３章に詳細を報告したが、導水ルートや変遷については、部分的な構造等は明らかとしたが、全体像については不明な点が多い。絵図にみられる辰巳用水のルートについても明らかとは出来なかった。しかし、石組溝の変遷や石材利用の変化の一端を明らかとした点は重要な成果と言えよう。

Ⅳ期以降　第２章第３節で述べられているように、明治 15 年に、河北門一ノ門の撤去及び矢来門の設置について要求がなされ、翌明治 16 年の絵図では二ノ門が描かれておらず、この頃には一ノ門、二ノ門も含め姿を消していたと考えられる。この門の撤去以降をⅣ期としており、盛土造成が行われており２面が確認出来る。２面とも黒灰色砂質土の硬化面が広がり、標高約 43m と 42.5m前後を測る。

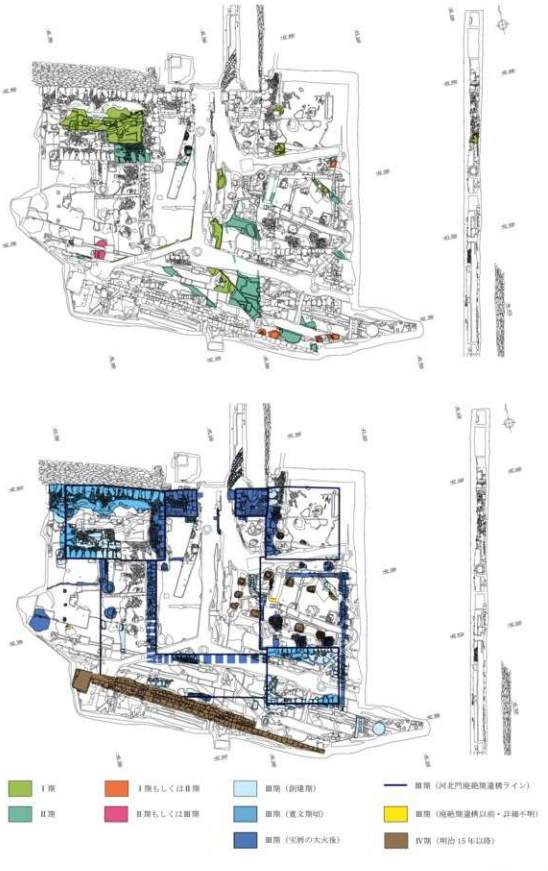
軍隊期、金沢大学期、公園整備に伴う盛土造成土が約１ｍの厚さで堆積し現地表面は標高 43.50m 前後と、高くなっている。河北門復元に際しても現三ノ丸から河北門二ノ門にむけてスロープとして段差を解消している。

その他　本調査では、冒頭にも述べたように、河北門最終廃絶時の遺構が良好に残っており、復元に関しては多くの情報が得られた。ただしそれ以前の河北門の状況については、不明な点がまだまだ多くある。例えば、二ノ門内では路盤下のⅢ期整地層の途中から切り込む性格不明の遺構群の存在があり、門の遺構の変遷以外にも小規模ではあるが、変遷がみられる。それらの変遷は時期差や段階差・施工差等様々な要素があると推定できるが、個別の検討は十分とはいえない。ただし、比較的広範囲の調査を行ったことにより、河北坂から三ノ丸北周辺の地山レベルや近世遺構面レベルが明らかとなり、今後の公園整備の際に現況レベルとの比較を行うことが可能となったことなども成果にあげられよう。柱状図（第 86 図）は断面図を模式図化したものであるが、門の主要部では次段階の削平を受けながら新たな遺構面が形成されている状況がうかがえる。一方縁辺部においては、河北門の段階では比較的一定した状況であったこともわかる。

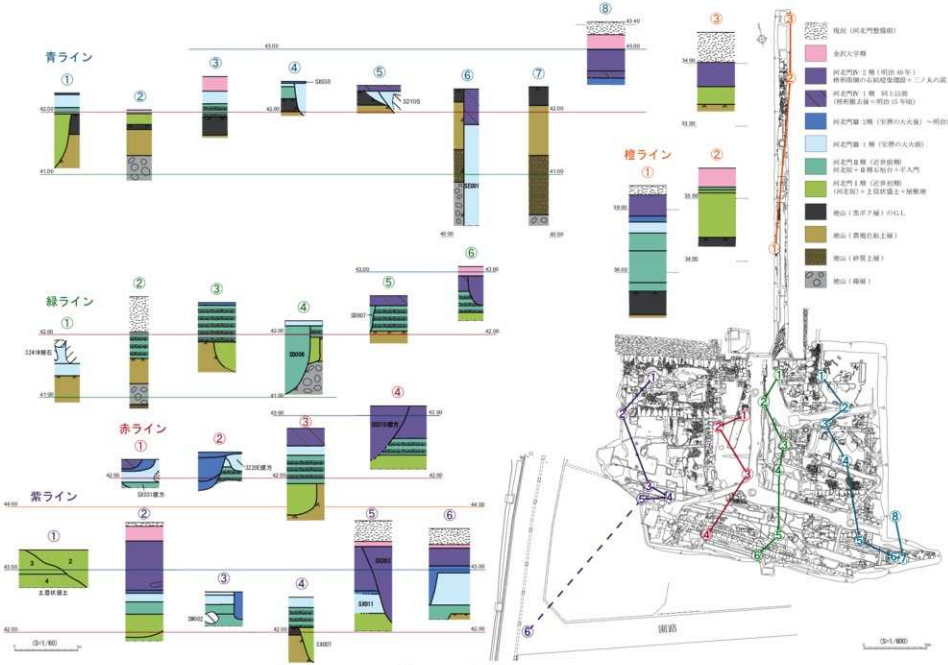
解体調査については、解体調査に先立つ石垣の表面観察についても、鉛の付着状況や間詰石の変化などから、改修等の一定の情報が得られることが明らかとなり、解体調査の詳細な事前調査の必要性を感じた。また、解体そのものの重要性だけでなく、一ノ門頬当石垣の解体石材の観察所見から得られる情報量の多さから、一石毎の解体石材観察の必要性を確認した。

第25表　遺構の変遷

金沢城調査研究所2008『金沢城跡埋蔵文化財確認調査報告書』をもとに加筆作成



第 85 図　河北門遺構変遷図


青ライン
緑ライン
赤ライン
紫ライン
橙ライン
(S=1/60)
(S=1/600)
現況（河北門整備前）
金沢大学敷
河北門IV：2 期（明治 40 年）
（修形指導の石組壁柱設＋三ノ丸の盛土造成後
河北門IV：1 期　同上以前
（修形前土塁＋明治 15 年頃）
河北門III：2 期（安政の大火後）～明治15年頃
河北門III：1 期（安政の大火前）
河北門II期（近世初期）
河北尾＋長屋石垣＋平入門
河北門 I 期（近世初期）
（河北尾）＋土塁状盛土＋屋敷地
地山（黒ボク層）のGL
地山（黄褐色粘土層）
地山（砂質土層）
地山（礫層）
園路

第86図　調査区柱状図

第２節　遺物編

陶磁器・土器の各期の様相

河北門の調査では、検出した遺構群のⅠ～Ⅲ期の変遷が明らかとなっている。各時期は、Ⅰ期が河北坂造成以前、Ⅱ期が 1600 年以降、Ⅲ期が慶長後期以降である。ここでは、陶磁器・土器から、各期の様相を述べていくこととする。なお、土師器皿については、『金沢城跡埋蔵文化財確認調査報告書Ⅰ』での A～C 類の分類を採用している（凡例参照）。

Ⅰ期　河北坂調査区で、坂造成以前（Ⅰ期）の整地層中から陶磁器・土器が出土している。その特徴は、磁器は中国の製品で占められ、陶器は肥前が出土せず、瀬戸・美濃、越前などがみられることである。肥前陶器や志野を含んでいないことから、17 世紀以前、16 世紀後半～末の年代が考えられる。また、版築状盛土（Ⅱ期）下では、黒色土を主体とするⅠ期の遺構をいくつも確認しているが、出土する土師器皿は、京都系 B 類が主体を占めており、肥前陶器は出土していない。このような出土の傾向は、16 世紀末前後の様相を示している河北坂造成前とも共通している。

新丸第２次調査［(財) 石川県埋蔵文化財センター2002a］では、初現が金沢坊期に遡る可能性のある下部遺構面が確認されている。同遺構面の出土の遺物の半数以上は、輸入陶磁器で占められるが、国産品では肥前陶器や志野は含まれず、瀬戸・美濃の大窯の段階の製品が出土している。このような出土状況から、同遺構面の廃絶年代は 16 世紀末～17 世紀初頭であると考えられ、慶長４年（1599）の新丸造成に伴い廃絶したのではないかと推定されている。河北坂での坂造成以前の遺構面の廃絶年代もほぼ同じである。

Ⅱ期　Ⅰ期の河北坂以前の様相から、Ⅱ期の河北坂造成は 16 世紀末～17 世紀初頭にかけて始まったと考えられる。

Ⅱ期を代表する遺構は SD006・007 であり、陶磁器・土器がまとまって出土している（第６章第 15・16 表）。陶器では、肥前の製品が出土するようになり、志野や織部などが加わり始める。磁器は、依然として中国のもので占められ、初期伊万里は出土していない。土師器皿では、C1 類が中心で C2 類は少ない傾向がある。両遺構に関しては、遺構の形状等からは、同一遺構かどうか判断が難しく、より詳細な遺物の観察が必要であった。京都系土師器皿の出土傾向を指標に考えると、SD006 が若干古いようにも思えるが、その土師器皿は能登からの搬入品と考えられ、加賀での使用が減少した後も使用が続いた可能性があり、年代的な指標とするのは難しい。また、SD006 では、志野織部が出土しており、このことからも SD007 より先行するものとは考え難い。材質別破片数（皿）では、合計 SD006 が 633 点、SD007 は 2872 点と破片数は４倍以上であるが、比率は近い数値である。総量は異なるが、組成は似ており、総体として考えると同一遺構である可能性が高い。

全体としては、土師器皿 C2 類が主体となる元和期より前で、慶長期の終わり頃の様相であると思われ、多くの土師器皿が出土し、織部や擂いの唐津の向付が見られる出土状況からは、Ⅱ期に周辺に屋敷地が展開していたことが想定出来る。SD006 の志野織部については、織部の中では新しい方に属するが、上記のように土師器皿の形状から慶長の末頃と考えている。

Ⅲ期　Ⅲ期では、遺構・整地土ともに遺物は少なくなる。これは、門という性格上遺物を多量に廃棄することがなくなるためと想定できる。

なお、まとまった量ではないが、Ⅰ期以前の遺物として、古墳時代中期の須恵器の瓹（P62）、15 世紀の龍泉窯の磁器（P44・P70・P289）等が出土している。

瓦の様相［第 87 図、第 26・27 表］

河北門出土の瓦について、金沢城本丸周辺を対象とした調査報告書である『金沢城跡埋蔵文化財確認調査報告書Ⅰ』［石川県金沢城調査研究所 2008a］（以下、『確認調査Ⅰ』）と、『金沢城跡石川門前土橋（石川橋）』［（財）石川県埋蔵文化財センター1997］（以下、『石川橋』）に掲載されている、年代の絞られている瓦の文様等を比較し、河北門出土瓦の城内での年代的な位置を推定していく。『確認調査Ⅰ』では、本丸の元和６年（1620）、寛永８年（1631）の大火前後、1640 年代、1640 年代以降の各年代に廃棄された資料を掲載しており、第 87 図では、文様を比較し『確認調査Ⅰ』の瓦の隣に配置し、時期区分を想定した。また、『石川橋』では 1630～1640 年代造成の盛土３出土の瓦が掲載されている。第 26・27 表では、『確認調査Ⅰ』『石川橋』掲載の瓦と文様を比較し、表に示した。河北門の検出遺構から明らかになった時期区分については前節を参照されたい。

第26表　軒丸瓦

	河北門	確認調査Ⅰ（本	石川橋
巴Ⅰ-1	SE001(20層)	なし	なし
巴Ⅱ-1a（右）	SE001(20層)・坂造成土18層上面	遺構外	盛土３
巴Ⅱ-1b（左）	SE001(20層)	寛永の大火の片づけ層(2004-2地点SX02 Ⅵ層)	盛土３
巴Ⅱ-2a	SE001(20層)	なし	なし
巴Ⅱ-2b	SE001(20層)	なし	盛土３
巴Ⅲ-1(a)	SE001(20層)・坂造成土18層上面	不明	盛土３
巴Ⅲ-1(b)	3241表土	不明	なし
巴Ⅲ-2	近代以降の整地層T017(3-1-01 28~46層)	寛永大火の被災資料の再利用の可能性あり、1640年代には廃棄	盛土３多く出土
巴Ⅳ	SD006上層・SD202	元和６(1620)年廃絶以前廃絶の(2004-1(2003-8)地点)SX02のみ出土	なし

軒丸瓦　巴文を比較すると『石川橋』・『確認調査Ⅰ』では巴Ⅰは出土していない。『確認調査Ⅰ』では 巴Ⅱ-1b は、表土出土を除くと、寛永８年の大火の片づけのみで報告されている。『石川橋』盛土３では、軒丸瓦は巴Ⅱ-1b が大半を占める。巴Ⅲ-2 は『確認調査Ⅰ』では、寛永８年の大火の被災資料の再利用の可能性がある層から出土している。『石川橋』盛土３からも多く出土している。巴Ⅳは、『確認調査Ⅰ』の T39 と同じ瓦当と思われる。T39 は珠文 16 個、径 16cm、巴左巻き、巴の頭同士が近く平坦部には金箔が付き、元和６年（1620）頃には廃絶していたと考えられる SX02（土坑）のみで出土している。

巴Ⅱ-1b は、『確認調査Ⅰ』・『石川橋』と河北門 SE001 から出土していることから、寛永８年（1631）の大火前から寛文８年（1668）頃までは使用されていたことが分かった。巴Ⅲについてもほぼ同時期に使用されていた可能性が高い。巴Ⅱ-2a（珠文 14 個、中心突起なし、径 14～15cm、右回り）は、残

第27表　軒平瓦

	河北門	確認調査Ⅰ（本丸）	石川橋
桐文	SD006 SX011・SX203	元和6年頃廃絶の(2004-1(2003-8))SK13	なし
花文Ⅰ	近代以降の整地層T017(3-1-01 29層)	なし	盛土３
花文Ⅱ	近代以降の整地層T017(3-1-01 29層)	寛永の大火の片づけ層(2003-3地点Ⅳ層)	盛土３
花文Ⅲ	SE001(20層)・坂造成土18層上面	なし	盛土３
花文Ⅳ	近代以降の整地層T017(3-1-01 28～46層)	なし	盛土３
花文Ⅴ	SE001(20層)	なし	盛土３
三葉文Ⅰ	攪乱・近代以降の整地層T017(3-1-01　28～46層	寛永の大火後の片づけ層(2002-7地点Ⅵ1層)	なし
三葉文Ⅱ-1	SA001　近代部分	寛永の大火の被災資料の再利用の可能性もある。1640年代には廃棄(2002-23地点Ⅴ層)	なし
三葉文Ⅱ-2	SX036・坂造成土17・18層上面	寛永の大火の被災資料の再利用の可能性もある。1640年代には廃棄(2002-23地点Ⅴ層)	なし
三葉文Ⅲ	坂造成土18層上面	寛永の大火後の片づけとほぼ同時期	なし
三葉文Ⅳ	近代以降の整地層T017(3-1-01 28~46層	寛永の大火の被災資料の再利用の可能性もある。1640年代には廃棄(2002-23地点Ⅴ層)	なし
三葉文Ⅴ	SD101　検出面(3-6-01　28層上)	17世紀前葉~中葉の層、寛永大火前後廃棄(2002-22地点)	盛土３
三葉文Ⅵ	表土	なし	盛土３
垂下型五葉文	SE001(18・20層)	なし	表土
垂下型三葉文	枡形内整地層	なし	19世紀中頃以前(瓦溜まり1)

存状況が悪く、中心の突起の有無の判別が難しかったが、河北門以外の両地区でも確認出来ないことから、本来そのような文様は無く、Ⅱ-2a の分類はⅠ-1 に吸収される可能性もある。河北門の巴Ⅳ(T35)は、本丸出土の T39 と巴文上面に平坦部を持つ形状が酷似していることから、河北門枡形創建以前の SD006（Ⅱ期）にも「金箔瓦」が廃棄されていた可能性が高い。

軒平瓦　桐文は『確認調査Ⅰ』では、元和６年(1620)頃に廃棄されている SK13 から出土している。河北門の T104 は、河北門枡形創建以前の SD006（Ⅱ期）から出土しており、丸瓦の切り離しがコビキａで金箔瓦を含む（可能性がある）点も河北門の SD006 と SK13 は共通している。

花文Ⅰ・Ⅲ～Ⅴは『石川橋』盛土３からは出土しているが、『確認調査Ⅰ』では報告されていない。また、花文Ⅱは、『確認調査Ⅰ』では、寛永８年（1631）の大火に伴う片づけで廃棄されており、これ以前に生産されていることが判明している。

三葉文Ⅰ、Ⅱ-1・2については河北門出土の瓦も他の城内出土の瓦も同様に非常に残存状況が悪く比較が困難であったが、三葉文Ⅰは『確認調査Ⅰ』の T59 に似ており、寛永の大火に伴う片づけの層から出土している。三葉文ⅡはT72・T76・T80 の文様が似ており、寛永の大火から 1640 年代頃の層から出土している。三葉文Ⅲは、『確認調査Ⅰ』の SK11 出土の瓦と非常に似ているが同范ではなく、現在まで同范は確認していない。三葉文Ⅳは、1640 年代には廃棄されたと考えられる層で出土している。また、残存状況が悪く、細分していないが、三葉文Ⅴにも幾つか范がある可能性があり、『確認調査Ⅰ』2002－22 地点の 17 世紀前半から中葉の層の他、『石川橋』盛土３からも出土している。三葉文Ⅵも『石川橋』の盛土３から出土している。

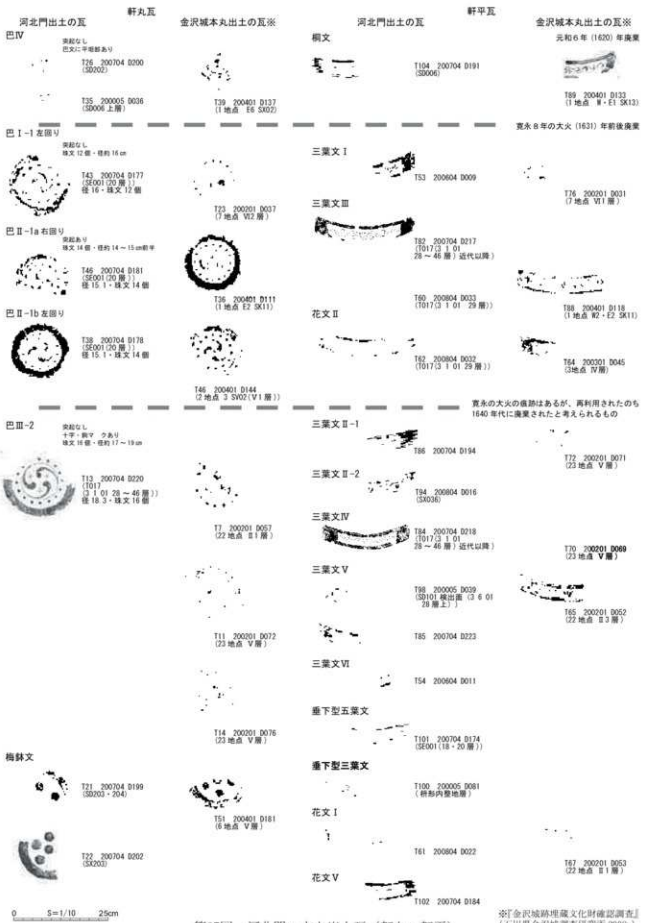
花文に反して三葉文は、本丸から多く出土している。他の文様に比較し、三葉文Ⅰ、Ⅱ-1・2 が何れも残存状態が悪かったのは、先行して使用されていたために、被災資料か、あるいは、再利用されている可能性も考えられる。垂下型五・三葉文は、本丸では出土せず、『石川橋』では新しい層からのみ出土している。

河北門と『確認調査Ⅰ』『石川橋』の瓦を文様その他で比較した結果を、以下にまとめる。

・河北門 SE001 から、７（もしくは６）種類に分類できる巴文軒丸瓦が出土している。その中には、両報告書により、上限は寛永の大火頃、下限は 1630～1640 年代の盛土３頃までは使用されていたと想定されてきた文様も含まれる。本調査で SE001 から出土したことにより、下限が寛文８（1668）年頃まで広がった。また、同遺構から、垂下型五葉文が出土したことにより、寛永の大火後に見られると漠然と捉えられてきた文様が、遅くとも、寛文８年以前には使用され、廃棄されたことが明らかになった。また、SE001 は、遺物の上限は寛永の大火頃と考えており、使用されていた年代幅が狭まってきた。ただし、軒丸瓦が多く出土した状況を考慮すると、集積されていた瓦が、最終的に寛文８年頃に廃棄された可能性もある。

・『確認調査Ⅰ』では三葉文が多く出土し、花文が少なく、対して、河北門と『石川橋』では花文が多く出土していることから、花文は本丸ではあまり使用されず、三ノ丸付近で多く使用された可能性もある。

・『確認調査Ⅰ』『石川橋』の両地区出土瓦を合わせた数位の豊富な文様種の瓦が、河北門では出土している。河北門出土の瓦が、河北門に関連する建物に葺かれていた瓦と仮定すると、『石川橋』と同じ三ノ丸に位置し、本丸へ向かう大手筋の門であり、両方と共通する文様が使用されていた可能性もある。



第87図　河北門・本丸出土瓦（軒丸・軒平）

引用・参考文献

石川県 1996『金沢城址公園　金沢大学教育学部第２教棟（旧陸軍第７聯隊兵舎）解体工事による記録保存調査報告書』

石川県金沢城調査研究所 2008a『金沢城跡埋蔵文化財確認調査報告書Ⅰ』

石川県金沢城調査研究所 2008b『戸室石切丁場調査報告Ⅰ』

石川県金沢城調査研究所 2008c『絵図でみる金沢城』

石川県金沢城調査研究所 2008d『金沢城調査研究所年報１』

石川県金沢城調査研究所 2008e『金沢城石垣構築技術史料Ⅰ』

石川県金沢城調査研究所 2009a『よみがえる金沢城２』

石川県金沢城調査研究所 2009b『金沢城調査研究所年報２』

石川県金沢城調査研究所 2010a『金沢城跡石垣修築工事報告書－玉泉院丸南西石垣－』

石川県金沢城調査研究所 2010b『金沢城の三御門－河北門・橋爪門・石川門－』

石川県金沢城調査研究所 2010c『金沢城調査研究所年報３』

石川県金沢城調査研究所 2010d『シンポジウム　天下普請にみる石垣技術』

石川県教育委員会 1970『金沢城二ノ丸跡発掘調査概報』

石川県教育委員会 1991『金沢御堂・金沢城調査報告書Ⅰ』

石川県教育委員会 1993『金沢城跡』

石川県教育委員会 2001『金沢城フォーラム　いま甦る金沢城』

石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター2001『金沢市三社町遺跡』

石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター2002a『金沢市金沢城跡Ⅰ』

石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター2002b『金沢市木ノ新保遺跡』

石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター2002c『金沢市経王寺遺跡』

石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター2002d『金沢市高岡町一ツ水溜跡』

石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター2002e『金沢市前田氏（長種系）屋敷跡』

石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター2005『山中町九谷A遺跡Ⅰ』

石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター2006『加賀市九谷A遺跡Ⅱ』

石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター2007『金沢市三社町遺跡』

石川県教育委員会文化財課 1969『重要文化財金沢城　石川門・三十間長屋保存修理工事報告書』

石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室 2004a『年報２』

石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室 2004b『御造営方日並記　上巻』

石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室 2005a『御造営方日並記　下巻』

石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室 2005b『金沢城フォーラム　記録集　石垣の匠と技』

石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室 2006a『金沢城跡Ⅱ』

石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室 2006b『よみがえる金沢城１』

石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室 2006c『年報４』

石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室 2007『年報５』

石川県図書館協会 1974『石川県史　第４編』復刻版

石川県土木部営繕課 2001『金沢城公園菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓等復元工事報告書』

石川県立埋蔵文化財センター1990『元菊町遺跡』

石川県立埋蔵文化財センター1992『特別名勝　兼六園（江戸町推定地）発掘調査報告－附 本多家上屋敷跡試掘調査報告－』

石川県立埋蔵文化財センター1996『金沢城跡車橋門発掘調査報告書』

石川県立埋蔵文化財センター1997『金沢城跡石川門前土橋（通称石川橋）発掘調査報告書』

石川県立埋蔵文化財センター1998『金沢城跡石川門前土橋（通称石川橋）発掘調査報告書Ⅱ』

伊藤さやか2004「金沢城跡」『石川県埋蔵文化財情報』第12号（財）石川県埋蔵文化財センター
伊藤さやか2005「金沢城跡」『石川県埋蔵文化財情報』第14号（財）石川県埋蔵文化財センター
伊藤嘉章・唐澤昌宏 2003『日本のやきもの　美濃』淡交社
井上銀夫 1969『金沢城跡の発掘』金沢大学金沢城学術調査委員会
上田秀夫 1982「14～16 世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』№2 貿易陶磁研究会
上野佳也 1976「金沢城四十間長屋跡発掘調査概報」『日本海文化』3 日本海文化研究室
大橋康二 2000「Ⅰ　九州陶磁概論」『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会
大橋康二 2003『日本のやきもの　唐津』淡交社
岡田茂和 1998「図書館蔵の明治天皇巡幸等写真について」『学習院大学資料館紀要』13 号学習院大学史料館
小野正敏 1982「15～16 世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』№2 貿易陶磁研究会
御長屋跡第Ⅱ地点発掘調査団 2002『小田原城三の丸御長屋跡第Ⅱ地点　発掘調査報告書』
垣内光次郎 1990「中世北陸の瓦屋文化」『石川考古学研究会々誌』第 33 号石川考古学研究会
学習院大学資料館編 2006『写真集　明治の記憶』吉川弘文館
加藤克郎 2001「金沢城跡」『石川県埋蔵文化財情報』第 6 号（財）石川県埋蔵文化財センター
加藤克郎 2009「金沢城跡」『石川県埋蔵文化財情報』第 22 号（財）石川県埋蔵文化財センター
金沢市 2006『金沢市史　通史編 3 近代』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2002『金沢市彦三町遺跡』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2003a『石川県金沢市昭和町遺跡Ⅱ』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2003b『金沢市高岡町遺跡Ⅱ』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2003c『金沢市本町一丁目遺跡Ⅲ』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2003d『野田山墓地』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2004a『石川県金沢市昭和町遺跡Ⅲ』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2004b『石川県金沢市広坂遺跡（1 丁目）Ⅰ（測量図編）』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2004c『金沢市久昌寺遺跡』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2005a『石川県金沢市片町二丁目遺跡』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2005b『石川県金沢市広坂遺跡（1 丁目）Ⅱ（古代・中世編、測量図編 2）』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2006a『石川県金沢市市内遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2006b『石川県金沢市広坂遺跡（1 丁目）Ⅲ（近世遺 1）』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2006c『石川県金沢市本町一丁目遺跡Ⅳ』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2007a『石川県金沢市兼六元町遺跡　彦三町一丁目遺跡』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2007b『石川県金沢市下堤・青草町遺跡』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2007c『石川県金沢市広坂遺跡（1 丁目）Ⅳ（近世編 2）』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2008a『石川県金沢市金沢城惣構跡Ⅰ～西外惣構跡・東内惣構跡発掘調査報告書～』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2008b『野田山・加賀藩士前田家墓所調査報告書』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2009『辰巳用水調査報告書』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2010『石川県金沢市東山一丁目遺跡』
金沢市・金沢市教育委員会 1991『甍草町遺跡』
金沢市・金沢市教育委員会 1995『本町一丁目遺跡』
金沢市・金沢市教育委員会 1997『安江町遺跡』
金沢市教育委員会 1997『金沢市本町一丁目遺跡Ⅱ』
金沢市教育委員会（金沢市埋蔵文化財センター）2001a『金沢市醒ヶ井遺跡』
金沢市教育委員会（金沢市埋蔵文化財センター）2001b『金沢市昭和町遺跡Ⅰ』
金沢市教育委員会（金沢市埋蔵文化財センター）2001c『金沢市高岡町遺跡Ⅰ』
金沢市埋蔵文化財センター1998『長田町遺跡　長町遺跡　穴水町遺跡』

金沢市埋蔵文化財センター1999『下本多町遺跡』
金沢市埋蔵文化財センター2007『土清水塩硝蔵跡』（現地説明会資料）
金沢市埋蔵文化財センター2008『土清水塩硝蔵跡　第２次発掘調査』（現地説明会資料）
金沢市役所 1973『稿本　金澤市史　市街篇第四』復刻版　名著出版
金沢大学金沢城学術調査委員会 1967『金沢城　その自然と歴史』金沢大学生活協同組合
金沢大学日本海文化研究室 1976『金沢城郭史料』石川県図書館協会
金沢大学埋蔵文化財調査センター2000『金沢大学文化財学研究』２
金沢大学埋蔵文化財調査センター2001・2002『金沢大学文化財学研究』３・４
金沢大学埋蔵文化財調査センター2003『金沢大学文化財学研究』５
唐澤昌宏 2002『日本のやきもの　瀬戸』淡交社
木越隆三 2003「元和～寛文期の金沢城修築について」『金沢城研究』創刊号金沢城研究調査室
木越隆三 2006「城郭石垣を築いた人々」『金沢城研究４』金沢城研究調査室
木越隆三 2008「二　二種類の慶長図について」『絵図でみる金沢城』石川県金沢城調査研究所
木越隆三・正見泰・石野友康 2007「河北門に関する絵図・文献資料」『金沢城研究』５号金沢城研究調査室
北垣聰一郎 1987『石垣普請』法政大学出版局
北島俊朗 1995『戸室石引道　調査報告書』金沢市
北野博司 2003「金沢城の石垣変遷１」『金沢城研究』創刊号金沢城研究調査室
北野博司 2004「金沢城の石垣変遷２－切石積石垣－」『金沢城研究』第２号金沢城研究調査室
宮内庁管理部 2007『特別史跡　江戸城跡　皇居東御苑内本丸中之門石垣修復工事報告書』
宮内庁管理部 2009『江戸城跡　皇居山里門石垣修復工事報告書』
九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年』
九州近世陶磁学会 2001『国内出土の肥前陶磁－東日本の流通をさぐる－』
久保智康 2005「日本海域をめぐる赤瓦」『日本海域歴史大系』４清文堂
熊谷葉月 1999「金沢城跡（三の丸東調査区）」『石川県埋蔵文化財情報』創刊号（財）石川県埋蔵文化財センター
甲府市教育委員会 2001a『甲府城下町遺跡Ⅰ－北口二丁目（桜シルク跡）発掘調査報告書－』
甲府市教育委員会 2001b『武田城下町遺跡Ⅰ－大手一丁目（甲府営林署跡地）発掘調査報告書－』
紺野義夫 1993 『新版・石川県地質図（10 万分の１）および石川県地質誌』石川県
（財）出光美術館 2004『古唐津』
（財）大阪市文化財協会 1988『大坂城跡Ⅲ』
（財）大阪市文化財協会 1992『難波宮址の研究　第九』
（財）広島市歴史科学教育事業団 1997『広島城外堀跡城北駅北交差点点発掘調査報告』
佐賀県立名護屋城博物館 2008『前田利家邸跡』
佐賀県立名護屋城博物館 2009『名護屋城跡－天守台－』
佐々木達夫 1980「金沢城跡の発掘－一九七九年－」『日本海文化』７金沢大学文学部日本海文化研究室
佐々木達夫 1981「金沢城跡の発掘－1977 年－」『金沢大学日本海域研究所報告』第 13 号
貞末堯司・石崎俊哉・前田清彦 1986「金沢城の発掘－1981－藤右衛門丸北側法面掘部発掘報告－」『金沢大学日本海域研究所報告』第 18 号
貞末堯司・前田清彦・児玉剛 1989「金沢城の発掘－1986 年－　黒門横北側懸崖部発掘調査報告」『日本海文化』15 金沢大学文学部日本海文化研究室
新宿区払ノ町遺跡調査団 1999『払ノ町遺跡－警察庁払ノ宿舎建設事業に伴う緊急発掘調査報告書－』
珠洲市立珠洲焼資料館 1989『珠洲の名陶』
瀬戸　薫 2000『「北信愛覚書」について－天正十五年の金沢城－」『加能史料研究』第 12 号 石川県地域史研究振興会
仙台市教育委員会 2007『若林城跡　―第６・７次発掘調査報告書―』
第４回全国城跡等石垣整備調査研究会実行委員会事務局 2007『第４回　全国城跡等石垣整備調査研究会　記録集』

高松市・高松市教育委員会 2007『史跡高松城跡整備報告書第１冊　鉄門石垣調査・保存整備工事報告書』
高松市・高松市教育委員会 2008『史跡高松城跡整備報告書第２冊　石垣基礎調査報告書』
滝川重徳 1999「金沢城跡（本丸附隅調査区）」『石川県埋蔵文化財情報』創刊号（財）石川県埋蔵文化財センター
滝川重徳 2000a「金沢城跡（五十間長屋調査区）」『石川県埋蔵文化財情報』第３号（財）石川県埋蔵文化財センター
滝川重徳 2000b「金沢城跡」『石川県埋蔵文化財情報』第４号（財）石川県埋蔵文化財センター
滝川重徳 2010「Ⅰ　都市の時代　三　城下町・金沢」『史跡で読む日本の歴史９　江戸の都市と文化』吉川弘文館
田中徳英 1996「宝暦大火後の金沢城再建における造営組織について」『日本建築学会計画系論文集』480 号日本建築学会
田中徳英 2008「第三章　金沢城の建築と内作事方の役割」『加賀藩大工の研究－建築の技術と文化－』桂書房
地下鉄７号線溜池・駒込間遺跡調査会 1996『江戸城外堀跡四谷御門外橋詰・御堀端通・町屋跡』
土田友信 2000「金沢城跡」『石川県埋蔵文化財情報』第４号（財）石川県埋蔵文化財センター
坪井利弘 1999『図鑑　瓦屋根』理工学社
東京大学埋蔵文化財調査室 1999『東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類（１）』
栃木英道 1998「金沢城跡」『石川県立埋蔵文化財センター年報』第 19 号石川県立埋蔵文化財センター
冨田和気夫・湊屋玲美 2002「金沢城跡」『石川県埋蔵文化財情報』第７号（財）石川県埋蔵文化財センター
豊島区教育委員会 2001『染井　Ⅵ』
濱岡伸也 1995「二系統の『慶長金沢城図』について」『研究紀要』８石川県立歴史博物館
濱岡伸也 1999「絵図・地図解題　４、金沢城図」『金沢市史』資料編 18（絵図・地図編）
林　大智 2008「金沢城跡」『石川県埋蔵文化財情報』第 19 号（財）石川県埋蔵文化財センター
広瀬岳志 2005「コビキ再考」『森宏之君追悼城郭論集』織豊期城郭研究会
藤　則雄 1999「金沢城跡「百間堀」の断層とその周辺の地形」『北陸の考古学Ⅲ　石川考古学研究会々誌』第 42 号石川考古学研究会
平凡社 2000『増補　やきもの事典』
北陸中世考古学研究会 1998『北陸中世の金属器－生産と流通－』
北陸中世考古学研究会 1999『中世北陸の石文化Ⅰ』
増山　仁 1997「金沢城下における近世墓―久昌寺墓地を中心として―」『第９回関西近世考古学研究会大会　西日本近世墓の諸様相』
増山　仁 1999「金沢城跡」（「近世」）『金沢市史　資料編 19　考古』金沢市史編さん委員会
三浦正幸 2005『城のつくり方図典』小学館
三浦正幸 2006『城づくりのすべて』学習研究社
三浦ゆかり 1999「金沢城跡（いもり堀）」『石川県埋蔵文化財情報』第２号（財）石川県埋蔵文化財センター
湊屋玲美・土田友信 2001「金沢城跡」『石川県埋蔵文化財情報』第５号（財）石川県埋蔵文化財センター
湊屋玲美・土田友信 2001「金沢城跡」『石川県埋蔵文化財情報』第６号（財）石川県埋蔵文化財センター
峰岸純夫・入間田宣夫 2003『城と石垣－その保存と活用－』高志書院
三輪茂雄 1994『増補　石臼の誌』クオリ
森島康雄 1999「中世末から近世初頭の陶磁器」『考古学ジャーナル』№442 ニューサイエンス社
森島康雄 2000「織豊期の基準資料と暦年代の再検討－京都を中心に－『織豊城郭』第７号織豊期城郭研究会
森田　勉 1982「14～16 世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』№２貿易陶磁研究会
森　毅 2000「秀吉期城郭出土の土器・陶磁器の編年－大阪における信長・秀吉秀頼期の陶磁器－」『織豊城郭』第７号織豊期城郭研究会
谷口明伸・増山　仁 2004「前田土佐守家の下屋敷と醒ヶ井遺跡」『研究紀要』第１号（財）金沢文化振興財団
山梨県 2005『甲府城跡』
吉岡康暢 1985「金沢城の発掘」『金沢城と前田氏御内の諸城』（日本城郭史研究叢書　第五巻）名著出版

報告書抄録

ふ り が な	かなざわじょうあと　かほくもん
書　　名	金沢城跡　－河北門－
副　書　名	金沢城史料叢書13
シリーズ名	金沢城公園整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	4
編 著 者 名	西田郁乃、伊藤さやか、吉田千沙子、木越隆三、丹野修太、冨田和気夫、藤根　久、竹原弘展、米田恭子、佐々木由香、バンダリ　スダルシャン、中村賢太郎、黒沼保子
編 集 機 関	石川県金沢城調査研究所
所　在　地	〒920-0918　石川県金沢市尾山町10－５　石川県文教会館５階　TEL 076-223-9696
発行年月日	平成23年３月31日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°′″	°′″		(㎡)	
金沢城跡（かなざわじょうあと）	石川県（いしかわけん） 金沢市丸の内（かなざわしまるうち）	01	01215	36° 33′ 58″	136° 39′ 35″	20000831 ～ 20001025	180	活用目的調査
						20060705 ～ 20061227	1,050	
						20070423 ～ 20071221	1,730	
						20080407 ～ 20080822	1,140	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
金沢城跡	城館	近世	石垣、礎石、根固、石組溝、溝、通路等	陶磁器、土器、瓦、石製品、金属製品	

要　　約

河北門は金沢城内の大手筋に位置する三ノ丸の正門であり、一ノ門・二ノ門を備えた枡形門の形式をとる。三ノ丸の搦手にある石川門と、二ノ丸の橋爪門とあわせて金沢城三御門と呼ばれる重要な門であったが、明治15年頃に破却された。

河北門復元整備のために行われた調査の結果、二ノ門やニラミ櫓、土塀などの石垣の根石部分や柱の礎石、礎石の基礎となる根固、石組溝とそれに取り付く枡や暗渠、当時の路面等を確認した。これらの遺構から、近世後期河北門の規模や地盤の高さ、石垣の改修時期や創建時期について明らかとすることができた。

また、河北門枡形の創建以前を含めて、Ⅰ～Ⅲ期に及ぶ河北門周辺の土地利用の変遷が明らかとなり、断片的ではあるが、初期金沢城の実態解明の手がかりとなる所見を得ることができた。

金沢城史料叢書 13
金沢城公園整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書 4

金 沢 城 跡

―河 北 門―

（本 文 編）

平成 23 年 3 月 31 日　発行

編集・発行　石川県金沢城調査研究所
〒920-0918
石川県金沢市尾山町 10-5　石川県文教会館 5 階
TEL　076―223―9696　／FAX　076―223―9697
E-mail　kncastle@pref.ishikawa.lg.jp

印　刷　株式会社そうごう